

奈良文化財研究所學報第85冊

# 漢長安城桂宮

— 論 考 編 —



2011

中国社会科学院考古研究所  
奈良文化財研究所

奈良文化財研究所學報第85冊

# 漢長安城桂宮

— 論 考 編 —

2011

中国社会科学院考古研究所  
奈良文化財研究所



# 序

本書は、奈良文化財研究所が中国社会科学院考古研究所に協力して、1996年から2001年まで実施した、漢長安城桂宮の発掘調査報告書の日本語版です。報告書の中国語版は、中国社会科学院考古研究所の編集により、2007年1月に文物出版社から刊行されております。その後、日本語版の刊行についての了解を得て翻訳に取りかかり、このたび出版の運びとなりました。日本語版の刊行にあたっては、発掘調査の報告である報告編に加え、日中両国の研究者による関連研究をまとめて論考編とし、一書に編むこととしました。

具体的な発掘調査の経過や調査体制については、報告編本文中の劉慶柱前所長と李毓芳氏の序言に詳しく述べられておりますので、そちらをご覧くださいと思います。奈良文化財研究所と中国社会科学院考古研究所の共同研究は、1991年に両研究所間で友好共同研究に関する協定を締結して以来、今日まで連綿と続いておりますが、桂宮の発掘調査は、北魏洛陽永寧寺につづく共同発掘の第二弾として実施したものです。

4年間におよぶ桂宮の共同調査では、本書報告編をご覧くださいればおわかりのように、ひじょうに多くの成果が上げられました。漢代の宮殿の配置や建物構造の具体的な様相が解明され、中国における都城研究の進展に大きな役割を果たすものとなっております。それらは同時に、日本の古代都城の変遷を考えるうえでもきわめて重要な資料であることは言を俟ちません。今回、日本語版を提供することで、広く日本の研究者にもご利用いただけることとなったのはまことに喜ばしく、翻訳を快諾された劉慶柱前所長と王巍所長をはじめ、中国社会科学院考古研究所の皆さんに篤く御礼申し上げる次第です。

また、論考編では、桂宮出土の瓦磚を中心に、秦漢代の瓦磚の製作技術やその変遷に関する論考などをまとめています。昨年刊行した『古代東アジアの造瓦技術』（奈良文化財研究所研究報告第3冊）とあわせ、日中および日韓の共同研究の成果のひとつと

して、古代の東アジア、ひいては日本古代の造瓦技術の解明に資するものとなるでしょう。また、こうした研究成果が、同じ遺跡を共同で発掘し、その出土品を調査研究するという、現場に立脚したものである点でも、重要な意義をもつと考えます。

なお、論考編には、桂宮出土品の中でもきわめて重要な発見であった封禪玉牒についての馮時氏の論考も含まれていることを付言しておきます。

本書の報告編ならびに論考編が大方の利用に供され、日本における古代都城研究の進展に寄与できれば、関係者一同これにまさる喜びはありません。

最後に、日本語版の報告書の作成にあたって絶大なご協力をいただいた中国社会科学院考古研究所はもちろん、論考のご寄稿を賜った方々や関係者各位にもあらためて御礼申し上げ、ご挨拶といたします。

2011年3月

独立行政法人国立文化財機構理事  
奈良文化財研究所長  
田 辺 征 夫

# 例 言

1. 本書は、中国社会科学院考古研究所と奈良国立文化財研究所（現 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所）が1997年11月から2001年5月まで実施した、漢長安城桂宮（陝西省西安市未央区）の共同発掘調査の成果報告である。
2. 本書は、報告編と論考編の2冊からなる。報告編は、2007年1月に中国で刊行した『漢長安城桂宮 1996—2001年考古発掘報告』（中国社会科学院考古研究所・日本奈良文化財研究所編、文物出版社発行、ISBN 978-7-5010-1997-7）の日本語版である。また、論考編は、両研究所の関係者による日中の7編の研究論文を掲載している。
3. 中国語の翻訳は今井晃樹が監修し、訳出と点検にあたっては、玉田芳英、渡辺晃宏、島田敏男、次山淳、箱崎和久、中川あや、丹羽崇史、児島大輔、藤井裕之、川村佳男、菊地大樹、北田裕行、坂口みどりの協力を得た。また、中国の測量に関する記述では西山和宏の協力があった。英文目次は石村智が作成した。このほか、全般にわたり、中国社会科学院考古研究所漢唐研究室の朱岩石、劉振東、張建鋒の協力を得た。
4. 報告編の挿図および写真図版は、原則として『漢長安城桂宮 1996—2001年考古発掘報告』所載のものを使用した。論考編の挿図は各執筆者がそれぞれ作成し、写真図版は牛嶋茂の撮影による。印刷用原稿の作成は中村一郎が担当し、井上直夫が協力した。
5. 本報告における北は、桂宮4号建築が真北であるのを除き、すべて磁北である。西安における磁北は、真北から約2°30′西偏する。なお、方向は、方位角（磁北または真北から時計回りに測った角度）で表示することがある。
6. 挿図・表の作成と図版レイアウトにさいしては、濱口典子、清野陽一、金田あおい、東仁美、上田素土子、大谷寧子、出口安子、森下しのぶ、山脇義子、佐々木聖子の協力を得た。
7. 論考編の用語・用字や個々の見解については、執筆者により異なる部分があるが、執筆者の意図を尊重して、あえて統一は図っていない。
8. 本書中での人名は、原則として敬称を省略させていただいた。
9. 註は、報告編では各節ごとに、それぞれの末尾にまとめた。
10. 本書の編集は、奈良文化財研究所長 田辺征夫と副所長 山崎信二、同 井上和人の指導のもとに、小澤毅と今井晃樹がおこない、濱口典子の協力を得た。



# 論考編 目次

1	桂宮出土瓦当の研究	李毓芳	1	
		申雲艷		
A	はじめに	1	D 軒丸瓦の製作技法	15
B	瓦当文様による分類	1	E おわりに	15
C	出土瓦当の内訳と 文様の類例	12		
2	前漢代瓦磚の基礎的研究	劉振東	17	
		張建鋒		
A	はじめに	17	D 丸瓦の分類	29
B	磚の分類	17	E 前漢代瓦磚の編年	33
C	平瓦の分類	26		
3	西安における秦から前漢までの 軒丸瓦の変遷	山崎信二	39	
A	はじめに	39	E 桂宮出土の軒丸瓦	60
B	櫟陽城出土の軒丸瓦	41	F 杜陵園出土の 軒丸瓦	63
C	未央宮5号建築出土の 軒丸瓦	52	G まとめ	64
D	未央宮3号建築出土の 軒丸瓦	58		
4	桂宮出土軒丸瓦の製作技法	清野孝之	67	
A	はじめに	67	D 製作技法と瓦当文様の 対応関係	80
B	丸瓦円筒の製作技法および 瓦当部との接合技法	67	E 軒丸瓦製作技法の 年代観	85
C	瓦当裏面と突帯上に残る 製作技法の痕跡	71	F まとめ	90



5 秦漢代瓦当の製作技法  
—— 櫟陽城・太上皇陵出土例を中心に ——…………… 大脇 潔 …… 98

- |                       |  |
|-----------------------|--|
| A はじめに…………… 98        | F 製作技法からみた<br>櫟陽城と太上皇陵<br>出土瓦当の分類…………… 109 |
| B 瓦当紋様の分類…………… 99     | G 西周～秦漢代における<br>瓦当の製作技法…………… 120           |
| C 秦漢代瓦当の製作技法…………… 101 |  |
| D 用語の整理と説明…………… 103   |  |
| E 糸切り半切技法の観察…………… 105 |  |

6 新王莽封禪玉牒の研究…………… 馮 時 …… 127

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| A はじめに…………… 127   | E 玉牒文の釈読…………… 134  |
| B 玉牒の年代…………… 127  | F 封禪儀礼の変化…………… 146 |
| C 玉牒文の書体…………… 130 | G おわりに…………… 153    |
| D 玉牒の性格…………… 131  |                    |

7 窖窯の系譜…………… 深澤 芳樹 …… 157

- |                     |                       |
|---------------------|-----------------------|
| A はじめに…………… 157     | D 通煙孔と出煙孔…………… 165    |
| B 陶窯の型式分類…………… 157  | E 各型式の分布状況…………… 166   |
| C 各型式の所属時期…………… 159 | F 型式変遷とその方向性…………… 170 |

英文目次…………… 193

図 版

# 図 版

図版 1	櫟陽城出土軒丸瓦 (1)	図版10	太上皇陵出土軒丸瓦 (2)
図版 2	櫟陽城出土軒丸瓦 (2)	図版11	櫟陽城・太上皇陵出土丸瓦
図版 3	櫟陽城出土軒丸瓦 (3)	図版12	櫟陽城出土平瓦
図版 4	櫟陽城出土軒丸瓦 (4)	図版13	杜陵便殿出土軒丸瓦 (1)
図版 5	櫟陽城出土軒丸瓦 (5)	図版14	杜陵便殿出土軒丸瓦 (2)
図版 6	櫟陽城出土軒丸瓦 (6)	図版15	杜陵東門出土軒丸瓦 (1)
図版 7	櫟陽城出土軒丸瓦 (7)	図版16	杜陵東門出土軒丸瓦 (2)
図版 8	櫟陽城出土軒丸瓦 (8)	図版17	皇后陵東門・杜陵便殿出土 丸瓦・平瓦
図版 9	櫟陽城出土軒丸瓦 (9)・ 太上皇陵出土軒丸瓦 (1)		

# 表

第 1 表	桂宮出土瓦当一覧 ……………	13	第12表	秦漢代瓦当製作技法の変遷……………	122
第 2 表	軒丸瓦接合法 ……………	66	第13表	組み合わせ式模骨の痕跡を残す 瓦当集成……………	123
第 3 表	桂宮出土軒丸瓦の型式別技法 一覧 (1) ……………	93	第14表	陶窯一覧 (1) ……………	173
第 4 表	桂宮出土軒丸瓦の型式別技法 一覧 (2) ……………	94	第15表	陶窯一覧 (2) ……………	174
第 5 表	桂宮出土軒丸瓦の型式別技法 一覧 (3) ……………	95	第16表	陶窯一覧 (3) ……………	175
第 6 表	桂宮出土軒丸瓦の型式別技法 一覧 (4) ……………	96	第17表	陶窯一覧 (4) ……………	176
第 7 表	桂宮出土軒丸瓦の型式別技法 一覧 (5) ……………	97	第18表	陶窯一覧 (5) ……………	177
第 8 表	櫟陽城出土瓦当の 製作技法による分類 (1) ……………	110	第19表	陶窯一覧 (6) ……………	178
第 9 表	櫟陽城出土瓦当の 製作技法による分類 (2) ……………	111	第20表	陶窯一覧 (7) ……………	179
第10表	櫟陽城出土瓦当の 製作技法による分類 (3) ……………	112	第21表	陶窯一覧 (8) ……………	180
第11表	太上皇陵出土瓦当の 製作技法による分類……………	113	第22表	陶窯一覧 (9) ……………	181
			第23表	陶窯一覧 (10) ……………	182
			第24表	陶窯一覧 (11) ……………	183
			第25表	陶窯一覧 (12) ……………	184
			第26表	陶窯一覧 (13) ……………	185
			第27表	陶窯一覧 (14) ……………	186
			第28表	陶窯一覧 (15) ……………	187

# 挿 図

第1図	桂宮出土の雲文以外の有文瓦当……………	2	第35図	模骨を用いた円筒不要部切り取り式の製作技法の復元……………	70
第2図	桂宮出土A型雲文瓦当……………	3	第36図	円筒不要部切り取り式の瓦当裏面に残る製作技法痕跡……………	71
第3図	桂宮出土B型雲文瓦当……………	4	第37図	瓦当裏面に残る馬蹄状圧痕……………	72
第4図	桂宮出土C型雲文瓦当……………	5	第38図	岸本による分解式模骨を使用した軒丸瓦製作技法の復元……………	72
第5図	桂宮出土D型雲文瓦当……………	7	第39図	劉・張による軒丸瓦製作技法の復元……………	73
第6図	桂宮出土E型雲文瓦当……………	9	第40図	瓦当裏面に残る布目……………	74
第7図	桂宮出土F型雲文瓦当……………	10	第41図	谷分類のA技法による円筒不要部の切り離し技法の復元……………	75
第8図	桂宮出土文字瓦当……………	11	第42図	突帯上に残る円筒不要部の切り離し痕跡……………	76
第9図	磚(1)方磚……………	19	第43図	糸切りによる円筒不要部の切り離し技法の復元……………	77
第10図	磚(2)長方磚・空心磚……………	23	第44図	半截丸瓦接合式の瓦当裏面に残る製作技法の痕跡……………	78
第11図	磚(3)空心磚・扇形磚……………	25	第45図	瓦当裏面下半の擬突帯……………	79
第12図	平瓦……………	27	第46図	桂宮出土軒丸瓦の主要な3型式……………	81
第13図	丸瓦と瓦当の接合方式(模式図)……………	30	第47図	瓦当裏面に馬蹄状圧痕が残るIV型1A式軒丸瓦……………	82
第14図	丸瓦……………	32	第48図	瓦当紋様の部分名称と雲紋の分類・記号化……………	100
第15図	円瓦当付き軒丸瓦の製作技法(模式図)……………	39	第49図	糸切り半切技法の分類……………	106
第16図	A技法による軒丸瓦の不要部分の取り除き方……………	40	第50図	第3群瓦当の製作工程……………	115
第17図	櫟陽城出土軒丸瓦(1)……………	42	第51図	組み合わせ式模骨の復元2例……………	116
第18図	櫟陽城出土軒丸瓦(2)・太上皇陵出土軒丸瓦……………	44	第52図	第3・4群瓦当紋様の推移……………	118
第19図	「分解式模骨」使用の軒丸瓦製作技法の復元……………	46	第53図	新王莽封禪玉牒……………	127
第20図	「関」文字軒丸瓦の製作に用いた工具(想像図)……………	47	第54図	唐玄宗禪地祇玉册……………	135
第21図	櫟陽城出土軒丸瓦(3)……………	48	第55図	宋真宗禪地祇玉册……………	136
第22図	櫟陽城出土軒丸瓦(4)……………	50	第56図	陶窯の分類……………	158
第23図	未央宮5号建築出土軒丸瓦(1)……………	53	第57図	各型式の実例(1)……………	160
第24図	未央宮5号建築出土軒丸瓦(2)……………	54	第58図	各型式の実例(2)……………	161
第25図	未央宮5号建築出土軒丸瓦(3)……………	56	第59図	各型式の実例(3)……………	162
第26図	未央宮5号建築出土軒丸瓦(4)……………	57	第60図	各型式の実例(4)……………	163
第27図	未央宮3号建築出土軒丸瓦(1)……………	58	第61図	各型式の実例(5)……………	164
第28図	未央宮3号建築出土軒丸瓦(2)……………	59	第62図	各型式の実例(6)……………	165
第29図	桂宮出土軒丸瓦(1)……………	61	第63図	各型式の分布(1)……………	167
第30図	桂宮出土軒丸瓦(2)……………	62	第64図	各型式の分布(2)……………	168
第31図	杜陵園出土軒丸瓦……………	63	第65図	各型式の分布(3)……………	169
第32図	軒丸瓦の各部名称……………	67			
第33図	谷分類による各技法模式図……………	68			
第34図	軒丸瓦の丸瓦部凹面に残る製作技法痕跡……………	69			

# 1 桂宮出土瓦当の研究

李毓芳  
申雲艷

## A はじめに

1950年代末から1960年代初頭にかけて、漢長安城考古隊は桂宮で初歩的な踏査とボーリングをおこなった。その後、1997年11月から2001年5月まで、中国社会科学院考古研究所と日本の奈良国立文化財研究所は、日中連合考古隊を共同で組織し、桂宮でボーリング調査と発掘調査を展開した。発掘調査では、合計545点の瓦当が出土した。本稿は、漢長安城桂宮から出土したこれらの瓦当について、初歩的な研究をおこなうものである。ただし、ほかの遺跡の瓦当と比較検討するために、漢長安城全体の瓦当を対象にした過去の分類方法は採用せず、桂宮出土瓦当単独での分類研究を進めることとする。

## B 瓦当文様による分類

瓦当の文様からみて、漢長安城桂宮で出土した瓦当は無文瓦当、有文瓦当、文字瓦当の3類に大別される。3類に大別

### i 無文瓦当

無文瓦当は3号建築遺構で1点出土したのみである。資料3:T4③:12は無文の半瓦当で、破損している。

### ii 有文瓦当

有文瓦当は、桂宮で出土した瓦当の大多数を占めている。文様の種類には、葵文(旋曲文)、動物文、樹木文、渦文、雲文などがある。

ほとんどが  
有文瓦当

**葵文瓦当** 瓦当中央に突線の太い縄状文が一周めぐり、その内外に葵文を飾る。桂宮2号建築・3号建築・4号建築から、1点ずつ出土している。瓦当の中央に太い縄状文が一周めぐり、その内側に三重線の表現による左向きの葵文を、外側に同じ三重線による右向きの葵文を飾るものもある。たとえば、4号建築で出土した4:T1③:64(第1図1)は、太い縄状文の内側に左向きの三重線葵文が4個、外側に右向きの三重線葵文が12個ある。瓦当径13.0cm、周縁の幅0.9cm、厚さ2.8cmである。また、3号建築で出土した3:T3③:17(第1図2)のように、瓦当中央に突線による圏線が一周し、その内側を三重線表現による右向き葵文、外側を左向きの三重線葵文で飾る瓦当もある。

**動物文瓦当** 主体文様として動物文を飾る。4号建築で出土した4:T1③:21(第1図3)は、中心文が半球形文で、その外側を圏線が二周する。界線により、瓦当は四つの区画に分けられ、各区画内に、翼を広げて飛翔する燕が1羽ずつ配される。瓦当径14.4cm、周縁の幅0.8~1.2cm、厚さ1.5cmである。

**樹木文瓦当** 主体文様として樹木文を飾る。3号建築出土の3:T1③:90(第1図4)は小片で、樹木文が一つだけ確認できる。

**渦文瓦当** 主体文様として渦文を飾る。2号建築で出土した2南:T4③:3は、1/4以下の小片。瓦当中央を圏線が一周し、その内側にX字形文がある。周縁の内側には圏線がさらに一周し、二重の界線が瓦当を4区画に区分する。各区画には、相対する渦文が1対ずつ配される。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.2cm、高さ0.6cm。糸切り痕が残る。瓦当径は、破損のため不明。周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.6cm。

**雲文瓦当** 主体文様が雲文のもの。円瓦当が大多数を占め、わずかに半瓦当が存在する。

**雲文半瓦当** 雲文半瓦当は6号建築から2点出土したのみで、同じ形態である。6:T1③:7は、瓦当の中心に格子文があり、その外側を2本の突線による圏線が半周する。周縁の内側にも突線による圏線が半周する。界線は二重線で表現され、左右の両区画には1個ずつの雲文を飾る。その内側には、中心文の圏線へと連続する単線がある。瓦当径16.7cm、周縁の幅1.3cm、瓦当中心部の厚さ1.0cm。丸瓦部の残存長28.5cm、内径13.1cm、凸面に中くらいから太めの縄目があるが、これらは複数回の叩きによるものである。最初は縦方向に叩き、次に右斜め方向に叩いている。縄目の幅は0.2cmで、瓦当に近い部分は、ケズリのため消されている。丸瓦部の成形は粘土紐作りで、内面に凹点文がある。

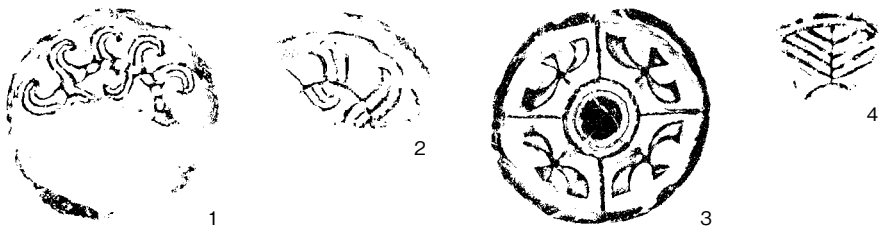
雲文円瓦当は瓦当の文様配置により、A~Fの6型に大きく分ける。

**雲文瓦当  
A型**

A型は中心に四葉文を飾るもので、Aa~Adの4亜型に分かれる。

Aa型は、中心の四葉文の中央に小さな珠文が一つある。四葉文の外側を圏線が二周し、周縁の内側を圏線がさらに一周する。二重の界線により瓦当は四分され、いずれの区画内にも雲文を1個ずつ飾る。4号建築出土の4:T1③:8(第2図1)は、中心の四葉文が桃形を呈する。瓦当中央部の珠文と四葉の中央は凹む。瓦当径16.3cm、周縁幅0.7cm、厚さ2.9cm。

Ab型は、中心の四葉文の中に小さな珠文が一つあり、葉と葉の間にも小さな珠文を一つずつ配する。四葉文の外側で圏線が一周し、周縁の内側でも圏線が一周する。二重の界線により瓦当文は四分され、いずれの区画内にも雲文が一つずつ見られる。4号建築出土の4:T3③:45(第2図2)は瓦当径15.6cm、周縁幅1.2cm、厚さ2.2cm。



1: 葵文瓦当 2: 葵文瓦当 3: 動物文瓦当 4: 樹木文瓦当

第1図 桂宮出土の雲文以外の有文瓦当

Ac型は、四葉文の中央に小さな珠文が一つあり、葉と葉の間にも小さな珠文を一つずつ配する。四葉文の外側を圏線が二周し、周縁の内側にも圏線が二周する。周縁内側の圏線の間は、X字形文の文様帯を構成する。二重の界線により4区画に分けられ、各区画内には雲文を一つずつ配する。3号建築出土の3:T1③:54(第2図3)は、雲文の末端が外側を向いて界線と連なる。雲文の両側には三角形文が一つずつあり、雲文中央の上方と下方に小さな珠文を一つずつおく。瓦当面には朱が残る。瓦当径15cm、周縁幅1.1cm、厚さ2.4cm。

Ad型は、中心の四葉文が比較的小さい。その外側を圏線が二周し、間にX字形文をはさむ。周縁内側の圏線間にもX字形文を配する。二重の界線が瓦当面を4区画に分け、各区画内に雲文を一つずつ配する。2号建築出土の2北:T1③:14(第2図4)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.3cm、周縁幅1.0cm、厚さ2.3cm。

B型は中心に格子文を飾るもので、Ba~Bdの4重型に分かれる。

雲文瓦当  
B型

Ba型の中心文は、圏線の内側を格子文ないし斜格子文で飾る。周縁の内側にも圏線が一周し、二重の界線により瓦当面は四分される。Ba I ~Ba IVの4式に細分することができる。

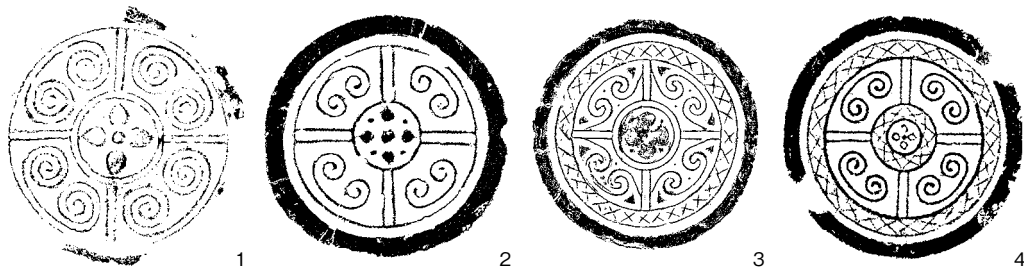
Ba I 式は、二重線の一端に雲文を飾る。2号建築出土の2北:T5③:21(第3図1)は、三重線が交錯して形成する斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.5cm、高さ0.4cmで、糸切り痕が残る。周縁幅1.4cm、周縁の高さ0.9cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は粘土紐で成形され、残存長12.7cm、内径12.7cm、厚さ1.4cmである。丸瓦の凸面には斜位の縄叩きがあり、瓦当に近い部分の縄目は磨り消されている。縄目の幅は0.4cm。凹面に凹点文(「麻点紋」)が残る。同種の瓦当は、東西路遺構と1号・3号・4号建築からも出土している。

Ba II 式は、瓦当にキノコ形雲文が飾られ、その末端は界線と連なる。2号建築出土の2北:T1③:16(第3図2)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.3cm、高さ1.1cmである。糸切り痕が残る。瓦当径15.4cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.8cm。3号建築下層排水渠からも、同種の瓦当が1点出土している。

Ba III 式は、瓦当の4区画の一つずつの雲文をもつ。2号建築出土の2北:T4③:14(第3図3)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.0cm、高さ0.7cmである。糸切り痕が残る。瓦当径14.7cm、周縁幅1.3cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.0cm。

Ba IV 式は四つの雲文を飾り、その内側にある1本の線は中心文と連続する。2号建築出土の2北:T1③:2(第3図4)は、斜格子文を中心に飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.2cm、高さ0.6cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.8cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.0cmである。

Bb型の中心文は、圏線の内側で横・縦・斜めの線が交錯し、三角形文を形成する。2号建築出



1 : Aa型 2 : Ab型 3 : Ac型 4 : Ad型

第2図 桂宮出土A型雲文瓦当

土の2北:T1③:42(第3図5)は、3条の横線・縦線と5条の斜線により形成された三角形文を中心に飾る。周縁の内側には圏線が一周する。二重の界線により瓦当は四分され、各区画内に雲文を1個ずつ飾る。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.0cm、高さ0.2cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.8cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.5cmである。

Bc型は圏線が中央で一周し、その内側を斜格子文で飾る。斜格子文の中央には米字形をおく。周縁の内側にも圏線が一周する。二重の界線が瓦当を四分し、各区画内に雲文を飾る。4号建築出土の4:T3③:26(第3図6)の雲文はキノコ形で、末端が界線に連なる。瓦当径14.5cm、周縁幅0.8cm、厚さ2.3cmである。同種の瓦当は、2号建築と7号建築でも出土している。

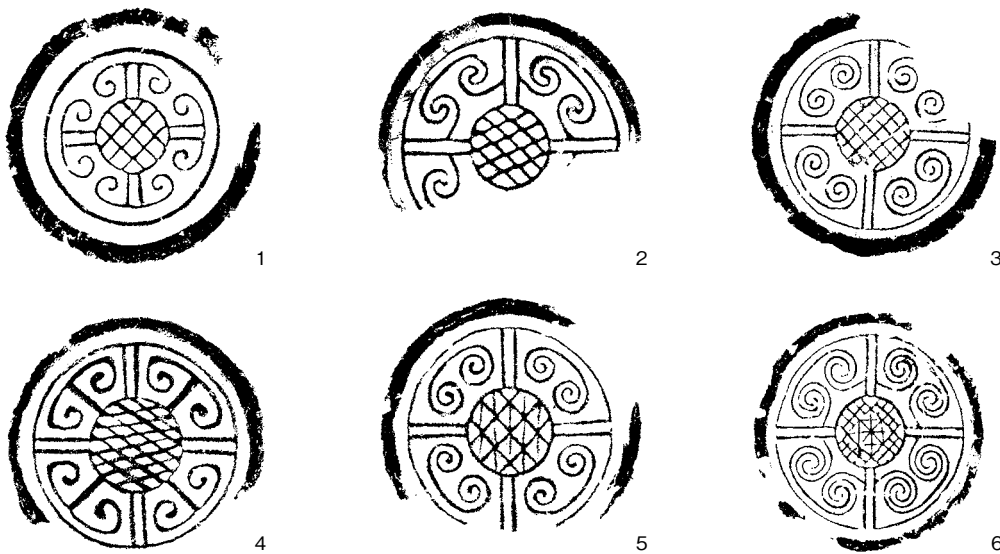
雲文瓦当  
C

C型は、圏線が中央で一周めぐり、周縁の内側にも圏線が一周する。二重の界線が中心文を貫き、瓦当を四分する。中央の圏線の内側には、各区画内にL字形文を一つずつ飾る。Ca~Ceの5亜型に分かれる。

Ca型は、圏線で囲まれた中心文内に、単線によるL字形文を飾る。Ca I ~Ca Vの5式に細分することができる。

Ca I 式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T2③:18(第4図1)は瓦当径16.0cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.1cm。2北:T5③:16は瓦当径13.3cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.3cm。同種の瓦当は、1号・3号・4号・5号建築と下層排水渠、南門からも出土している。

Ca II 式は、瓦当面の各区画内にキノコ形文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:8(第4図2)は、雲文の末端が界線に連なる。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.1cm、高さ0.2cm。糸切り痕が残る。瓦当径15.6cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.4cmである。1号建築出土の1:TG8③:13は、瓦当裏面に布目痕と糸切り痕が残る。瓦当径14.8cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.4cmである。



1 : Ba I 式 2 : Ba II 式 3 : Ba III 式 4 : Ba IV 式 5 : Bb 型 6 : Bc 型

第3図 桂宮出土B型雲文瓦当

CaⅢ式は、二重の界線の端部に一つずつ雲文を飾る。4号建築出土の4:T3③:10(第4図3)は、瓦当径16.0cm、周縁幅1.0cm、厚さ2.9cmである。同種の瓦当は、1号・2号建築からも出土している。

CaⅣ式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。雲文の内側には直線があり、中心文の圏線に連なる。2号建築出土の2南:T5③:55(第4図4)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.4cmである。同種の瓦当は7号建築からも出土している。

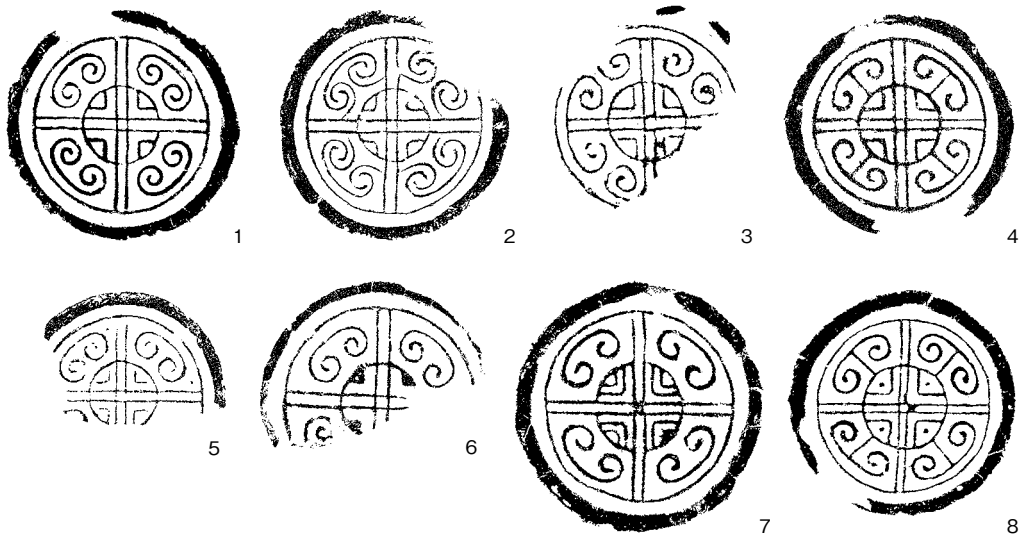
CaⅤ式は、瓦当面の各区画内に雲文を一つずつ飾る。雲文の両側の一つずつの小さな珠文がある。2号建築出土の2南:T8③:4(第4図5)は、瓦当裏面下半の突帯の幅2.2cm、高さ0.4cm。糸切り痕が残る。瓦当径14.4cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ1.7cm。

Cb型は、中心文に帯状のL字形文を配する。2号建築出土の2北:T5③:6(第4図6)は、中心文の外側に雲文を飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕はない。瓦当径15.6cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.9cm、厚さ2.6cm。1号建築でも同種の瓦当が1点出土した。

Cc型は、中心文に二重線によるL字形文を飾る。南門出土の南門:T1③:9(第4図7)は、雲文を四つ飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がある。瓦当径15.2cm、周縁幅0.8cm、周縁の高さ0.7cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は、残存長5.8cm、内径13.0cm、厚さ1.1cmで、凸面に斜位の縄叩きが残る。縄目の幅は0.4cm。丸瓦部凹面には布目痕があり、瓦当裏面にまで及んでいる。同種の瓦当は、1号・2号・4号建築からも出土している。

Cd型は、中心文に単線によるL字形文を配し、L字形文の内側に小さな珠文を一つずつ飾る。4号建築出土の4:T1③:96(第4図8)は、雲文を四つ飾る。雲文の内側には直線があり、中心文の圏線に連なる。瓦当径14.8cm、周縁幅0.9cm、厚さ2.1cm。

Ce型は、中心文に単線によるL字形文、L字形文の内側には帯状の三角形を一つずつ飾る。2号建築出土の2南:T1③:36は、瓦当面に四つの雲文を飾る。瓦当裏面下半の突帯の幅2.2cm、突帯



1 : CaⅠ式 2 : CaⅡ式 3 : CaⅢ式 4 : CaⅣ式 5 : CaⅤ式 6 : Cb型 7 : Cc型 8 : Cd型

第4図 桂宮出土C型雲文瓦当



の高さ0.5cm。糸切り痕がある。瓦当径15.5cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.4cmである。丸瓦部は残存長3.5cm、厚さ1.4cm。凸面の瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。凹面には凹点文がある。

Cf型は、瓦当の文様はCc型瓦当と基本的に同じだが、中心文の圏線が二重になっている。2号建築から1点出土したのみである。2南:T1③:30は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕がある。瓦当径15.6cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ1.1cm、瓦当中心部の厚さ1.5cmである。丸瓦部は残存長14.0cm、内径13.0cm、厚さ1.3cm。凸面には縦位の縄叩きが見られるが、瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。縄目の幅は0.2cm。凹面には凹点文がある。

#### 雲文瓦当型D

D型は、中心文に半球形文を一つ飾り、その周囲に圏線を一重から三重めぐらす。周縁の内側にも圏線が一重から二重めぐることが多い。中心文外側の圏線間に小さな珠文を飾るものがあり、珠文には粗密がある。X字形文などが一周するものもある。周縁内側の圏線間には、X字か交互にV字を配した文様帯がめぐる。瓦当は二重の界線によって四分され、各区画内に雲文を一つずつ飾る。界線の端部に雲文を一つずつ飾るものもある。また、キノコ形雲文や、周囲に小さな珠文あるいは小さな三角形文を加えた雲文もある。瓦当の文様配置によって、Da~Diの9重型に分けることができる。

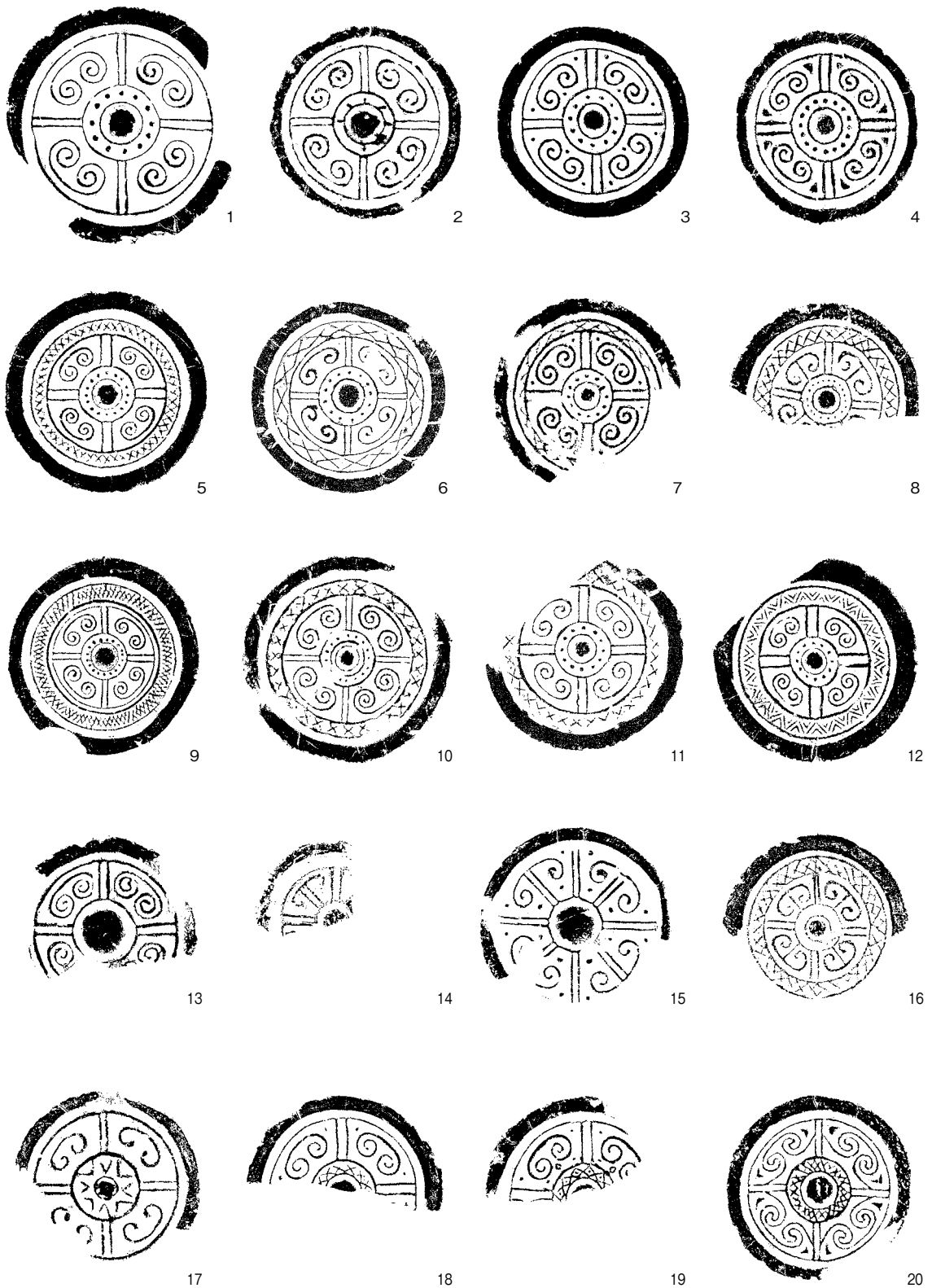
Da型は、半球形文の外側を連珠文が一周し、周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線によって四分され、雲文が一つずつ飾られる。Da I~Da IIIの3式に細分できる。

Da I式は、雲文のそばに装飾がない。比較的大きなつくりのものには、中心文の周囲に二重の圏線がめぐり、その間に12個の珠文からなる連珠文が配される。4号建築出土の4:T4③:8(第5図1)は、瓦当径19.5cm、周縁幅1.8cm、厚さ2.3cm。比較的小型のものもあり、その中心文の周囲の二重圏線の間には8個の珠文からなる連珠文が配される。4号建築出土の4:T1③:87(第5図2)は、瓦当径15.5cm、周縁幅0.9~1.2cm、厚さ2.8cm。同種の瓦当が3号建築からも出土している。

Da II式は、雲文の両側と内側に小さな珠文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:23(第5図3)は、中心文周囲の二重圏線間に11個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面の中央には楕円形の凹みがある。瓦当径15.3cm、周縁幅1.4cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。丸瓦部は、残存長24.0cm、内径13.6cm、厚さ1.6cm。凸面に縦位の縄叩きが見られ、瓦当付近の縄叩きは磨り消されている。縄目の幅は0.3cm。凹面には布目痕がある。4号建築と5号建築出土の同種の瓦当は、中心文を二重に取り巻く圏線間に、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当径はいずれも19.3cmに達する。2号建築出土の同種の瓦当は、中心文を二重に取り巻く圏線間に、12個ないし15個の珠文からなる連珠文がある。3号建築からも同種の瓦当が出土しているが、連珠文の珠文数は11である。

Da III式は、雲文の両側に三角形文を一つずつ飾る。2号建築出土の2北:T5③:20(第5図4)は、中心文を二重に取り巻く圏線間に、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面中央に楕円形の凹みがあり、その外側には、周縁に沿って溝が半周する。瓦当径15.0cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.1cm。南門と3号建築からも同種の瓦当が出土した。

Db型は、中心の半球形文の周囲にある二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側にはX字形文がめぐる。瓦当面は二重の界線によって四分され、X字形文には粗密がある。



1・2 : Da I 式 3 : Da II 式 4 : Da III 式 5・6 : Dba I 式 7 : Dba II 式 8 : Dba III 式 9 : Dbb 型  
 10 : Dbc 型 11 : Dc 型 12 : Dd 型 13 : De I 式 14 : De II 式 15 : Df 型 16 : Dg 型 17 : Dh 型  
 18・19 : Di I 式 20 : Di II 式

第5図 桂宮出土D型雲文瓦当

Db<sub>a</sub>型は、中心の半球形文の周囲にある二重圏線の間を連珠文が一周し、周縁の内側を二重にめぐり、圏線の間には、X字形文が一周する。Db<sub>a</sub>Ⅰ～Db<sub>a</sub>Ⅲの3式に細分できる。

Db<sub>a</sub>Ⅰ式は、瓦当面に雲文を飾る。2号建築出土の2北:T5③:7(第5図5)は、中心文の周囲をめぐり、二重圏線の間には、16個の珠文からなる連珠文がある。X字形文は密である。瓦当裏面の中央には楕円形の凹みがあり、その外側には、周縁に沿って溝が半周する。瓦当径16.1cm、周縁幅1.5cm、周縁の高さ0.6cm、厚さ2.7cm。2南:T7③:33(第5図6)は、中心文の周囲にある二重圏線の間には、13個の珠文からなる連珠文がある。X字形文は比較的疎らである。瓦当裏面の中央に楕円形の凹みがある。瓦当径14.9cm、周縁幅1.0cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ3.5cm。同種の瓦当は1号・3号・4号・5号建築、南門、下層排水渠からも出土している。中心文周囲の連珠文の数は、9・11・12・16・18・20個とさまざまである。

Db<sub>a</sub>Ⅱ式は、瓦当面に雲文を飾り、雲文の両側には珠文が一つずつある。2号建築出土の2北:T5③:3(第5図7)は、中心文周囲の二重圏線の間には、12個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面は平滑で、その中央には楕円形の凹みがある。瓦当径14.5cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.9cm。同種の瓦当は1号・4号建築、下層排水渠からも出土している。中心文周囲の二重圏線の間をめぐり、連珠文の数は、9・10・12個とさまざまである。

Db<sub>a</sub>Ⅲ式は、瓦当面の各雲文の内側から、中心文周囲の二重圏線に連なる直線が伸びる。4号建築出土の4:T3③:13(第5図8)は、中心文周囲の二重圏線の間には、19個の珠文からなる連珠文がある。瓦当径15.3cm、周縁幅1.6cm、厚さ2.2cm。

Db<sub>b</sub>型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には、X字形文をはさむ二重圏線がめぐり、その内側に圏線がさらに一周する。4号建築出土の4:T1③:80(第5図9)は、中心文周囲の二重圏線の間には、18個の珠文からなる連珠文がある。瓦当面の4区画内には巻雲文が一つずつ飾られる。瓦当径15.5cm、周縁幅1.3～1.7cm、厚さ2.2cm。同種の瓦当は、2号・4号建築と南門からも出土している。中心文周囲の二重圏線の間をめぐり、珠文の数は、12・13・16個とさまざまである。

Db<sub>c</sub>型は、中心文周囲の二重圏線の外側に連珠文がめぐり、周縁の内側には、X字形文をはさむ二重圏線がめぐり、南門出土の南門:T1③:8(第5図10)は、中心文周囲の二重圏線の間には、16個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面に縄叩きがあり、ナデで消されている。瓦当径15.7cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。

Dc型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には外から順に、X字形文と圏線がめぐり、2号建築出土の2北:T1③:4(第5図11)は、中心文周囲の二重圏線の間には、12個の珠文からなる連珠文がある。瓦当裏面の中央には縄叩き痕が残り、瓦当裏面周縁に沿って溝が半周する。瓦当径15.3cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.5cm。

Dd型は、中心文周囲の二重圏線の間を連珠文が一周する。周縁の内側には、交互に向き合う二重のV字形文をはさむ二重圏線がめぐり、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。2号建築出土の2南:T5③:37(第5図12)は、中心文周囲の二重圏線の間には、12個の珠文からなる連珠文がある。二重の界線の間隔は比較的広い。四つの区画内に雲文を一つずつ飾る。瓦当径16.2cm、周縁幅1.6cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.3cm。

De型は、中心の半球形文が大きく、その外側を圏線が一周する。周縁の内側にも圏線がめぐ

る。瓦当は二重の界線により四分され、いずれの区画内にも雲文が飾られる。De I とDe II の2式に細分できる。

De I 式は、瓦当面各区画に雲文を飾る。2号建築出土の2南:T8③:34(第5図13)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.3cm、周縁の高さ0.4cm、厚さ2.6cm。

De II 式は、雲文の内側から中心文の圏線に連なる二重線が伸びる。4号建築出土の4:T1③:23(第5図14)は、全体に小々なつくりである。瓦当径13.2cm、周縁幅1.4cm、厚さ2.1cm。

Df型は、中心の半球形文が比較的大きく、その外側を圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。雲文の内側には二重線があり、中心文の圏線に連なる。雲文の両側と内側には、小さな珠文を一つずつ飾る。3号建築出土の3:T2③:36(第5図15)は、瓦当径15.3cm、周縁幅1.2cm、厚さ2.2cm。

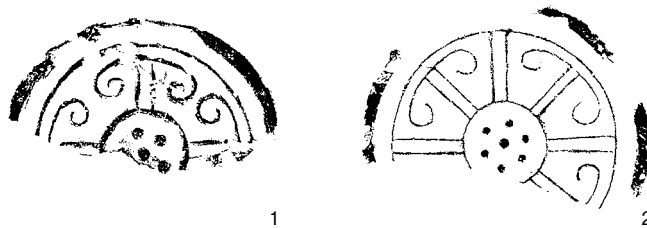
Dg型は、中心の半球形文の外側に二重の圏線、周縁の内側にもX字形文をはさむ圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。各雲文の内側からは、中心文の圏線に連なる短い直線が伸びる。2号建築出土の2南:T8③:14(第5図16)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径15.5cm、周縁幅1.5cm、周縁の高さ0.3cm、厚さ2.0cm。

Dh型は、中心の半球形文の外側に圏線がめぐり、内側には四つのL字形文とその中間にV字形文を配する。周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。2号建築出土の2南:T6③:30(第5図17)は、瓦当裏面に縄叩き痕が残り、丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径15.2cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.6cm。

Di型は、中心の半球形文の外側に、X字形文をはさんで二重の圏線がめぐり、周縁の内側にも圏線がめぐる。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。Di I とDi II の2式に細分することができる。

Di I 式は、中心の半球形文の外側に、珠文をはさむX字形文がめぐる。2号建築出土の2北:T1③:15(第5図18)は、瓦当の各区画内にある雲文の両側に、珠文を一つずつ飾る。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径16.0cm、周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.3cm。2北:T1③:18(第5図19)は、中心文周囲に葉形文が一つずつ見られる。瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡はない。周縁幅1.2cm、周縁の高さ0.5cm、厚さ2.2cm。

Di II 式は、中心の半球形文の外側に、X字形文をはさむ二重の圏線がめぐる。瓦当の各区画内にはキノコ形雲文が飾られる。雲文の端部は、両側に伸びて界線に連なり、雲文の両側と上方に、三角形文が一つずつ飾られる。4号建築出土の4:T1③:84(第5図20)は、瓦当径15.2cm、周縁幅1.1~1.8cm、厚さ2.5cm。同種の瓦当は3号建築からも出土している。



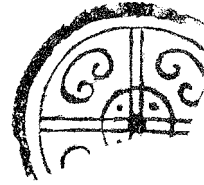
1 : Ea型 2 : Eb型

第6図 桂宮出土E型雲文瓦当

雲文瓦当  
E型

E型は、中心に圏線がめぐり、その内側に珠文を多数飾る。また、周縁の内側にも圏線が一周する。EaとEbの2垂型に分けることができる。

Ea型は、二重線の端部に雲文を飾る。2号建築出土の2南:T1③:9(第6図1)は、中心文に7個の珠文を飾る。瓦当裏面には糸切り痕がある。瓦当径16.7cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.7cm、中心部の厚さ1.2cm。



第7図 桂宮出土F型雲文瓦当

Eb型は瓦当面が二重の界線により四分され、各区画内に雲文が飾られる。各雲文の内側からは、中心文の圏線に連なる二重線が伸びている。2号建築出土の2南:T1③:51(第6図2)は、中心文に7個の珠文がある。瓦当裏面下半の突帯は、幅2.5cm、高さ0.5cm。糸切り痕が残る。瓦当径17.6cm、周縁幅1.1cm、周縁の高さ0.8cm、厚さ2.9cm。

雲文瓦当  
F型

F型は、中心文と周縁の内側にそれぞれ圏線がめぐり、瓦当面は、中心文を貫く二重の界線により四分される。中心文には珠文が配され、その外側には雲文が飾られる。2号建築出土の2南:T8③:42(第7図)は、瓦当裏面に丸瓦の切り離し痕跡がない。瓦当径16.0cm、周縁幅0.9cm、周縁の高さ0.7cm、中心部の厚さ1.8cm。

### iii 文字瓦当

文字瓦当の銘文の内容は、吉祥句が多いが、官署建築物の名称もある。たとえば、「長生無極」「長生未央」「千秋萬歳」「與天無極」「延年益壽」「右空」などである。

「長生無極」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「長生無極」の4字がある。中心文は、半球形の外側に、連珠文をはさむ二重の圏線がめぐり、周縁の内側にも、圏線が一、二周する。瓦当面は二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。2号建築出土の2北:T8③:9(第8図1)は、中心文の周囲に、12個の珠文からなる連珠文をはさんだ二重の圏線がめぐり、瓦当裏面は平滑で、丸瓦の切り離し痕跡はない。瓦当径17.7cm、周縁幅1.8cm、周縁の高さ0.6cm、瓦当中心部の厚さ2.8cm。2南:T4③:6は、「生」の1字だけ残存している。周縁の内側に二重の圏線がめぐり、「長生無極」瓦当は3号・4号建築からも出土した。

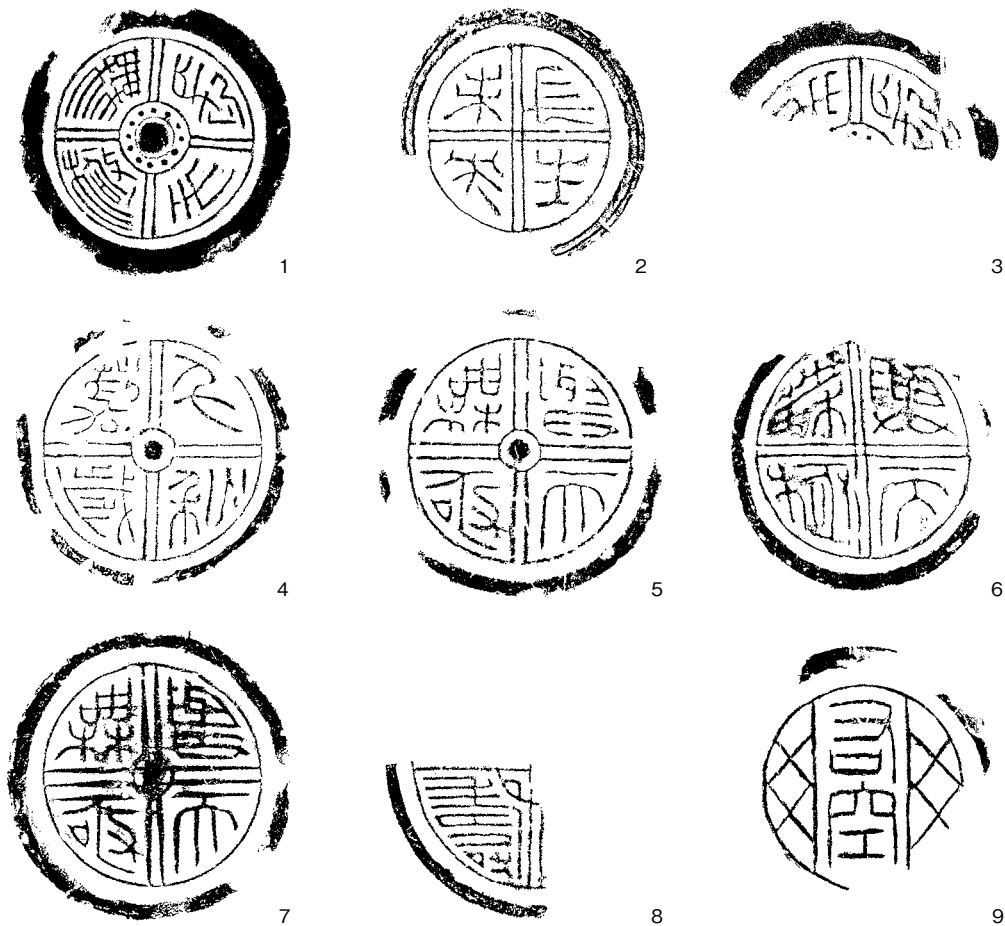
「長生未央」瓦当 瓦当面に陽文による「長生未央」の4字がある。周縁の内側に圏線が一周するものもある。瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。3号建築出土の3:T2③:27(第8図2)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径15.5cm、周縁幅1.1~1.5cm、厚さ3.1cm。中心文の周囲には圏線と連珠文帯がめぐり、周縁の内側にさらに一重の圏線がめぐり、瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分され、各区画内に文字が一つずつ配される。4号建築出土の4:T4③:3(第8図3)は、「長」「未」の2字のみが残存する。周縁幅1.8cm、厚さ2.5cm。

「千秋萬歳」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「千秋萬歳」の4字がある。中心の珠文の外側と周縁の内側に、それぞれ圏線がめぐり、瓦当面は、二重の界線により四分され、各区画内に文字が配される。3号建築出土の3:T1③:86(第8図4)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径18.0cm、周縁幅1.0cm、厚さ3.5cm。2号建築出土の2北:T2③:4は、「千」「萬」の2字のみが残存する。瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径約18cm、周縁幅1.3cm。

「與天無極」瓦当 瓦当面に陽文の篆書による「與天無極」の4字がある。中心の珠文の外側と周縁の内側に、それぞれ圏線がめぐるものもある。瓦当面は、二重の界線により四分され、各区画内に文字が一つずつ配される。3号建築出土の3:T1③:41(第8図5)は、瓦当裏面に糸切り痕がある。瓦当径19.0cm、周縁幅1.1cm、厚さ2.4cm。4号建築出土の4:T3③:22(第8図6)は、瓦当径17.6cm、周縁幅0.9~1.1cm、厚さ2.4cm。下層排水渠出土の3:排水渠:7(第8図7)は、瓦当径18.8cm、周縁幅1.0cm、厚さ4.1cmである。

「延年益壽」瓦当 中心文と周縁の内側にそれぞれ圏線がめぐる。瓦当面は、中心文を貫通する二重の界線により四分される。中心文内には、L字形文が一つずつ配される。3号建築出土の3:T2③:1(第8図8)は、「壽」の1字のみが残存する。周縁幅1.2cm、厚さ2.9cm。

「右空」瓦当 周縁の内側に圏線がめぐる。瓦当面は、2本の線により、中央と左右の区画に分けられる。中央の区画には、上から下へ陽文の篆書で「右空」とある。左右の両区画にはX字形文を飾る。2号建築出土の2北:T8③:5(第8図9)は、瓦当裏面に糸切り痕が残る。瓦当径約18cm、周縁幅1.6cm、周縁の高さ0.7cm、厚さ2.3cm。



1:「長生無極」瓦当 2・3:「長生未央」瓦当 4:「千秋萬歳」瓦当 5~7:「與天無極」瓦当  
8:「延年益壽」瓦当 9:「右空」瓦当

第8図 桂宮出土文字瓦当

## C 出土瓦当の内訳と文様の類例

**出土瓦当の内訳** 漢長安城桂宮から出土した大量の瓦当は、桂宮の造営および使用年代を研究するうえで重要な参考資料となる。1997年11月から2001年5月の発掘調査で出土した545点の瓦当は、円瓦当と半瓦当に分けられるが、うち円瓦当が542点と、瓦当総数の99.4%を占めた。半瓦当は3点で、瓦当総数の0.6%にすぎない。

瓦当は、文様により、無文瓦当、有文瓦当、文字瓦当に分けることができる。内訳は、無文瓦当が1点(0.2%)、有文瓦当が496点(91.0%)、文字瓦当が48点(8.8%)である。

雲文瓦当が大多数

また、有文瓦当のうちでは雲文が最も多く、計489点と、瓦当総数の98.6%を占める。このほかには、葵文、樹木文、動物文、渦文瓦当が少量見られる程度である。

文字瓦当では「長生無極」が18点と最も多く、それに次ぐのは「與天無極」10点と「千秋萬歳」9点であった。これ以外に「長生未央」「右空」「延年益壽」などが少量あり、文字が判別できないか不完全なものが7点ある。

**雲文以外の有文瓦当の類例** 漢長安城桂宮で、雲文瓦当以外の有文瓦当が占める割合は、瓦当総数の1.3%にすぎない。これは、前漢初年に建てられた未央宮の宮城西南角楼で出土した雲文以外の有文瓦当が、瓦当総数の21%であるのに比べ、大幅に減少している。

桂宮出土の、中心に太い縄状文と葵文を飾る瓦当は、漢長安城未央宮の西南角楼出土の葵文瓦当と基本的に同じ文様である。ただし、未央宮西南角楼出土の葵文瓦当は、縄状文の内側に三重線の葵文が右向きに、その外側は左向きに配されている。また、桂宮出土の燕文瓦当は初めて発見されたものだが、燕はいずれも頭を中心に向け、翼を広げて飛び立とうとしており、ひじょうに生き生きとしている。

豊富なバリエーション

**雲文瓦当の類例** 雲文は、桂宮で最も普遍的な瓦当文様であり、そのバリエーションはきわめて豊富である。

中心に四葉文を飾るA型の雲文瓦当は、先秦時代の山東省曲阜魯国故城遺跡ですでに発見例がある。その後、漢代になると、関中地区で比較的流行したが、河南省や河北省などでも出土している。Aa型は、かつて河北省邯鄲の漢代建築遺構から出土したことがあるが、その雲文はキノコ形であった。Ab・Ac・Ad型は、今のところ桂宮でしか見られない。陝西省臨潼魚池遺跡、澄城良周漢建築遺構、淳化甘泉山董家村漢代建築遺構で、Ab型とよく似た雲文瓦当を出土したことがあるが、中心の四葉文に珠文はない。

中心文内に斜格子文を飾るB型の雲文瓦当は、陝西省、河南省、山東省などの戦国時代の建築遺構から数多く発見されている。桂宮出土のこの型の瓦当は、中心部の圏線の中に格子文・斜格子文・三角形文などを飾り、雲文の様式もより豊富になっている。BaⅠ式は、陝西地区の秦漢建築遺構でよく見られる瓦当様式である。BaⅡ式は、河南省登封の東周陽城遺跡で出土したことがある。BaⅢ式は、陝西省臨潼芷陽韓峪郷の秦東陵2号建築遺構で出土例がある。しかし、中心の斜格子文はより密である。BaⅣ式は、今のところ桂宮でしか見られない。Bb型の中心部の文様と基本的に同じ雲文瓦当は、陝西省臨潼の秦代櫟陽城で出土しており、Bc型は陝西省淳化の雲陵園遺跡で出土例がある。

第1表 桂宮出土瓦当一覧

瓦当文様	型式	1号 建築	2号 建築	3号 建築	4号 建築	5号 建築	6号 建築	7号 建築	南門	東西 道路	排水 渠	計
無文半瓦当				1								1
葵文瓦当			1	1	1							3
樹木文瓦当				1								1
動物文瓦当					1							1
渦文瓦当			1									1
雲文半瓦当							2					2
雲文瓦当	Aa				1							1
	Ab				1							1
	Ac			1								1
	Ad		2									2
	Ba I	1	1	2	2					2		8
	Ba II		2								1	3
	Ba III		1									1
	Ba IV		2									2
	Bb		1									1
	Bc		2		1			1				4
	Ca I	8	65	23	66	1		2	1		1	167
	Ca II	1	2									3
	Ca III		1		1							2
	Ca IV		1									1
	Ca V		1									1
	Cb	1	2									3
	Cc	2										2
	Cd				1							1
	Ce		1									1
	Cf		1									1
	Da I			5	11				1			17
	Da II		21	1	1	2						25
	Da III		6	1								7
	Db a I	1	12	23	16	2			2		2	58
	Db a II	2	4		1			1			1	9
	Db a III		1		1							2
	Db b		3	4	10							17
	Db c								1			1
Dc		1									1	
Dd		6									6	
De I		2									2	
De II				1							1	
Df			2								2	
Dg		1									1	
Dh		2		1?							3	
Di I		2									2	
Di II			2	1							3	
Ea		1									1	
Eb		2									2	
F		1									1	
「千秋萬歳」瓦当		8	1								9	
「長生無極」瓦当		16	1					1			18	
「長生未央」瓦当			2	1							3	
「與天無極」瓦当		3	5	2				2		2	14	
「延年益壽」瓦当			1								1	
「石室」瓦当		1						1			2	
計		16	180	77	121	5	2	5	8	2	7	423

型式不明の瓦当は含んでいない。また、たんに瓦当とあるものは円瓦当を示す。



雲文瓦当  
C型

二重の界線が中心文を貫き、その内側にL字形文を飾るC型の雲文瓦当は、桂宮での出土量が比較的多い。Ca I 式は最も多く、2号・3号・4号建築から大量に出土したほか、1号・5号建築、南門、下層排水渠でも発見された。同種の瓦当は、陝西省の戦国から秦代の咸陽1号宮殿で見られ、漢代になっても陝西省西安・臨潼・藍田・華陰・淳化・鳳翔などの建築遺構から比較的多く出土している。また、河北省石家荘と定州でも出土例がある。Ca II 式は、今のところ1号・2号建築で2点ずつ出土しただけである。Ca III 式は、1号・2号・4号建築で1点ずつ出土している。同種の瓦当は、かつて陝西省淳化雲陵園、華陰京師倉遺跡で出土したものの、発見例は比較的小さい。Ca IV 式は、未央宮中央官署遺跡で出土例がある。Ca V 式とCb・Cc・Cd・Ce型は比較的小さいが、Cd・Ce型は未央宮西南角楼で出土したことがある。

雲文瓦当  
D型

中心文が半球形文であるD型の雲文瓦当は、桂宮で数多く発見されている。Da I 式はおもに4号建築で出土し、全体のつくりが大きめのものと小さめのものがある。同種の瓦当は平陵園でも出土例がある。Da II 式はおもに2号建築で出土したが、3号・4号・5号建築でも発見されている。また、未央宮椒房殿でも同種の瓦当がかつて出土した。Da III 式はおもに2号建築で出土しているが、漢長安城窯址にも出土例がある。周縁の内側にX字形文を配するDb型は、桂宮で比較的多く発見されている。Db a I 式は2号・3号・4号建築でいずれも少なからず出土している。陝西省咸陽の渭陵園、咸陽北二道土原の後漢墓の墓道充填土中からも1点ずつ出土したことがある。Db a II・Db a III 式とDb b・Db c・Dc・Dd型は、現在のところ、桂宮で出土したのみである。De I 式は、2号建築で2点出土しただけである。同種の瓦当は、未央宮少府（あるいは所轄官署）遺構における早期の堆積中から、かつて出土したことがある。De II 式は4号建築で1点出土したのみである。Df型は桂宮3号建築で2点出土したが、この建築特有の種類である。Dg・Dh・Di型は、2号建築以外に出土例がなく、2号建築特有の種類である。

中心文に珠文を数多く飾るE型の雲文瓦当は、河南省登封の東周陽城遺跡から出土したことがある。2号建築出土のEa型は、未央宮前殿A区に出土例がある。Eb型は、今のところ桂宮2号建築で見られるのみである。未央宮椒房殿で、かつてEb型とよく似た雲文瓦当が出土したが、雲文の内側から圏線に至る線は単線であり、二重線ではない。

F型雲文瓦当は、現在のところ桂宮2号建築でしか見られない。

**文字瓦当の類例** 漢長安城桂宮出土の「長生無極」瓦当は、おもに2号建築で出土したが、3号・4号建築からも1点ずつ出土した。この種の瓦当は、陝西地区の漢代遺跡に多く、漢長安城未央宮前殿・椒房殿・武庫、漢長安城西北郊窯址、杜陵園、渭陵園、平陵園、華陰京師倉遺跡、淳化漢洪崖宮遺跡、鳳翔雍城遺跡、鳳翔凹里漢代建築遺構などから出土しており、文様も基本的に同じである。

「長生未央」瓦当は、前漢の陝西地区で最もよく見られる文字瓦当だが、桂宮出土瓦の文様は、ほかの地域のものとは異なっている。中心文を貫通する二重の界線が瓦当面を四分し、中心文の圏線の内側を一重の連珠文がめぐる様式は、今のところ桂宮でしか見られない。

「千秋萬歳」瓦当はおもに2号建築から出土しており、瓦当文様の配置や文字の書き方は、陝西省華陰京師倉遺跡出土の「千秋萬歳」瓦当と完全に一致する。しかし、後者は全体的にやや小ぶりで、瓦当径は12.4cmしかない。

3号・4号建築および下層排水渠から出土した「與天無極」瓦当は、過去に陝西地区の漢代建

築遺構から少なからず発見されている。

「延年益壽」瓦当は、漢長安城、神木瑤鎮漢代建築遺構、長安窩頭寨漢代錢范出土遺跡、廬県兆倫漢代鑄錢遺跡などから出土している。そのほかの地区では、中心文に圏線がめぐるのは見られない。桂宮3号建築からは、二重の界線が中心文とその周囲の圏線を貫通し、中心文内にL字形文を飾る瓦当が出土している。

「右空」瓦当は、現在のところ、桂宮2号建築でのみ見られる。

## D 軒丸瓦の製作技法

桂宮出土の瓦当はいずれも型作りで、范を用いて瓦当を成形した後に、丸瓦の製作と接合をおこなう。また、3号建築では、雲文瓦当の范が1点発見されている(3:T1③:84)。瓦当表面は二重線で四分され、各区画内に雲文を飾る。周縁の内側には圏線がめぐり、これから瓦当径を復元すると、16.4cmとなる。

雲文瓦当范

桂宮出土軒丸瓦の製作・接合方法は、おもに四つに分けられる。

製作技法で四つに分類

第一の方法では、范にのせた瓦当の裏面上に、粘土紐で円筒を成形する。このとき、模骨は用いない。その後、円筒の半分を切り離す。この方法によって作られた瓦当の裏面には、丸瓦の断面に沿って通された糸の痕跡が残る。瓦当裏面下半に突帯も残るが、突帯上には糸切り痕がある。瓦当裏面と丸瓦の内側に粘土紐を足して接合を補強した痕跡は見られない。

第二の方法は、范にのせた瓦当の裏面上に、模骨を用いて円筒を成形し、模骨を取りはずした後、円筒の半分を切り離す。このようにすると、丸瓦の断面に沿って糸を通した痕跡が残り、糸切り痕をとまなう突帯が瓦当裏面下半に形成される。瓦当裏面と丸瓦の内側に粘土紐を足して接合を補強した痕跡は見られない。また、瓦当裏面には、長方形か馬蹄形の突起あるいは布目痕が部分的に見られる。

第三の方法は、范にのせた瓦当の裏面に、別作りの円筒を接合した後、円筒の半分を切り離す。この方法で作られた瓦当の裏面と接合した丸瓦の凹面側には、補強のために粘土紐を一周貼り付けた痕跡が残る。また、瓦当裏面には、丸瓦の断面に沿って糸を通した痕跡が残り、糸切り痕をとまなう突帯が瓦当裏面下半に形成される。

第四の方法は、范にのせた瓦当の裏面に、円筒から半分切り離した成形済みの丸瓦を直接接合する。この方法で作られた瓦当裏面と接合した丸瓦の凹面側には、補強のために粘土紐を半周貼り付けた痕跡が残る。瓦当裏面には、糸を通した痕跡や糸切り痕は残らない。

なお、桂宮出土瓦当の観察によれば、糸による切り離しには二通りある。一つは糸の一端を固定し、別の一端を引きながら、半円を描くように円筒の半分を切り離す方法である。もう一つは、糸を粘土円筒に貫通させ、切り離したい円筒の外側に糸の一端を密着させながら、もう一端まで回しこみ、その端部を引っ張ることで円筒の半分を切り離す方法である。

切り離し法は二通り

## E おわりに

桂宮の発掘調査で出土した遺物は、いずれも前漢中期から後期にかけてのものであり、『三輔

黄図』の「桂宮、漢武帝造」という記載と一致している。また、各建築遺構から瓦当が出土したが、これは瓦当が桂宮の建物にごく普遍的に使われていたことを物語る。とくに2号・3号・4号建築からは多量の瓦当が出土しており、かつ種類も豊富である。

3号建築は倉庫建築であり、出土瓦当のうち、有文瓦当はCa I 式とDb a I 型の2種類の雲文瓦当、文字瓦当は「與天無極」が主体であった。4号建築は、皇后や皇妃が宮廷関連の活動に宮中で従事するための補助施設および居住区であり、瓦当はやはりCa I 式とDb a I 型雲文瓦当が主体であった。2号建築は、必要な施設が完全に揃った宮殿建築群といえ、漢の武帝が皇后や皇妃のために造営した重要な宮殿建築である。2号建築の出土瓦当は、有文瓦当ではC型とD型の雲文瓦当が最も多く、文字瓦当では「長生無極」が主体であった。これは、未央宮椒房殿と漢宣帝王皇后陵で発掘された東門・寝殿から出土した文字瓦当がおもに「長生無極」瓦当であった状況と共通する。また、「千秋萬歳」瓦当は2号建築で最も多く発見され、今のところ、2号建築と4号建築でしか見つからないことが注目される。これらは、そうした建物に特有の瓦当として、建物の独自性を示すものといえよう。

## 2 前漢代瓦磚の基礎的研究

劉振東  
張建鋒

### A はじめに

漢代の建築遺跡を調査・発掘すると、多量の瓦磚が出土する。この瓦磚にきめ細かな考古学的研究を加えること、つまり製作技法や使用方法を観察し、その発展の過程および形態・文様の変化を検討することは、漢代の建築遺跡の年代や建築技術、製陶技術の研究にとって重要な意味をもつ。また、前後の時代の瓦磚の比較研究をつうじて、王朝の交替が物質文化の継承や発展にもたらした問題を明らかにするうえでも、大いに参考になる。

前漢代の瓦磚の中でも、豊富な種類と精美なデザインをもち、変化に富んだ瓦当は、研究や著作の刊行が盛んにおこなわれてきた。漢代のとくに軒丸瓦について、日本人の考古学者が専門的な研究をおこなった例もある<sup>(1)</sup>。しかし、一般の磚や平瓦・丸瓦についての製作技法、使用方法、装飾の手法、スタンプで施された陶文(刻印)、時期ごとの特徴などに関する研究は、遺跡の発掘報告や各種の著作に散見される程度にすぎない<sup>(2)</sup>。発掘で出土した多量の瓦磚を用いて、時期区分や年代決定を主旨とした総合的な研究はいまだ僅少である。

そこで、本稿では、前漢の首都である長安(陝西省西安市)地区で出土した磚・平瓦・丸瓦について、基礎的な研究をおこなう。対象としたのは、漢長安城の発掘で出土した資料であり、とりわけ近年発掘された桂宮(Gと略記、以下同様)出土の瓦磚を主体とする。また、北宮南窯跡(Y31~41)<sup>(3)</sup>、施家寨小学校窯跡(Y49・50)<sup>(4)</sup>、武庫(W)<sup>(5)</sup>、未央宮(WY)<sup>(6)</sup>、西市窯跡(Y1~30、Y42~48)<sup>(7)</sup>、城壁西南角楼(西南角と略記)<sup>(8)</sup>の発掘で出土した資料で補足する。このほかに、太上皇陵や杜陵陵园(D)<sup>(9)</sup>の発掘で出土した瓦磚も若干引用する。

以下、製陶技術の変遷を手がかりに、形態と文様の基本要素から、磚・平瓦・丸瓦の詳細な型式分類をおこなう。そして、典型的な遺跡の出土資料を用いて、年代の基本的な枠組みを構築し、各遺跡の資料を総合して、より客観的で詳細な編年案を作成したい。しかし、筆者の研究水準には限りがあり、誤りがあればご批判・ご指摘を請う次第である。

瓦当以外の  
瓦磚を対象

### B 磚の分類

#### i 磚の各部名称と製法・用法

**各部名称** 磚の各部名称については、記述の便宜上、磚の使用時の状況にもとづき、上向きの面を上面、下向きの面を下面、その他の4面を側面(長側面および短側面)と呼ぶ。

**製法と用法** 磚はいずれも型作りである。ここでいう型作りとは、よくこねた粘土を型の中に入れて叩き込み、型を外した後にケズリやナデによる調整を施して完成させる方法である。磚は、おもに地面に敷設されたが、それ以外に、雨落や廊道の縁に置かれることもあり、排水施設や井戸・溝の壁材のほか、アーチ型天井や階段などにも用いられた。

## ii 磚の種類と型式

磚は、その形態により、方磚、長方磚、扇形磚、柄付磚、空心磚、異形磚に分けられる。大多数の磚の表面は無文であるが、一面あるいは複数面に、印判状の施文具や叩き板によるスタンプ文や、線刻による文様をもつものもある。形態や文様の異なる磚は、しばしば異なる用途に使用される。

### a) 方 磚

方磚の主要な用途は地面の舗装だが、廊道や雨落の縁に立てならべることもある。また、加工して各種の磚にし、異なる用途に適応させることもあった。この種の磚は、一つの面がやや大きく、反対側の面がやや小さい形態に作られることが多い。地面を舗装する際には、やや大きい面を上に向け、小さい面を下にする。このように置くことで、磚と磚を密着させ、隙間をなくす。そのため、出土時には、しばしば小さい面に泥状の付着物が認められる。

方磚は、表面の装飾の有無によって、無文方磚と有文方磚に分けられる。有文方磚には、一面あるいは両面に、印判状の施文具や叩き板によるスタンプ文、あるいは線刻による文様が描かれている。文様には、幾何学文、方格文、縄目文、博局文、菱形文および渦文、組み合わせ格子文などがある。

**無文方磚** 上下面と側面ともに文様がない。大小の違いにより、5式に分けられる。

1式は、長さとは幅が異なり、厚さ3.5cm前後の薄めのもの。資料Y38:3は、上面の長さ39.6cm、幅34.5cm。下面の長さ39.4cm、幅34.3cm、厚さ3.4cm。

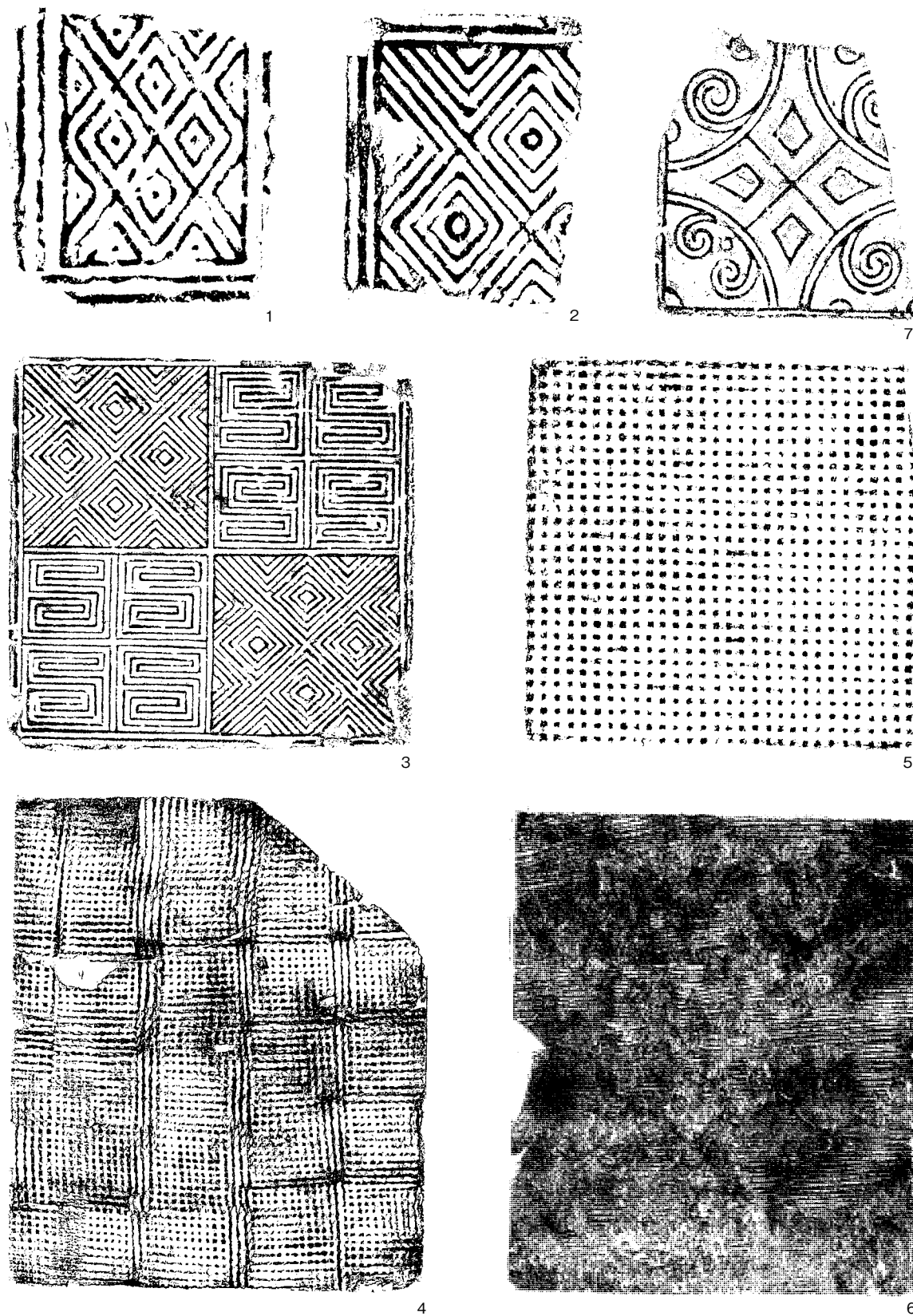
2式は、長さとは幅が基本的に同じで、厚さ3.5cm前後の薄めのもの。資料WY5:T1③:134は、上下面ともに長さ35.5cm、幅34.8cm、厚さ3.5cm。

3式は、長さとは幅が基本的に同じで、厚さ4.0cm前後の厚めのもの。資料G2南:T8③:49は、上面の長さとは幅がともに33.6cm、下面の長さ32.4cm、幅32.8cm、厚さ3.9cm。

4式は、長さとは幅が基本的に同じで、厚さ4.5cm前後の厚めのもの。杜陵3号遺跡から出土した当該型式の資料に、上面の一辺34.9cm、下面の長さ34.9cm、幅34cm、厚さ4.6cmのものがある。資料G4:T1③:122は、上面の長さ34.5cm、幅34.2~34.5cm、下面の長さ33.4cm、幅32.3~33.6cm、厚さ4.5~4.7cm。

5式は、長さとは幅が基本的に同じで、厚さ5.0cm前後の厚いもの。資料G2南T1③:40は、上面の一辺34.1cm、下面の一辺33.5cm、厚さ5.0cm。

**幾何学文方磚** 一般的に、下面に文様を飾り、上面は無文である。用法は無文方磚と同じで、地面を舗装する際には、無文の面を上に向け、有文の面を下に向ける。これによって、磚とその下にある土が密着する強度を高めている。しかし、斜道に敷設するときは、無文面を下に、有文面を上に向けて、文様による摩擦を強め、滑り止めとする。また、後者の状況で用いる場合は、磚にさらに加工を施す必要があり、刃物のような工具で磚の側面を削って、文様のある面を大き



1：幾何学文方磚Ⅰ型1式    2：幾何学文方磚Ⅰ型2式    3：幾何学文方磚Ⅱ型4式  
 4：小方格文方磚Ⅰ型    5：小方格文方磚Ⅱ型2式    6：網目文方磚    7：菱形文および渦文方磚

第9図 磚(1) 方 磚

めに、無文の面を小さめにしている。

磚の表面にスタンプされた幾何学文様の一般的な配置は、垂直に交わる十字形の二重線で面を4区画に分けて、各区画内に2種類の文様を飾るものである。一つは曲折文、もう一つは菱形文と直角文であり、対角に位置する両区画で文様が共通する。磚の規格と表面の文様細部の特徴によって、Ⅰ～Ⅲの3型に分けられる。

#### 幾何学文 方磚Ⅰ型

Ⅰ型は、薄めで、ほぼ長方形を呈するもの。文様の細部に見られる特徴の違いから、2式に細分される。

1式は、資料太上皇陵採:5(第9図1)。文様の外縁を囲む方形区画は三重線で描かれている。菱形文と直角文で構成された長方形の1区画しか残存していない。単線により、文様はさらに四つの小区画に区分され、各小区画に三重の菱形文が1組と二重の直角文が3組飾られる。外側に位置する菱形文のうち二辺は区画線を借用し、最も内側には、菱形文と菱形の直角文、方形の乳釘状の文様がある。残存長16.6cm、残存幅14.5cm、厚さ2.7～3cm。

2式は、資料G1:T10③:2(第9図2)。文様の外縁を囲む方形区画は二重線で描かれている。菱形文と直角文で構成された1区画だけが、一部欠失するものの残存する。二重線により文様はさらに四つの小区画に区画され、各小区画に四重の菱形文が1組と三重の直角文が2組飾られる。外側に位置する菱形文のうち二辺は区画線を借用している。内側の菱形文はあまり整った形ではなく、円形に近い。残存長13.7cm、残存幅11.8cm、厚さ2.4cm。

#### 幾何学文 方磚Ⅱ型

Ⅱ型は、厚めで、基本的に正方形を呈するもの。文様の外縁を囲む方形区画は二重線で描かれている。二重の区画線で4区画に分けられる。そのうち曲折文のある2区画は、二重線によりさらに四つの小区画に分けられる。各小区画には二重線による曲折文(5回折れ曲がるものが一般的)が1組飾られる。他の2区画には菱形文と直角文が飾られる。文様の細部に見られる特徴の違いによって、4式に細分される。

1式は、菱形文と直角文の区画が、単線によりさらに四つの小区画に分けられるもの。各小区画に四重の菱形文が1組と三重の直角文が2組ある。外側に位置する菱形文のうち二辺は区画線を借用している。資料G2南:T6③:8(長方形に加工してあり、異形磚に属する)は、下面の長さ35.0cm、幅28.5cm、上面の長さ35.3cm、幅28.8cm、厚さ5.1cm。下面に幾何学文を飾る。

2式は、方形の区画線が、曲折文の組ごとにその外側を囲むもの。菱形文と直角文の区画は、二重線によりさらに四つの小区画に分けられる。各小区画に三重の菱形文が1組と三重の直角文が2組飾られる。外側に位置する菱形文のうち二辺は区画線を借用している。資料G2南:T1③:25がこれにあたる。上面に幾何学文を飾る。長さ33.0cm、残存幅17.0cm、厚さ4.4cm。

3式は、菱形文と直角文の区画が、二重線によってさらに四つの小区画に分けられるもの。各小区画は、三重の菱形文が1組と三重の直角文が2組飾られる。資料G4:T1③:123の完形品がこれにあたる。上面は文様が施され、長さ35.0～35.6cm、幅35.0cmである。下面の長さ34.7～35.2cm、幅35.0cm、厚さ5.3cm。

4式は、曲折文が各組とも二重線で描かれ、6回折れ曲がるもの。菱形文と直角文の区画は、二重線でさらに四つの小区画に分けられる。各小区画に四重の菱形文が1組と四重の直角文が2組飾られる。資料G2北:T1③:21の完形品(第9図3)がこれにあたる。上面は文様が施され、長さ33.0cm、幅32.8cmである。下面の長さ32.5～33.0cm、幅31.7cm、厚さ4.0cm。

Ⅲ型は、文様の外縁を囲む方形区画が単線で描かれているもの。曲折文の区画は二重線によって、さらに四つの小区画に分けられる。各小区画は、11回折れ曲がる単線で表現された曲折文が1組飾られる。菱形文と直角文の区画も、二重線によりさらに四つの小区画に分けられる。各小区画には四重の菱形文が1組と二重の直角文が2組飾られる。外側に位置する菱形文のうち二辺は区画線を借用している。杜陵2号遺跡から出土したⅢ型の1点は、上面の長さ34.5cm、幅34.0cm、下面の長さ33.3cm、幅33.0cm、厚さ4.5cmである。

**小方格文方磚** I～Ⅲの3型に分けられる。

I型は、上面は叩きによる縄目が縦横に交差して小方格文を形成する。下面は叩きによる縄目が施される。資料Y37:4(第9図4)は、上面の一辺34.9cmで、28個の大方格に分けられる。いずれの方格内にも、叩きによる縄目で、より小さな方格文が形成される。縄目の幅は0.6cmである。下面は一辺34.6cm、厚さ2.8cm。側面に陽文で「大匠」の刻印がある。四つの側面はいずれも削られている。

II型は、無文の面と、小方格文をもつ面とがある。厚さの違いにより、2式に分けられる。

1式は厚さ2.0～3.5cmと薄手のもの。未央宮西南角楼で出土した資料のように、上面に小方格文を飾る。上面の一辺35.2cm、下面の一辺34.8cm、厚さ3.0cm。

2式は、厚さ4～5cmと厚手のもの。杜陵2号遺跡から出土した資料(第9図5)は、上面が無文で、長さ30.3cm、幅29.8cm。下面は小方格文があり、長さ29.5cm、幅29.0cm、厚さ5.1cm。

Ⅲ型は、両面に小方格文を飾る。資料W1:256は残存長14.1cm、残存幅14.0cm、厚さ2.7cm。

**縄目文方磚** 一般的に薄手で、上面は無文、下面に叩きによる縄目がある。側面の下面寄りにケズリを施し、下面を上面よりやや小さくすることで、敷設の時に磚どうしの隙間をなくす工夫をしている。資料Y37:5(第9図6)は、上面の長さ40.0cm、幅34.3cm、下面の長さ39.9cm、幅33.8cm、厚さ3.0cm、縄目の幅0.5cm。四つの側面のうち3面にケズリ痕がある。

**博局文方磚** 上面に博局文が陰刻される。資料Y37:6は、長さ38.8cm、幅34.8cm、厚さ3.3cmである。

**菱形文および渦文方磚** 上面に二重線による菱形を描き、その中を単線の十字が4区画に分ける。各区画に単線による菱形文が一つずつ飾られ、二重線の菱形文の外側に渦文が施される。下面には、幅0.6cmと太めで直線状を呈する縄目がある。資料Y40:3(第9図7)は、残存長20.0cm、残存幅18.0cm、厚さ3.0cm。

**組み合わせ格子文方磚** 格子文と斜格子文の組み合わせで装飾された区画と無文の区画とが、交互に配列されている。資料WY1A:T1③:61は、厚さ4.8cmである。

#### b) 長方磚

各面とも長方形を呈するもので、表面の装飾の違いにより、I～Ⅳの4型に分けられる。

I型は、無文のもの。排水穴や排水溝の壁材、見切りなどに用いた。大小2種あり、そのうち幅広のものは、一般的に長さ31.0～39.2cm、幅15.5～19.7cm、厚さ4.7～11.0cmである。資料G2南:T8③:52は、上面の長さ38.0cm、幅19.0cm、厚さ9.7cm。一方、幅の狭いものは、長さ32.3～37.4cm、幅7.5～9.9cm、厚さ5.0cm前後である。資料WY2:T7③:97は、長さ35.0cm、幅8.0cm、厚さ4.8cm。

II型は、一つの面に縄目文を飾る。資料W3:T2:3は、長さ34.5cm、幅16.1cm、厚さ6.5cm。縄



目の幅は0.5cmである。

Ⅲ型は、一つの面に幾何学文を飾る。武庫5号遺跡で出土したⅢ型の資料は、長さ31.3cm、幅11.7～12.0cm、厚さ5.4cmである。

Ⅳ型は、一つの面にスタンプで施された文様を飾る。側縁が突帯になっている。資料Y50:12(第10図1)は、残存長13.0cm、幅7.2cm、厚さ2.8cm、枠の幅1.3cm、高さ0.3cmである。

### c) 空心磚

内部が空洞のもので、階段に敷設した。完形品はない。無文空心磚、幾何学文空心磚、龍鳳文空心磚、翼虎文空心磚、菱形格子文(内側は「田」字形四菱文)空心磚、方形单位米字文空心磚、樹木文同心円文空心磚などに分けられる。

**無文空心磚** 資料Y27:13は、残存長28.5cm、幅23.7cm、厚さ4.5～4.6cm。

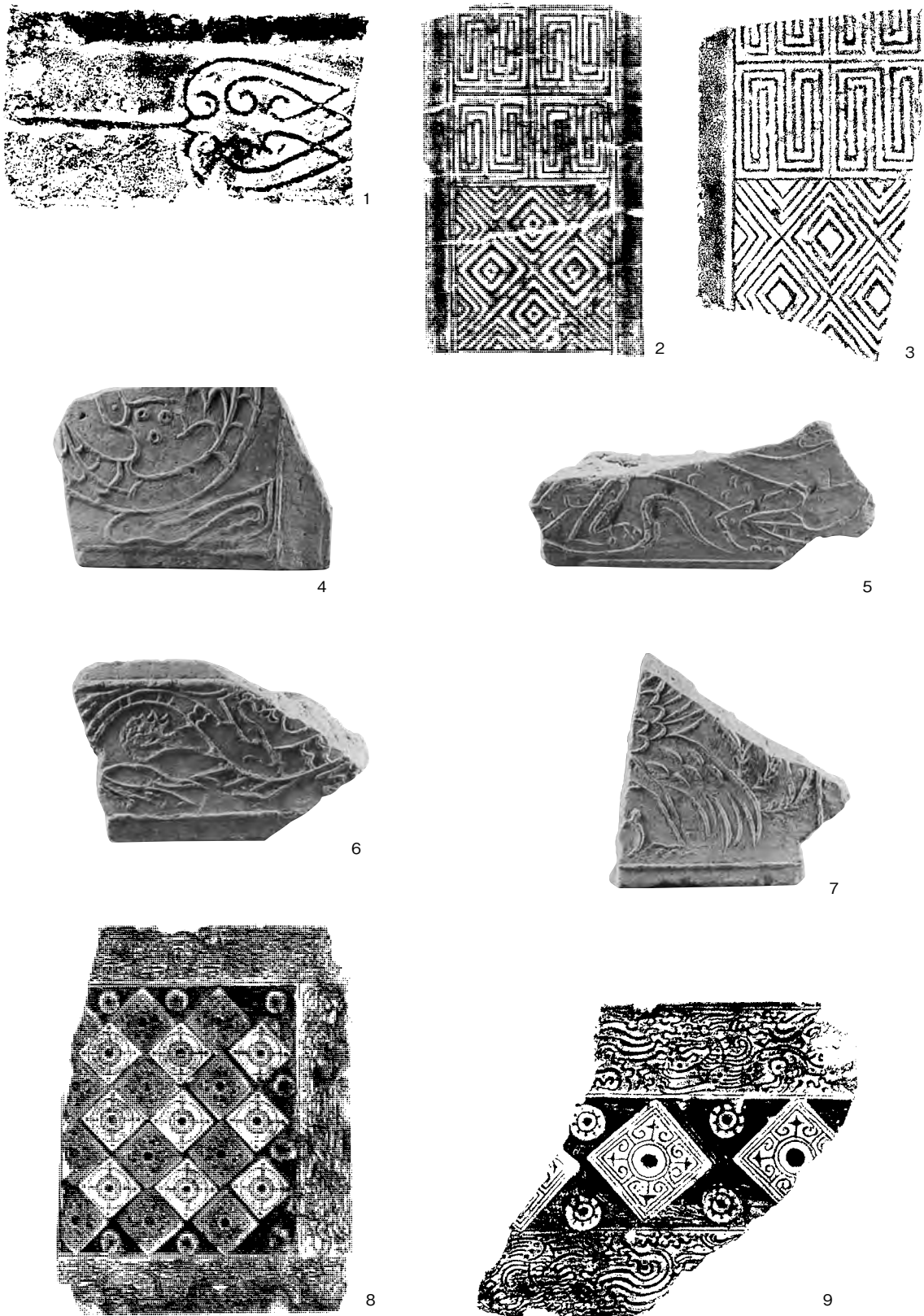
**幾何学文空心磚** 曲折文および菱形文・直角文で表面を交互に飾る。これは漢代の空心磚の様式である。文様の違いによって、Ⅰ・Ⅱの2型に分ける。

Ⅰ型は薄手のもの。文様帯全体の外縁に二重線で描かれた方形区画がめぐり、区画の中は縦方向に二重線で等分され、曲折文区と菱形文・直角文区が交互に配される。曲折文区は、二重線でさらに四つの小区画に分けられ、各小区画内には、5回折れ曲がる1組の曲折文が二重線で描かれている。菱形文・直角文区も、二重の区画線で四つの小区画に分けられ、各小区画内には、四重の菱形文が1組と三重の直角文が2組飾られる。外側の菱形文のうち二辺は区画線を借用し、内側にある菱形文は、方形の乳状突起のような形を呈する。資料Y37:3は、残存長31.0cm、幅19.5cm、厚さ2.3cm(第10図2)。

Ⅱ型は厚手のもの。文様帯全体の外縁に単線ないし二重線で描かれた方形区画がめぐり、区画の中は縦方向に単線ないし二重線で等分され、曲折文区と菱形文・直角文区が交互に配される。曲折文区内は、単線ないし二重線でさらに四つの小区画に分けられ、各小区画内には、5回折れ曲がる1組の曲折文が二重線で描かれている。菱形文・直角文区も、単線もしくは二重の区画線で四つの小区画に分けられ、各小区画に四重あるいは三重の菱形文が1組と三重の直角文が2組飾られる。外側の菱形文のうち二辺は区画線を借用している。資料G2南T1③:39(第10図3)は、残存長29.5cm、残幅10.7cm、高さ19.7cm、厚さ4.2cm。

**龍鳳文空心磚** 杜陵8号遺跡で出土している(第10図4～7)。

**翼虎文空心磚** 翼虎文・柿蒂文しでい・連珠文などを組み合わせて文様を構成する。側面の文様構成は、両端に翼虎文、中央に柿蒂文と小連珠文を配置する。柿蒂文の構造は、二重線による方形区画の中央に大きな乳状突起を1個おき、その外周を二重線で丸く囲む。方形区画と円の間は、単線で4区画に等分され、各小区画に柿蒂文を飾る。小連珠文の構造は、1個の乳状突起を円が取り囲み、その外側を9個の小さい乳状突起が取り囲む。上面にある文様の構造は、三辺を唐草文で飾り、中央を柿蒂文・大連珠文・小連珠文で飾る。柿蒂文の構造は側面のものと同じであるが、図案は小さい。小連珠文の構造も側面のものとはほぼ同じだが、円の外側を囲む小乳状突起は18個である。大連珠文の構造は、方形区画の中心に乳状突起が一つあり、その外側を円が取り囲み、さらにその外側を小乳状突起が23個ずつ二重にめぐり、方形区画の四隅から乳状突起が3個ずつ、小乳状突起の円に向かって直線状に並ぶ。資料G2北:T8③:46(第10図8)は、残存長25.4cm、幅33.5cm、残存高8.0cm、厚さ3.7～4.4cm。資料G2南:T3③:9(第10図9)は、残存長22.0cm、



1：長方磚Ⅳ型    2：幾何学文空心磚Ⅰ型    3：幾何学文空心磚Ⅱ型    4～7：龍鳳文空心磚  
 8：翼虎文空心磚上面    9：翼虎文空心磚側面

第10図 磚（2）長方磚・空心磚

残存幅6.0cm、高さ18.0cm、厚さ4.2cm。

**菱形格子文空心磚** 杜陵5号遺跡Y2から1点出土した(第11図1~5)。残存長82.5cm、幅30.3cm、高さ18.0cm、厚さ3.0cm。上面は、中央に菱形格子文の文様帯が5列あり、菱形格子文の中には「羽觴」文と「田」字形四菱文が交互に並ぶ。菱形格子文の上下には、連珠文が1列ずつ並ぶ。連珠文は、中央に大きな乳状突起が1個あり、その外側を9個の小乳状突起が囲む。上面の上下縁辺部には、外側を菱形文、内側を網目文で構成された文様帯がある。左右の縁辺部は、網目文の文様帯が飾られる。下面の文様は、中央に方形単位文が7列に並ぶ。方形単位文の中には2種類の文様がある。一つは中心が同心円で、その外側を四葉文が取り巻く。もう一つは大きな乳状突起で、両者は交互に配列される。方形単位文の文様帯の上下には、連珠文が1列ずつ並ぶ。また、下面の上下縁辺部には菱形文の文様帯、左右縁辺部には網目文の文様帯が並ぶ。空心磚の両側面は、1面に菱形格文とその上下に連珠文を配する。もう1面は、三つの区画(四葉文が2列、大乳状突起が1列並ぶ)とその上下に連珠文、上下縁辺部には網目文を飾る。

**方形単位米字文空心磚** 無文の方形単位と米字文の方形単位を交互に並べる。資料WY3:T10③:21(第11図6)は厚さ5.3cmである。

**樹木文同心円文空心磚** 資料Y16:77(第11図7)は2面が残存する。一つの面に菱形格子文、同心円文、樹木文、柿蒂文などを飾り、もう一つの面には縄目を飾る。厚さ2.2~2.5cm。

#### d) 扇形磚

平面が扇形を呈するもの。表面の装飾の違いにより、I・IIの2型に分ける。

I型は無文のもので、大きささまざまである。井戸や貯蔵穴の壁に積み上げた。未央宮で出土した扇形磚は、外弧長20.0~49.7cm、内弧長13.4(破損)~29.0cm、幅17.3~19.4cm、厚さ9.1~10.1cmである。資料WY2:T6③:99は、外弧長49.7cm、幅18.0cm、厚さ9.2cm。資料WY3:T10③:22は、外弧長35.5cm、内弧長26.0cm、幅17.3cm、厚さ9.2cm。杜陵で出土した扇形磚には大小2種がある。大きいものは外弧長22.0cm、内弧長14.5cm、幅14.0cm、厚さ7.2cm。小さいものは外弧長16.0cm、内弧長10.5cm、幅10.4cm、厚さ7.0cm。桂宮で出土した資料G2南:T5③:70は、外弧長36.4cm、内弧長30.0cm、幅13.8cm、厚さ6.5cm。

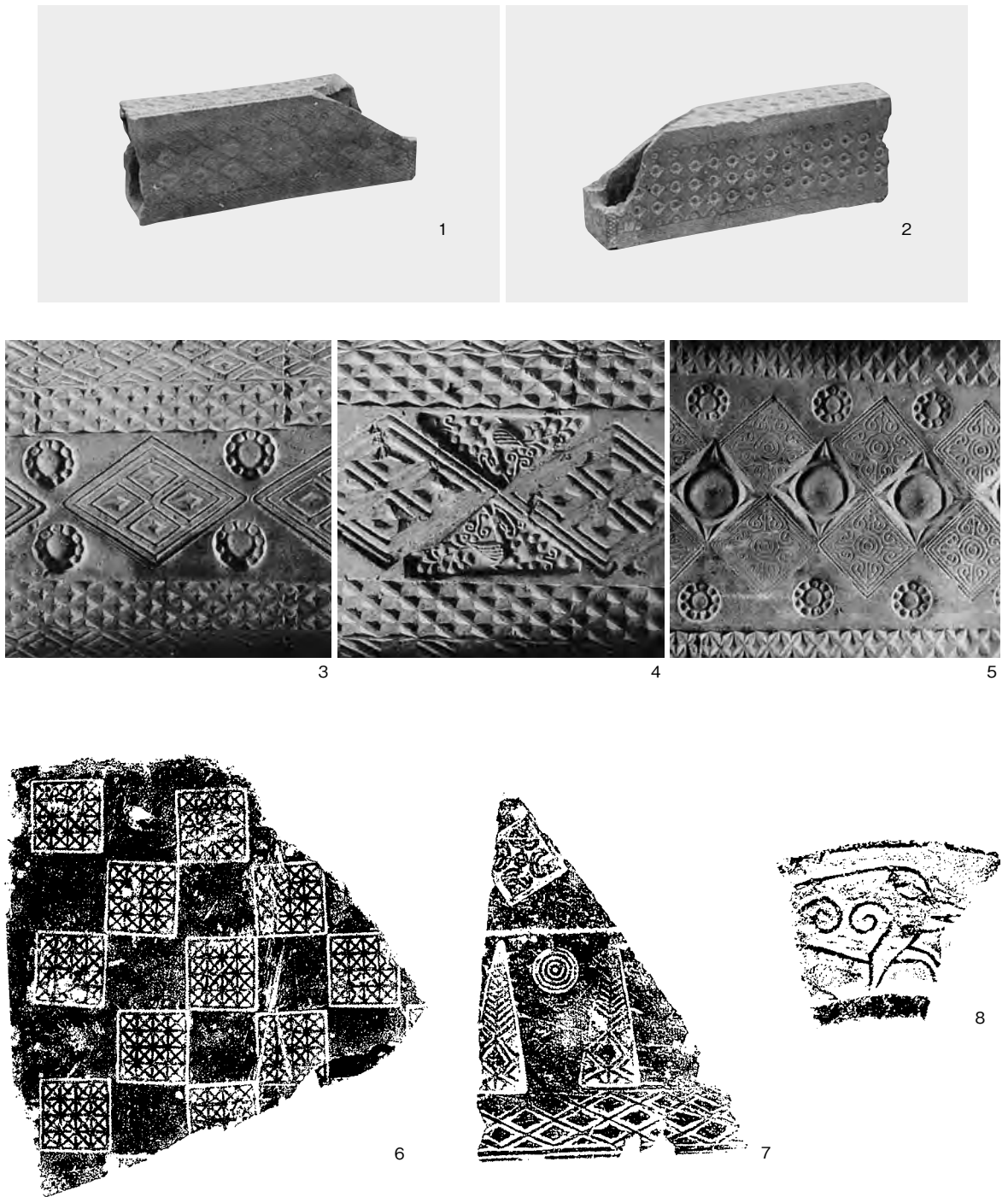
II型は、スタンプによる文様が一つの面に施される。その他の面に文様はない。文様の側縁は突帯になっている。資料Y50:13(第11図8)は外弧残存長11.8cm、内弧残存長5.0cm、幅7.9cm、厚さ2.9cm、枠の幅1.1cm、高さ0.3cm。

#### e) 柄付磚

平面は長方形を呈し、両長辺のうち、一辺の中央に柄、反対側の辺の中央に柄穴がある。無文で、大きささまざまである。磚の両端は厚さが異なり、柄がある端部は比較的厚く、柄穴のある端部は比較的薄い。溝のアーチ天井などの構築に用いられた。資料Y25:14は、長さ24.5cm、幅29.2cm、厚さ3.5~4.5cm。資料WY3:T10③:23は、長さ32.0cm、幅28.0cm、厚さ4.3~6.2cm。資料G3:排水溝:20は、長さ35.5cm、幅25.0cm、厚さ5.0~7.0cm、柄の長さ3.9cm、幅5.0cm、柄穴の幅5.0cm、深さ5.5cm。

#### f) 異形磚

方磚や長方磚を加工ないし改造した、通常と異なる形態や用途の磚で、三角形磚、四辺形磚、L字形磚、軸吊孔のある磚などがある。磚の側面には、刃物状の工具でケズリを施した痕跡が残



1～5：菱形格子文空心磚 6：方形單位米字文空心磚 7：樹木文同心円文空心磚 8：扇形磚Ⅱ型

第11図 磚(3) 空心磚・扇形磚

っている。

**三角形磚** 無文方磚から作られたものである。資料G2南:T5③:85は、上面の長辺長32.4cm、高さ16.9cm、厚さ4.4cm。資料WY2:T7③:85は、一つの面の底辺長44.3cm、その両側の辺長31.0cmと32.0cm、厚さ4.7cm。

**四辺形磚** 無文方磚を改造したもので、三角形の一つの角を取り除いたような形状である。資料G2南:T5③:74は、上面の長さ30.5cm、幅22.0cm、厚さ3.7cm。

**L字形磚** 無文方磚を改造して作られたものである。資料G2南:T5③:78は、上面の長さ29.5cm、幅20.5cm、厚さ4.4cm。

**軸吊孔のある磚** 長方磚を加工して作られたもので、一つの面に臼状の凹みがある。資料G2北:T3③:6は、残長21.5cm、幅19.0cm、厚さ9.7cm、凹みの径6.6cm、深さ3.5cm。

## C 平瓦の分類

### i 平瓦の各部名称と製法

**各部名称** 製作時の状況によって、凸面、凹面と呼び、その他の長辺方向の2面は側面、短辺方向の2面は端面と呼ぶ。幅の大きいほうの端を広端とし、小さいほうの端を狭端とする。狭端から広端に向かって、狭端縁、上部、下部、広端縁など、いくつかの部分に分けられる。

**製法** 平瓦の製作にあたっては、まず手作りか型作りによって、上が小さく下が大きい粘土円筒を作る。その粘土円筒の内側から、4等分になるように刃物で上下方向に切り込みを入れる。切り込みは一般に浅い。その後、円筒が少し乾燥するまで待ち、凹面の切り込み部分に外側から打撃を加えると、円筒は切り込みに沿って自然に割れる。このようにして4分割された一つひとつが、平瓦になる。平瓦の凸面には叩きによる縄目があり、上下両端縁はナデにより消されていることが多い。凹面は通常、ナデのため無文になっているが、成形時の当て具痕や、模骨から付いた凹点文（「麻点紋」）、斜位の縄目文、斜格子文、格子文、指頭圧痕、布目痕などが残存していることもある。

粘土円筒  
を4分割

### ii 平瓦の型式

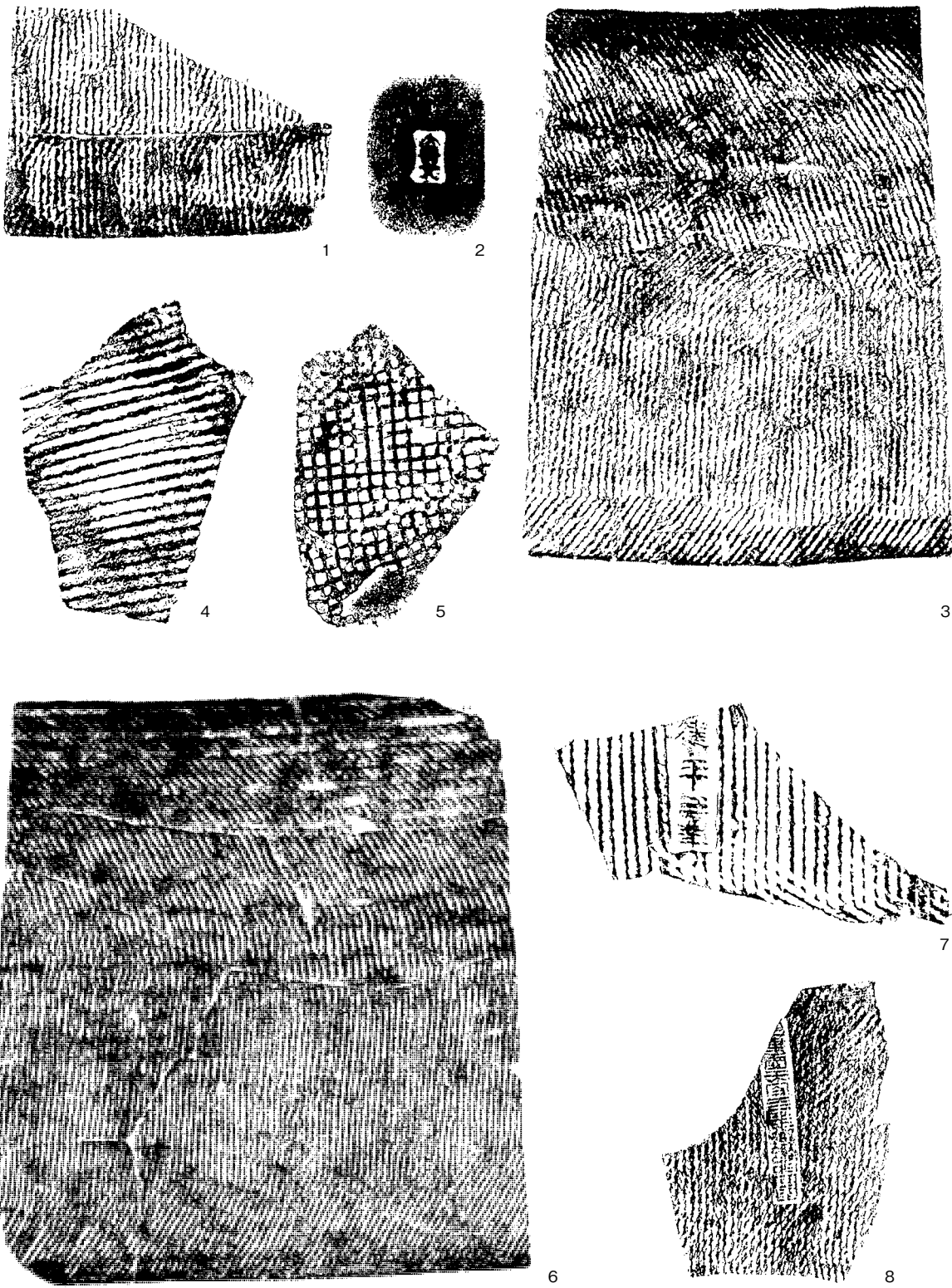
平瓦の製法と凸面や凹面に見られる文様細部の特徴などにより、I～VIの6型に分ける。

I～V型は  
手作り成形

**I 型** 手作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目がある。凹面はナデ調整されているが、凹点文が残る。細部の特徴の違いによって、3式に分かれる。

1式は、縦位と斜位の縄目を凸面に施す。上部と下部にはそれぞれ、縄目をなで消した段がある。資料Y31:5は、凸面下部の縄目が幅10cm前後消されている。凹面下部には、陰文で「大匠」と刻印される。残存長14.4cm、残存幅43.0cm、厚さ1.7cm。資料W7:188は、凸面上部の縄目が幅7.3cmにわたってなで消されるが、一部に縄目の痕跡が残る。残存長37.8cm、残存幅29.5cm、厚さ1.4cm。資料W4:173（第12図1・2）は、凸面下部の縄目が幅10.5cmにわたり消されている。凹面に陽文で「大卅五」の刻印がある。残存長15.3cm、残存幅33.0cm、厚さ1.7cm。

2式は、凸面に叩きで縦位の縄目をつけ、次に斜位の縄目を施す。縄目の幅は0.7cm。下部に縄



1・2：平瓦Ⅰ型1式 3：平瓦Ⅱ型 4・5：平瓦Ⅲ型 6：平瓦Ⅴ型 7：平瓦Ⅵ型2式 8：平瓦Ⅵ型3式

第12図 平瓦

目をなで消した箇所が1段ある。資料Y34:10は、下部の縄目が幅7.7~8.9cmにわたってなで消されている。残存長34.1cm、幅43.9cm、厚さ1.3~1.6cm。

3式は、凸面の下部に右斜め方向の縄目、中ほどより上には左斜め方向の縄目が、叩きによって施されている。縄目の幅は0.7cmである。下部に縄目をなで消した箇所が1段ある。資料Y26:1は残存長31.3cm、残存幅28.9cm、厚さ1.5~2.2cm。右下の角の近くに円形の孔が一つある。凸面から凹面に穿孔されたもので、径1.4cm。

**Ⅱ 型** 手作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目がある。凹面はナデ調整されているが、斜位の縄目の痕跡が残る。資料Y50:3は、凸面上部の縄目が幅約8cmにわたってなで消されている。残存長13.0cm、残存幅19.5cm、厚さ1.3cm。杜陵2号遺跡から出土した資料(第12図3)には、凸面広端縁に右斜め方向の縄目、その上は中ほどまで縦位の縄目、上半には左斜め方向の縄目が、叩きにより施されている。また、中ほどには、右斜め方向の縄目も一部認められる。長さ57.0cm、広端幅39.5cm、狭端幅35.5cm、厚さ1.5~1.9cm。

**Ⅲ 型** 手作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目、凹面に斜格子文か格子文がある。太上皇陵T1から出土した資料は、凸面に幅0.5cmの縄目、凹面に粗い斜格子文がある。残存長20.5cm、残存幅9cm、厚さ1.5cm。資料太上皇陵T1:3は、凸面の縄目の幅が0.7cmで、凹面に細かい斜格子文がある。残存長19.7cm、残存幅11.5cm、厚さ1.6~2.4cm。資料太上皇陵T1:2(第12図4・5)は、凸面の縄目の幅が0.7cmで、凹面に格子文がある。残存長16.0cm、残存幅14.2cm、厚さ1.6~2.4cm。

**Ⅳ 型** 手作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目、凹面に指頭圧痕がある。資料WY1A:T1③:76Aは、長さ55.5cm、幅27.5cm、厚さ1.4cm。

**Ⅴ 型** 手作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目があり、凹面は無文である。杜陵6号遺跡で出土した資料(第12図6)は、下部に右斜め方向の縄目、中ほどに縦位の縄目、上部に左斜め方向の縄目が施されている。長さ57.4cm、幅43.5~48.8cm、厚さ2.3~3.3cm。

型作り成形  
のⅥ型

**Ⅵ 型** 型作りによる成形で、凸面には叩きによる縄目、凹面に布目痕がある。なで消されているものと、布目の外側にほかの文様を施すものがある。3式に分かれる。

1式は、凸面の叩きによる縄目の方向が、下部は右斜め、中ほどは縦、上部は左斜めである。縄目は幅0.6~0.8cm。資料G3:T1③:101は、長さ53.5cm、残存幅38.4cm、厚さ1.7~1.8cm。

2式は、凸面の下部に、叩きによる左斜め方向の縄目があり、ナデによる数条の幅広い凹帯をはさんで、その上は縦位の縄目となる。資料西南角T4H2:10は、残存長9.9cm、残存幅18.5cm、厚さ1.6cm。凸面に陽文で「建平三年」の刻印がある(第12図7)。資料西南角T4③:39は、残存長19.0cm、残存幅12.6cm、厚さ1.5cm。凸面に陽文で、縦方向に「(建)平三年」の刻印がある。

3式は、凸面の下部に左斜め方向、その上は縦位の縄目が施される。凹面に布目痕があり、布目の外側には縦長の楕円形文や平行文などが配される。資料西南角T4③:43は、残存長24.8cm、残存幅20.0cm、厚さ1.5~2.0cmである。凸面に陽文で、縦方向に「始建國天鳳四年保城都司空」の刻印があり、凹面には布目痕とその外側に縦長の楕円形文が配される。資料西南角T4③:45(第12図8)は、残存長23.8cm、残存幅17.9cm、厚さ1.8~2.0cm。凸面に陽文で、縦方向に「始建國天鳳四年保城都司空」の刻印があり、凹面には布目痕とその外側に平行文がある。

## D 丸瓦の分類

### i 丸瓦の各部名称と製法

**各部名称** 製作時の状況によって、凸面、凹面と呼び、その他の長辺方向の面は側面、短辺方向の面は端面と呼ぶ。幅の大きいほうの端を広端とし、小さいほうの端を狭端とする。胴部と玉縁部からなり、狭端から広端に向かって、玉縁部、狭端縁、上部、下部、広端縁など、いくつかの部分に分ける。

**製法** 丸瓦の製作にあたっては、まず輪積みか模骨によって粘土円筒を作り、その円筒の狭端に玉縁部を作り出した後、刃物で円筒の凸面あるいは凹面を上下方向に切り込む。切り込みは、完全に切り抜く場合もあるが、通常は最後まで切り通すことはない。円筒が少し乾燥するのを待ち、切り込み部に凸面から打撃を加えると、円筒は切り込みに沿って自然に割れる。このようにして2分割された一つひとつが丸瓦となる。丸瓦の凸面には、一般的に叩きや回転押捺による縄目があるものの、上部と下部はなで消されていることが多い。凹面には、成形時の当て具痕や、模骨の凹点文、布目痕がまんべんなく残されている。

粘土円筒  
を2分割

### ii 丸瓦の型式

丸瓦の製法や分割方法、形態の大小、凸面および凹面の文様細部の特徴などによって、I～IIIの3型に分かれる。

**I型** 輪積みにより成形され、模骨を用いない、規格性の低い作りである。成形後の円筒の外側から内側に向けて切り込みを入れ、切り口は比較的深い。凸面には叩きによる縄目が施され、上部と下部の縄目は、それぞれなで消されている。下部の縄目がなで消された部分のほうが、縄目が残る部分よりも長い。凹面には凹点文がある。

輪積み成形

この型の丸瓦は、瓦当と接合する方式に2種類ある。一つは、範で瓦当を作り、直接、瓦当裏面に輪積みで粘土円筒を成形した後に、刃物で円筒を二分し、糸か刃物で円筒の半分を瓦当から切り離す（I型接合、第13図1）。もう一つは、輪積みで粘土円筒を作り出した後に、瓦当裏面と接合し、最後に糸か刃物で円筒の半分を切り離す（II型接合、第13図2）。

I型・II型  
接合

瓦当裏面には、糸か刃物で切り離した痕跡が残る。円筒の切り離し方は、おもに次のようなものである。一つは、糸を円筒に貫通させ、その一端を固定して、糸の另一端を引きながら、半円を描くように円筒の半分を切り離す。瓦当裏面下半の突帯に残る切り離し痕は、一端からもう一端へと、内から外に向かって斜めに伸びる擦痕になる（1型切り離し法、第14図1）。もう一つの切り離し方法は、糸を円筒に貫通させ、切り離したい円筒の外側に糸の一端を密着させながら、もう一端まで回しこみ、その端部を引っ張ることで円筒の半分を切り離すものである。この方法でおこなうと、一端からもう一端へと、外から内に向かって斜めに伸びる擦痕が瓦当裏面下半の突帯につく（2型切り離し法、第14図2<sup>(10)</sup>）。

1型・2型  
切り離し法

I型は、細部に見られる特徴の違いにより、3式に分けられる。

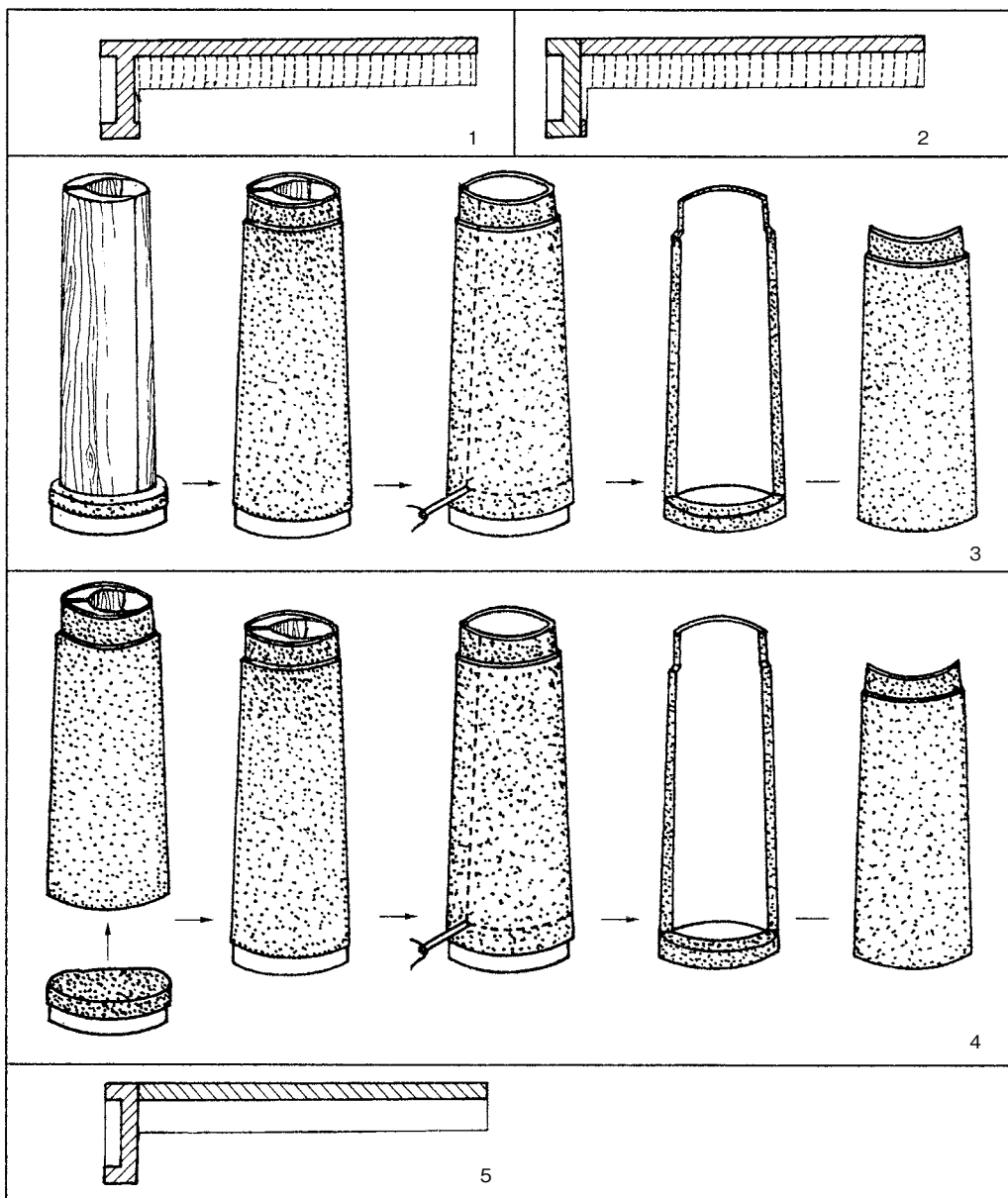
1式は、凸面に叩きによる細めの縄目がある。縄目は幅0.2cmで、比較的浅い。資料Y37:1は、



Ⅲ型1式の瓦当と接合する。上部の縄目は、幅8.4cmにわたってなで消されている。長さ57.1cm、径16.5~16.8cm、厚さ1.5cm、玉縁部の長さ2.6cm、厚さ1.0cm(第14図3)。資料Y34:8(第14図4・5)は、無文の半瓦当と接合する。残存長34.5cm、幅15.1~15.8cm、厚さ1.2~1.9cm。凸面の広端近くに、陰文で「大匠」と刻印されている。

2式は、凸面に叩きによる太めの縄目がある。縄目は幅0.4cmで、比較的深い。資料Y50:15は、上部の縄目が幅7.5cm、下部の縄目が幅約7cmにわたってなで消されている。長さ51.5cm、幅16.8~17.2cm、厚さ1.0cm、玉縁部の長さ2.5cm、厚さ1.0cm。

3式は、凸面に叩きによる斜位の縄目がある。縄目の幅は0.3cm前後で、比較的深い。凹面の広端縁は斜めに面取りされている。資料G3:T2③:10は、縄目の幅0.3~0.4cmである。上部の縄目



1 : I型接合    2 : II型接合    3 : III型接合    4 : IV型接合    5 : V型接合

第13図 丸瓦と瓦当の接合方式 (模式図)

は幅約5cm、下部の縄目は幅約6cmにわたって、それぞれなで消されている。凹面の広端縁を、ケズリにより幅約3cmにわたって面取りする。長さ49.1cm、幅13.4~14.5cm、厚さ1.3cm、玉縁部の長さ2.4cm、厚さ0.9cm。

Ⅱ型 模骨によって成形され、規格性が高いつくりである。成形後、円筒の外側から内側へ向かって切り込みを入れ、この時点でほとんど切断している。凸面には叩きあるいは回転押捺による縄目があり、上部および下部の縄目は1段ずつなで消されている。残された部分の縄目は、下部のなで消された部分より長い。凹面には布目痕がある。瓦当の切り離し法は、1型と2型の両者があるが、2型が主流である。

この型の丸瓦は、瓦当と接合する方式に2種類ある。一つは、範で瓦当を作り、瓦当裏面に模骨をのせて、直接、円筒を成形した後に、糸か刃物で円筒の半分を切り離す(Ⅲ型接合、第13図3)。もう一つは、模骨で円筒形を作り出した後に、瓦当裏面と接合し、最後に糸か刃物で円筒の半分を切り離す(Ⅳ型接合、第13図4)。

Ⅲ型接合では、瓦当裏面に模骨底部の圧痕が残る。現有資料から見て、模骨には2種類があった。一つは、平面が弧形を呈する厚い木材をいくつか(3個が一般的)組み合わせて、円筒形を作るものである。この組み合わせ式模骨の木材は、それぞれが密着していないため、瓦当の上に模骨を縦置きして丸瓦を作る際に安定しない。そこで、模骨を下(瓦当裏面)に押しつけることで、瓦当裏面に馬蹄形の突起とそれを取り囲む凹みが残る(第14図6・7)。もう一つの模骨は、薄い木板を数多く組み合わせて、円筒形を作るものである(取り出し口をあけておき、丸瓦を成形した後に模骨を取り出しやすくしたはずである)。これを用いて瓦当裏面上で丸瓦を作ると、模骨の外側に装着した布袋が模骨の下に押しつけられて、瓦当裏面には環状の布目痕が残る(第14図8)。

Ⅱ型は、細部に見られる特徴の違いにより、4式に分けられる。

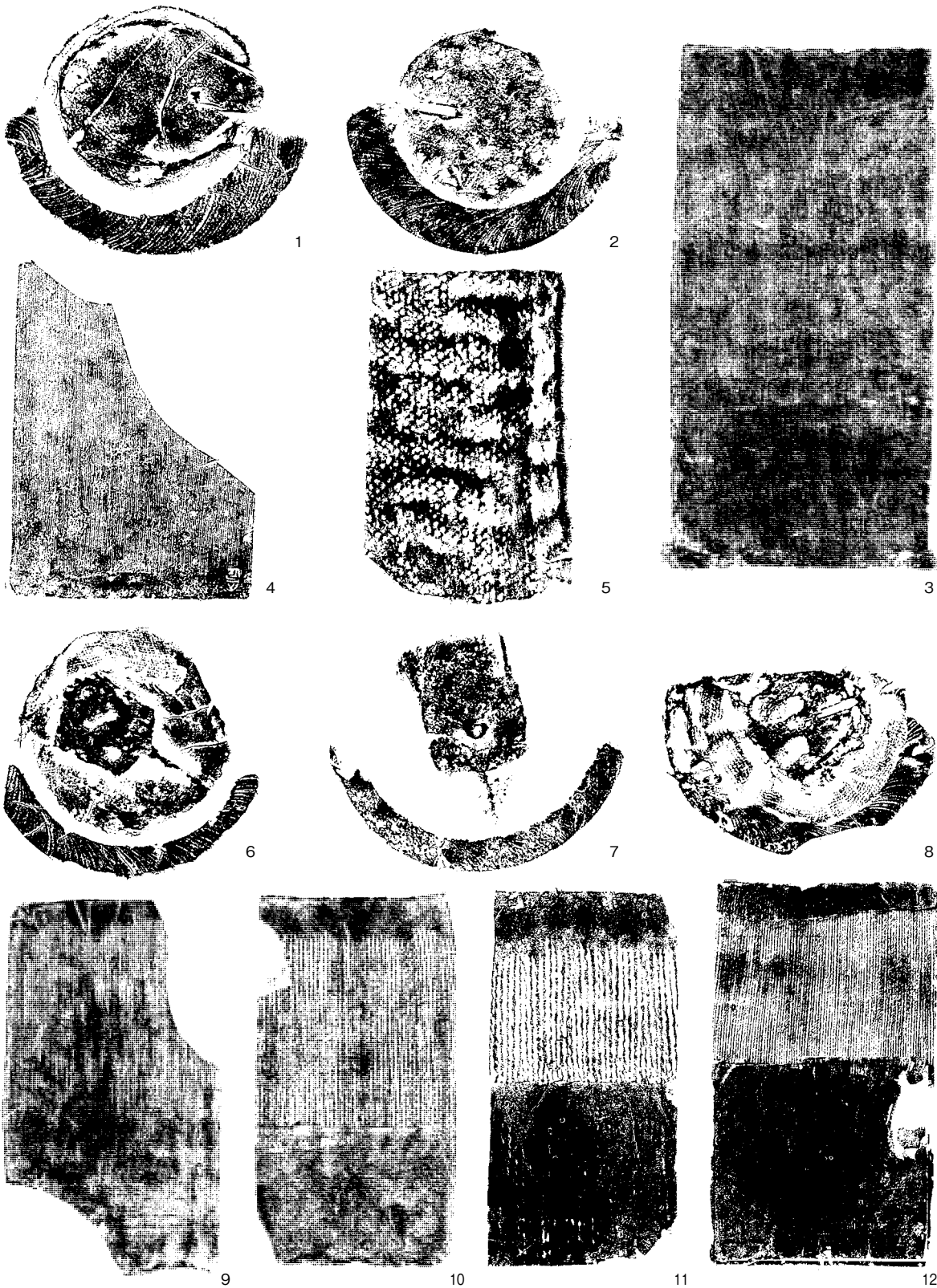
1式は、凸面に叩きによる細めの縄目がある。縄目は幅0.3cmで、比較的浅い。上部と下部の縄目は、指ナデ調整が少し施されているが、完全になで消されてはいない。凹面の布目痕は玉縁部までである。凹面の広端縁は斜めに面取りされている。資料Y26:2(第14図9)は、長さ47.8cm、径15.7~15.9cm、厚さ1.5cm。玉縁部は無文で、比較的短いうえに薄く、端に近づくにつれて幅が狭まる。玉縁部の長さ2.6cm、厚さ1.0cm。

2式は、凸面に幅0.3cmの縦位の縄目がある。縄を巻きつけた丸い棒を回転押捺して施文している。凹面の布目痕は玉縁部までである。凹面の広端縁は斜めに面取りされている。玉縁部は無文で、比較的短いうえに薄く、端に近づくにつれて幅が狭まる。端部の断面は円形に近い。資料Y50:5は、上部の縄目が幅2.1cmにわたってなで消され、下部の縄目も消されている。縄目の幅は0.3cmである。残存長33.2cm、残存幅15.6cm、厚さ1.4cm。資料G6:T1③:6は、上部の縄目が幅約8cm、下部の縄目が幅14.5cmにわたってなで消されている。長さ50.0cm、幅15.2~15.6cm、厚さ1.5cm。凹面の広端縁は、ケズリによる幅2.7cm前後の面取りがある。玉縁部の長さ2.2cm、厚さ1.1cm。

3式は、凸面に幅0.5cmの縦位の縄目がまっすぐ伸びている。上部の縄目は幅4.5cm、下部の縄目は幅15.8cmにわたってなで消されている。凹面の広端縁に面取りは見られない。玉縁部はやや厚く、端に近づくにつれて幅が狭まる。玉縁部端部の断面は方形である。凸面に斜位の太い縄目を施した後、なで消している。凹面にはケズリが施され、ケズリ痕は長さ1.8cmである。資料G2:T

型作り成形  
外側からの  
切り込み

Ⅲ型・Ⅳ型  
接合



1 : 1型切り離し法    2 : 2型切り離し法    3 : 丸瓦Ⅰ型1式    4・5 : 丸瓦Ⅰ型1式  
 6 : 瓦当裏面の模骨痕跡    7 : 瓦当裏面の模骨痕跡    8 : 瓦当裏面の模骨痕跡    9 : 丸瓦Ⅱ型1式  
 10 : 丸瓦Ⅱ型3式    11 : 丸瓦Ⅲ型1式    12 : 丸瓦Ⅲ型3式

第14図 丸瓦

I③:10 (第14図10) は、長さ44.0cm、幅13.1~14.1cm、厚さ1.3cm、玉縁部の長さ2.7cm、厚さ1.3cmである。

4式は、凸面に幅0.35cmの縦位の縄目がまっすぐ伸びている。上部の縄目は幅約4cm、下部の縄目は幅24.3cmにわたってなで消されている。凹面の広端縁には面取りがある。玉縁部は比較的長く、端に近づくにつれて幅が狭まる。玉縁端部の断面は方形である。杜陵3号遺跡で出土した資料は、長さ52.2cm、径15.9~16.6cm、厚さ1.2cmで、玉縁部の長さ5.0cm、厚さ1.6cm。

Ⅲ型 模骨による成形で、つくりは規格性が高い。成形後、円筒の内側から外側へ向かって切り込みを入れる。切り込みは、浅いものと深いものがある。凸面に幅0.5~0.8cmと太めの縄目がまっすぐに回転押捺され、上部および下部の縄目は1段ずつなで消されている。残された部分の縄目は、下部のなで消された部分より短い。凹面には布目痕があり、広端縁に面取りを施す。玉縁部は端部の断面が方形で、端に近づくにつれて幅が直線的に狭まる。玉縁部の内側はケズリ調整され、布目痕の面よりやや深くまで達したケズリ面もある。

型作り成形  
内側からの  
切り込み

この型の丸瓦と瓦当の接合方式は、まず模骨で円筒形を成形し、刃物で円筒を二等分した後、分割した丸瓦と瓦当裏面とを接合する、というものである(V型接合、第13図5)。当然、瓦当裏面下半には切り離し痕跡は見られない。

V型接合

Ⅲ型は、細部に見られる特徴の違いにより、3式に分けられる。

1式は、玉縁部の長さが3cm前後で、比較的短い。資料G3:T1③:49 (第14図11) は、上部の縄目が幅約6cm、下部の縄目も幅22.5cmにわたってなで消されている。縄目は幅0.8cmである。全長48.4cm、径13.9~14.8cm、厚さ1.3~1.4cm、玉縁部の長さ2.7cm、厚さ1.5cm。

2式は、玉縁部の長さが4~5cmと、やや長い。資料G3:T1③:69は、凸面上部の縄目が幅3.8cm、下部の縄目が幅23.1cmにわたってなで消されている。縄目は幅0.6cm。全長50.7cm、幅15.6~16.2cm、厚さ1.3cm、玉縁部の長さ4.8cm、厚さ1.7cm。Ⅲ型11式の瓦当と接合する。

3式は、玉縁部の長さが6cm前後で、比較的長い。資料G3:T1③:37は、凸面上部の縄目が幅3cm、下部の縄目が幅23.2cmにわたってなで消されている。縄目は幅0.5cm。全長54.0cm、幅15.7~17.1cm、厚さ1.6cm、玉縁部の長さ5.7cm、厚さ1.8cm。「長生無極」の文字瓦当と接合する。資料西南角:T4③:28 (第14図12) は、凸面上部の縄目が幅3.0~4.5cm、下部の縄目が幅25.2cmにわたってなで消されている。縄目は幅0.5cm。全長53.9cm、幅17.0~17.4cm、厚さ1.8cm、玉縁部の長さ5.7cm、厚さ1.9cm。

## E 前漢代瓦磚の編年

瓦磚の編年研究において、型式学を用いて形態と文様の両方面から型式分類し、時期ごとの変化の手がかりを探ることは重要である。しかし、瓦磚の形態や文様の変化は、つねに製作技法の改変や製陶技術の向上と密接に関わっている。そのため、瓦磚の製作技法の変遷過程に注目することは、瓦磚の編年研究にとって不可欠といえる。

このほか、漢代都城の考古学では、建築の創建年代を文献記載から考証することができ、時期を異にした多くの建築遺構によって、先後関係を伴った年代の枠組を系列的に構築することが可能である。こうした年代の枠組は、瓦磚のより細かな編年研究にとっても重要な価値をもつ。

したがって、型式学の方法を用いつつ、製陶技術を重視し、文献史料でこれを補うことで、より客観的な前漢代瓦磚の編年をおこなうことができる。

## i 遺跡の年代と出土瓦磚

**北宮** 漢長安城北宮は高祖の時期に創建され、武帝の時に増築と修築が加えられた。<sup>(11)</sup>北宮南瓦磚窯跡の年代は、窯の形態および出土遺物から見て、前漢前期である。<sup>(12)</sup>窯跡は合計11基発掘され、Y31～41の番号が与えられた。この大規模な官窯群が北宮に最も近いことを考慮すれば、その製品はおもに北宮の建物に供給されたと推測できるが、同時期に造営された長楽宮、未央宮、北闕、東闕、武庫などの建設にあたって供給された可能性がある。また、北宮が完成した後も、この窯群が長期間にわたって存在し続けたとは想像しにくいいため、窯跡の年代は、前漢初年の高祖の代かやや遅れる頃と推定される。よって、ここから出土した瓦磚は、前漢初年の典型的な資料となる。

窯跡から出土した遺物は豊富で、磚、平瓦、丸瓦、瓦当などがある。磚は、無文方磚のほか、有文方磚、空心磚がある。無文方磚は1式で、有文方磚には小方格文I型、菱形文および渦文、縄目文、博局文の4種類がある。空心磚の外表面装飾は幾何学文I型である。平瓦はI型1・2式、丸瓦はI型1式に属する。

**武庫** 漢長安城の武庫は高祖7年(前200)かその翌年に創建され、<sup>(13)</sup>前漢末年に破壊された。<sup>(14)</sup>前漢の各時期に修復と再建をおこなっているため、武庫遺跡で出土する瓦磚資料の年代は前漢の初頭から末年にまで及ぶ。年代の幅は大きい、そのうち最も古い資料は、平瓦I型1式、丸瓦I型1式のような、高祖の代のものであろう。平瓦の凹面や丸瓦の凸面には、文字が刻印されている。

**未央宮** 漢長安城未央宮は、武庫と同時期に建設が計画された。<sup>(15)</sup>前漢の皇帝が代々使用した宮殿としての特殊性から、前漢の各時期に、比較的大規模な増築・再建・修繕の工事がおこなわれた可能性がある。したがって、未央宮で出土する瓦磚資料の年代幅も大きい。このほか、同じ場所に秦代の建築もいくつか建てられていた。<sup>(16)</sup>そのため、未央宮で出土する瓦磚の中には、一部に秦代のものが混入している可能性がある。なお、未央宮で実際に出土した瓦磚資料の全体的な状況は、上記の内容と符合している。

**太上皇陵** 漢の太上皇は高祖10年(前197)に死亡したが、その陵はこれ以前に造営を始めていたに違いない。このため、太上皇陵出土の瓦磚で年代の最も古い幾何学文方磚I型1式、平瓦Ⅲ型、丸瓦I型1式などは、高祖の時期に属するはずである。<sup>(17)</sup>

**西市** 漢長安城の西市は恵帝6年(前189)に創建され、漢末に至るまで存続した。<sup>(18)</sup>西市内ではおもに手工業の生産工房跡を調査し、少量の瓦磚が出土している。その中には、Y24とY26など、いくつかの窯跡で出土した平瓦I型3式や丸瓦Ⅱ型1式などが含まれていた。これらの年代は、前漢前期後半から前漢中期前半であろう。

**施家寨小学校窯跡** 六村堡鎮施家寨小学校で発掘された2基の瓦磚窯跡(Y49・Y50)のうち、Y50から、長方磚Ⅳ型、扇形磚Ⅱ型、平瓦Ⅱ型、丸瓦I型2式・Ⅱ型2式などの瓦磚資料が出土した。丸瓦のI型とⅡ型が併存している状況からすれば、この窯の年代は、丸瓦I型のみを出土した北宮南瓦磚窯跡より下であろう。しかし、西市内で発掘されたY24・Y26などの窯跡では

丸瓦Ⅱ型しか出土していないので、Y50の年代はこれらと同じか、やや古い。文帝・景帝期における社会経済の回復と発展を考慮すると、この時期に、より多くの需要が丸瓦Ⅱ型の製作技法に対する進歩を促した可能性がある。したがって、これらの遺物は、前漢前期の瓦磚の変化を研究するための得がたい資料といえる。

**杜陵** 杜陵は宣帝の元康元年（前65）に建設が始まり、元帝の初元元年（前48）に宣帝を埋葬した。杜陵出土の瓦磚の年代は、いずれも前漢中期から後期にかけてである。宣帝の埋葬から前漢滅亡までは60年足らずしかない。その間におこなわれた陵園建築の修理や再建には限りがあるので、杜陵で出土した遺物の大部分は前漢中期後半の宣帝期であったことになる。これは、前漢の中期から後期への移行期に瓦磚がたどった変化を研究するうえで重要な資料である。杜陵で出土した磚には、無文方磚4式、幾何学文方磚Ⅲ型、小方格文方磚Ⅱ型2式、龍鳳文および菱形格子文空心磚などがある。平瓦にはⅡ型とⅤ型があり、丸瓦はⅢ型が多数を占めるが、少量のⅡ型（4式）も存在する。

**桂宮** 桂宮は武帝の時期に創建された<sup>(20)</sup>。しかし、武帝以前の前漢前期にここが空地であったとはいいがたく、秦代に建築群があった可能性もある。有名な秦代の封泥が出土した遺跡は桂宮に接している<sup>(21)</sup>。とはいえ、桂宮で出土した瓦磚の大部分は、前漢中期と後期に属するものであることに疑いの余地はなく、とくに中期の瓦磚を研究するうえで重要な資料である。ここで出土した磚の種類は、無文方磚3～5式、幾何学文方磚Ⅰ型・Ⅱ型（おもにⅡ型）、幾何学文空心磚Ⅱ型、翼虎文空心磚などが揃っている。平瓦はⅥ型1式である。丸瓦は、Ⅰ型3式もあるが、Ⅱ型とⅢ型に属するものが主体である。

**城壁西南角楼** 長安城の城壁西南角楼は、試掘調査の結果、前漢末期～新代の遺物包含層が確認され、新の貨幣と前漢末期から新にかけての瓦が多量に出土した。平瓦はⅥ型2・3式に属する。凸面に「元延元年」（前12）、「建平三年」（前4）、「始建國天鳳四年保城都司空」（後17）などの紀年銘が刻印されているものもある。丸瓦はⅢ型3式である。これらの遺物は、前漢末年から新にかけての瓦を研究するうえで貴重な資料である。

## ii 瓦磚の変遷とその年代

以上のように、瓦磚の形態、文様、製作技法を対象とした型式学研究や文献の記載を参考にすることで、前漢の磚・平瓦・丸瓦がたどった変化と各時期の特徴に対して基礎的な理解を得ることができた。しかし、磚については、資料数の制約のため、編年をおこなうまでいたっていないものもいくつかある。以下、簡単にまとめておく。

**方磚** 方磚は、磚の中で最も主要なものである。そのうち、縄目文方磚、博局文方磚、菱形文および渦文方磚は、北宮南窯跡でのみ出土しており、杜陵と桂宮では見られない。この事実は、それらが前漢初期～前期に流行したことを物語っている。無文方磚および文様方磚の全体的な変遷過程は、規格性の低いものから高いものへ、薄いものから厚いものへ、文様方磚の文様は単純なものから複雑なものへ、という変化であった。

無文方磚は、前漢初期～前期には、長さ幅が一致せず、長方形に近いものが多い。厚さは3.5 cm前後と薄い（1式）。前漢中期・後期の磚は正方形を呈し、厚さは4～5 cmに増す。

幾何学文方磚は、前漢早期ではほぼ長方形を呈し、厚さは3 cm以下で、文様も比較的単純であ

変遷の方向

る。菱形文および直角文の区画は長方形を呈し、区画線により四つの小区画に分かれる。各小区画には、三重の菱形文を1組と二重の直角文を2組飾る。外側の菱形文は区画線を借用し、内側の菱形文および直角文は乳状の突起で菱形および直角形を描く（I型）。前漢中期・後期は方形を呈し、厚さ4.0～5.3cmである。文様はより画一性を備え、複雑になる。曲折文は5回折れ曲がる二重線か、11回折れ曲がる単線で表現される。菱形文は三重あるいは四重、直角文は二重から四重である（II型・III型、ただしIII型の文様は比較的特殊である）。

小方格文方磚は、I型とIII型が比較的特殊で、前漢初期・前期に属する。II型が最も多く見られる。そのうち1式が薄手で、年代は前漢前期から中期にかけてであろう。2式は厚手で、前漢中期から後期にかけてのものと推定される。

**幾何学文空心磚** 幾何学文空心磚のI型は薄手で、菱形文・直角文区画のうち、最も内側にある菱形文が乳状突起のような形を呈する。年代は比較的古く、前漢前期である。一方、II型は厚手で、前漢中期から後期にかけてのものである。

**平瓦** 手作りによる平瓦の出現は古く、存続した時間も長い。そのおもな特徴は、形状の規格性があまり高くなく、凸面に叩きによる縄目が施されていることである。上部と下部の縄目は、それぞれ1段ずつまで消されている。凹面には凹点文が見え隠れする。凹面の文様には、これ以外に、指頭圧痕や斜格子文、格子文、縄目文などがある。

**平瓦 I 型** 前漢初期の典型的な資料は、北宮南窯跡出土の平瓦I型1・2式で、その最もはっきりした特徴は、平瓦I型1式に見られるように、凹面に「大匠」と刻印されていることである。I型1式の凹面の刻印には、このほか、「大」「宮」「工」「居室」などがある。平瓦I型1式は、桂宮や杜陵<sup>(22)</sup>では見られない一方、武庫、未央宮、長樂宮で数多く出土している。こうした事実は、それらが前漢前期のものであることを説明するに足る。「大」「宮」「工」「居室」などの刻印をもつ平瓦と、漢初の「大匠」のような刻印をもつ平瓦は、同時期であるが管轄が異なる工官の工房で作られたため、刻印に違いがあるのかもしれないし、あるいは年代が少し下るのかもしれない。平瓦I型は、前漢中期まで継続した可能性がある（3式）。

**平瓦 II～V 型** 一方、平瓦II型は、現有資料からみて、およそ前漢前期後半に始まった（Y50）。そして、杜陵の例が示すように、前漢中期にも依然として使われていた。また、III型・IV型の平瓦は、前漢前期の可能性もある。平瓦V型は、前漢中期から後期にかけてのものである。

**平瓦 VI 型** 平瓦VI型は、模骨を使用しているので、凸面に縄目があるが、最もはっきりした特徴として、凹面に布目痕が残る。模骨を使用した平瓦は、同じ製法の丸瓦よりやや遅く、およそ前漢中期に始まる。平瓦によっては、凹面に、布目痕以外にも、縦長の楕円形文や平行文などの文様が見られる。一部の平瓦の凸面には、縦長の長方形の刻印があり、多くの場合、紀年や官署名が記されている。紀年銘には、「元延」（成帝）、「建平」「元壽」（哀帝）、「元始」（平帝）、「居攝」（孺子嬰）、「始建國」「始建國天鳳」（新）などがある。また、官署名には「都司空」（「都」と略称していることが多い）、「保城都司空」（新代に「都司空」から「保城都司空」に改められた）<sup>(23)</sup>などがある。

**丸瓦 I 型** **丸瓦** 丸瓦I型の年代は、およそ前漢前期に相当し、前漢中期前半まで継続している可能性がある。その製法は輪積みにより、模骨を用いない。玉縁部は2.5cm前後と比較的短い。凸面には叩きによる縄目が施される。消されていない縄目部分の長さは、下部の消された部分よりも大きい。凹面には凹点文がある。成形後の粘土円筒は、外側から内側に向かって切り込みを入れる。

丸瓦と瓦当の接合方法は、Ⅰ型とⅡ型がある。Ⅰ型接合の出現は古く、前期前葉には使用された可能性がある。Ⅱ型接合は、前期後半に出現した可能性があり、中期前半まで使われた。丸瓦の切り離し方法はおもにⅠ型で、前期後半か中期前半にⅡ型の切り離し法が出現した。丸瓦Ⅰ型Ⅰ式の凸面に施された縄目は細めで、「大匠」などの刻印をもつものもある。年代は前漢初年である。丸瓦Ⅰ型Ⅱ式の凸面に施された縄目は太めで、年代は文帝や景帝の代まで下るかもしれない。丸瓦Ⅰ型Ⅲ式の年代は中期前半まで下る可能性がある。

丸瓦Ⅱ型の年代は、ほぼ前漢前期後半から中期前半にかけての時期に始まり(Ⅱ型Ⅰ・Ⅱ式)、おもに前漢中期に使用された(Ⅱ型Ⅲ・Ⅳ式)。製作工程において模骨を使用する。玉縁部は2.5cm前後と比較的短いものが多いが、杜陵陵園3号遺跡で出土した丸瓦は、玉縁部が5.0cmと比較的長い。丸瓦凸面の縄目は、叩きによるものと回転押捺によるものがある。縄目が消されていない部分は、下部の縄目を消した部分の長さよりも大きい。凹面には布目痕があり、凹面の広端縁には斜めの面取りがあるものが多い。成形後の粘土円筒の分割に際しては、外側から内側に向けて切り込みを入れる。丸瓦と瓦当の接合方法はⅢ型とⅣ型で、Ⅲ型接合は前期後半から中期前半、Ⅳ型接合はおもに中期に用いられた。瓦当の切り離し方法はⅡ型が主流で、Ⅰ型の切り離し法は少ない。

丸瓦Ⅱ型

丸瓦Ⅲ型は前漢中期後半に出現し、おもに前漢後期に使用された。製作工程において、やはり模骨を用いるが、改良が認められる。すなわち、模骨の外側に、対称になる位置に2本の長い木材を縦に置いて、粘土円筒を二等分する区画線(分割界線)とする。こうすると、型を取り出した後、円筒の内部には2本の溝が残る。切断にあたっては、刃物で凹面から溝に沿って切り込みを入れるが、切り込みは浅いものが一般的である。玉縁部は3~6cmと比較的長い。凸面には回転押捺による縄目残り、上部と下部の縄目はそれぞれ1段ずつ消されている。消されずに残った縄目の長さは、下部の消された部分よりも短い。凹面には布目痕があり、その下縁には斜めの面取りがある。丸瓦と瓦当との接合方式はⅤ型接合である。瓦当裏面に、糸による切り離し痕跡はない。

丸瓦Ⅲ型

- 
- (1) 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技術について」『考古学雑誌』第69巻第3号、1984年。「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法」『MUSEUM』No. 519、東京国立博物館。岸本直文「中国における秦漢代の瓦調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年。
  - (2) 陳直『関中秦漢陶録』天津古籍出版社、1994年。陳直「関中秦漢陶録提要」『摹廬叢著七種』齊魯書社、1981年。
  - (3) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城北宮的勘探及其南面瓦磚窯的發掘」『考古』1996年第10期。
  - (4) 現在、資料は中国社会科学院考古研究所漢城工作隊に存在する。
  - (5) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城武庫遺址發掘的初步收穫」『考古』1978年第4期。中国社会科学院考古研究所『漢長安城武庫』文物出版社、2005年。
  - (6) 中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980~1989年考古發掘報告』中国大百科全書出版社、1996年。
  - (7) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城1号窯址發掘簡報」『考古』1991年第1期、「漢長安城窯址發掘報告」『考古學報』1994年第1期、「漢長安城23-27号窯址發掘簡報」『考古』1994年第11期、「漢長安城新發現六座窯址」『考古』2002年第11期。
  - (8) 現在、資料は中国社会科学院考古研究所漢城工作隊に存在する。
  - (9) 中国社会科学院考古研究所『漢杜陵園遺址』科学出版社、1993年。中国社会科学院考古研究所櫟



陽発掘隊「秦漢櫟陽城遺址の勘探和試掘」『考古学報』1985年第3期。

- (10) 瓦当の2型切り離し法は、奈良文化財研究所の清野孝之氏が、研究所の代表として中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊を来訪し、われわれと瓦当の共同研究をおこなったときに初めて観察したものである。同時に共同で実験をおこない、この種の切り離し法の概略を明らかにした。
- (11) 『三輔黄図』に「高帝時制度草創、孝武増修之」とある（陳直『三輔黄図校証』陝西人民出版社、1980年。以下同じ）。
- (12) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城北宮の勘探及其南面瓦磚窯の発掘」前掲註3。
- (13) 『漢書』高帝紀「(七年二月)蕭何治未央宮、立東闕・北闕・前殿・武庫・太倉」（中華書局標点本。以下同じ）、『史記』高祖本紀「(八年)蕭丞相營作未央宮、立東闕・北闕・前殿・武庫・太倉」（中華書局標点本。以下同じ）。
- (14) 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊「漢長安城武庫遺址発掘の初歩収獲」前掲註5。
- (15) 前掲註13に同じ。
- (16) 中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮 1980～1989年考古発掘報告』前掲註6、248頁。
- (17) 『史記』高祖本紀「(高祖十年)七月、太上皇崩櫟陽宮」。『漢書』高帝紀「(高祖十年)七月癸卯、太上皇崩、葬萬年」。
- (18) 『漢書』惠帝紀「(六年)起長安西市、修敖倉」。
- (19) 『漢書』宣帝紀「元康元年春、以杜東原上爲初陵、更名杜縣爲杜陵」。
- (20) 『三輔黄図』「(桂宮)漢武帝造」。
- (21) 中国社会科学院考古研究所漢長安城工作隊「西安相家巷遺址秦封泥の発掘」『考古学報』2001年第4期。
- (22) 現在、資料は中国社会科学院考古研究所漢城工作隊に存在する。
- (23) 陳直『閩中秦漢陶録』前掲註2。陳直「閩中秦漢陶録提要」前掲註2。その他の資料は、現在、中国社会科学院考古研究所漢城工作隊に存在する。

### 3 西安における秦から前漢までの 軒丸瓦の変遷

山崎 信二

#### A はじめに

秦から前漢にいたる軒丸瓦の製作技法はかなり大きく変化しており、以下では、その変化を軒丸瓦製作工程の復元という視点から具体的に論じたいと思う。

過去に秦および前漢の軒丸瓦の製作技法を細かく論じたのは、谷豊信の「西晋以前の中国の造瓦技法について」<sup>(1)</sup>(1984年)と「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法」<sup>(2)</sup>(1994年)である。

前者の論考で、谷が丸瓦および軒丸瓦の製作技法について指摘したのは次の点である。

谷豊信による  
技法復元

第一に、西周から漢代のころまでの瓦は粘土紐によって作られている。

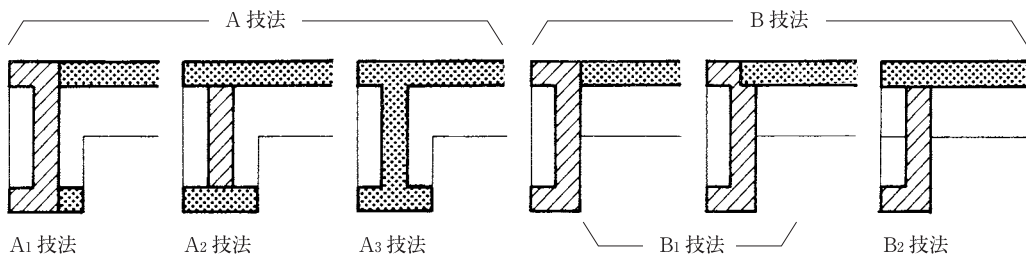
第二に、瓦の出現以降、模骨使用の開始まで、瓦は陶器と同様に、叩き板と当て板によって成形された。そして、丸瓦製作工程での一つひとつの作業、つまり回転台上での粘土紐の積み上げ、叩きによる成形、回転を利用した玉縁の整形と円筒内外面の調整、そして糸による切り離しが、当時の製陶技法と基本的には全く同じであったと思われる。

第三に、当て板痕には地方差が認められ、陝西省には中国人研究者が麻点紋と呼ぶ小凹点紋ないし目の細かい方格紋が多い。

第四に、模骨を用いた成形、すなわち丸瓦凹面全面に整った布目がつく、いわゆる布目瓦の出現については、秦では布目瓦の報告が少ない。紀元前350年より滅亡の時まで秦の首都であった咸陽宮で発掘された第一宮殿址では、布目瓦は出土しなかったと報告されており、確実な出土例としては、わずかに秦始皇帝陵西側の刑徒墓地での報告があるのみである。秦では、丸瓦桶巻作りの開始が洛陽などよりも遅かったものと思われる。

第五に、軒丸瓦の製作技法については、「瓦当となる粘土の円板と分割する以前の丸瓦円筒を接合したのち円筒の不要な部分を取り除く方法」(A技法)と、「瓦当円板にすでに分割した丸瓦を接合する方法」(B技法)とに大別できる(第15図)。

A・B技法



第15図 円瓦当付き軒丸瓦の製作技法(模式図)

A・B技法  
の細分

A技法は三つに細分でき、A1技法は「瓦当円板背面に丸瓦円筒を接合したのち不要部分を取り除く方法」、A2技法は「周縁の無い瓦当円板を丸瓦円筒の内側に嵌め込む」方法である。また、A3技法は「いわゆる一本造り」で、「これは模骨を用いて成形した丸瓦円筒に、模骨上で瓦当を接合するもの」である。B技法は二つに細分でき、B1技法は「瓦当円板の背面に丸瓦を接合する方法」、B2技法は瓦当「下半には周縁をつけ」、瓦当「上半は周縁をつけない瓦当円板を」「丸瓦に」接合する方法である。

A・B技法の分布について、西安一帯にみられるのは、A1・A2・B1技法であるとした。そして「華北では戦国期から漢代の或る時点までA1・A2技法が行われ、その後B1技法が普及したのである。B1技法への交替の時期は各地で差があり、西安は比較的早く、洛陽は西安より遅かったものとみられる」とした。

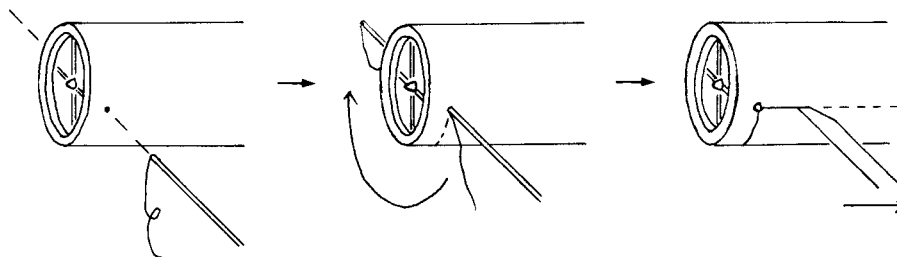
第六に、A1・A2技法による軒丸瓦の不要部分の取り除き方は、「瓦当と丸瓦円筒を接合したのち、先端に糸をつけた径約3mmほどの棒を瓦当の背面よりやや後ろの所で円筒の外から反対側へ貫通させ、糸を下へ回して瓦当背面下半を切る。そして棒と糸を抜き、棒が穿った孔の位置から刃物で分割<sup>せつせん</sup>線を入れる。乾燥させたのち打撃を加えて二分し、軒丸瓦と丸瓦各一個を得る」(第16図)。

第七に、西安における造瓦の変遷として、「漢初の状況は明らかでないが」、「叩き板・当板技法による丸瓦部分の成形とA1・A2技法の組み合わせの下限は恐らく漢代に入るであろう」とした。そして「技術発展の順序から考えてこの次に来ると思われるのは布目瓦とA1・A2技法の組み合わせであり、これは「前漢前期から中頃にかけて行われた技法と思われる」と述べ、「この次の段階が布目瓦とB1技法の組み合わせ」であって、「その上限年代」は、「武帝の頃と思われ」とした。

一方、谷の后者の論考は、東京国立博物館保管資料を中心に、一つひとつの軒丸瓦の製作技法を具体的に述べたもので、基本的な考えは前者の論考と異なるところはない。

以下、本論では、谷の分析方法を受け継ぎ、西安一帯における軒丸瓦の製作技法の変遷を細かく検討していくことにする。その際、谷が曖昧に表現した唯一の点を、やや詳しく検討したいと思う。それは、A技法では「瓦当となる粘土の円板と分割する以前の丸瓦円筒を接合」と説明された点で、A1技法は「瓦当円板背面に丸瓦円筒を接合」と説明されるかぎりでは、「瓦当部」と「丸瓦円筒部」の接合となる。ところが、「製陶技法と基本的には全く同じ」であるならば、瓦当筈が下にあり、「瓦当部」粘土を置いた後、下から粘土紐を積みあげて「丸瓦円筒部」を作りあげていくのが普通であるはずである。

そして、西安の軒丸瓦を観察したかぎりにおいては、瓦当筈が下にあり、「瓦当部」粘土を置



第16図 A技法による軒丸瓦の不要部分の取り除き方

いた後、下から粘土紐を積みあげて「丸瓦円筒部」を作りあげていく方法が古く、「瓦当部」と「丸瓦円筒部」とを接合する方法が新しいと考えている。以下、具体的な資料に基づきながら、この点を明らかにしていきたい。

## B 櫟陽城出土の軒丸瓦

以下に述べる資料は、中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊が1980年4月から翌年12月に発掘したもので、1985年に報告されている<sup>(3)</sup>。秦の櫟陽城は、雍城から本拠を移したもので、紀元前383年から350年まで、献公と孝公二代の都となった。また、漢の櫟陽宮は、紀元前205年に劉邦が都としたが、紀元前202年に帝位についた際に、長安を都とすることを決め、2年後に長楽宮が完成している。

櫟陽城出土の軒丸瓦の中に、秦の櫟陽城時代（前385～350年）のものがどれだけあるかは不明だが、おそらく戦国末から統一秦の時代のもので、漢のごく初期にあたる櫟陽宮の時代のもので主体を占めると考えられる。なお、劉邦の父、太上皇は紀元前197年に没し、櫟陽城の北原に埋葬されたが、櫟陽宮の北西に位置する太上皇陵出土の瓦も、以下、必要に応じて触れる。

まず、丸瓦部が残る櫟陽城出土軒丸瓦4点と、太上皇陵出土軒丸瓦1点の製作技法について述べよう。これらは、瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式とでも表現すべき技法である。

### i 瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

Ⅲ式D軒丸瓦（第17図1、図版4-145） 報文では渦巻紋＝Ⅲ式のDと分類されたもの。Ⅲ式のうちDは内区に3個の小渦巻文を配するもので、丸瓦部凸面に「縄紋」、凹面に「麻点紋」があると報告されている。この瓦当文とほぼ同一の文様を、陝西省文物管理委員会の報文では「<sup>(4)</sup>発展的葵文」と表現する。

丸瓦部は、報文に記すように、凸面に縦位の縄叩き、凹面には麻点文（凹点文）を施している。麻点文を残した当て具の具体的な素材はわからないが、今回西安で実見できた麻点文は、一見すると格子状に見えるものの、一つひとつの凹みの単位は米粒状の丸みをもっており、陶製または木製のややカーブをもった円形具に縄状の目の粗い織物をかぶせて当て具としたものと推定しておきたい。丸瓦部には、凹面と凸面に1ヵ所ずつ、粘土紐の接合痕が明瞭に残る。瓦当裏面は中央部が一番高く、周縁に近づくにつれて低くなる。瓦当裏面の大部分は、指押さえの後は無調整であり、ところどころに指紋が残る。瓦当裏面と丸瓦部との接合部は、丹念な指ナデによって、瓦当と丸瓦部の接合を補強している。

「麻点文」  
の当て具

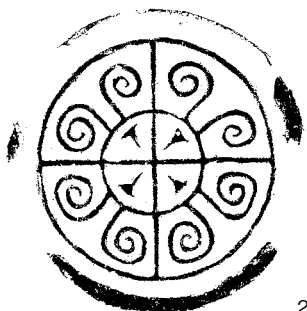
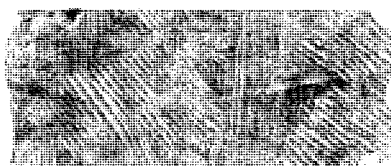
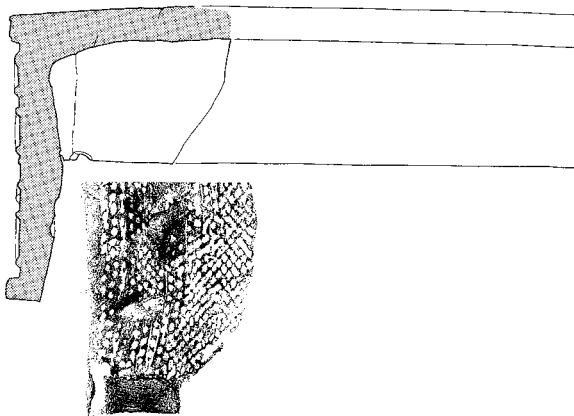
瓦当裏面下半の周堤状の突帯の上に糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡は、丸瓦部だけでなく瓦当裏面中央部にも及んでいる。この瓦では、瓦当裏面の突帯を下にして、棒の突き刺しは左から右であり、棒と結ばれていない方の紐（糸）は左側にあつて、左から右へ紐を引っ張り、糸切りをおこなっている。丸瓦部は、刃物による切り込みが丸瓦部凸面側からおこなわれ、丸瓦部凹面側に一部、粘土の割れ目である破面がみられる。

瓦当裏面の  
糸切り痕跡

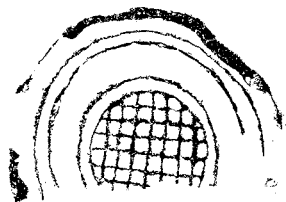
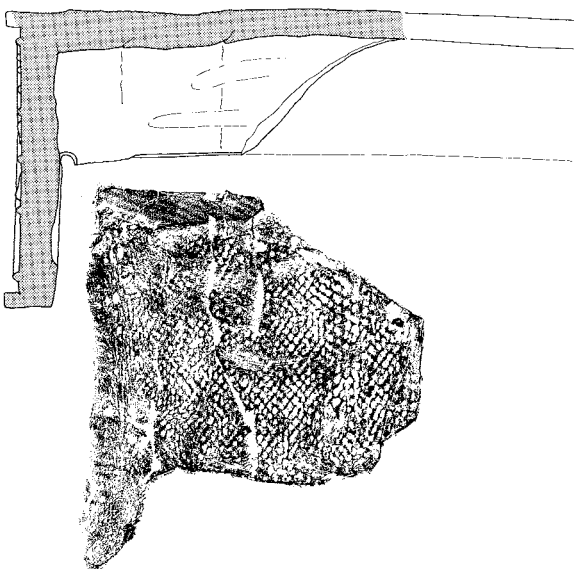
Ⅱ式A軒丸瓦（第17図2、図版8-175） 報文では8個の渦巻紋よりなるもの＝Ⅱ式のAと分類



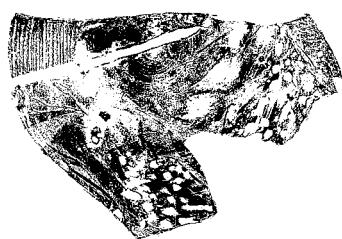
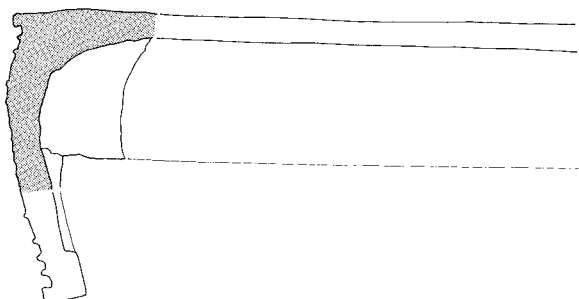
1 (145)



2 (175)



3 (171)



第17图 櫟陽城出土軒丸瓦 (1) 1:4

されたもの。Aは、中心から四方に単線を外区に伸ばし、外区は相背向する渦文を4組配するものである。内区には楔状の単線を4カ所配する。丸瓦凸面に「縄紋」、凹面に「麻点紋」があると報告されている。

丸瓦部は瓦当から21cmまでが残存しており、凸面に斜め方向の縄叩き痕と、粗い横方向のナデつけ痕、凹面に麻点文がみられる。丸瓦部凹面には2カ所に粘土紐接合痕がみられ、粘土相互の傾きは「内傾接合」である。つまり、内側に模骨のない円筒形の粘土製作においては、内側が低く、外側が高くなっている。 [内傾接合]

瓦当裏面の大部分は、指押さえの後は無調整である。瓦当裏面と丸瓦部との接合部は、やや粗いが、数回の指ナデつけによって、瓦当と丸瓦部の接合を補強している。また、丸瓦部凹面の中央付近においても、部分的に指ナデの痕跡が残る。

瓦当裏面下半の突帯の上には糸切り痕があり、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。前例と同じく、左から右へ紐を引っ張って糸切りをおこなっている。丸瓦部は、凸面側から刃物による切り込みがなされ、粘土の割れ目である破面は瓦当に近い部分では幅広くなっている。

**V式軒丸瓦** (第17図3、図版7-171) 内区に二重の同心円を描き、その内側に細かい格子文を配し、外区に二重の同心円を描くもの。

丸瓦部は、凸面に粗いヨコナデをおこなうが、横方向のハケメに近い感じである。叩き痕はみえない。丸瓦部凹面には、粗い大粒の麻点文がみられる。この瓦は、瓦当裏面全面および丸瓦との接合部に、丸い回転状のヨコナデが入念におこなわれている。

瓦当裏面下半の突帯はわずかに残存し、その上に糸切り痕が残るが、右から左へ紐を引っ張り、糸切りをおこなっている。また、糸切り用の棒が通った痕跡は、丸瓦部だけでなく、瓦当裏面中央部にも及んでいる。

**I式C軒丸瓦** (第18図1、図版6-140) 曲線の先端が蕨手様に内向して巻き込むものを「雲文」と称しており、外区だけでなく、内区に4個の雲文をもつものがI式Cである。

この瓦では丸瓦部の残存部が少なく、丸瓦部凸面の縄叩き痕は認められるが、丸瓦部凹面の麻点文はみえない。しかし、当て具が麻点文であるのは、ほぼ間違いないと思う。瓦当裏面は中央部が高く、周縁部では低くなり、全体に指押さえの凹凸が著しい。瓦当裏面と丸瓦部の接合部には、接合のためのヨコナデは認められない。

瓦当裏面下半の突帯の上には糸切り痕が残り、左から右へ紐を引っ張って糸切りをおこなっている。糸切り用の棒が通った痕跡は、丸瓦部だけでなく、瓦当裏面中央部にも残る。瓦当裏面下半の突帯の側面(瓦当側面)にも縄叩き痕が残る。 瓦当の側面にも縄叩き

**太上皇陵出土Ⅲ式A軒丸瓦** (第18図2、図版10-170) Ⅲ式は外区に雲文を配する。Ⅲ式Aは、内区に4+11+17の三重の小珠文を密に配したものである。

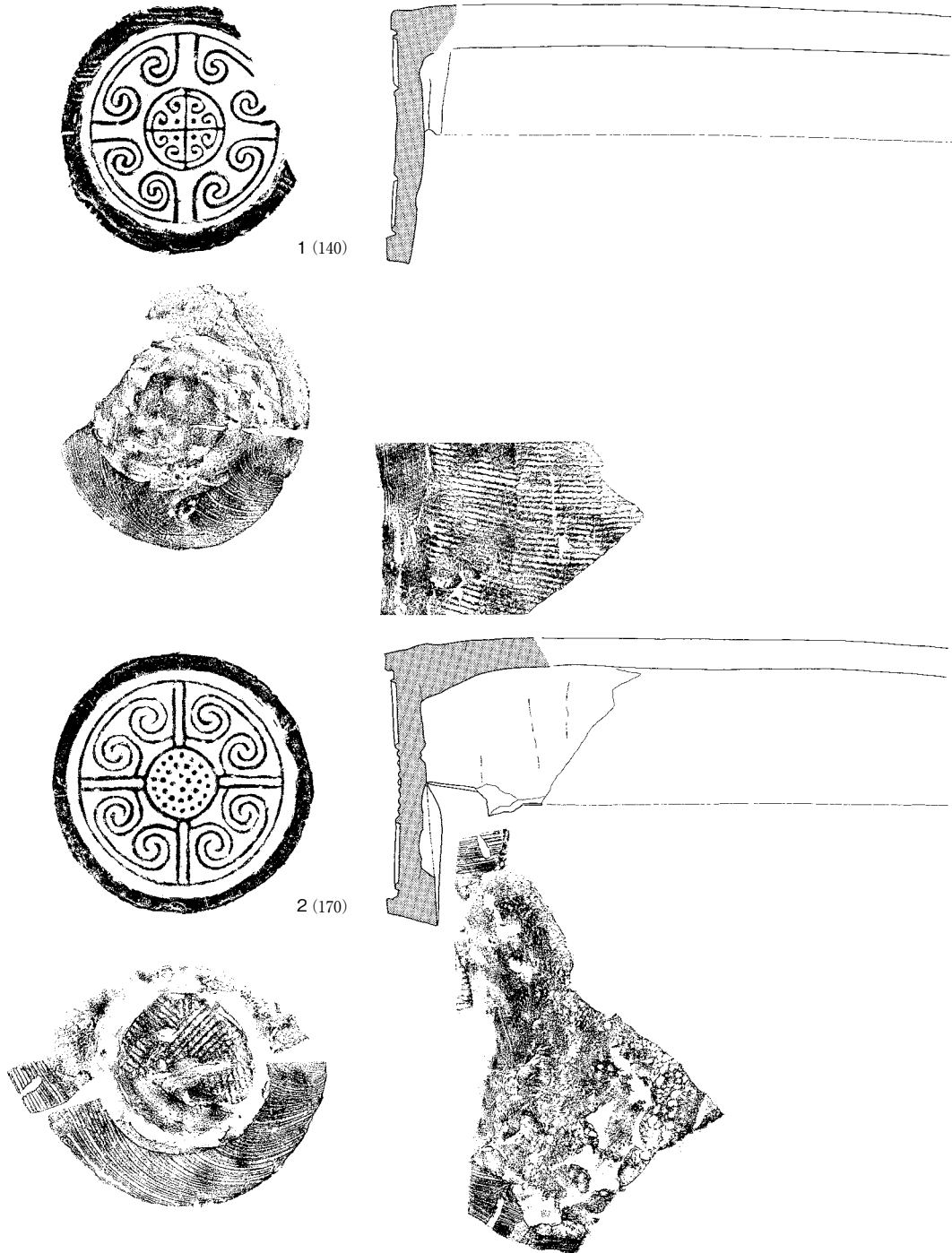
丸瓦部は凸面に縦位の縄叩き、凹面には粗い大粒の麻点文を施す。丸瓦部には凸面に2カ所、粘土紐の接合痕が残り、粘土紐相互は内傾接合を示している。

瓦当裏面中央には縄叩き痕が残る。これは丸瓦部凸面と同じ縄叩きであるが、右上がりとな左上がりの角度を異にして二重に叩き締められている。瓦当裏面と丸瓦部の接合部は、丹念な指ナデによって、瓦当と丸瓦部の接合を補強している。

瓦当裏面下半の突帯の上には糸切り痕が残り、左から右へ紐を引っ張って糸切りをおこなっ

ている。棒の突き刺しによる糸切りは2度おこなわれており、最初は、瓦当裏面下半の突帯を残し、不要丸瓦部端面を切り離す糸切りである。2回目は、それより2cmほど上位に棒を突き刺し、丸瓦部に縦に4cm程度、糸切りによる切り込みを入れている。それより上(玉縁寄り)の丸瓦部には、凸面側から刃物による切り込みを入れ、凹面側は粘土の割れ面である破面がみられる。破面がちぎれ、突出しているのが実測図でもわかる。

この軒丸瓦は、瓦当を下にして立て、瓦当裏面から丸瓦部凹面をみると、あたかも壺<sup>はんせつ</sup>を半截し



第18図 櫟陽城出土軒丸瓦(2)・太上皇陵出土軒丸瓦 1:4

たものの内側を見ているような印象を与える。

**瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦の製作技法** 以上、丸瓦部が残る櫟陽城出土軒丸瓦4点と太上皇陵出土軒丸瓦1点の製作技法を述べたが、櫟陽城Ⅲ式D・Ⅱ式A・Ⅴ式の3点および太上皇陵Ⅲ式Aでは、瓦当裏面と丸瓦部の接合部に丹念な指ナデがおこなわれていることが重要である。これは、次のような製作技法をとったものと考えてよい。

製作工程  
の復元

- (1) 製作台の上に、文様面を上にして瓦当範を置く。中国の瓦当範については関野雄の論考<sup>(5)</sup>があり、計28例のうち1例が石製で、ほかは陶製である。つまり「範のほとんど総ては粘土を焼いて作ったもの」であり、櫟陽城・太上皇陵など以下に述べるすべての軒丸瓦は、陶製範によって製作されたことを前提として論を進めたい。
- (2) 瓦当範の上に粘土を詰める。工人の手による粘土の押し込みがおこなわれ、瓦当裏面の凹凸が著しく、指紋の残るもの(櫟陽城Ⅲ式D)があるが、一方、瓦当裏面に縄叩きをおこなったもの(太上皇陵Ⅲ式A)もある。
- (3) 次に、瓦当部粘土の上に、最初の丸瓦部粘土を巻く。粘土紐の幅は3~4cm程度である。接合部の内面、すなわち瓦当裏面と丸瓦部の接合部に丹念な指ナデをおこなう。
- (4) さらに、3~6cmの幅の粘土紐を積みあげていく。これらの粘土紐相互の傾きは、内側が低く、外側が高くなる「内傾接合」である。一定の粘土紐積みあげの後、縄を巻きつけた叩き板で叩き締める。このとき、内側に当て具をあて、麻点文の痕跡が生じる。
- (5) 丸瓦部上方の粘土紐の積みあげおよび叩き締めをおこなう。玉縁部の処理については、実例がなく、よくわからない。
- (6) 最後に、円筒不要部の切り取りをおこなう。この(5)と(6)の工程の間には、ある程度乾燥させる時間が介在すると思う。円筒不要部の切り取りは、谷豊信が考察したとおりである。先端に糸をつけた棒を貫通させ、瓦当裏面下半を糸切りで切り取り、ついで丸瓦部の2分割は外からの切り込み(分割線)を入れ、切り残った部分は打撃を加えて割り取る(破面)。丸瓦の2分割には、丸瓦下端の分厚い部分に、先端に糸をつけた棒を再度貫通させ、丸瓦部の縦4cm程度を糸切りする例(太上皇陵Ⅲ式A)もあるが、これは少数であり、外からの切り込みが一般的である。こうして、円筒不要部は切り取られる(切り取ったものは丸瓦として使用か)。
- (7) 以上のようにして軒丸瓦が作られるが、円筒不要部の切り取り後、丸瓦部凸面・凹面の二次調整(ナデなど)は全くおこなわれていない。そして、この切り取り後に、瓦当範とある程度乾燥した軒丸瓦の分離、すなわち瓦当範の引き抜きがおこなわれる。

この過程の終了まで、瓦当範は1個の軒丸瓦製作のためだけに使用される。したがって、多くの瓦当範がなければ、多くの軒丸瓦製作を同時におこなうことはできない。それゆえ、関野雄が考察したように、母範(祖範)と子範(瓦当範)および陶製範の存在によって、多くの瓦当範を生み出すことができたと考えられるべきであろう。

瓦当範は  
多数存在

## ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

以下に述べる軒丸瓦の瓦当裏面は、「馬蹄状圧痕」とでも呼ぶべき特異な形状をしている。この一群の軒丸瓦の製作技法については、黒崎直、毛利光俊彦、大脇潔、牛嶋茂、岸本直文の5

馬蹄状圧痕



名が1994年3月に中国社会科学院考古研究所西安研究室で実見した成果を、「中国における秦漢代の瓦調査」として岸本がまとめ、次のように述べている。<sup>(7)</sup>

分解式模骨  
の 想 定

「それは『分解式模骨』（仮称）というべきもので、西安研究室での櫟陽城および太上皇陵出土瓦の観察から推定するものである。これらは、丸瓦凹面が平滑で布目をともなうことから、模骨に布をかぶせ粘土紐を巻上げて成形したことは明らかである。これらの瓦当裏面は平らではなく、3ないし4面から構成されていて、段差をともない、面の境にバリ状のはみ出しがある。したがって、複数の材を組み合わせた模骨であったことは間違いない。（中略）まず中心材を引き抜き、側材を内側にはずして抜き、引き続いて布を取り去ったあと、丸瓦を半截して軒丸瓦をえたのである。（中略）なお、こうした瓦当裏面に組み合わせ模骨の圧痕を残すものに限って、瓦当中央に穿孔が認められる場合が多い。これは瓦範に取り付けられたピンによるもので、模骨にあけられた孔に通すことで、瓦当の心と模骨の心を合わせる工夫であったと考えている」（第19図）。

分解式模骨  
の 否 定

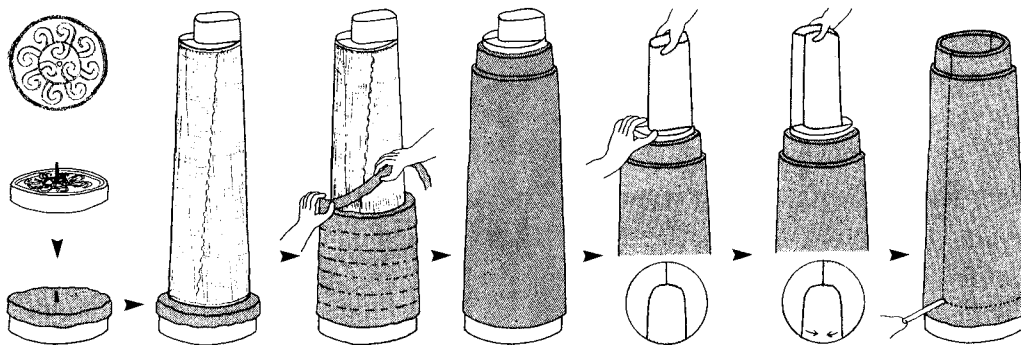
引用がやや長くなったが、今回のわれわれの調査（2000年11月、山崎信二・千田剛道）では、このような「分解式模骨」の存在に対しては否定的である。それは、「まず中心材を引き抜き、側材を内側にはずして抜く」ことが現実的に可能だろうか、という疑問から発している。少なくとも、復元図からみると、中心材は下方を細くすれば抜くことは可能であろうが、側材はまず抜けないであろう。もう一つの大きな理由は、中国の漢代瓦工がこんな面倒なことを考えるだろうか、という点である。もっとオーソドックスで、簡便な方法をとったはずである。それは、おそらく、模骨から抜かれた丸瓦円筒全形と瓦当部粘土とを接合する方法であり、その後、円筒不要部を切り取る方式のものである。馬蹄状圧痕の解釈については後で述べよう。

「関」軒丸瓦  
裏面の突出

次に、素材は異なるが、「瓦当背面の特殊な突出」がある京都大学蔵の「関」文字の軒丸瓦について、谷豊信は次のように述べる。<sup>(8)</sup>

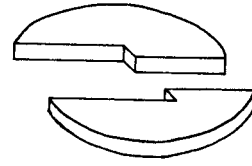
「瓦当背面と丸瓦部の交叉部分から瓦当中央にかけて幅2cm、高さ1.5cmほどの突出がある。突出部の延長線上では、瓦当背面の高さに僅かな違いがあって段になっている。これは図のような工具で瓦当背面を圧した結果とみる他はないであろう。（中略）洛陽のこの種の突出をもつ瓦当は中央に穿孔されたものが多い。（中略）この種の円瓦当はA1技法で作られている。（中略）つまり瓦当背面に突出部がある軒丸瓦はすべて瓦当円板の背面に丸瓦円筒を接合するという技法によって作られている。」

そして、「この技法の目的と具体的な工程はよくわからない」としながら、註では、参考まで



第19図 「分解式模骨」使用の軒丸瓦製作技法の復元

に思いつきとして、「瓦当背面に丸瓦を接合したのち、瓦当背面（および瓦当と丸瓦部分の接合部）を圧するか補強するためにそのような工具を二つ入れたのではなかろうか。工具が二つに分けられたのは径の小さい玉縁を通す必要からであろう」としている（第20図）。



第20図 「関」文字軒丸瓦の製作に用いた工具（想像図）

われわれは、洛陽周辺での「瓦当背面の特殊な突出」がある軒丸瓦について実見していないので、谷の分析に対するコメントは差し控えておきたい。以下では、西安周辺の櫟陽城出土例6点（うち4点は丸瓦部の一部が残存）の具体例をまず観察していきたい。

Ⅲ式D軒丸瓦（第21図1、図版7-147） 内外区の区画線を一重とし、外区は左向きの複線で表現した渦巻文8個、内区は右向きの複線表現の渦巻文3個がそれぞれ同一方向に回る。

まず、丸瓦部は凹面に布目痕が残り、模骨使用の丸瓦であることは疑いない。布綴じ合わせ目がある。次に瓦当裏面をみると、裏面中央の突出部は5×7cm程度の広さであり、周縁の馬蹄状に凹む部分は2カ所に分かれる。つまり、瓦当裏面は後に糸切りされた突帯の部分を除くと、中央の高まり部分と、2カ所の低く凹んだ部分とに分けられ、凹んだ部分は馬蹄状圧痕とでも表現すべきものである。高まりと凹んだ部分は4～5mmの段差をもつ。

馬蹄状圧痕の詳細観察

3面相互の境には、バリ状のはみ出しがある。このうち、中央の高まりと凹んだ部分との境のバリ状のはみ出しは、中央の高まり部分の方向へやや傾く。すなわち、この瓦の瓦当裏面では、まず中央部にゆるやかな圧痕が加えられ、それより後に、周縁部に二つの道具で同時に強い圧痕が加えられたことを示している。ところで、この二つの道具とは何であろうか。木製や陶製のように平坦で硬いものではない。凹み部分の凹凸を見るかぎり、それは乾燥してやや硬くなった粘土を想定させるような微妙な凹凸である。

微妙な凹凸

次に、瓦当部粘土と丸瓦部粘土との境を観察すると、丸瓦取りつきの中心部分では、瓦当部粘土と丸瓦部粘土の接合部の境で、布目は消える。すなわち、瓦当部粘土と、布目をもつ丸瓦部とが接合された状態を示す。一方、これより右へ30～45°振った部分では、二つの凹んだ圧痕部分の境目のバリは、7mmほど丸瓦部方向へ伸びており、そこでは布目はみえない。したがって、この瓦では、馬蹄状圧痕の外側のラインの一部はそのまま生きていると考えてよい。しかし、丸瓦部粘土凹面の布目が瓦当部粘土との接合部で消え、布目が境目の中に入っていくようにみえる点では、瓦当部粘土と模骨から抜かれた丸瓦粘土円筒とを接合したと考えざるをえない。

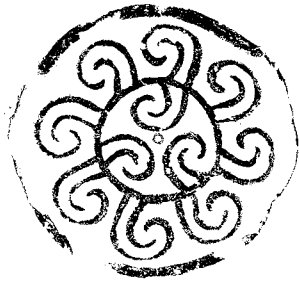
模骨から抜かれた粘土円筒を接合

瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。左から右へ紐を引っ張り、糸切りしている。突帯の左端の一部に、糸切り後、薄く粘土を切り取った痕跡が残る。丸瓦部は、刃物による切り込みが凸面側からおこなわれ、凹面側には粘土の割れ目である破面がみられる。なお、この瓦当中央には、径4～5mmの小孔が貫通している。

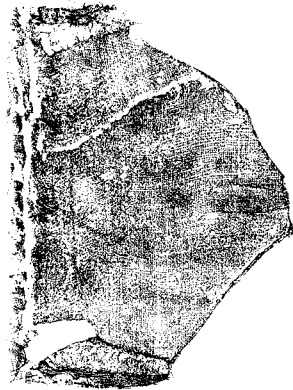
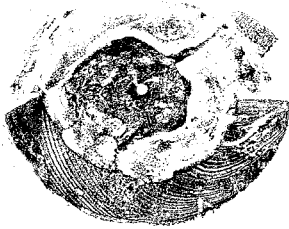
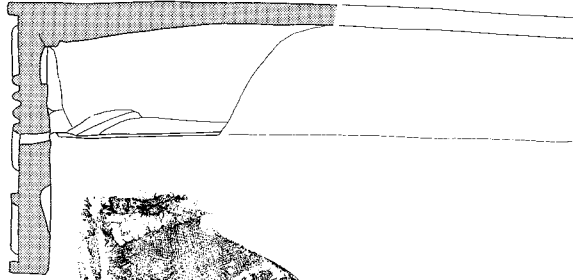
Ⅲ式D軒丸瓦（第22図2、図版3-137） 内外区の区画線を一重とし、外区は左向きの複線で表現した渦巻文、内区は右向きの複線表現の渦巻文がそれぞれ同一方向に回る。内外区の渦巻文接合部では、逆S字状の文様となる。

この瓦では丸瓦部が剥落しているが、瓦当裏面に指紋を多く残すので、技法を観察するうえでは良好な資料である。まず、瓦当裏面中央の突出部は6×7.5cm程度の広さで、表面は微妙な凹

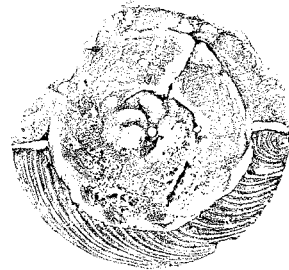
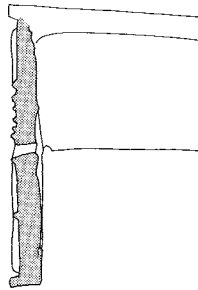
凸がある。凹んだ部分には指紋が多くつくが、やや高く盛り上がり、少し平坦になった部分では指紋は消える。次に、周縁の馬蹄状に凹む2カ所の部分は、指紋がほとんど認められない。この2カ所で凹む部分は、比較的平坦ではあるが、木製や陶製のように平坦で硬い道具で押したほどには平坦でなく、やはり硬い粘土を押したような微妙な凹凸がある。



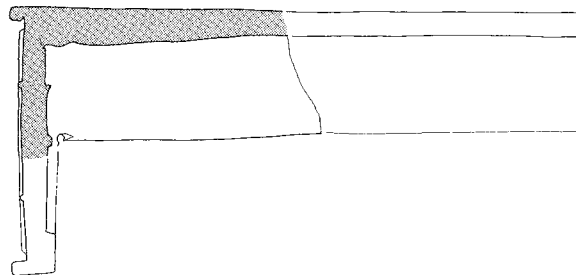
1 (147)



2 (137)



3 (172)



第21図 櫟陽城出土軒丸瓦（3）

次に丸瓦取りつき部であるが、ここにはベツタリと指紋が残る。この部分の瓦当の厚さは、外縁に近づくにつれて薄くなっており、瓦当範に粘土を押し込む際に、中央部粘土がやや厚く、周縁部粘土を薄くしていることがわかる。つまり、この指紋残存部が瓦当部粘土と丸瓦部粘土との接合部と考えてよい。この瓦では、中央の高まり部分と凹んだ部分との段差は少なく、最大でも1～2mm程度である。また、二つの凹んだ圧痕部分の境目のバリの突出も1～2mm程度である。瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残る、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。左から右へ紐を引っ張り、糸切りをおこなっている。

**Ⅲ式D軒丸瓦** (第21図3、図版8-172) 外区に右向きの複線、内区に左向きの複線で表現した渦巻文を配するもの。内外区の渦巻文接合部ではS字状の文様となる。内区の渦巻文の間に小珠点をおく。

丸瓦部は18cmほど残存し、丸瓦凹面に整った細かい布目痕および布の綴じ合わせ痕を残す。瓦当部粘土と丸瓦部粘土との境の接合部で、丸瓦部からの布目は消え、瓦当部粘土と布目をもつ丸瓦部とが接合された状態を示す。瓦当裏面に馬蹄状圧痕が残る、中央の高まり部分には出臍状の粘土の小さな突出がある。この中央の高まり部では細い筋状の痕跡が残る、木製板による圧痕の可能性もある。周縁部の二つの凹んだ圧痕部分の境目のバリ状のはみ出しは、中央の高まり部分の方向へやや傾く。

中央に出臍状の突出

**I式H軒丸瓦** (第22図1、図版1-123) 内外区の区画線を一重とし、内区に格子文、外区に雲文を入れるもの。外区は2条の界線を縦横に配して全体を4区に分け、各区に雲文を入れる。

丸瓦部は、凹面に布目痕が残る、布の綴じ合わせ目が残る。丸瓦部凹面に粘土紐の接合痕が残る、幅4cm程度の粘土帯を積みあげていることがわかる。粘土紐相互の傾きは、内側に模骨があるため、丸瓦広端部を下にして、外側(凸面側)が低く、内側(凹面側)が高い。外側が下に傾く「外傾接合」である。

「外傾接合」

瓦当裏面中央部の突出は4×8cm程度の広さであり、周縁の馬蹄状に凹む部分は2カ所に分かれる。中央の高まり部分には、出臍状の粘土の小さな突出がわずかに認められる。丸瓦部凹面の布目は、瓦当部粘土と丸瓦部粘土との境の接合部まで届く部分と、その手前で布目が終わっている(布端)部分とがあり、布綴じ合わせの左右で異なる。丸瓦部凹面全体に黄土が付着しており、細部観察は難しい。

**I式A軒丸瓦** (第22図2、図版3-138) 内区に斜格子文、外区に雲文を入れる。外区は2条の界線の端が雲文様曲線によって包まれる。

丸瓦部は剥落しており、以下は瓦当裏面のみの観察である。裏面中央の突出部は5×8.5cm程度の広さであり、周縁の馬蹄状に凹む部分との境は比較的直線に近い。中央の高まり部分と凹んだ部分とは最大7mmの段差をもつ。すなわち、この瓦の瓦当裏面の馬蹄状圧痕の境目は、前述の3例と比較すると、深さ・境目のラインとも明瞭であると言ってよい。中央の高まり部の表面は、細い筋状の痕跡が残る、中央の高まり部分に出臍状の突出があるかどうかは、黄土の付着のためわからない。2カ所の馬蹄状圧痕の凹み部分は、比較的平坦ではあるが、やはり微妙な凹凸をもっている。

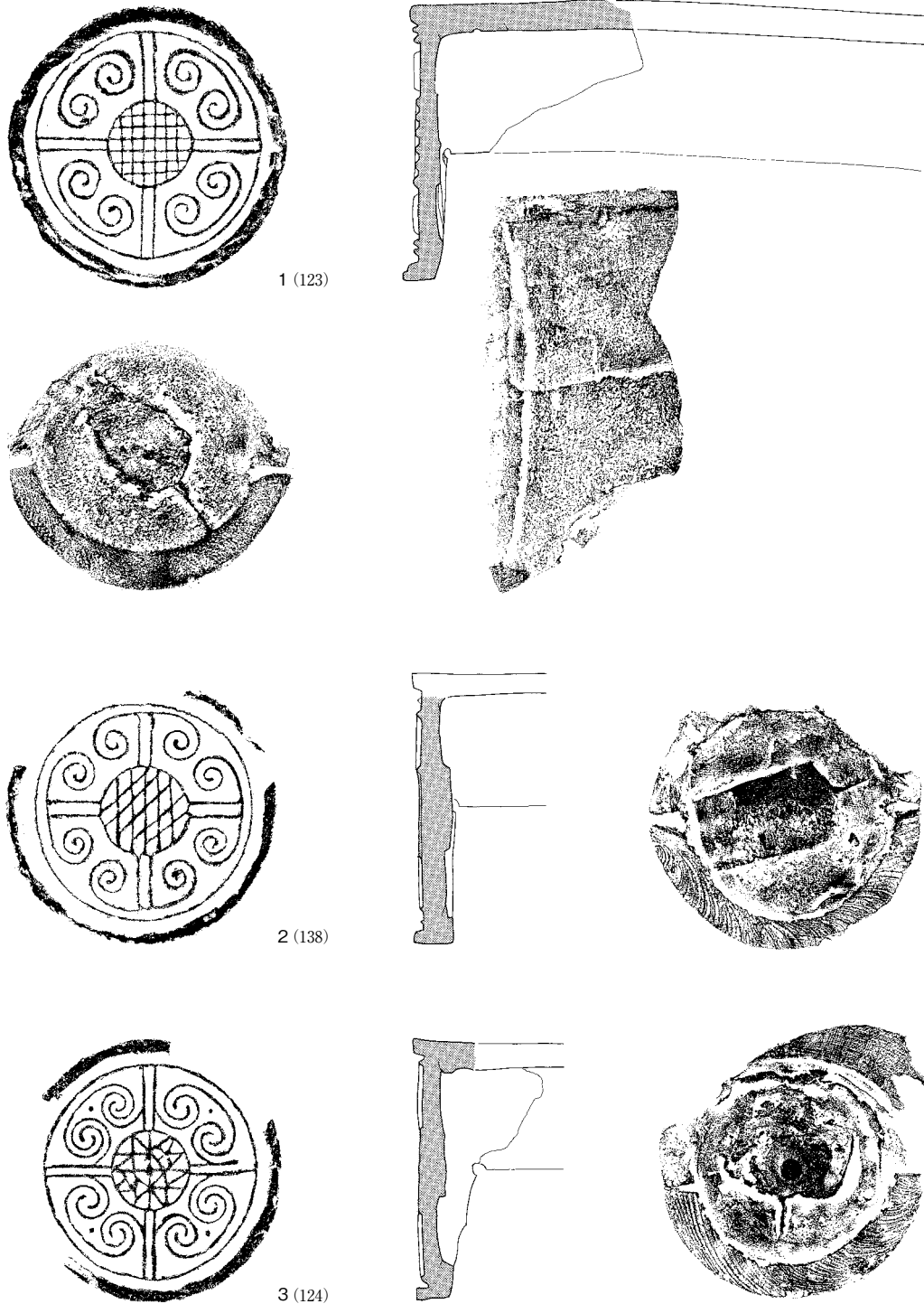
馬蹄状圧痕の境目明瞭

瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残る、右から左へ紐を引っ張って糸切りしている。

**I式B軒丸瓦** (第22図3、図版1-124) 内区は一重の区画線の中に三角形を組み合わせ、あた

かも八角星の文様を形づくっているように見える。外区は2条の界線から渦巻文が左右に分岐するものと雲文とを複合した文様をつくる。雲文中央に小珠点を配する。

丸瓦部は6 cm程度残り、丸瓦部凹面の布目は瓦当部粘土と丸瓦部粘土との境の接合部まで届かず、6 mmほど手前で終わる。瓦当と丸瓦部の接合部は、丸瓦部を押しつけたように凹凸の皺が



第22図 櫟陽城出土軒丸瓦（4） 1：4

生じ、先端部はふくらむ。

瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、左から右へ紐を引っ張って糸切りしている。

**模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦の製作技法** 以上、瓦当裏面に馬蹄状圧痕を有する櫟陽城出土軒丸瓦6点の瓦について述べた。これらは、次のような製作技法をとったものと考えてよい。

馬蹄状圧痕の軒丸瓦の製作工程

- (1) 製作台の上に、文様面を上にして瓦当箆を置く。陶製による瓦当箆と考える。
- (2) 瓦当箆に粘土を詰める。工人による粘土の押し込みがおこなわれ、多くの指紋を残す例(第21図2、図版3-137)では、元来、瓦当裏面全体に指紋痕跡が残っていたと考えてよい。このときの瓦当部粘土は中央部で厚く、周縁部に近づくにつれて斜めに薄くなる。
- (3) 次に、瓦当裏面中央部にある工具で軽く押し、平坦にする。このある工具とは、乾燥してやや硬くなった粘土の場合(第21図1、図版7-147および第21図2、図版3-137)と板の場合(第21図3、図版8-172および第22図2、図版3-138)とがあるようだ。後者では、出臍状の粘土の小さな突出が認められるものが多い。
- (4) 周縁部に、二つの工具で同時に強い圧痕を加える。瓦当裏面の馬蹄状圧痕は完全に平坦なものではなく、微妙な凹凸をもつものばかりである。しかも、中央の高まり部分と周縁の馬蹄状に凹む部分の境目が最も明瞭なものでさえ、木の側面や端面で圧痕が生じたような鋭利な境目をもつ例はない。すなわち、馬蹄状圧痕を形づくった工具とは、乾燥してやや硬くなった粘土のように、ある程度の柔軟性をもつものと考えられる。
- (5) 一方、丸瓦粘土円筒は別の台で製作されている。模骨と布袋のついた粘土円筒を分離し、布袋をはずして、粘土円筒全形ができあがる。乾燥時間をおくことなく、瓦当箆に詰められた瓦当部粘土の上に、粘土円筒全形を置き、丸瓦下端部を両手でささえ、やや内側の下の方向へ押さえ込む。瓦当と丸瓦部の接合部の外面は、粘土を少し足し、横方向のケズリやヨコナデによって仕上げる。
- (6) 最後に、円筒不要部を切り取る。この(5)と(6)の工程の間には、かなりの乾燥時間が必要だと思う。すなわち、瓦当部粘土と丸瓦部粘土とを強く接着させる時間であり、このため、瓦当箆はまだ下に据え置かれたままであろう。円筒不要部の切り取り方法は谷豊信が考察したとおりであり、また前項の瓦と同じであるので、省略する。
- (7) 以上のようにして軒丸瓦が作られるが、円筒不要部の切り取り後、丸瓦部凸面・凹面の二次調整(ナデなど)は全くおこなわれていない。

以上が、山崎の考える製作工程である。これは岸本らの復元と大きく異なっているが、将来さらに検討される可能性もあると思われるので、もう少し、別の点も指摘しておきたい。

- (a) もし組み合わせ模骨ならば、なぜ中央部分が必ず高くなるのか、説明が必要である。
- (b) もし組み合わせ模骨ならば、丸瓦部凹面の布目は、瓦当部粘土との接合部において、丸瓦広端の手前で終わるか、瓦当裏面の一部に達するか、または折り曲げられた状態のいずれかで終わるはずである。Ⅲ式D(第21図1、図版7-147および第21図3、図版8-172)、Ⅰ式H(第22図1、図版1-123)では、いずれも瓦当部粘土と丸瓦部粘土の接合部の境で布目は消え、布目が境目の中に入っていきようにみえる点は、模骨から抜かれた粘土円筒全形が瓦当部粘土と接合されたことを如実に示している。そして、丸瓦部広端近くで、丸瓦凹

組み合わせ模骨想定案の問題点

面側に凹凸の皺が生じ、先端部がふくらむ例が多い(第21図1、図版7-147および第21図3、図版8-172および第22図3、図版1-124)こともこれを傍証するものである。

- (c) なお、馬蹄状圧痕を形づくった工具が、乾燥してやや硬くなった粘土のようなものであれば、その粘土を内に置いたまま、粘土円筒全形を瓦当部粘土と接合した後、糸をつけた棒を貫通させ、瓦当裏面下半を糸切りで切り取ることも可能となる。Ⅲ式Dにおける例(第21図1、図版7-147)では、馬蹄状圧痕境目のバリのはみ出しは、7mmほど丸瓦部方向へ伸びており、あたかもそれを示すかのようなものである。しかし、この部分の圧痕が深く、それと接するかたちで丸瓦部端面が接合されたと考えられることも可能である。そして、瓦当裏面と丸瓦部との接合部分、瓦当裏面と突帯との接合部分では、ほとんどすべてがなだらかな内凹みのカーブを描く。瓦当裏面粘土と丸瓦粘土円筒全形とが、内側に何も介在することなく接合されたと解するほうが、自然で率直な観察のように思われる。
- (d) 最後に、なぜこのような圧痕ができるのかについて述べておきたい。一見、特異にみえる瓦当裏面のこれらの馬蹄状圧痕は、陶器や木製工具の圧痕ではあまり効果がなく、乾燥してやや硬くなった粘土であったために効果が上がったと考えたい。おそらく、こうした圧痕は、範の粘土への押し込みとは逆の効果、すなわち瓦当範と押し込まれた粘土を少し遊離させるため、粘土の範離れをよくするためにおこなわれたものであろう。乾燥してやや硬くなった粘土の表面を水でぬらし、瓦当裏面周縁に押しつける。そして粘土を上を引きあげて離す際の効果を、最大の理由としたものと思われる。

馬蹄状圧痕  
生成の理由

## C 未央宮5号建築出土の軒丸瓦

漢長安城未央宮<sup>びおう</sup>は、丞相蕭何<sup>しゅうか</sup>によって紀元前200年に建設が始められ、紀元前198年に完成している。先行して造営された長樂宮が秦代の離宮である興樂宮を改修したのに対し、未央宮の造営は基本的には新築であったという。

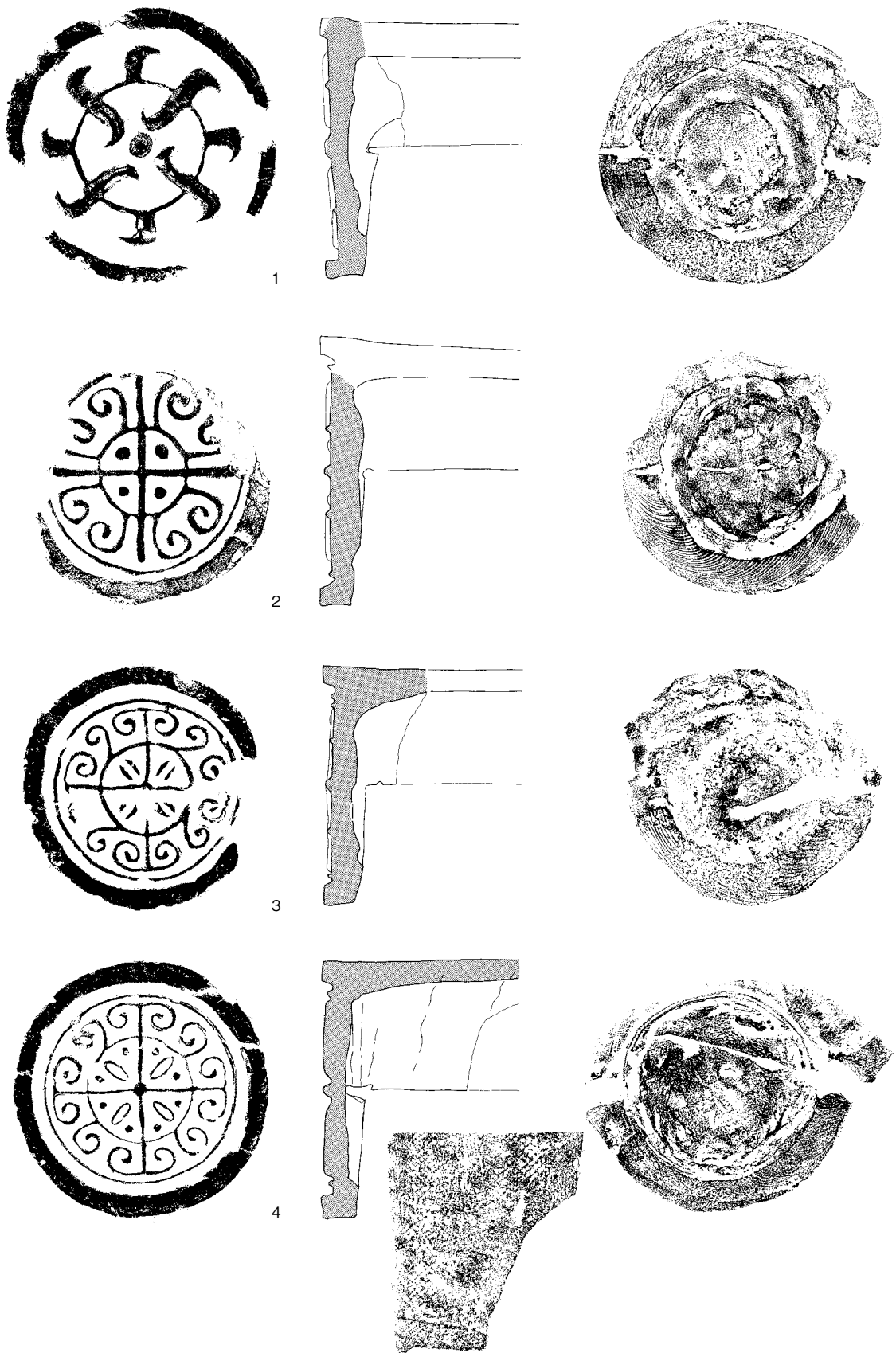
未央宮の発掘は、1980年から1989年にかけておこなわれ、発掘調査報告書が1996年に出版されている<sup>(9)</sup>。以下に述べる資料は、1988年から1989年にかけて発掘された未央宮5号建築(宮城西南角楼)と、1985年から1987年にかけて発掘された未央宮3号建築(中央官署)出土のものである。まず、未央宮5号建築出土の軒丸瓦を技法的に分類していきたい。

軒丸瓦は、櫟陽城出土軒丸瓦の章で説明した、「i 瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」、「ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」の例が少数認められる。そのほかに、「iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」と「iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦」がある。

### i 瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

このタイプを4例図示した。

第23図1は変形葵文瓦当I型式1式として報告されたもの。1点出土。文様は、内外区の区画線を一重とし、その内外にS字形および鎌形の曲線を交互に配している。中心に小さな珠点が隆起する。丸瓦部の凹面に麻点文はみえないが、あると考えてよい。丸瓦部凸面には縄叩き痕、瓦



第23図 未央宮5号建築出土軒丸瓦(1) 1:4



周縁に沿う  
ヨコナデ

当裏面には中央部に多くの指紋が残る。瓦当と丸瓦部の接合部は、周縁に沿ってヨコナデがおこなわれている。瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。左から右へ紐を引っ張っている。

第23図2は、渦文瓦当Ⅱ型1式として報告されたもの。2点出土している。文様は、内外区の区画線を一重とし、中心から四方に単線を外区まで伸ばして、外区には相対向する渦文を4組配する。内区には珠点を4個おく。丸瓦部は剥落し、瓦当裏面中央部は凹凸が著しい。瓦当と丸瓦部との接合部は、周縁に沿ってヨコナデがおこなわれている。瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。右から左へと紐を引っ張っている。

第23図3は雲文瓦当Ⅱ型1式、同図4は雲文瓦当Ⅱ型2式と報告されている。1式・2式とも2点ずつの出土。雲文瓦当Ⅱ型とは、外区に雲文を配し、内区は単線で4分割して葉文または珠点を配するものである。外区は4区画した分割線の先端に雲文が連結し、左向きの蕨形文を間に配する点が共通する。前者は内区に葉文、後者は珠点と葉文を配する。

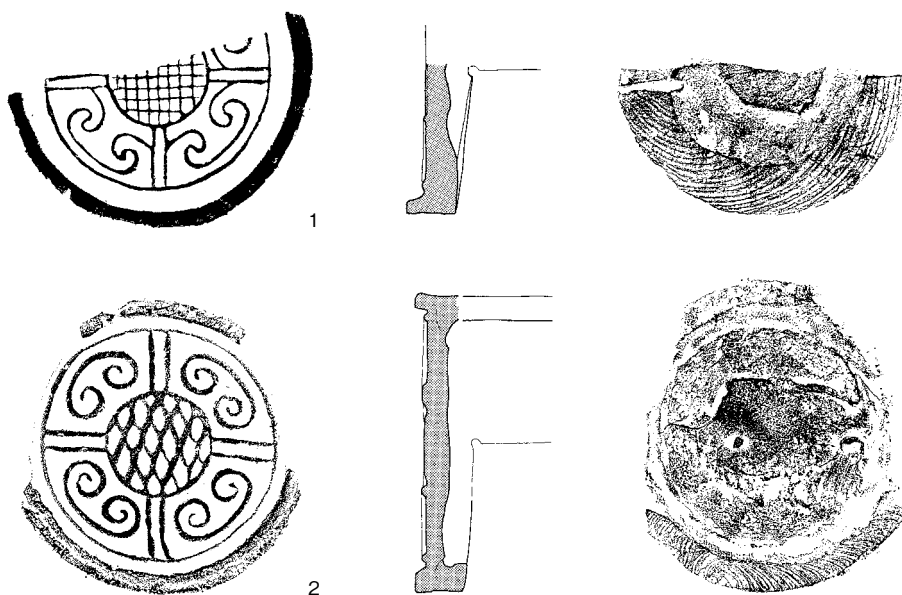
第23図3の丸瓦部凹面には麻点文が残り、凸面には縄叩き痕が残る。周縁に沿ってのヨコナデはみえない。瓦当裏面の突帯の糸切りは、左から右へ紐を引っ張っている。第23図4の丸瓦部は15cmほど残り、丸瓦部凹面には麻点文と幅約4～5cmの粘土紐接合痕がみえる。丸瓦部凸面に縄叩き痕が残る。瓦当と丸瓦部との接合部は、周縁に沿ってヨコナデがおこなわれている。突帯の糸切りは、右から左へ紐を引っ張っているが、糸切り用の棒は2回通されており、突帯の糸切りのほかに、丸瓦部縦方向にも糸切りがおこなわれている。

丸瓦部縦方向も糸切り

## ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

このタイプを2例図示した。

第24図1は、雲文瓦当Ⅲ型4式として報告されたもの。1点出土。外区は、縦横の界線から渦巻文が左右に分岐するものと雲文とを複合した文様で、両端が連結する。内区に格子文を配す



第24図 未央宮5号建築出土軒丸瓦(2) 1:4

る。瓦当裏面に馬蹄状圧痕を有し、突帯の糸切りは右から左へ紐を引っ張っている。

第24図2は、報文には図示されていないが、未央宮前殿B区建築出土の雲文瓦当Ⅲ型22式と同式であろう。内区は斜格子文で、外区は2条の界線によって4分割し、その間に雲文を配する。瓦当裏面に馬蹄状圧痕があり、丸瓦部粘土の布目は、瓦当部粘土との境まで続く。すなわち、瓦当部粘土と布目をもつ丸瓦部とが接合された状態を示す。突帯の糸切りは、やや特異で、左右両端から紐を引っ張った状態を示す。

### iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

このタイプの軒丸瓦の製作技法は本論では初めて扱うので、以下、やや詳しく述べることにしたい。第25図1・2・3は同範であり、報文では雲文瓦当Ⅲ型1式と分類されたものである。5号建築で22点が出土している。文様は内外区の区画線を一重とし、外区は2条の界線の端が雲文様曲線によって包まれるもので、内区は斜格子文を入れる。

第25図1の製作技法を述べよう。瓦当裏面は中央部が分厚くなるわけではなく、指紋のついた凹凸が続く。次に、瓦当部粘土と丸瓦部粘土との接合部であるが、丸瓦部凹面先端には、麻点文のついた粘土の曲げ皺が残る。すなわち、この瓦は、丸瓦凹面に麻点文の痕跡が残された後、先端部が折れ曲がり、瓦当部粘土と丸瓦部粘土円筒全形とが接合されたことを物語っているのである。これほど明確に接合方法を示すものはほかにないが、第25図2では、瓦当裏面は中央部がそれほど分厚くならず、指紋のついた凹凸が続く。丸瓦部凹面には麻点文が残り、3～4cm程度の幅の粘土紐を接合した痕跡を示す。粘土紐相互の傾きは、瓦当を下にして、外側が高く、内側が低くなる「内傾接合」である。第25図3では、黄土が付着して細部観察は難しいが、瓦当裏面は中央部がそれほど分厚くならず、全体として平坦となっている。突帯の糸切りは、第25図1では、右から左へ紐を引っ張ったことがわかるが、ほかは不明である。

雲文瓦当Ⅲ型1式の製作技法

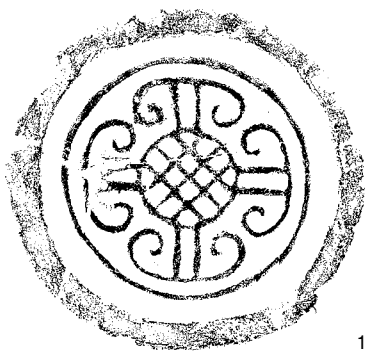
「内傾接合」

次に、雲文瓦当Ⅲ型2式と分類されたものについて述べよう。これはⅢ型1式と異なり、雲文先端が二重に巻き込む（1式は一重に巻き込む）ものと報告されている。2点出土。第25図4の瓦当裏面は、中央部が1～2mmほど高まるだけで、全体としては平坦である。突帯の糸切りは、左から右へ紐を引っ張っている。

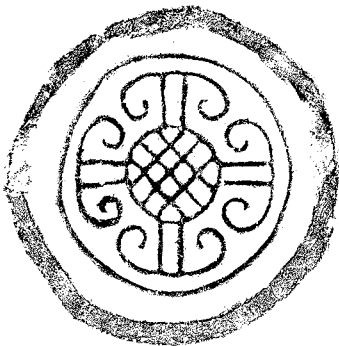
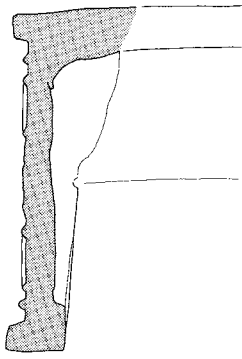
これらの軒丸瓦は、共通して、瓦当部粘土と丸瓦部粘土との境目に、全くヨコナデを残していないのが特徴であり、次のような製作技法によったものと考えてよい。

雲文瓦当Ⅲ型2式の製作技法

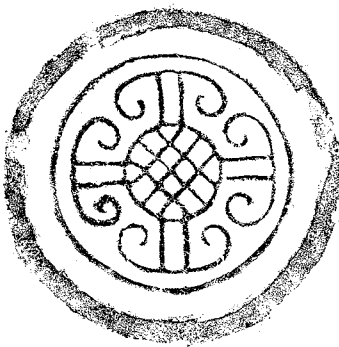
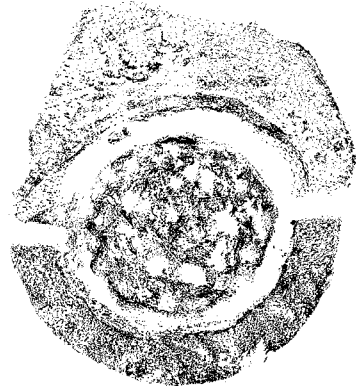
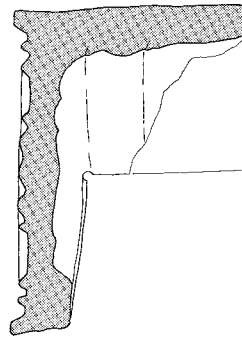
- (1) 製作台の上に、文様面を上にして瓦当範を置く。陶製による瓦当範と考えられる。
- (2) 瓦当範に粘土を詰める。工人の手による粘土の押し込みがおこなわれるが、瓦当裏面全体はほぼ同じ厚さにし、とくに中央部を盛りあげることはいない。
- (3) 一方、丸瓦粘土円筒は別の台で製作されている。模骨を使用することはない。幅3～4cmの粘土紐を積みあげていく。これらの粘土紐相互の傾きは、内側が低く、外側が高くなる「内傾接合」である。一定の粘土紐積み上げの後、縄を巻きつけた叩き板で叩き締める。このとき、内側に当て具をあて、麻点文の痕跡が残る。これを繰り返し、最後に玉縁部を作る。
- (4) 瓦当部粘土と丸瓦粘土円筒全形とを接合する。粘土円筒全形が作られた後、乾燥時間をおくことなく、瓦当範に詰められた瓦当部粘土の上に、粘土円筒全形を置き、丸瓦下端部



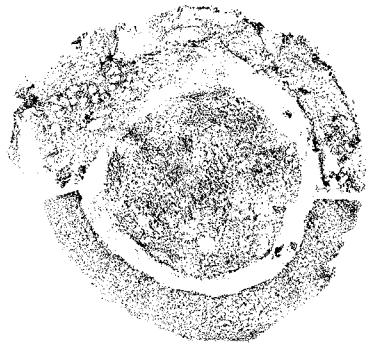
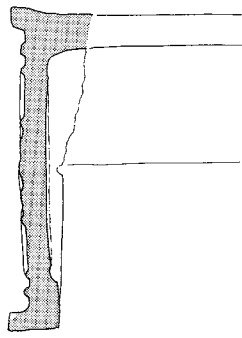
1



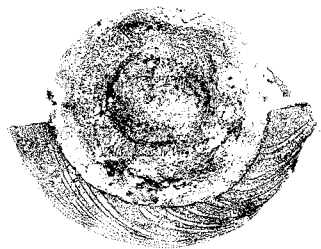
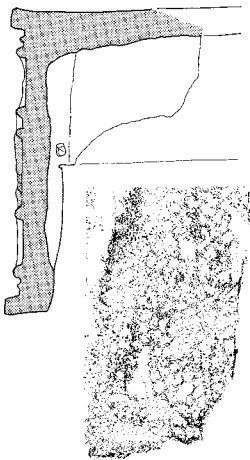
2



3



4



第25图 未央宫5号建筑出土轩丸瓦(3) 1:4

を両手でささえ、少し内側の下の方向へ押さえ込む。瓦当と丸瓦部の接合部の外面は、粘土を少し足し、横方向のケズリやヨコナデによって仕上げる。

(5) 最後に、円筒不要部を切り取る。この(4)と(5)の工程の間には、かなりの乾燥時間が必要だと思ふ。すなわち、瓦当部粘土と丸瓦部粘土を強く接着させる時間であり、このため、瓦当部は下に据え置かれたままであろう。円筒不要部の切り取り方法は、谷豊信が考察したとおりである。

(6) 以上のようにして軒丸瓦が作られるが、円筒不要部の切り取り後、丸瓦部凸面・凹面の二次調整(ナデなど)は全くおこなわれていない。

#### iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦

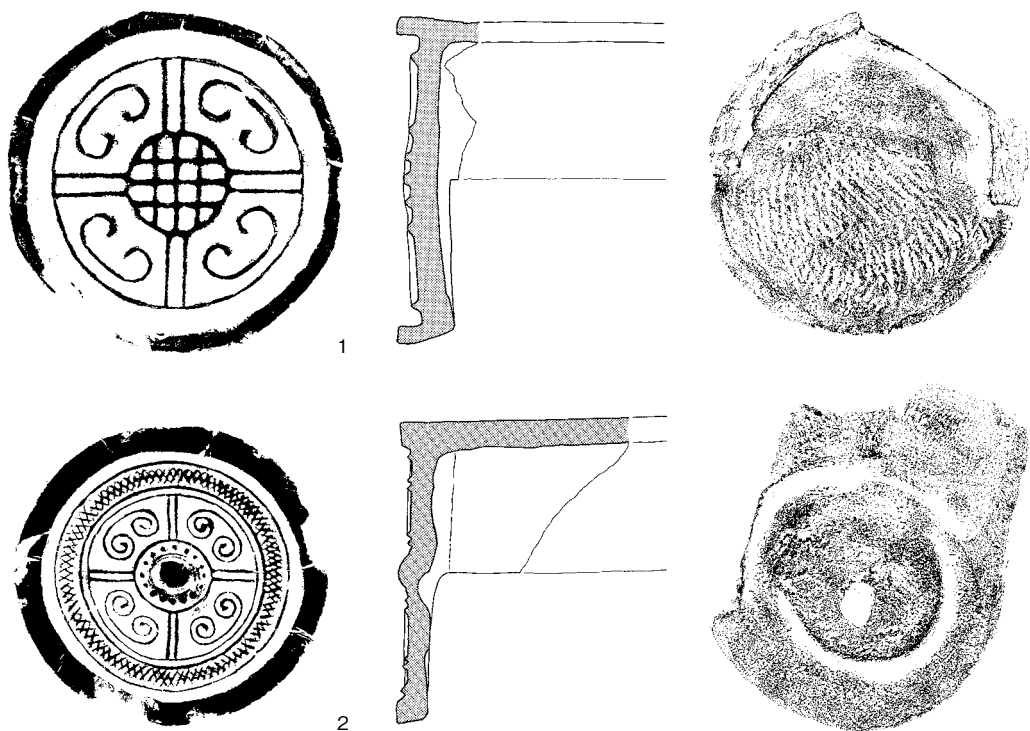
これは、模骨を使用して丸瓦粘土円筒を作り、その粘土円筒を縦に2分割して丸瓦を完成させ、瓦当部粘土に接合する方式のものである。このタイプは、軒丸瓦2点を図示した。

完成させた丸瓦を接合

第26図1は雲文瓦当Ⅲ型3式と報告されたもので、3点が出土している。内区は格子文を配し、外区は2条の界線で全体を4区に分け、各区に雲文を入れる。瓦当裏面全体に縄目きをおこない、丸瓦部との接合部および瓦当裏面下半周縁部にナデをおこなって仕上げる。丸瓦部は若干残存し、凹面に布目痕を残す。

第26図2は雲文瓦当Ⅲ型11式と報告されたもので、9点出土している。中心を半球状に作り、その周囲に珠文をめぐらす。外区は4分割し、間に雲文を入れ、外区外側に斜格子文帯を配する。瓦当裏面全体は円周に沿ってヨコナデをおこない、瓦当裏面下半に円周状の凹みを作る。これはおそらく、回転台を回しながら指を強く押し込んで仕上げたものと考えられる。最後に、瓦

円周状凹み



第26図 未央宮5号建築出土軒丸瓦(4) 1:4

当裏面中央に指を1本、下方から押し込み、深さ7mm、大きさ1.7×2.4cmの指頭圧痕を作る。丸瓦部は10cmほど残存し、凹面に布目痕、凸面に縦位の縄叩き痕を残す。

## D 未央宮3号建築出土の軒丸瓦

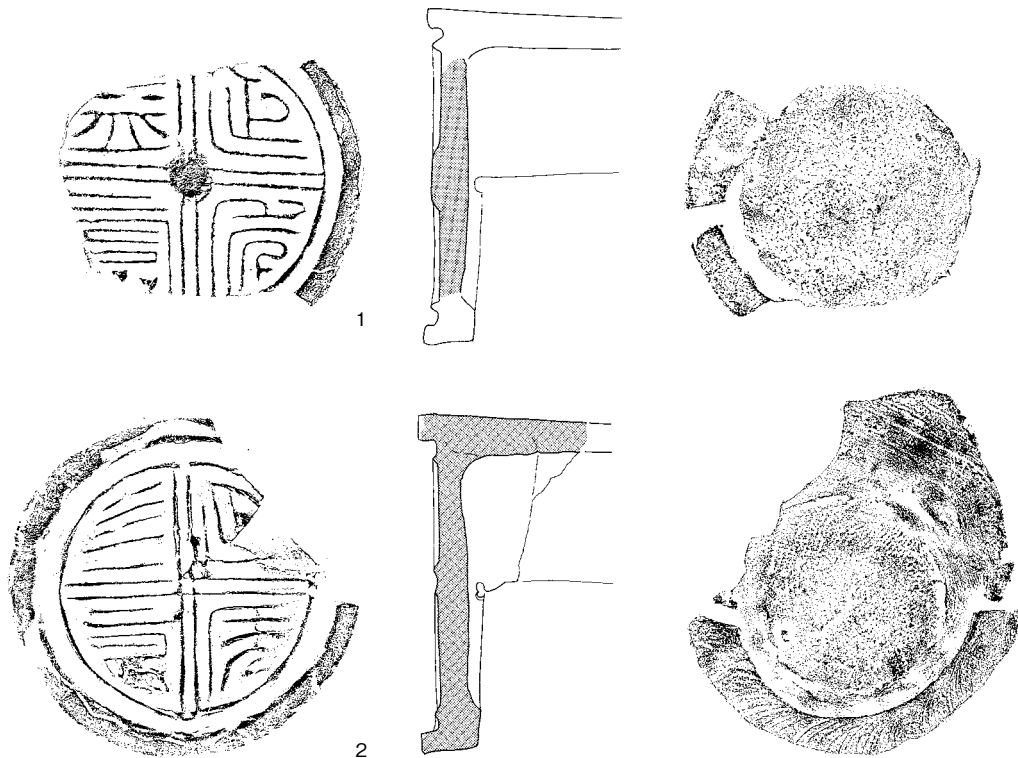
未央宮3号建築出土軒丸瓦の製作技法はいくつかのタイプがあるが、ここでは主要なものとして、「ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦（馬蹄状圧痕なし）」と、「iii 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦」について述べる。

### ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦（馬蹄状圧痕なし）

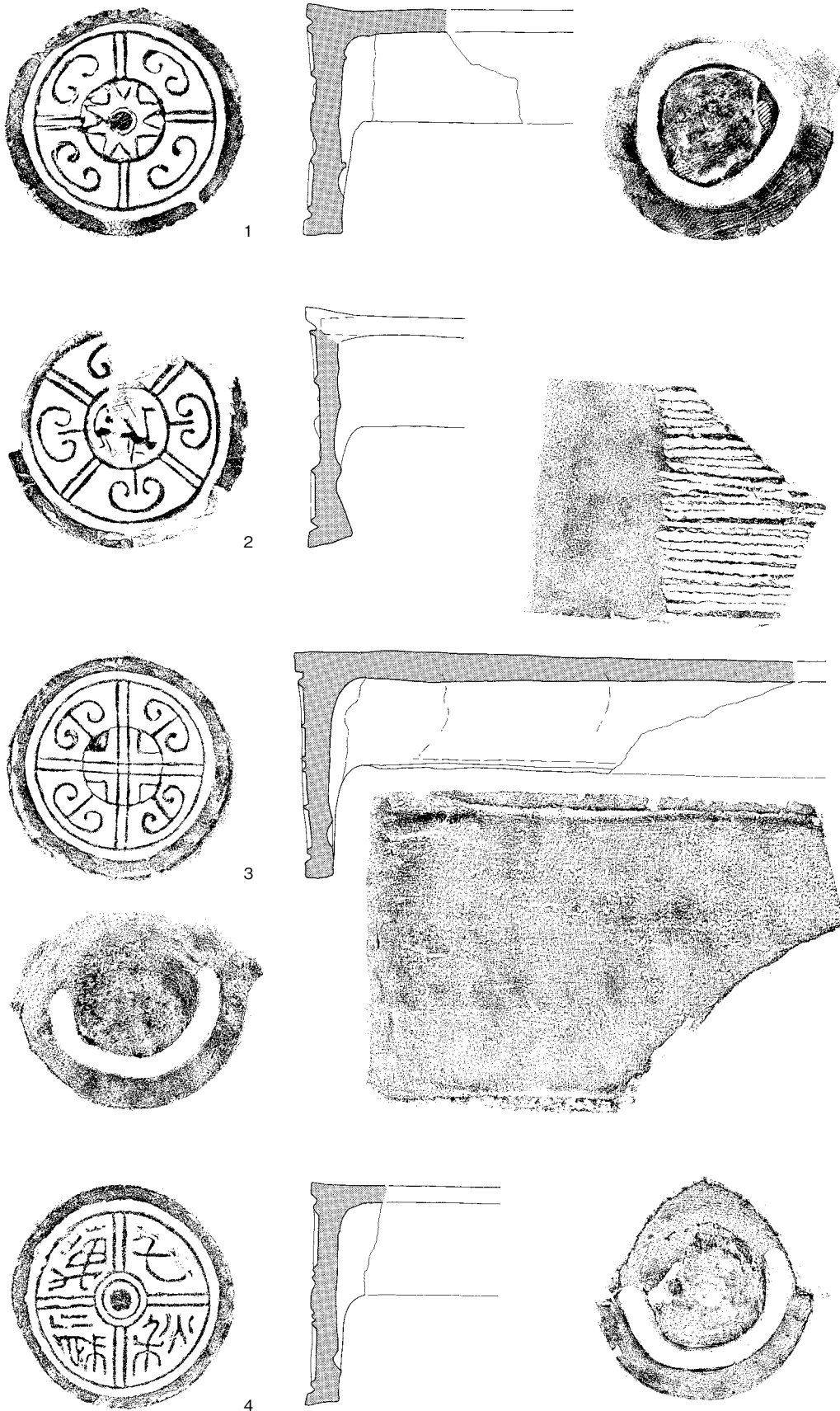
2例を図示した。両者とも「延年益壽」の文字を配する文字文瓦当で、報告書ではI型・II型に分類されている。いずれも1点ずつの出土。

I型（第27図1）は瓦当裏面が平坦であるが、黄土の付着のため、細部の状態は不明。瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。

II型（第27図2）は丸瓦部が5cmほど残存し、丸瓦部凹面に布目痕と粘土紐接合痕、凸面に縦位の縄叩き痕が残る。粘土紐相互の傾きは「外傾接合」である。瓦当裏面に縄叩き痕が残るが、これは瓦当部粘土と丸瓦円筒とを接合する以前の工程で生じたものである。現存する丸瓦部と瓦当裏面との境には、補足粘土とヨコナデが施され、これは円筒不要部切り取り後におこなったものである。瓦当裏面の突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。左から右へ紐を引っ張って、糸切りをおこなっている。



第27図 未央宮3号建築出土軒丸瓦（1） 1:4



第28図 未央宮3号建築出土軒丸瓦（2） 1:4

#### iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦

以下では4種の軒丸瓦について述べる。

**雲文瓦当Ⅲ型12式軒丸瓦** (第28図1) 11点出土。内区は中心を半球状に作り、その周囲に三角形文をめぐらし、八角星を形づくる。外区は2条の界線で全体を4分割し、間に雲文を配する。丸瓦部は8cm程度残存し、凹面に布目痕が残る。丸瓦は分割截線を入れることによって切り取っているが、それに接して分割界線が残り、丸瓦の模骨に分割突帯が設けられていたことを示す。瓦当裏面には縄叩き痕が残り、瓦当筈に粘土を詰めた後、縄叩きによって裏面を平坦にしたことがわかる。丸瓦部を瓦当部粘土と接合した後、接合用の補足粘土を足し、その後、回転台を回しながら指を強く押し込んで、瓦当裏面全体に円周状の凹みを作っている。

分割截線  
分割突帯

円周状凹み

**雲文瓦当Ⅲ型14式軒丸瓦** (第28図2) 5点出土。少なくとも3種の筈がある。第28図2は内区に2羽の鶴の全身を描く。体の向きは逆だが、顔は同一方向を向いている。外区は、2条の界線で全体を4分割し、各区に雲文を入れる。瓦当裏面はⅢ型12式と同じく、まず縄叩きをおこない、次に回転台を回しながら指を強く押し込んで、瓦当裏面全体に円周状の凹みを作る。Ⅲ型12式と異なるのは、瓦当裏面にさらに指を押し込み、縦方向の溝を作ることである。

**雲文瓦当Ⅳ型4式軒丸瓦** (第28図3) 81点出土。雲文瓦当Ⅳ型は外区に雲文を配し、内区は2条の線を十字形に交叉させ、四隅に曲尺線を入れるものである。Ⅳ型4式は、内外区の区画線から単線が四方に延び、四方に配した雲文と連結するものである。丸瓦部は約30cm残存し、凹面に布目痕、凸面玉縁寄りに縄叩き痕を残す。ほかの丸瓦部凸面は横方向のナデつけ・ケズリによって縄叩き痕を磨り消している。丸瓦部凹面には粘土紐接合痕が残り、接合痕跡が明瞭な場所での間隔は約10cm。粘土紐相互は「外傾接合」。丸瓦部側面は片方を分割截線で切り取り、ほかの片方は、残存部に関するかぎり、分割破面のみで割り取っている。両側とも、隣接して分割界線が残り、丸瓦の模骨に分割突帯が設けられていたことを示す。瓦当裏面は縄叩き痕は全くみえず、瓦当裏面全体にナデ調整をおこなった後、回転台を回しながら指を強く押し込んで、瓦当裏面下半に円周状の凹みを作っている。

「外傾接合」

**「千秋萬歳」文字瓦当** (第28図4) 4点出土。丸瓦部は若干残るが、布目はよくみえない。瓦当裏面の縄叩き痕は全くみえず、瓦当裏面全体にナデ調整をおこなった後、回転台を回しながら指を強く押し込んで、瓦当裏面下半に円周状の凹みを作っている。

## E 桂宮出土の軒丸瓦

前漢武帝の時代(前140～前87年)に、漢長安城では建章宮(前103年)、明光宮(前101年)が造営されるが、桂宮も『三輔黄圖』に「桂宮、漢武帝造」などとあって、武帝の時代に造営されたと考えられている。

桂宮の発掘は1996年から2001年にかけておこなわれ、以下では、桂宮出土の軒丸瓦を技法から、「iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」と「iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦」の二つに分類する。

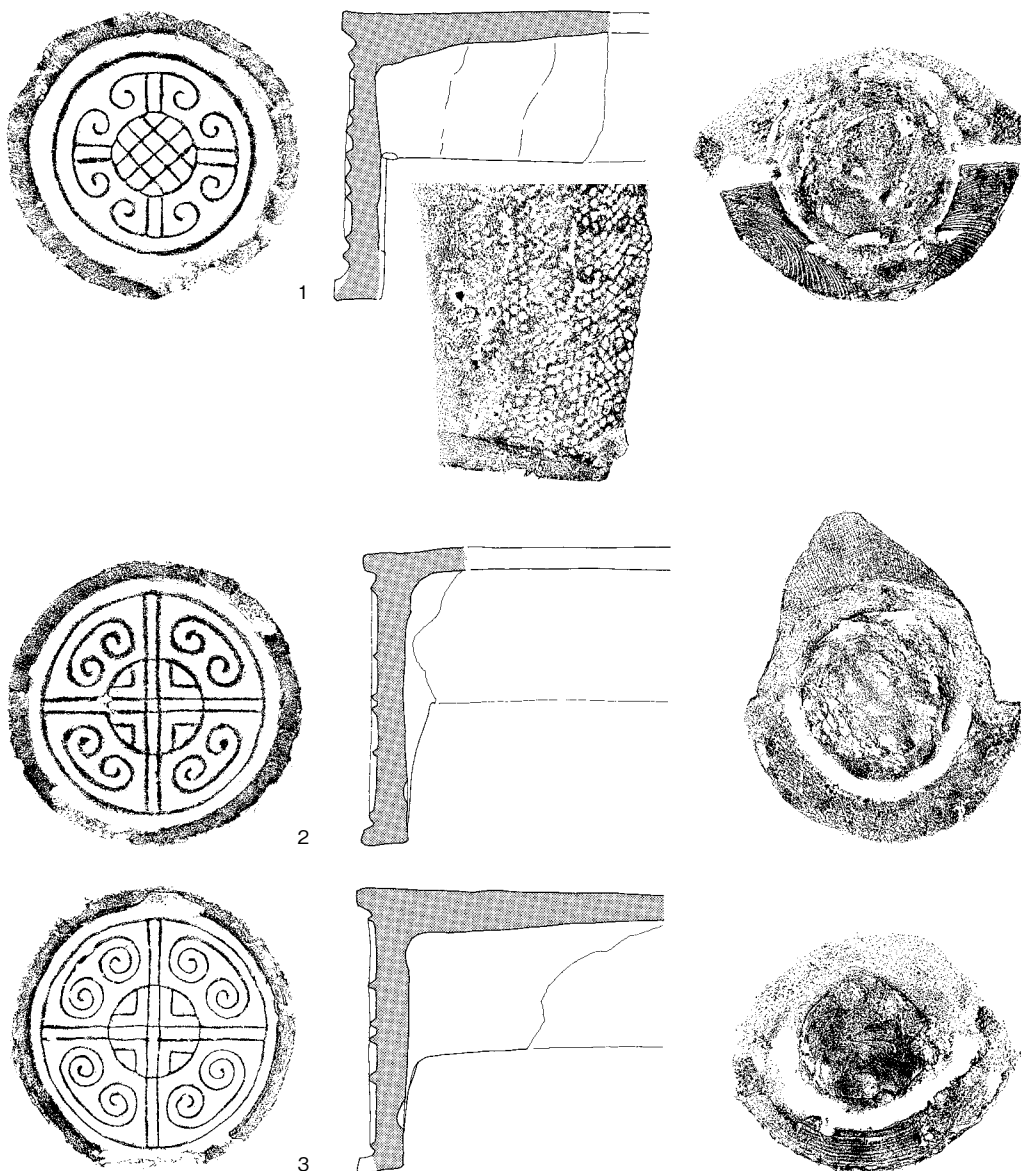
iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

雲文瓦当軒丸瓦 (第29図1) 内区に斜格子文を配し、外区に雲文を配するもの。丸瓦部は12cmほど残存し、凹面に麻点文、凸面にはヨコケズリ後の縄叩き痕を残す。丸瓦部凹面には約5cm間隔で粘土紐接合痕が残り、粘土紐相互の傾きは「内傾接合」である。瓦当裏面は中央部がやや厚くなる程度で、瓦当部粘土と丸瓦円筒粘土との接合部には全くヨコナデを残していない。突帯の上には糸切り痕が残り、また糸切り用の棒が通った痕跡が残る。右から左へ紐を引っ張って、糸切りをおこなっている。

「内傾接合」

iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦

外区雲文内区曲尺文軒丸瓦 (第29図2・3) このタイプの軒丸瓦は、桂宮では出土量の多いもの



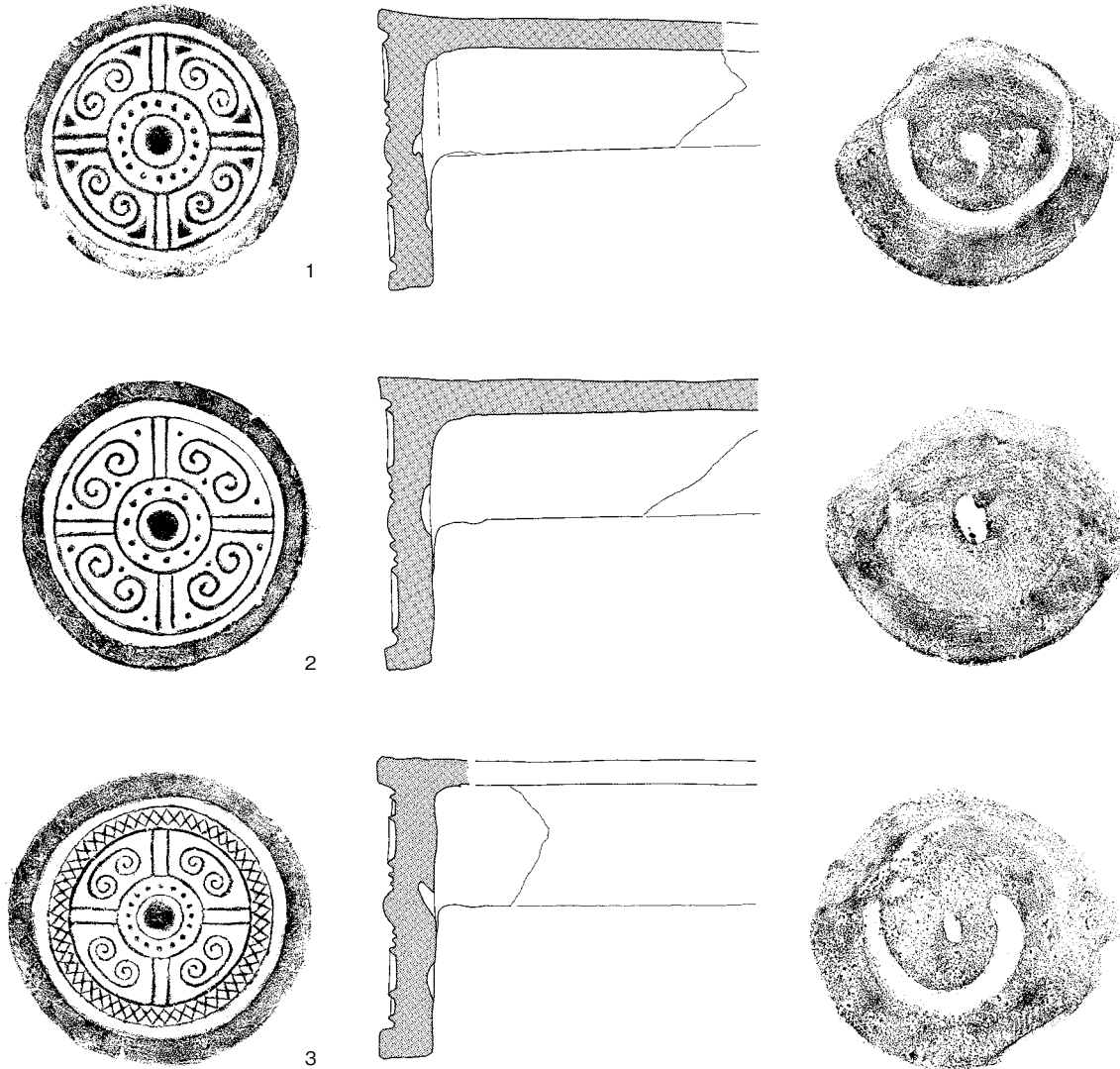
第29図 桂宮出土軒丸瓦 (1) 1:4



で、軒丸瓦全体の2割を越える。第29図2は、丸瓦部凹面に布目痕を残す。瓦当裏面には縄叩き痕があり、また手による押圧を示す凹凸と指紋が残る。円周に沿ってヨコナデをおこない、さらに回転台を回しながら指を強く押し込んで、瓦当裏面全体に円周状の凹みを作っている。第29図3は、丸瓦部凹面に布目痕、凸面に縦の縄叩き痕を残す。瓦当裏面には手による凹凸と指紋が残る。回転台を回しながら指を強く押し込み、瓦当裏面全体に円周状の凹みを作った後、瓦当裏面下端を円周状に削って、ハケメ状の調整痕を残す。

外区雲文内区周囲珠文半球状中心軒丸瓦 (第30図1・2) このタイプは、雲文の両脇に長三角形容を配するもの (第30図1) と、雲文の両脇および上に珠点を配するもの (第30図2) とがあり、両者合わせて軒丸瓦の1.5割程度を占める。第30図1の瓦当裏面は、瓦当裏面全体をナデで平坦にした後、回転台を回しながら指を強く押し込み、瓦当裏面全体に円周状の凹みを作る。瓦当裏面中央には、1本の指を押し込んで小穴を作る。第30図2の瓦当裏面は、瓦当裏面全体をナデで平坦にする。最後に、瓦当裏面中央に1本の指を押し込み、小穴を作る。

瓦当裏面の中央に小穴



第30図 桂宮出土軒丸瓦 (2) 1:4

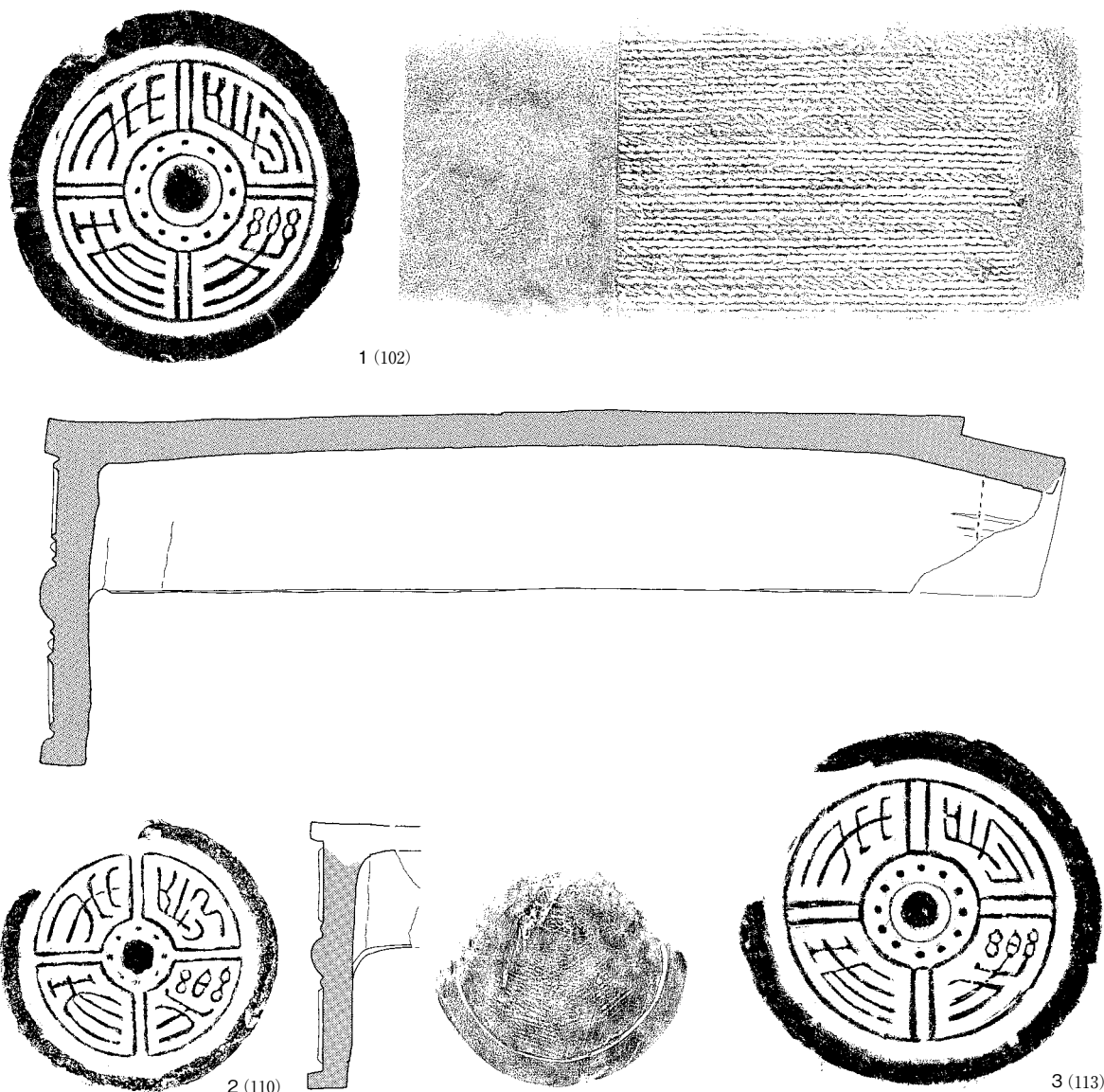
外区雲文・斜格子文内区周囲珠文半球状中心軒丸瓦（第30図3） このタイプの軒丸瓦は、桂宮では出土量が多く、軒丸瓦全体の3割弱に達する。瓦当裏面は縄叩きによって平坦にし、瓦当周縁に沿って軽くヨコナデをおこなう。

瓦当裏面に縄叩き

## F 杜陵園出土の軒丸瓦

杜陵は、『漢書』宣帝紀によると「元康元年（前65年）の春、杜県の東の原のほとりに初陵を造営し、杜県の名を杜陵と改めた。丞相・將軍・列侯・吏二千石、百万銭の資産家を杜陵に移した」とある。杜陵園の発掘は1982年から1985年まで中国社会科学院考古研究所によっておこなわれ、1993年に報告書が刊行されている。<sup>(10)</sup>

瓦は宣帝陵東門と北門および便殿（5号遺跡）から出土しており、以下では3点の軒丸瓦につ



第31図 杜陵園出土軒丸瓦 1:4

いて述べる。いずれも「長楽未央」文字文軒丸瓦である。

分割突帯  
分割截線

第31図1（図版13-102）は、便殿出土のほぼ完形の軒丸瓦である。全長57cm。丸瓦凹面に布目痕を残し、玉縁部で布をしぼる。丸瓦部凸面は、瓦当寄りをヨコナデで仕上げ、玉縁寄りに縦位の縄叩き痕を残す。丸瓦の分割は、分割突帯の存在を示す分割界線に沿って内側から切り込みを入れ（分割截線）、丸瓦部中央で分割破面が多く残る。瓦当裏面はほぼ平坦だが、中央部がごくわずかに凹む。瓦当裏面周縁に沿ってヨコナデをおこなう。

第31図2（図版14-110）も便殿出土である。丸瓦部凹面に布目を残し、瓦当裏面に縄叩き痕が残る。瓦当裏面全体は平坦だが、工具によって幅1mm程度の細い沈線を瓦当裏面下半の周縁に沿って入れる。

第31図3（図版15-113）は宣帝陵東門出土。瓦当裏面全体にナデ調整をおこない、瓦当裏面下半の周縁に沿って指で強くナデつけ、半円周状の凹みを作る。

瓦当裏面  
が平坦

以上、杜陵園の軒丸瓦は、「iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式」であり、瓦当裏面の形状は、第31図1（図版13-102）・2（図版14-110）のように平坦にするものが圧倒的に多く、第31図3（図版15-113）のような半円周状の凹みを作るものはごくわずかである。

## G まとめ

以上、秦から前漢にいたるまでの軒丸瓦を、主として製作技法の点から概観してきた。これらがどのような年代におかれるのか、その点を検討してみよう。

第一に、櫟陽城出土の「i 瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」であるが、秦の櫟陽時代（前383～350年）まで遡るものはほとんどない。また、秦の咸陽時代（前350～221年）<sup>(11)</sup>の軒丸瓦と文様を比較しても、その前半代まで遡るものはなく、戦国末の秦から統一時代の秦（前221～206年）までのものと考えてよいだろう。

未央宮5号建築（西南角楼）では、葵文瓦当、変形葵文瓦当、芭蕉葉文瓦当、渦文瓦当Ⅱ型1式・Ⅲ型3式、雲文瓦当Ⅱ型1式・Ⅱ型2式などがそれぞれ1～2点出土しているが、これは未央宮以前の秦代瓦当が混入したのものと考えてよいだろう。

模骨の使用

第二に、櫟陽城出土の「ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦（馬蹄状圧痕あり）」であるが、漢王の櫟陽宮時代（前205～200年）のものと考えて間違いあるまい。この時点では、確実に模骨を使用した丸瓦（布目瓦）の製作がおこなわれている。

第三に、未央宮出土の「iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦」だが、これらは未央宮造営当初（前200～198年）の瓦であると思う。というのは、未央宮出土軒丸瓦のうち、30点以上出土しているのは、雲文Ⅲ型1式、雲文Ⅲ型2式、雲文Ⅲ型11式、雲文Ⅳ型2式、雲文Ⅳ型4式、「長楽未央」、「長生無極」の7種であるが、後五者は文様や製作技法からみて、武帝から宣帝の時代に製作されたことが確実であり、iiiの技法を示す雲文Ⅲ型1式・雲文Ⅲ型2式しか、未央宮造営当初に当てはめられるものはないからである。さらに、漢の高祖の長陵出土として写真が掲載されたものが、これと同じ文様であり、この雲文Ⅲ型1式・雲文Ⅲ型2式を未央宮造営当初のものとしてよい。<sup>(12)</sup>

以上のように考えると、漢の高祖の時代には、iiの模骨を使用した丸瓦を用いる軒丸瓦と、iii

の模骨を使用しない丸瓦を用いる軒丸瓦とが併存することになる。しかし、すでに述べたように、両者とも、瓦当部粘土と丸瓦粘土円筒全形とを接合して、円筒不要部を切り取る点では共通しているのであり、iiiの模骨を使用しない軒丸瓦も、前代のiの模骨を使用しない軒丸瓦とは製作工程が異なっている。

模骨使用・  
不使用併存

第四に、未央宮3号建築出土の「ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦(馬蹄状圧痕なし)」であるが、これと類似した文様構成の瓦が、紀元前139年から翌年にかけて造営され始めた武帝茂陵の瓦<sup>(13)</sup>にみられるので、武帝初期にはまだ円筒不要部切り取り式軒丸瓦が製作されていたと考えておきたい。

第五に、桂宮出土の瓦であるが、9割以上が「iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦」であり、武帝治世のうちのある段階(明光宮が造営された前101年頃か)では、丸瓦を半截したものを瓦当部粘土に接合する方式に変化していると考えたい。

半截丸瓦の  
接合へ変化

なお、桂宮出土の瓦と、未央宮5号建築出土の「iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦」を比べると、ともに瓦当裏面下半に円周状の凹みを作る点では共通するが、未央宮例の方が、先行する円筒不要部切り取り式軒丸瓦の瓦当裏面の突帯の形状に類似しており、未央宮例の方がやや先行するようと思われる。

第六に、杜陵園出土の軒丸瓦は、紀元前65年頃に位置づけられるものであるが、瓦当裏面は平坦なものが圧倒的に多いことに注目したい。すなわち、半截丸瓦と瓦当部粘土を接合する軒丸瓦のうち、瓦当裏面に円周状の凹みを作るものは、武帝後半から昭帝を経て宣帝のごく初めまでの年代におかれるものであろう。

- 
- (1) 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号、1984年。
  - (2) 谷豊信「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法」『MUSEUM』No. 519、1994年。
  - (3) 中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊「秦漢櫟陽城遺址の勘探和試掘」『考古学報』1985年第3期。
  - (4) 陝西省文物管理委员会「秦都櫟陽遺址初歩勘探記」『文物』1966年第1期。
  - (5) 関野雄「中国歴代の瓦当範」『古文化談叢』第26集、1991年。
  - (6) 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」前掲註1。
  - (7) 岸本直文「中国における秦漢代の瓦調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年。
  - (8) 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」前掲註1。
  - (9) 中国社会科学院考古研究所『漢長安城未央宮』中国大百科全書出版社、1996年。
  - (10) 中国社会科学院考古研究所『漢杜陵園遺址』科学出版社、1993年。
  - (11) 秦都咸陽考古工作站 馬建熙「秦都咸陽瓦当」『文物』1976年第11期。
  - (12) 石興邦・馬建熙・孫德潤「長陵建制及其有關問題—漢劉邦長陵勘察記存」『考古与文物』1984年第2期。
  - (13) 王志傑・朱捷元「漢茂陵及其陪葬塚附近新發見的重要遺物」『文物』1976年第7期。

#### 挿図出典(原図を一部改変)

- 第15図 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」前掲註1、第8図。  
 第16図 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」前掲註1、第10図。  
 第19図 岸本直文「中国における秦漢代の瓦調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』1994年、77頁挿図。  
 第20図 谷豊信「西晋以前の中国の造瓦技法について」前掲註1、第13図。

追 記

上記の文章は2000年調査（山崎：11月20～25日、千田：11月11日～25日）直後の12月に記したものである。2010年12月の現時点からみると、軒丸瓦接合法の全体的な姿が描けていないので、現時点での考えを表として記しておきたい（第2表）。

第2表 軒丸瓦接合法

A 接合式	I 無加工（瓦当部粘土・丸瓦部とも無加工で接合） II 瓦当裏面に刻み III 丸瓦を加工 a：刻みのみ入れる                      あ：丸瓦凸面側に刻み b：1回へラケズリ                      い：丸瓦端面に刻み c：片柄状2回へラケズリ              う：丸瓦凹面側に刻み d：凹凸両面2回へラケズリ e：端面V字数ヵ所切り取り IV 瓦当裏面・丸瓦両方を加工
B 一本作り式	I 泥条盤築一本作り (1) 瓦当裏面下半条切取式 a：粘土紐積上式 (瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切取式) b：粘土円筒置式 (模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切取式) (2) 瓦当裏面下半刃物切取式 a：粘土紐積上式 II 円筒型木巻きつけ一本作り (1) 瓦当裏面下半条切取式 a：粘土紐積上式 b：粘土円筒置式 (模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切取式) (2) 瓦当裏面下半刃物切取式 あ：最終段階丸瓦切取式 い：初期丸瓦切取、瓦当粘土嵌込式 III 横置成形型一本作り

## 4 桂宮出土軒丸瓦の製作技法

清野孝之

### A はじめに

2001年6月から7月にかけて筆者は、中国社会科学院考古研究所西安研究室で、1996年から2000年までの日中共同発掘により出土した、漢長安城桂宮出土の軒丸瓦521点などを調査する機会を得た。本稿は、その内容をおもに製作技法の面から解説するものである。

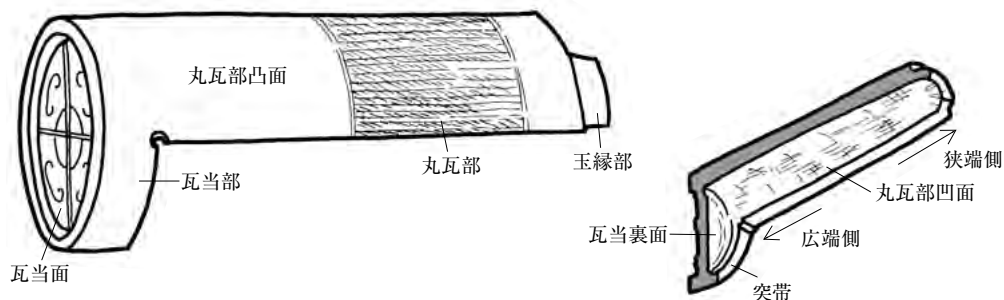
『漢長安城桂宮』（中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所2007、以下『桂宮報告』と表記）では、各調査区から出土した軒丸瓦について、文様ごとに分類し、それぞれの製作技法を示す痕跡について触れているが、本稿では、まず桂宮出土軒丸瓦に用いられた製作技法を、とくに瓦当裏面に残された製作技法の痕跡に注目して解説し、次に、おのこの技法で製作された軒丸瓦はどのような文様であるか説明する、という方法をとりたい。文様の分類方法は『桂宮報告』に従うこととする。本稿で用いる軒丸瓦の各部名称は第32図のとおりである。なお、軒丸瓦の製作途中段階における各部の名称については、第35図を参照いただきたい。

記述の順序

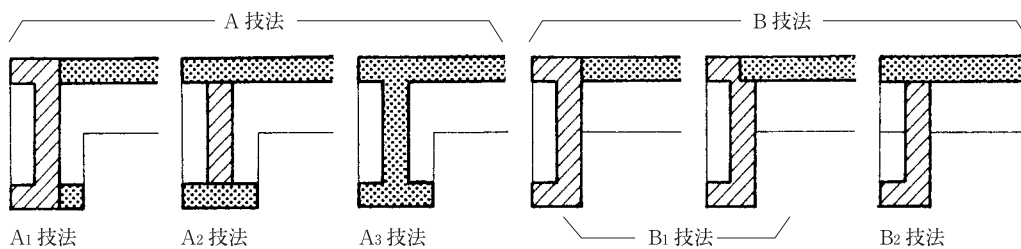
本稿の目的とするところは、桂宮出土軒丸瓦の特徴を製作技法から明らかにすることであるが、前漢代のまとまった良好な出土資料を対象に、製作技法と文様の対応関係を示すことによって、今後、前漢代の軒丸瓦の編年観を確立していくための基礎的な検討材料となることを期待している。

### B 丸瓦円筒の製作技法および瓦当部との接合技法

軒丸瓦は、瓦当部と丸瓦円筒<sup>はんせつ</sup>を半截した丸瓦部で構成されている。前漢代の軒丸瓦の製作技法については古くから研究がある（中国科学院考古研究所1959、駒井1964など）。その後、個別の発掘調査報告書や瓦当文様の変遷をアツかった論文の中で、製作技法についても分析がなされている



第32図 軒丸瓦の各部名称



第33図 谷分類による各技法模式図

が(劉1994・2000など)、製作技法を中心に扱った研究としては、谷豊信、岸本直文、劉振東・張建鋒、山崎信二によるものがある。これらは、おもに丸瓦円筒の製作技法、瓦当部粘土と丸瓦円筒ないし半截された丸瓦部の接合技法に着目し、製作技法を復元・分類している。

**谷分類** 谷は、西晋以前の中国における丸・平瓦、軒丸瓦の製作技法について幅広く論じた(谷1984・1994)。その中で、漢代以前の軒丸瓦については、いくつかの製作技法があり、それが時代および地域により異なることを指摘する。谷による軒丸瓦製作技法の分類は、「瓦当となる粘土の円板と分割する以前の丸瓦円筒を接合したのち円筒の不要部分を取り除く方法」(A技法)と、「瓦当円板にすでに分割した丸瓦を接合する方法」(B技法)とに大別し、瓦当部粘土と丸瓦円筒の接合手法、瓦当筈と外縁の関係などによって、A1、A2、A3、B1、B2に細分する、というものである(以下、「谷分類」という)(第33図)。

この細分に従うと、桂宮出土軒丸瓦のうち、瓦当部粘土と丸瓦円筒の接合手法、瓦当筈と外縁の関係が判明するもののほとんどが、瓦当裏面に丸瓦円筒を接合する、つまり外縁全体を瓦当部粘土で形成するA1・B1技法を用いており、A2・A3・B2技法を用いたと思われるものはわずかである。そのため、以下では、この細分についてはとくに説明しないこととする。

**岸本の復元** 岸本は、中国社会科学院考古研究所西安研究室が所蔵する秦および前漢代の軒丸瓦を調査し、その製作技法について述べた(岸本1994)。とくに注目されるのは、「分解式模骨」を使用した軒丸瓦製作技法の復元であるが、これについては後で検討したい。

**劉・張分類** 劉・張は、漢長安城および西安周辺の関連遺跡から出土した秦～前漢代の瓦磚類を対象として、製作技法と編年観を総合的に論じた(劉・張2007)。軒丸瓦の製作技法については、丸瓦円筒製作技法を、模骨を使用しない技法(A型)と使用する技法(B・C型)に大別したうえで、瓦当部粘土との接合技法(I～V型接合、第39図参照)と切り離し技法(1・2型切り離し法)により分類し、丸瓦円筒の調整、玉縁部の調整や長さなどから細分を行っている(I～IV式)。

**山崎分類** 山崎は、漢長安城および西安周辺の関連遺跡における秦から前漢までの軒丸瓦を観察し、製作技法を以下の四つに分類した。(山崎2011、以下「山崎分類」という)。なお、それぞれの技法の特徴と、その技法を用いた際にどのような痕跡が残るのかについては、筆者が補足している。

#### i 瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

模骨を使用せずに、瓦当部粘土上で粘土紐を積み上げて丸瓦円筒を製作し、丸瓦円筒のうち不要な半分(以下、「円筒不要部」と表記)を切り取る方法。特徴は、丸瓦円筒の凸面に叩き調整を施す際に、凹面側に用いられる当て具の痕跡(中国で「麻点紋」と呼ばれるものなど。第34図2)が残ること、瓦当裏面下半には周堤状の突帯(円筒不要部の広端側の先端が切

り取られずに瓦当裏面に残ったもの。第32図参照)があり、その上面に糸切り痕ないしヘラ切り痕を残すこと、瓦当裏面の丸瓦部との接合部に丁寧な指ナデや指頭による押圧の痕跡を残すこと、の3点である。

#### ii 模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

模骨を使って製作した丸瓦円筒を、瓦当部粘土上に接合し、円筒不要部を切り取る方法。特徴は、丸瓦部凹面に、模骨にかぶせた布の圧痕である布目が残ること(第34図1)、瓦当裏面下半に突帯があり、その上面に糸切り痕ないしヘラ切り痕を残すこと、の2点である。

#### iii 模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦

模骨を使用せずに製作した丸瓦円筒を、瓦当部粘土上に接合し、円筒不要部を切り取る方法。特徴は、丸瓦部凹面の広端側先端付近まで当て具痕が残ること、瓦当裏面下半に突帯があり、その上面に糸切り痕ないしヘラ切り痕を残すこと、の2点である。

#### iv 模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦

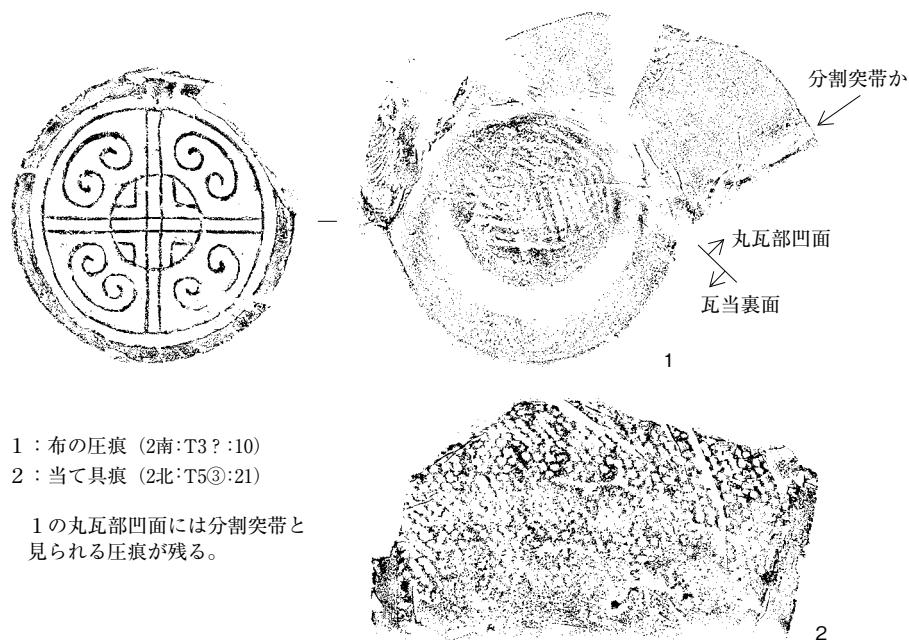
模骨を使って製作した丸瓦円筒を半截した後、瓦当部粘土と接合する方法。特徴は、丸瓦部凹面に布目が残ること、瓦当裏面下半に突帯がないこと、の2点である。

山崎分類の i、ii、iii は、谷の A 技法を、丸瓦円筒の製作技法によって細分したもので、iv は谷の B 技法に該当する。山崎分類は、谷分類をさらに詳細にしたものといえる。

山崎・谷分類の対応

また、劉・張による分類は、谷分類や山崎分類、岸本による「分解式模骨」を用いた製作技法をふまえて検討し、細分化したものといえる。しかし、後述のとおり、この「分解式模骨」については疑問点があるので、劉・張の分類については必要に応じて触れることとしたい。

さて、山崎分類は、西安における秦から前漢までの軒丸瓦を、桂宮出土資料を含めて対象としており、筆者の桂宮出土軒丸瓦の観察でも妥当なものであることを確認した。ただし、現実的に



第34図 軒丸瓦の丸瓦部凹面に残る製作技法痕跡 1:4

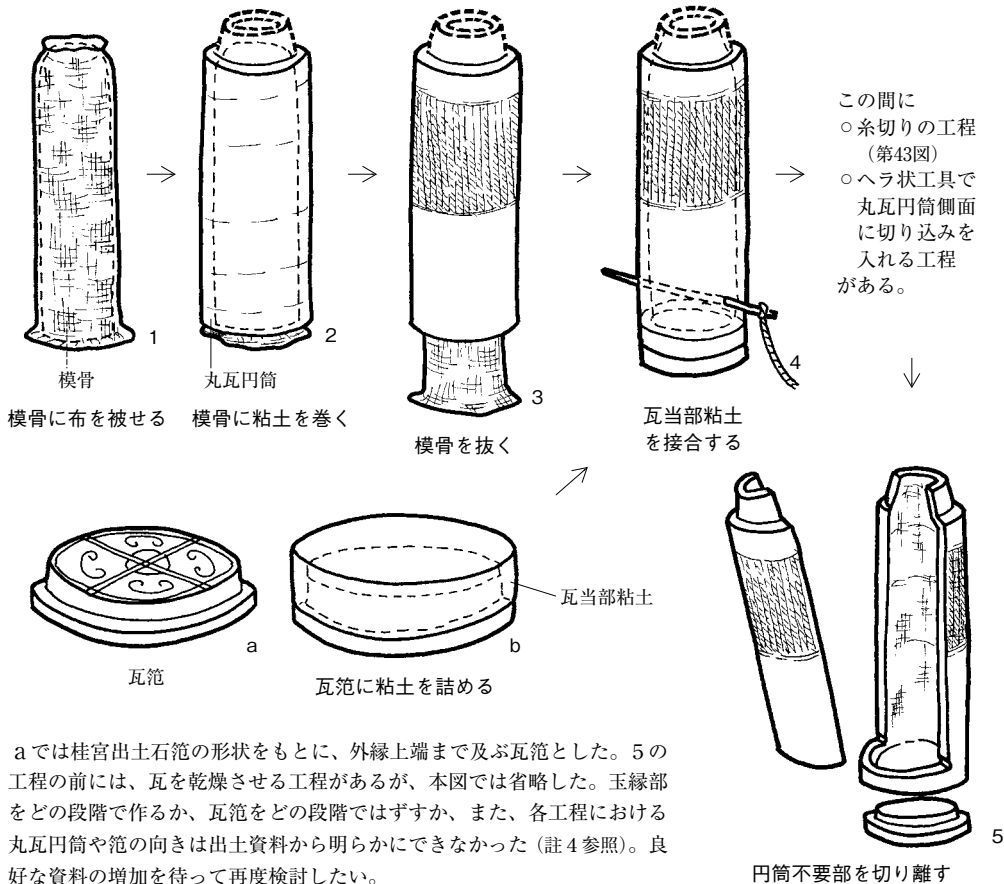


は、i と iii の区別はきわめて困難である。それは、iii の場合でも、丸瓦円筒を粘土紐積み上げによって製作し、瓦当部粘土との接合部に指ナデや指頭による押圧などを施して、丸瓦円筒の広端側の先端付近が観察できない場合、i との見分けがほぼ不可能であるためである。したがって、i と iii の分類は、瓦当裏面の丸瓦部との接合部分が詳細に観察可能なものに限定されることとなり、実際、筆者の観察では、確実に見分けがつくものは少なかった。そこで、本稿では、i と iii はとくに区分せずに扱うこととしたい。

製作技法による2大別

桂宮出土軒丸瓦は、瓦当部粘土と丸瓦円筒を接合してから丸瓦円筒を半截するもの（谷分類のA技法、山崎分類のi、ii、iii）と、すでに半截した丸瓦を瓦当部粘土に接合するもの（谷分類のB技法、山崎分類のiv）に、製作技法上、大きく二分することができる。また、これに対応して、さまざまな技法の違いが認められ、谷と山崎による分類は、桂宮出土軒丸瓦の分析に際しても有効な部分が多い。以下、前者を「円筒不要部切り取り式」、後者を、「半截丸瓦接合式」と呼び分け、必要に応じて、「円筒不要部切り取り式」のうち、模骨を用いないもの（山崎分類のi、iii。以下、「模骨不使用」と表記した場合、瓦当裏面上に粘土紐を積み上げて丸瓦円筒を製作したものを含む）と、模骨を用いるもの（山崎分類のii）に分けて説明する。

なお、桂宮出土軒丸瓦では、模骨を用いる円筒不要部切り取り式と、模骨を用いる半截丸瓦接合式の数が最も多い。後者は、日本でも古代から広く行われている一般的な軒丸瓦の製作技法と基本的に共通するが、前者については、第35図のように製作されたと考えられる<sup>(2)</sup>。



第35図 模骨を用いた円筒不要部切り取り式の製作技法の復元

## C 瓦当裏面と突帯上に残る製作技法の痕跡

### i 円筒不要部切り取り式の製作技法の痕跡

桂宮出土軒丸瓦の瓦当裏面および突帯上には、さまざまな製作技法を示す痕跡が認められる。まず、円筒不要部切り取り式による軒丸瓦について説明する。

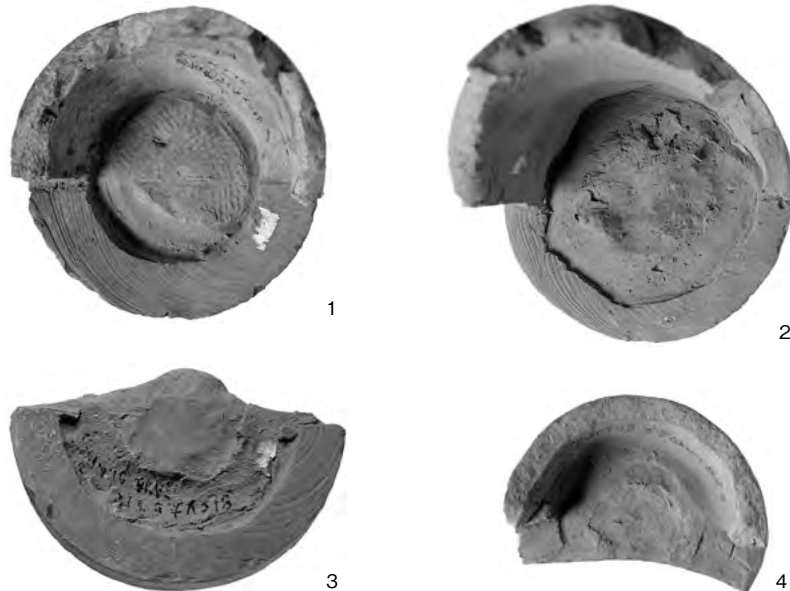
**瓦当裏面と接合部に残る基本的な製作技法の痕跡** この技法で製作された軒丸瓦の瓦当裏面には、粘土を筥に押しつけた際の指頭圧痕や指ナデの痕跡のほか、粗い縄目（ないしは格子刻み目）が見られるものがある。後者は、筥に粘土を詰めるとともに、瓦当裏面を平滑にすることを目的として施された叩き（または工具による押圧）調整と考えられる（第36図1）。

瓦当裏面の縄叩き

これ以外の製作技法の痕跡としては、瓦当裏面の丸瓦部との接合部に、指頭ないし先端に丸みをもつ工具（両者は判別がつかないため、以下、両者を併せて「指頭」と表記）によるナデつけ痕跡が、多くの資料で認められる。接合部を補強するための技法と考えられる。なかには、ナデつけが瓦当部と丸瓦部の接合部だけでなく、突帯との接合部まで及んで一周し、円形を描くものもある（第36図1～4）。

ナデつけ

このほか、瓦当裏面中央部付近に、指頭によるナデつけ痕跡が、直径3cm程度の小さい円を描くように残るものが少数存在する（第36図4）。瓦当部粘土の中央部を筥に押しつける工夫とも思われるが、こうしたナデつけが施されないものが大多数であること、このナデつけ痕跡があるものとなないもの間に、とくに違いが見出せなかったことから、目的は不明といわざるをえない。



1：縄叩き 2：指頭圧痕 3：指ナデ 4：中央部に小さい円を描くナデつけ  
いずれも接合部に円形を描くナデつけが施される。

桂宮以外から出土した瓦を技法の参考資料として掲載（以下、「参考資料」と呼ぶ）。

1：参考資料（太上皇陵170） 2：参考資料（櫛陽城175） 3：参考資料（太上皇陵130）  
4：参考資料（櫛陽城167）

第36図 円筒不要部切り取り式の瓦当裏面に残る製作技法痕跡 1：4

突帯だけでなく瓦当裏面にも、棒の貫通痕跡や糸切り痕跡を残すものが存在するが、それらを消す調整はほとんど認められなかった。基本的に、円筒不要部を切り取った後は、瓦当裏面の全体に及ぶような調整を施さないことが多かったものとみられる。

**瓦当裏面の馬蹄状圧痕と布目** 岸本は、秦・前漢の軒丸瓦の瓦当裏面に、「3ないし4面から構成されていて、段差をともない、面の境にバリ状のはみ出しがある」特殊な工具の圧痕を残すものがあることを指摘している(岸本1994)。谷が指摘する洛陽周辺出土軒丸瓦の裏面に見られる「特殊な突出」も、同様なものであった可能性がある(谷1984)。山崎は、この圧痕を、形状から「馬蹄状圧痕」と呼んでおり(山崎2011)、筆者の観察とも一致する部分が多いので、本稿でも、これを馬蹄状圧痕と呼ぶことにしたい(第37図)。

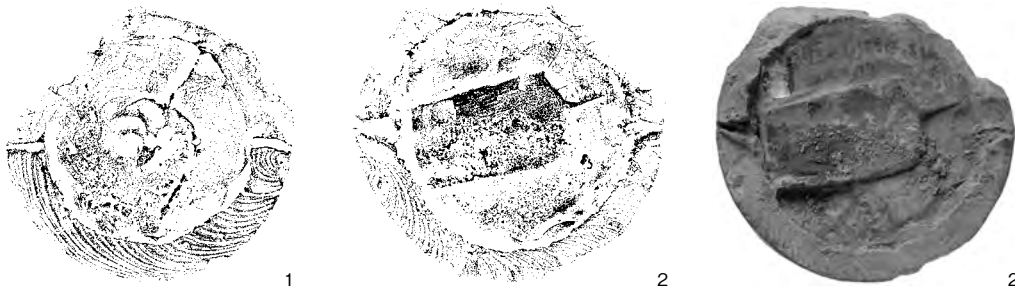
馬蹄状圧痕

分解式模骨の想定

馬蹄状圧痕が生じる理由について、岸本は、複数の部材からなる「分解式模骨」の使用によるものと想定した。岸本が推定する軒丸瓦製作技法は、瓦当裏面に布をかぶせた分解式模骨をのせ、瓦当裏面上で丸瓦円筒を製作し、その後に模骨を分解して丸瓦円筒から引き抜き、円筒不要部を切り取る、というものである(第38図)。劉・張は、この圧痕を二つないし三つの部材からなる模骨を使用した痕跡と考えており、復元模式図を見るかぎり、基本的に、岸本が想定した分解式模骨を使用した技法と同様と考えられる(劉・張によるⅢ・Ⅳ型接合。第39図3・4)(劉・張2007および本書所収論文)。

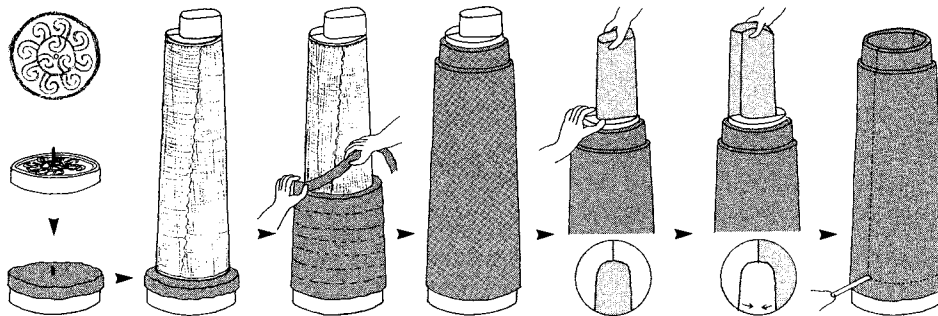
山崎による  
懐疑的見解

一方、馬蹄状圧痕を残す軒丸瓦については、山崎が詳細に検討し、分解式模骨の使用に懐疑的な見解を述べている。山崎は、馬蹄状圧痕には「微妙な凹凸」が見られることを指摘しており、乾燥してやや硬くなった粘土か、板のような工具を押しつけた痕跡と想定する。



1は瓦当裏面中央に小円孔がある。 1：参考資料(標陽城137) 2：参考資料(標陽城138)

第37図 瓦当裏面に残る馬蹄状圧痕 1:4



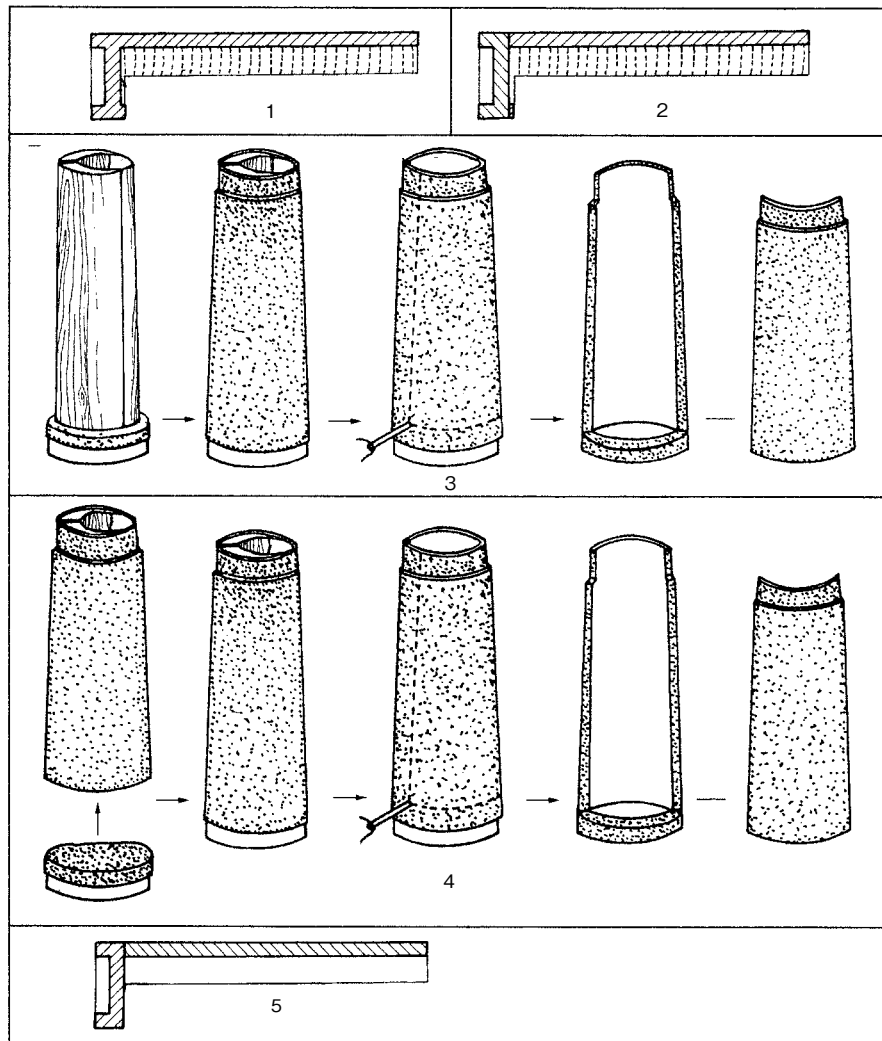
第38図 岸本による分解式模骨を使用した軒丸瓦製作技法の復元

筆者も、桂宮出土軒丸瓦などに見られる馬蹄状圧痕を観察したところ、山崎の見解が妥当なものであることを確認した。ただし、馬蹄状圧痕を残す工程の機能や目的について、山崎は不明としつつも、一案として、瓦当範と瓦当部粘土を離す際の範離れの工夫であった可能性をあげるが、これについては態度を保留しておきたい。

さて、筆者は分解式模骨の存在をとくに否定するわけではないが、観察した資料からは、こうした特殊な形状をもつ模骨の使用を想定しなければならないほどの積極的根拠が見あたらない、という印象をもった。分解式模骨について、筆者が感じた疑問点を以下に記す。

複数の部材を組み合わせた分解式模骨を使用した場合、部材間には隙間や段差が生じる。瓦当裏面に残る馬蹄状圧痕は、こうした隙間や段差のうち、模骨の小口面に生じたものによると解す

分解式模骨  
の疑問点



- 1 : I型接合 (模骨不使用・円筒不要部切り取り式、瓦当部粘土上で丸瓦円筒製作)
- 2 : II型接合 (模骨不使用・円筒不要部切り取り式、丸瓦円筒を別に製作して接合)
- 3 : III型接合 (模骨使用・円筒不要部切り取り式、瓦当部粘土上で丸瓦円筒製作)
- 4 : IV型接合 (模骨使用・円筒不要部切り取り式、丸瓦円筒を別に製作して接合)
- 5 : V型接合 (模骨使用・半截丸瓦部接合式)

( )内は筆者が追加。3は(4もか)分解式模骨または薄い木を綴じて接合した模骨を用いたものと復元されている。

第39図 劉・張による軒丸瓦製作技法の復元

るのであろう。模骨の小口面に生じた隙間や段差は、当然ながら模骨の側面にも及び、小口面から連続して存在したはずである。しかし、馬蹄状圧痕を残す軒丸瓦の丸瓦部凹面に、そうした隙間や段差の圧痕を残すものはまったくなかった。模骨が布で覆われていたにせよ、瓦当裏面に数mm程度の幅をもつバリ状のはみ出しを生じさせるほどの隙間の痕跡を、丸瓦部凹面に残す資料が1点もない、ということがありうるであろうか。

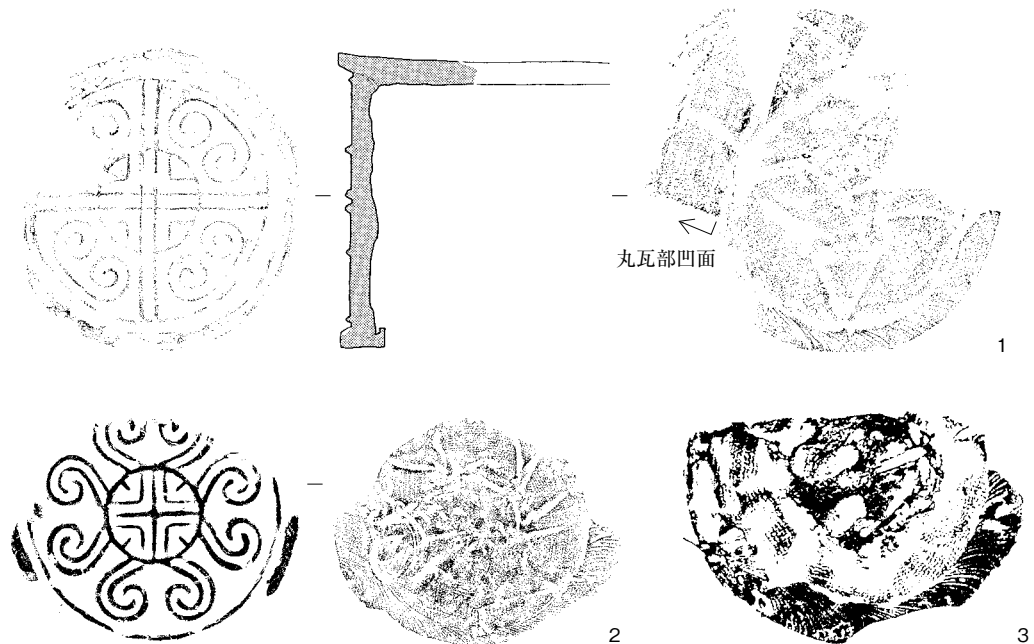
また、模骨を分解してはずす際に、丸瓦円筒内で模骨をずらしたり、引き抜いたりする工程が生じることになるが、それらの痕跡もまったく認められなかった。模骨が布に覆われていたとしても、細い丸瓦円筒内でそうした大きな動作をしたのであれば、丸瓦部凹面の布目にわずかな乱れが生じるなど、何らかの痕跡を残す資料があってよいのではないだろうか。

薄い木を連結した模骨

なお、劉・張は、瓦当裏面の丸瓦部との接合部付近に布目を残す資料について、「薄い木を綴じて連結した円筒形の模骨に、布をかぶせて使用したことによるもの(筆者意訳)」と推定する。これについても、瓦当裏面上に模骨をのせて丸瓦円筒を製作し、その後に模骨を抜く、という工程を復元していることから、基本的な製作技法は分解式模骨と同様と考えてよいだろう。筆者はこの資料を実見していないので、コメントは差し控えるが、馬蹄状圧痕を残す軒丸瓦と同様に、丸瓦部凹面に複数の部材間の隙間や段差を示す圧痕や、模骨を引き抜く工程を示す痕跡が認められるか否かがポイントとなる。

瓦当裏面の全体に布目

そのほか、桂宮出土軒丸瓦には、瓦当裏面のほぼ全体に布目を残すものがある(第40図1)。これは、劉・張が上記の技法によるものとした資料(第40図3)とやや異なり、瓦当裏面全体に一樣に布目が残る。布目は、瓦当裏面と丸瓦部凹面の双方にあり、両者の布目はよく似ているが、丸瓦部凹面の布目が広端側の先端まで深く入り込んで、瓦当裏面の布目とつながっているかどう



3は劉・張論文で薄い木を綴じて連結した模骨の使用を想定。中央部には布目のはっきりと残らない。  
1:3:T1③:5 2:参考資料(標陽城168) 3:参考資料(漢長安城城壁西南角楼出土、本書32頁第14図8)

第40図 瓦当裏面に残る布目 1:4

かは確認できなかった。瓦当裏面の布目は、一部しわになったり折り重なったりした部分もあり、若干平滑な部分では、馬蹄状圧痕に見られるような微妙な凹凸があるようにも見える。この瓦当裏面に布目を残す軒丸瓦については、模骨にかぶせた布が模骨の小口まで及び、瓦当裏面に布目が残された可能性のほかに、瓦当裏面に馬蹄状圧痕を残す軒丸瓦と同じく、瓦当裏面に布を敷き、微妙な凹凸をもつ工具を押しつけた可能性も想定しておきたい。

**突帯上の糸切り痕跡** 円筒不要部切り取り式による軒丸瓦は、円筒不要部を瓦当部粘土から切り離す際の糸切りないしヘラ切りやナデの痕跡を突帯上に残す、という特徴をもつ。このうち、糸切りの痕跡には、後で説明するように2種類あり、それぞれが異なる糸切り技法によって残されたものである。この糸切り技法は、軒丸瓦の製作技法を分類するうえできわめて有効な指標となりうる。

円筒不要部の切り取り方法については、谷によって以下のような工程が復元されている(谷1984)(以下のア～ウは筆者が分割)(第41図)。

谷による  
復元工程

ア 瓦当部粘土と丸瓦円筒を接合したのち、

イ 先端に糸をつけた径約3mmほどの棒を瓦当の背面よりやや後ろのところで円筒の外から反対側へ貫通させ、糸を下へ回して瓦当背面下半を切る。

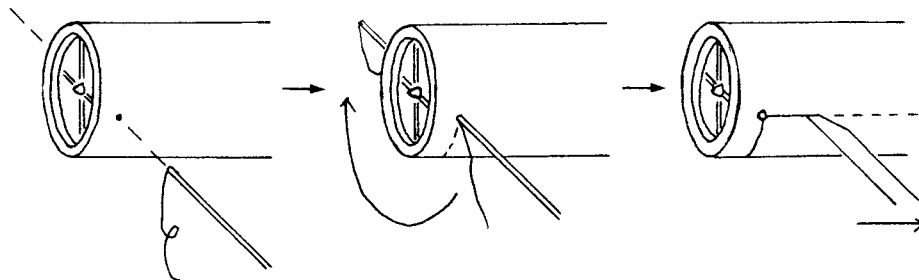
ウ そして棒と糸を抜き、棒が穿った孔の位置から刃物で分割<sup>せつせん</sup>線を入れる。乾燥させたのち打撃を加えて二分し、軒丸瓦と丸瓦各一個を得る。

さて、桂宮出土軒丸瓦の瓦当裏面の突帯上には、糸切りの工程により、無数に重なる円弧を描くような糸の擦痕が残るものが多い(第42図1・2)。その円弧の向きに着目すると、第42図1は突帯上に円弧の下半部を、同図2は円弧の上半部を描くように残っている。前者の糸切り痕は、谷氏が復元した上記の技法によって残されるものであるが、後者の糸切り痕は、上記の工程のうち、イの「糸を下に回して」と表現した部分がまったく異なっていると考えられる。以下、円筒不要部を棒(実際は先端が尖った針状の工具であろう)と糸を使って瓦当部粘土から切り離すイの工程を中心に、桂宮出土軒丸瓦から復元される2種類の糸切り技法を解説する。

糸切り技法  
は2種類

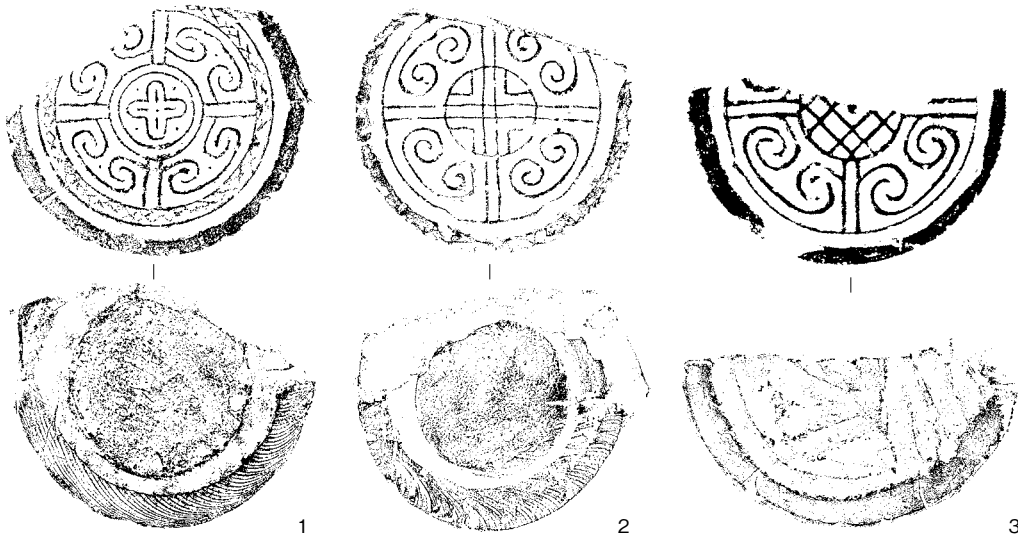
なお、この二つの糸切り技法は、筆者が2001年に中国社会科学院考古研究所西安研究室で桂宮出土軒丸瓦の調査を行っている際に考案し、劉振東・張建鋒とともに実験や議論を重ねながら整理したものであり、両名のいう1型・2型切り離し法と基本的に同じと考えてよい。

まず、第42図1に見られるような、突帯上に円弧の下半部を描くように糸切り痕跡が残る技法、すなわち谷が復元した技法は、以下のようなものと考えられる。劉・張の1型切り離し法と



丸瓦円筒を横向きに寝かせ、棒に糸を結んだ側を先に通すように復元されている。

第41図 谷分類のA技法による円筒不要部の切り離し技法の復元



1：半周糸切り技法 2：巻き付け糸切り技法 3：ヘラ切りないし糸切り後ナデ・削り  
1：参考資料（漢長安城城壁西南角楼出土） 2：2南：T5③：58 3：2南：T1③：1

第42図 突帯上に残る円筒不要部の切り離し痕跡 1：4

谷が考えた  
切り離し法

ほぼ同じ内容である（第43図1～6）。

- (1) 糸が結ばれた棒を丸瓦円筒の外側から反対側に貫通させる。谷の復元どおり、先端に糸をつけた径約3mm程度、断面円形の棒を瓦当裏面よりやや後ろ（狭端部寄り）のところで、円筒の外から反対側へ貫通させる（第43図1・2）。
- (2) 丸瓦円筒を貫通した棒と糸を固定し、まだ貫通していない糸を持って、糸で丸瓦円筒を切りながら、もう一方の貫通孔まで半周させ、瓦当裏面下半から円筒不要部を切り離す（第43図3～6）。
- (3) 棒が貫通した孔の位置から、丸瓦円筒に刃物で分割線を入れ、乾燥後に半截して2分割する（谷の復元工程のウ。第35図）。

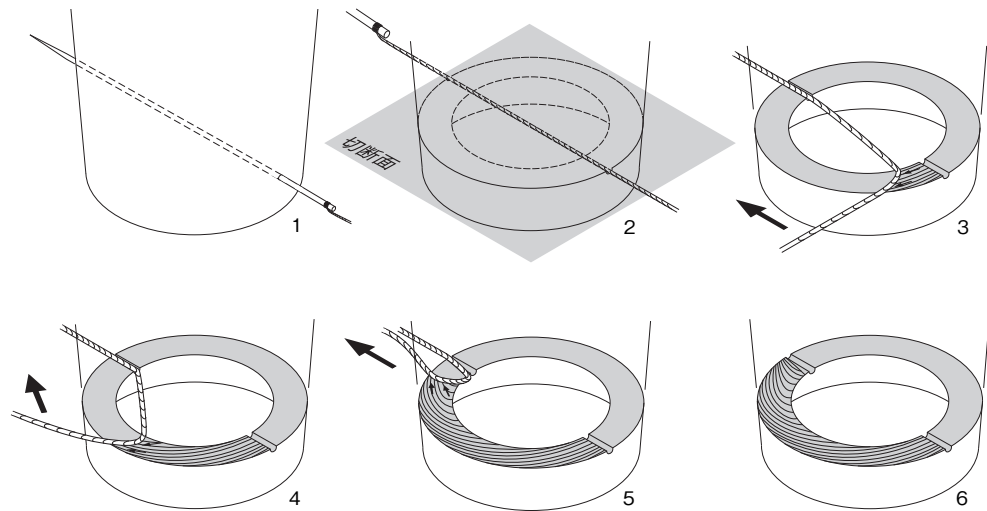
谷と異なる  
切り離し法

次に、突帯上に円弧の上半部を描くように糸切り痕跡が残る技法、すなわち谷が復元した技法とは異なる技法を説明する。劉・張の2型切り離し法とほぼ同じ内容である（第43図7～13）。

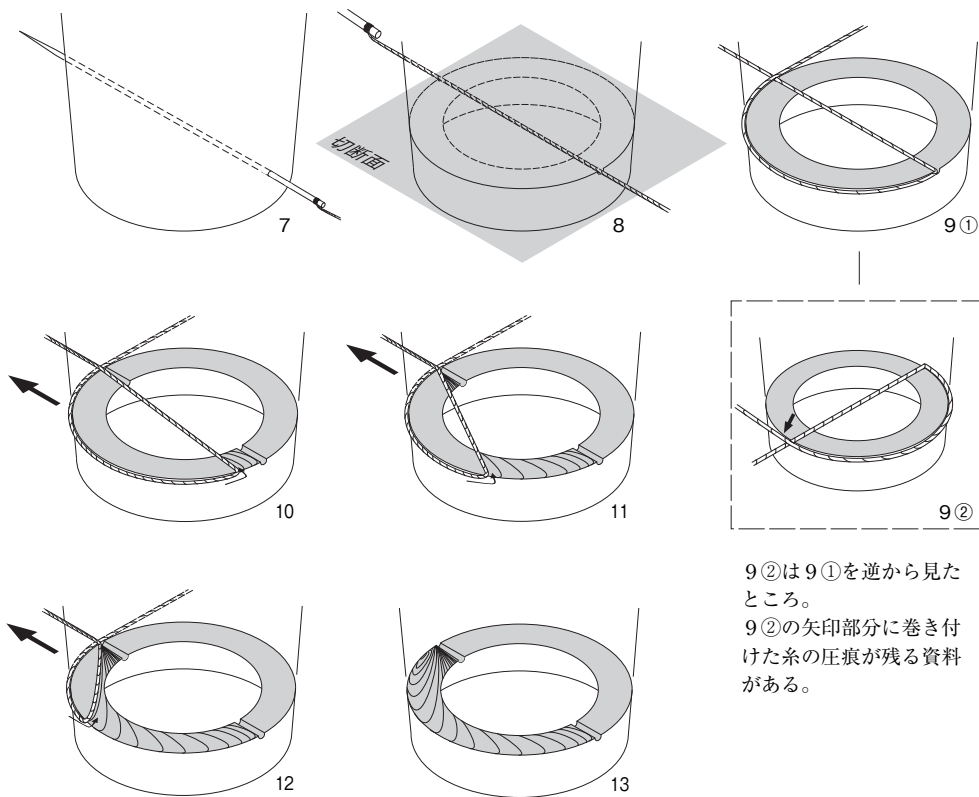
- (1) 糸が結ばれた棒を丸瓦円筒の外側から反対側に貫通させる。この工程については、谷が復元した上記の技法と同じである。棒についても、谷が復元した糸切り技法で使用したものと、径（3mm程度）、形状（断面円形）に違いはない（第43図7・8）。
- (2) 糸を、瓦当裏面に当たる位置よりやや狭端部寄りで、丸瓦円筒の外側に沿って、もう一方の貫通孔まで巻き付ける（第43図9①②）。糸は対面する二つの貫通孔を通り、丸瓦円筒をほぼ半周するように巻き付けられることになる。
- (3) 丸瓦円筒に巻き付けた糸を固定したまま、棒ないし棒と結ばれた糸を、棒を貫通させた方向に引っ張って、糸を引き抜く。すると、巻き付けた糸に沿って丸瓦円筒が切り取られ、対面する二つの貫通孔の間、すなわち瓦当裏面下半と円筒不要部を切り離すことができる（第43図10～13）。
- (4) 丸瓦円筒を半截する。この工程については、谷が復元した上記の技法と同じである（谷

の復元工程のウ。第35図)。

なお、桂宮出土軒丸瓦の中には、丸瓦部凸面の、棒貫通孔から数cmほどの部分(第43図9②の矢印部分)に糸の圧痕が残っている資料が数点ある。これは、丸瓦部凸面に糸を巻き付ける際に、貫通孔をわずかに越えた部分まで余分に糸を巻き付けたために、糸の圧痕が切り取られずに残ったものであり、糸を丸瓦円筒に巻き付ける工程を如実に示すものと考えてよい。



半周糸切り技法 (2~6 は切断面を模式的に示す)



9②は9①を逆から見たところ。  
9②の矢印部分に巻き付けた糸の圧痕が残る資料がある。

巻き付け糸切り技法 (8~13 は切断面を模式的に示す)

第43図 糸切りによる円筒不要部の切り離し技法の復元



以下、突帯上に残る糸切りの痕跡が、円弧の下半を描くもの（谷が復元した技法。劉・張の1型切り離し法）を「半周糸切り技法」、円弧の上半を描くもの（劉・張の2型切り離し法）を「巻き付け糸切り技法」と呼ぶことにしたい。<sup>(4)(5)</sup>

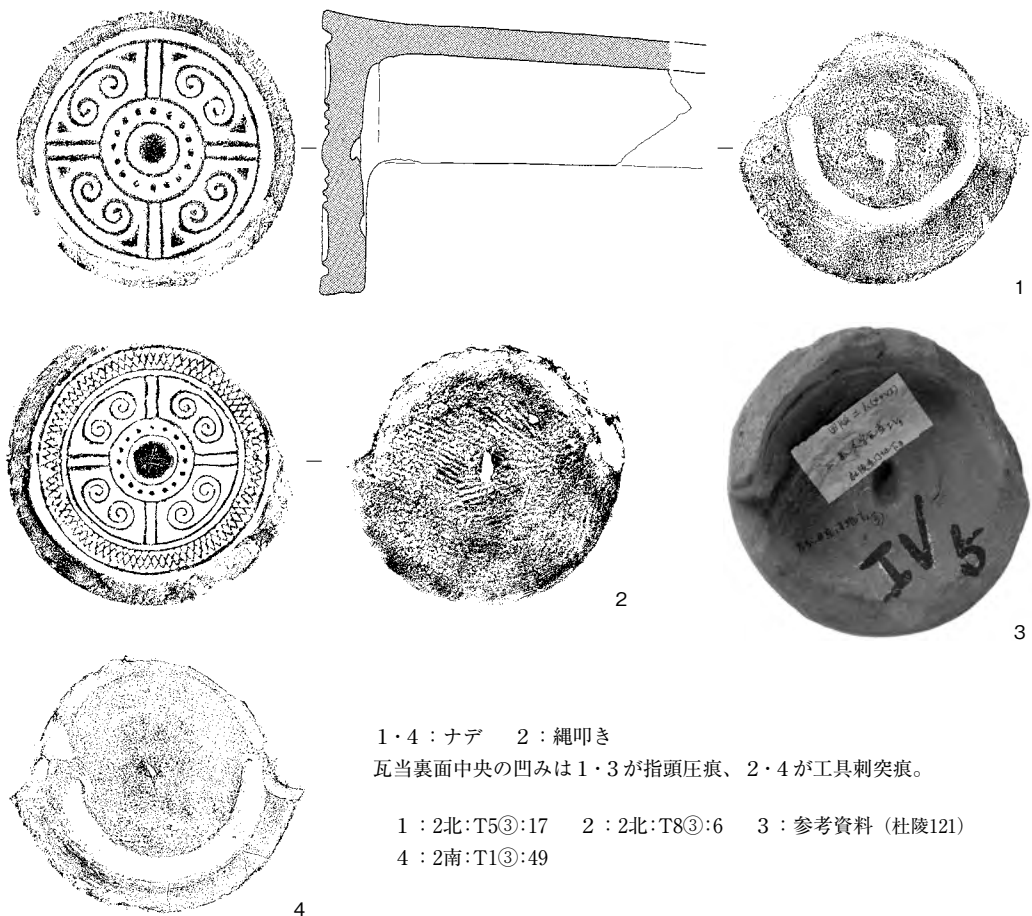
このほか、少数ながら、突帯上に糸切り痕跡をまったく残さないものも存在した（第42図3）。これらは、糸切り後、突帯上にナデや削りなどを施して、糸切り痕跡を完全に消したか、あるいは糸を用いずにヘラ状工具などで切ったか、のいずれかである。後者の場合、円筒不要部の側面だけでなく、瓦当部粘土側の端面の切り取りについても、ヘラ状工具を用いたことになる。

## ii 半截丸瓦接合式の製作技法の痕跡

次に、半截丸瓦接合式による軒丸瓦の瓦当裏面に残る製作技法の痕跡について説明する。

**瓦当裏面に残る基本的な製作技法の痕跡** ほとんどの軒丸瓦の瓦当裏面にはナデ調整の痕跡が認められるが、縄目が薄く残っているものも多い。縄目がまったく認められないものは、ナデ調整により縄目が完全に消された可能性が高い。瓦当裏面に縄叩きの後、ナデ調整を施す、という製作技法が多数を占めていたと考えられる（第44図）。

瓦当裏面の丸瓦部との接合部には、粘土を充填した後、指頭によってナデつけを施し、接合部を補強している。なかには、ナデつけが丸瓦部との接合部だけでなく、瓦当裏面下半にも施さ



1・4：ナデ 2：縄叩き

瓦当裏面中央の凹みは1・3が指頭圧痕、2・4が工具刺突痕。

1：2北：T5③：17 2：2北：T8③：6 3：参考資料（杜陵121）

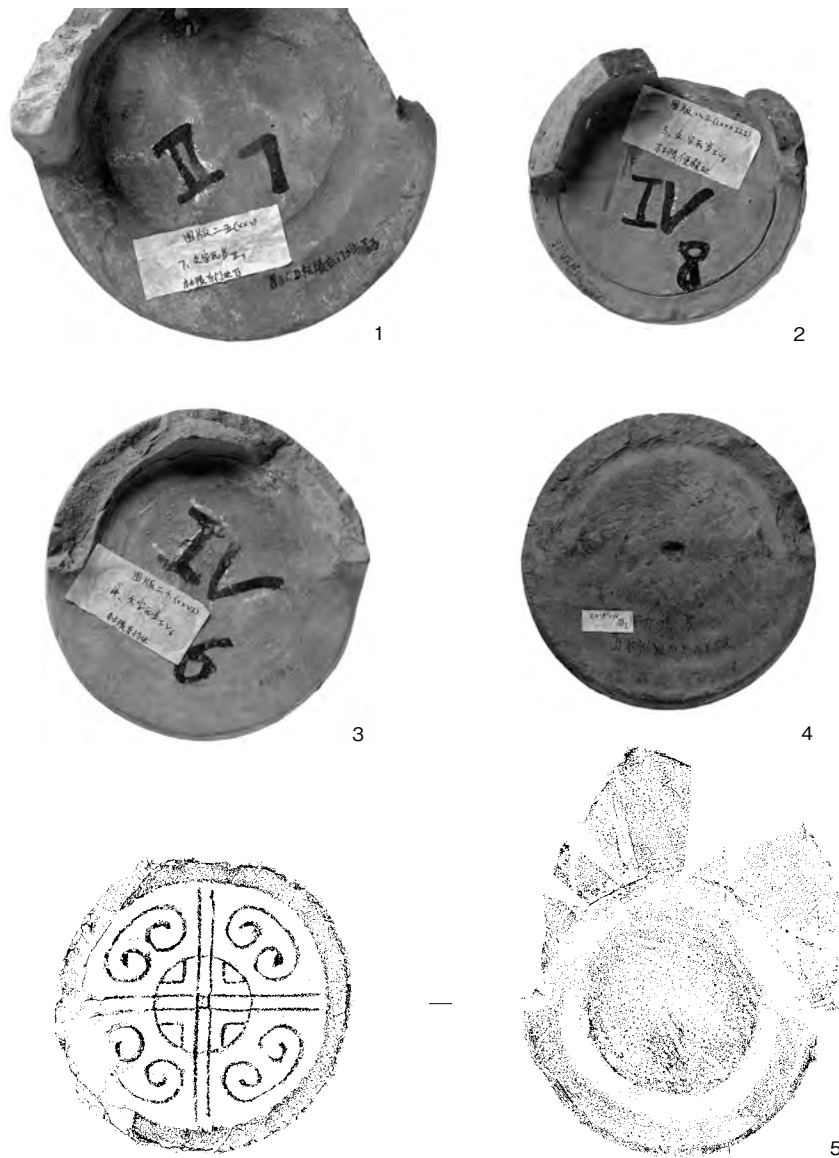
4：2南：T1③：49

第44図 半截丸瓦接合式の瓦当裏面に残る製作技法の痕跡 1：4

れ、後述する「擬突帯」を形づくるものがある。

このほか、特殊な製作技法痕跡としては、瓦当裏面中央部に、指頭の押圧による凹み（以下、「指頭圧痕」と表記。第44図1・3）、または細い棒状工具の刺突による孔が認められるもの（以下、「工具刺突痕」と表記。第44図2・4）がある（以下、指頭圧痕と工具刺突痕を区別する必要がない場合、「瓦当裏面中央の凹み」と表記）。こうした凹みが見られるのは、瓦当面の中央に大粒の珠文を置くものに限られるので（後述するように、桂宮出土資料以外で1点、例外がある。87頁参照）、この凹みは、本来、中央の珠文に当たる部分の筈に粘土を詰めるための工夫であろう。しかし、瓦当面中央に大粒の珠文を配する軒丸瓦でも、瓦当裏面にこうした凹みがないものもあり、必要不可欠な

瓦当裏面  
中央の凹み



1：指頭によるナデツケによる 2：線刻による 3：一見、線刻に見えるがヘラナデによる  
4：横ナデによる 5：指頭によるナデツケがほぼ一周する

- 1：参考資料（杜陵113） 2：参考資料（杜陵110） 3：参考資料（杜陵116）  
4：参考資料（櫛陽城135） 5：2南：T1②：64

第45図 瓦当裏面下半の擬突帯 1：4

工程ではなかったようである。

**瓦当裏面下半の擬突帯** 瓦当裏面下半の突帯とは、円筒不要部切り取り式において、切り残されて瓦当裏面に残存する円筒不要部の広端側の先端部である。半截丸瓦接合式の場合は、すでに半截された丸瓦を瓦当部粘土に接合するので、突帯は存在しない。

ルジメント しかしながら、谷によれば、「B技法によりながら、わざわざ瓦当背面を中凹みに」するものや、「瓦当背面下部の縁の近くに沈線で円弧を描いてA技法に見られる丸瓦円筒の痕跡を表現したもの」が存在しており、谷はこれらを突帯の「一種のルジメント（痕跡器官）」と表現している（谷1984）。

桂宮出土軒丸瓦にも、こうした痕跡の表現が認められるものが多く見られる。瓦当裏面下半の縁のやや内側に、指頭によるナデつけにより半円の凹みをつけるもの（第45図1）、あるいはヘラ状工具で半円の線刻を描いたり、ヘラナデを施すものである（第45図2・3）。線刻がある資料の中には、瓦当裏面下半にヘラナデを施したにもかかわらず、瓦当裏面にはヘラ状工具の先端の痕跡しか残らなかったために、線刻に見えていると思われるものがある（第45図3）。また、指頭によるナデつけの凹みが浅く、一見すると横ナデのように見えるものもある。したがって、こうした痕跡の表現は、線刻およびヘラナデ、指頭によるナデつけおよび横ナデ、の二者に分けて扱うのが妥当である。

擬 突 帯 これらが施される位置は瓦当裏面下半であり、円筒不要部切り取り式においては突帯の内側にあたる部分にほぼ該当することから、突帯そのもの、あるいは瓦当裏面の突帯との接合部に施されるナデつけを模倣し、突帯があるかのように見せかけた工夫と考えられる。谷の指摘どおり、型式学におけるルジメントとみてよく、本稿では、このように線刻や凹線で突帯を模した表現を「擬突帯」と呼ぶ。なかには、線刻が瓦当裏面下半でもかなり中央部に寄った位置に施されるものも見られる。擬突帯が本来の突帯の形を離れ、形骸化していった結果と考えられよう。

また、擬突帯を表現するナデつけの凹みが、瓦当裏面の丸瓦部との接合部に施されるナデつけと連続し、瓦当裏面上で円形をなすものがある。これは、円筒不要部切り取り式で認められる、接合部を円形に一周するナデつけを施した痕跡を意識したものかもしれない（第45図5）。

## D 製作技法と瓦当文様の対応関係

### i 瓦当文様の概要と山崎分類

ここまで、桂宮出土軒丸瓦の観察から導き出される製作技法の内容を説明してきた。次に、これらの技法が、どのような文様の軒丸瓦に、どのような組み合わせで用いられたのかを分析する。文様の分類は、『桂宮報告』の型式分類（以下「桂宮分類」と呼ぶ）に従う。

**瓦当文様の概要** 『桂宮報告』によれば、桂宮の発掘調査で出土した軒丸瓦は546点であるが、筆者が観察できた桂宮出土の軒丸瓦は521点（このほかに石筈1点）である。以下、筆者が観察したものに限って述べることにする。

521点中、筆者が桂宮分類により型式を判別できたものは519点であった。各型式の出土点数は第3～7表（93～97頁）のとおりである。このうち、とくに出土点数が多いのは、雲文Ⅲ型11式

(以下、「雲文」は省略)の176点(型式が判明する519点中の33.9%、以下同じ)、Ⅲ型17式の57点(11.0%)、Ⅳ型1A式の152点(29.3%)の3型式(第46図)で、これらを合わせると385点(74.2%)となり、全体の約3/4を占める。桂宮出土軒丸瓦の特徴は、この主要3型式の様相に大きく左右されることになる。なお、桂宮分類では、Ⅲ型11式を外区のX字形文の粗密により、A~Dの四つに細分しているが、このうちA~Cは筆者には判別できなかった。したがって、以下の記述では、Ⅲ型11式は一括して取り扱う。

**山崎分類による技法別出土点数** 瓦当裏面の突帯の有無、丸瓦部凹面の痕跡が判別でき、山崎分類による区別が可能なのは173点ある。それぞれの点数と文様は次のとおりである。

瓦当部粘土・粘土紐積み上げ、円筒不要部切り取り式軒丸瓦、ないし模骨不使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式は14点ある。文様は、Ⅳ型1A式が3点、Ⅲ型1・5式、Ⅳ型12式が各2点、変形葵文、葵文、動物文、Ⅲ型22式、Ⅳ型1B式が各1点である。

模骨使用丸瓦円筒・瓦当部粘土接合、円筒不要部切り取り式軒丸瓦は35点ある。文様は、Ⅳ型1A式が29点、Ⅳ型9式が1点、「與天無極」銘入り軒丸瓦(以下、「與天無極」と表記。瓦当面に文字が入る軒丸瓦は、同様に呼称する)が3点、「長生未央」、「千秋萬歳」が各1点である。

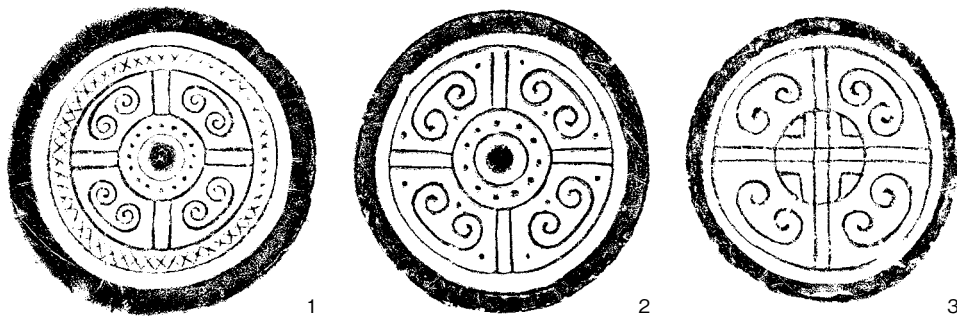
模骨使用丸瓦円筒半截・瓦当部粘土接合式軒丸瓦は124点ある。文様は、Ⅲ型11式が73点、Ⅳ型1A式が19点、Ⅲ型17式が12点、「長生無極」(「長生無□」、「長□無□」各1点を含む)が5点、Ⅳ型1C式が3点、Ⅲ型25・33式、Ⅳ型4式が2点、Ⅲ型16・26・32式、Ⅳ型10式、「長□未□」が各1点である。

山崎分類が適用できる資料のうち、円筒不要部切り取り式では7割あまり、半截丸瓦接合式ではすべてが模骨を使用している。模骨を使用しないものは、文様に一定の傾向がなく、ばらつきが目立つが、模骨を使用するものは特定の数型式にまとまる傾向が見られる。

## ii 円筒不要部切り取り式の瓦当文様

山崎分類は、丸瓦円筒の製作技法まで含めてまとめたものであるため、瓦当裏面と丸瓦部凹面がいずれも一定程度残っていないと判別できず、適用できるのは、残存状況が良好な1/3あまりに限定されてしまう。一方、本稿は、桂宮出土軒丸瓦の全体の傾向を知ることが目的としているので、極力、分析対象を増やすこととしたい。

そこで、瓦当裏面に残る製作技法に重点をおき、円筒不要部切り取り式、半截丸瓦接合式の分



1 : Ⅲ型11式 (2北:T5③:7)    2 : Ⅲ型16式 (2北:T5③:23)    3 : Ⅳ型1A式 (2北:T8③:1)

第46図 桂宮出土軒丸瓦の主要な3型式 1:4

類に限定して説明したい。円筒不要部切り取り式は127点、半截丸瓦接合式は339点あり、あわせて466点、全体の約9割を分析対象とすることができる。

以下、円筒不要部切り取り式については、突帯上に残る二つの糸切り技法と、糸切り痕跡を残さない技法に分類して説明する。また、瓦当裏面に馬蹄状圧痕や布目があるものは、別途、説明することとする。

**半周糸切り技法による資料** 半周糸切り技法を用いたものは14点ある。文様は、「與天無極」が3点（うち2点は□天□極）、Ⅲ型1式・葵文が各2点、Ⅲ型2・4・5・7・28式、Ⅳ型1A式、「右空」が各1点である。出土点数自体が少ないが、特定の型式に偏らず、ばらつきが目立つ。

丸瓦円筒の製作技法がわかる資料は、模骨不使用が3点（葵文、Ⅲ型1・5式が各1点）、模骨使用が1点（「與天無極」）である。

接合部の技法では、指頭によるナデつけがほぼ一周するものが5点認められる。瓦当裏面の調整は、ナデ、指ナデ、指頭による押圧が目立つが、格子刻み目を入れた工具による圧痕ないし縄叩き痕跡を残すものが3点あり、いずれも文様は「與天無極」である。瓦当裏面中央部に小さく円形にナデつけを施すものはなかった。

技法的には、多くの型式で特定の傾向が見出しにくい中、「與天無極」はわずか3点に過ぎないが、瓦当裏面に縄叩き痕ないし格子刻み工具の圧痕があり、糸切りはいずれも右から左に施すなど、製作技法の均一性が高い。なお、「與天無極」は全体で10点出土しており、いずれも円筒不要部切り取り式であるが、この製作技法で圧倒的多数を占める巻き付け糸切り技法が一つもなく、半周糸切り技法が3点、ヘラ切りないし突帯上削りが2点である。

桂宮造営用  
ではない

このように、半周糸切り技法による資料には、製作技法や文様に一定の傾向を見出しがたいことからみて、これらは桂宮造営のために新たに作られたのではなく、寄せ集められたか、桂宮以外の施設からの混入である可能性を指摘しておきたい。

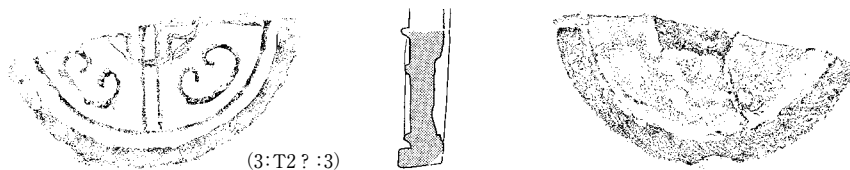
**巻き付け糸切り技法による資料** 巻き付け糸切り技法を用いたものは101点ある。文様は、Ⅳ型1A式が80点と、約8割を占める。このほかは、Ⅳ型12式が4点、Ⅳ型1B・9式、「千秋萬歳」が各3点、Ⅲ型22式とⅣ型5式が各2点、Ⅲ型1・5式、渦文、「長生未央」各1点である。

丸瓦円筒の製作技法が判別できる資料では、模骨使用のものが最も多く、31点ある。このうち、Ⅳ型1A式が28点を占め、Ⅳ型9式、「千秋萬歳」、「長樂未央」は各1点である。模骨不使用は8点、うち、Ⅳ型1A式が3点、Ⅳ型12式が2点、Ⅲ型1式、Ⅲ型22式、Ⅳ型1B式が各1点である。Ⅳ型1A式は模骨使用が圧倒的に多いが、わずかに模骨不使用のものも存在する。

接合部の  
ナデつけ

接合部に指頭によるナデつけがほぼ一周めぐるものが73点あり、うちⅣ型1A式が63点を占める。桂宮出土の巻き付け糸切り技法を用いる軒丸瓦では、かなり一般的な技法とみてよい。

瓦当裏面中央に小円形をなすナデつけが認められるのは25点ある。Ⅳ型1A式が24点、Ⅳ型9



第47図 瓦当裏面に馬蹄状圧痕が残るⅣ型1A式軒丸瓦 1:4

式が1点である。残存状況がよいものは、いずれも糸切りを右から左方向に行って、瓦当裏面にナデを施し、模骨を使用する、といった高い共通性が認められる。なお、これら25点中20点には、接合部に指頭による、ほぼ一周するナデつけが施されている。

**ヘラ切りないし削りによる資料** 突帯上にヘラ切りないし削りの痕跡を残すものは5点である。文様は、Ⅲ型2・5式、動物文が各1点、「與天無極」が2点である。

丸瓦円筒の製作技法については、動物文が模骨不使用で、「與天無極」はいずれも模骨使用である。「與天無極」は、接合部に指頭によるナデつけがほぼ一周めぐり、わずか2点であるが、半周糸切り技法において説明したように、共通性が高い。

**馬蹄状圧痕と布目を残す資料** 以上、突帯上に残る円筒不要部切り取り痕跡により、三つに分類して説明したが、最後に、この3分類とは別に、瓦当裏面に馬蹄状圧痕や布目を残す特殊な一群について説明する。

瓦当裏面に馬蹄状圧痕を残すものは3点ある。文様は、Ⅲ型4・5式、Ⅳ型1A式が各1点である。このうち、Ⅲ型5式は巻き付け糸切り技法、Ⅳ型1A式は半周糸切り技法を用いている(第47図)。Ⅳ型1A式は、桂宮全体で152点出土しているが、半周糸切り技法を用いるのはわずかに1点であり、その1点に馬蹄状圧痕が残ることになる。

馬蹄状圧痕

瓦当裏面に布目を残すものは5点ある。文様は、Ⅳ型1A式が4点、Ⅲ型2式が1点である。Ⅳ型1A式は、いずれも巻き付け糸切り技法を用いて、糸切りを右から左方向に施しており、瓦当裏面に布目を残すことを除けば、Ⅳ型1A式の最も一般的な技法を用いている。Ⅲ型2式は半周糸切り技法を用いる。

瓦当裏面の布目

### iii 半截丸瓦接合式の瓦当文様

半截丸瓦接合式については、擬突帯の有無で分類し、瓦当裏面中央に凹みがあるものは、別途、説明することとする。

**擬突帯がある資料** 半截丸瓦接合式で、瓦当裏面下半に、指頭によるナデつけや横ナデ、線刻、ヘラナデによって擬突帯を表現するものは191点ある。文様は、Ⅲ型11式が79点、Ⅳ型1A式が48点、Ⅲ型17式が31点、Ⅳ型1C式が12点、「長生無極」が5点(「長生無□」、「□生□極」各1点を含む)、Ⅳ型6式が4点、Ⅳ型4式が2点、Ⅲ型12・16・23・24式と「長□未□」が各1点のほか、型式不明が2点である。

このうち、指頭によるナデつけおよび横ナデにより擬突帯を表現するものは167点、線刻およびヘラナデにより擬突帯を表現するものは24点である。後者の軒丸瓦は、Ⅲ型11式が18点、Ⅲ型17式が5点、型式不明1点と、二つの型式に限定される。Ⅲ型11式で瓦当裏面中央部が判別できるものは、いずれも指頭の押圧による凹みが認められ、多様な技法が混在するように見えるⅢ型11式の中では、とくに均一性が高い一群をなす。

**擬突帯がない資料** 半截丸瓦接合式で、瓦当裏面下半に擬突帯がないものは51点ある。文様は、Ⅲ型11式が41点、Ⅲ型33式が3点、Ⅲ型32式と「長生無極」が各2点(うち1点は「長生無□」)、Ⅲ型27・29式とⅣ型1A式が各1点である。

Ⅲ型11式は擬突帯があるものが79点と多く、ないものはその約半分だが、一定程度存在することがわかる。点数が少ないため、単純には比較しにくいだが、「長生無極」も擬突帯があるものが

5点、ないものが2点と似た傾向を示す。これに対して、Ⅳ型1A式の半截丸瓦接合式は、1点を除き、すべてに擬突帯がある、という極端な偏りが見られる。

**裏面中央部の凹みの有無** 以上、瓦当裏面下半の擬突帯に着目して説明したが、擬突帯の有無が不明なものが97点存在している。そこで、次に視点を変えて、瓦当裏面中央部の凹みの有無に着目する。

瓦当裏面中央に凹みがあるものは140点ある。文様は、Ⅲ型11式が104点で、このうち擬突帯があるものが64点、ないものが14点、不明なものが26点である。Ⅲ型17式は21点で、擬突帯の有無が不明な9点を除き、すべてに擬突帯がある。「長生無極」は7点（うち1点は「長□無極」）、Ⅲ型25式が2点、Ⅲ型23・30式と「長生未央」が各1点のほか、型式不明が3点である。

一方、瓦当裏面中央に凹みがないものは95点ある。文様は、Ⅲ型11式が40点で、うち擬突帯があるものは7点、ないものは27点、不明なものが6点である。このほか、Ⅳ型1A式が21点、Ⅲ型17式が10点、「長生無極」が6点（「長生無□」2点、「長□無□」、「□生□極」各1点を含む）、Ⅲ型33式が3点、Ⅲ型32式、Ⅳ型1C・4・6式が各2点、Ⅲ型12・16・20・24・27式、Ⅳ型10式が各1点ある。「長生無極」6点のうち、擬突帯があるものは3点、ないものが2点である。Ⅲ型33式、Ⅲ型22式、Ⅲ型27式は、いずれも擬突帯がない。このほかについては、擬突帯の有無は不明である。

**半截丸瓦接合技法と瓦当文様の対応** 以上をまとめると、Ⅲ型11式と「長生無極」は、擬突帯の有無だけではなく、瓦当裏面中央の凹みの有無についても、両者が混在し、共通した特徴をもつことがわかる。Ⅲ型11式については、擬突帯があるものでは、瓦当裏面中央に凹みが認められるものが多く、擬突帯がないものでは、逆に瓦当裏面中央に凹みがないものが多い、という傾向が見られる。

一方、それ以外の型式では、擬突帯の有無と瓦当裏面中央の凹みの有無について、対応関係がかなり認められる。Ⅳ型1A式は、擬突帯がないものが1点存在するものの、49点中48点に擬突帯があり、いずれも瓦当裏面中央には凹みが認められない。Ⅳ型1C式も同様な傾向を示す。点数は少ないものの、そのほかのⅣ型も同様である。なお、Ⅳ型1C式は12点出土しているが、いずれも4号建築出土で、擬突帯があり、瓦当裏面中央に凹みがないというように、製作技法だけでなく、供給先にも顕著な特徴が見られる。

Ⅲ型17式については、一見、瓦当裏面中央の凹みの有無でばらつきがあるように見えるが、同型式に分類されているものの中には、内区の雲文の周囲に珠文（第46図2）や三角文（第44図1）を配するものと、これらを配さず雲文のみもの（第4表）が混じっている。これらは、それぞれ製作技法と出土地に一定の傾向が認められるので、やや冗長になるが、細かく説明する。

（1） 2号建築南院：23点出土。雲文周囲に珠文を二つ配するものは3点あり、うち判明する2点は瓦当裏面中央の凹みがない。珠文を三つ配するものは10点あるが、製作技法にまとまりを欠く。雲文のみものは10点あるが、ほかで出土したものを含め、このタイプで擬突帯を線刻で表現する4点のすべてがここから出土している。なお、雲文の周囲に三角文を配するものは出土していない。

（2） 2号建築北院：13点出土。珠文を三つ配するものは7点あり、すべて瓦当裏面中央に指頭圧痕がある。三角文を配するものは6点出土しており、いずれも擬突帯を指頭によるナ

Ⅲ型11式と  
「長生無極」

Ⅲ型17式

デツけで表現し、1点を除いて瓦当裏面中央に指頭圧痕がある。なお、雲文周囲に珠文を二つ配するもの、雲文のみのものは出土していない。

(3) 3号建築：7点出土。うち5点は雲文のみのものである。雲文周囲に珠文を三つ配するもの、三角文を配するものが各1点ある。珠文を二つ配するものは出土していない。

(4) 4号建築：12点出土。雲文のみのものが10点あり、すべて指頭によるナデツけで擬突帯を表現する。珠文を二つ配するものは2点出土しており、いずれも指頭によるナデツけで擬突帯を表現し、瓦当裏面中央に指頭圧痕がある。なお、雲文周囲に珠文を三つ配するもの、三角文を配するものは出土していない。

(5) 5号建築：2点出土。いずれも雲文周囲に珠文を二つ配するものである。

以上のように、円筒不要部切り取り式と半截丸瓦接合式の瓦当文様との対応関係を解説してきたが、特定の型式と技法に偏り、対応関係が見られるものと、そうでないものがあることがわかる。こうした対応関係が明瞭な資料は、文様の細部まで一致し、筆者の目から見ても同範の可能性が高いものが数多く存在する。一方、一定の傾向が認められず、ばらつきがあるものは、さらに文様による型式の細分が可能なものが多いと考えられる。とくにⅢ型11式にばらつきが多かったのは、桂宮分類における本型式の細分を筆者が判別しかねたことと大きく関係していると思われる。

明瞭な対応  
は同範品か

## E 軒丸瓦製作技法の年代観

ここまで、桂宮出土軒丸瓦に限定して、製作技法の特徴や、製作技法と文様の対応関係について分析してきた。次に、ここまでの分析に加え、桂宮以外の西安周辺の遺跡から出土している秦から前漢代の軒丸瓦も参考にしながら、各技法の年代観について検討したい。

### i 桂宮以外の軒丸瓦の様相

中国社会科学院考古研究所西安研究室で筆者は、桂宮以外に、陝西省西安市に所在する櫟陽<sup>やくよう</sup>城、太上皇陵、漢長安城長楽宮・未央宮<sup>びおう</sup>、杜陵といった秦から前漢代の遺跡で出土した軒丸瓦の一部を観察することができた。また、これらについては、過去に奈良文化財研究所の調査が行われ、詳細な分析が可能な資料もある。このほか、咸陽博物館で秦咸陽宮出土資料、陽陵博物館で前漢景帝の陽陵およびその近辺の出土資料を観察する機会を得た。

**櫟陽城(櫟陽宮)** 櫟陽には、戦国時代の秦櫟陽城と前漢の櫟陽宮が営まれた。秦の櫟陽城は、紀元前383年から350年まで、獻公と孝公によって秦の本拠地とされ、前漢の櫟陽宮は、紀元前205年から202年まで、高祖劉邦によって漢の都とされた。したがって、櫟陽城出土瓦には、戦国時代末前後と、前漢のごく初期のものが含まれると考えられる。

櫟陽城出土軒丸瓦のうち、ここで分析するのは37点である。桂宮分類のⅢ型11式1点のみが半截丸瓦接合式で、残り36点は円筒不要部切り取り式である。

ほとんどは  
円筒不要部  
切り取り式

円筒不要部切り取り式で、半周糸切り技法を用いる24点のうち、馬蹄状圧痕があるものは7点あり、この7点中で丸瓦円筒の製作技法がわかるものは、いずれも模骨使用である。半周糸切り技法で、馬蹄状圧痕がないものは16点あり、丸瓦円筒の製作技法がわかるものは、いずれも模骨



不使用である。また、巻き付け糸切り技法を用いるものは6点で、馬蹄状圧痕があるものが5点、布目があるものが1点ある。丸瓦円筒の製作技法がわかるのは1点しかなく、模骨を使用している。

**太上皇陵** 太上皇陵は、櫟陽城の北西に位置し、高祖劉邦の父で紀元前197年に崩じた太上皇が葬られている。したがって、ここから出土する瓦には、前漢のごく初期のものが含まれると考えられる。

円筒不要部  
切り取り式

太上皇陵出土軒丸瓦のうち、ここで分析するのは9点である。いずれも円筒不要部切り取り式で、半周糸切り技法を用いるものが5点、ヘラ切りないし糸切り後に突帯上を削ったものが1点、ほかに糸切りを行っているが詳細不明のもの2点がある。丸瓦円筒製作技法が判明するのは、半周糸切り技法を用いる1点のみで、文様は桂宮分類のⅢ型7式である。この資料は、瓦当裏面に馬蹄状圧痕があるが、丸瓦円筒の製作技法などの詳細は不明である。

**長楽宮** 長楽宮は漢長安城内の東南部にあり、秦始皇帝が造営した興楽宮の地に、高祖劉邦が紀元前202年に長楽宮を造営し、紀元前200年に完成したとされる。恵帝以降は皇太后の宮殿として使用され、その後も後漢初めの更始帝劉玄が長楽宮に入っている。したがって、長楽宮出土瓦には、統一秦から前漢のごく初期のものが含まれると考えられる。

円筒不要部  
切り取り式

長楽宮出土軒丸瓦のうち、ここで分析するのは、2001年の中国社会科学院考古研究所西安研究室による調査で出土した資料中の6点である。文様は、桂宮分類Ⅲ型1式2点、Ⅲ型2式3点、中国で「磨菇紋」と呼ばれるもの1点である。丸瓦円筒の製作技法が判明するものは1点のみで、模骨不使用である。すべて円筒不要部切り取り式で、糸切り技法の詳細がわかる5点は、半周糸切り技法を用いる。いずれも、瓦当裏面には馬蹄状圧痕や布目がない。

**杜陵** 杜陵は、紀元前49年に崩じた前漢宣帝が葬られており、紀元前65年の造営とされている。したがって、杜陵出土瓦には、前漢後期から末期のものが含まれると考えられる。

杜陵出土軒瓦のうち、ここで分析するのは、中国社会科学院考古研究所西安研究室が発掘調査を行い、1993年に報告書が刊行された杜陵園の東門および便殿出土の13点である（中国社会科学院考古研究所1993）。報告書によれば、軒瓦が403点出土しており、文様は「長楽未央」が337点、「長生無極」が45点、雲文瓦当が21点で、いずれも瓦当裏面には糸切り痕がない。このうち、東門出土資料には、「長楽未央」118点と雲文瓦当3点がある。便殿出土は144点で、すべてが「長楽未央」である。

半截丸瓦  
接合式

分析対象とした13点は、いずれも「長楽未央」である。丸瓦部の製作技法が判明するものは、いずれも模骨使用で、すべて半截丸瓦接合式である。擬突帯の表現は、指頭によるナデつけによるものが2点、瓦当下半部の横ナデによるものが4点、線刻によるものが4点、擬突帯がないものが1点である。瓦当裏面中央に指頭押圧による凹みがあるのは1点のみで、ほかは瓦当裏面中央に凹みが見られない。なお、瓦当裏面中央に凹みがある1点は、瓦当面中央の大きな珠文の周囲に小さい珠文をめぐらさず、他の12点とは明らかに文様の雰囲気異なる。

**咸陽宮** 咸陽宮は、戦国時代の秦の孝公が造営して紀元前350年に櫟陽城から遷都し、秦末に項羽によって焼失したとされている。したがって、咸陽宮出土瓦には、戦国時代末から統一秦のものが含まれると考えられる。

咸陽宮出土瓦のうち観察できたのは、桂宮分類のⅢ型1・2・5・7・24式、葵文などのほか、Ⅳ

型1 A式、「右空」少数である。

Ⅲ型の各種や葵文は、ほとんどが模骨不使用であり、半周糸切り技法が用いられている。ただし、Ⅲ型24式には、半周糸切り技法のほか、一部に巻き付け糸切り技法を用いるものがあった。Ⅳ型1式は、巻き付け糸切り技法を使用している。「右空」は半截丸瓦接合式で、瓦当裏面中央に指頭押圧による凹みがあり、瓦当裏面下半に横ナデを施して擬突帯を表現する。筆者が確認したうち、瓦当裏面中央に凹みがあるものは、瓦当面中央に大きな珠文を配するが、この「右空」は唯一の例外である。

**陽陵周辺** 陽陵は、紀元前153年から造営が開始され、紀元前141年に崩じた前漢景帝が葬られたのち、紀元前126年には皇后が合葬されている。したがって、陽陵周辺から出土した瓦には、前漢前期から中期のものが含まれると考えられる。

陽陵周辺出土瓦のうち観察できたのは、桂宮分類のⅢ型1・2・11式、中国で「羊角紋」と呼ばれるものごく少数と、Ⅳ型1 A・9式、「千秋萬歳」、「長楽未央」、「長生無極」などであるが、圧倒的多数を占めるのはⅣ型1 A式である。

筆者が観察したⅢ型1・2式は、いずれも模骨不使用で、半周糸切り技法を用いる。また、「羊角紋」も半周糸切り技法を用いる。Ⅳ型9式と「千秋萬歳」は、模骨不使用で半周糸切り技法を用いるものと、模骨使用で巻き付け糸切り技法のものが混在し、後者が多いようである。

模骨使用・  
不使用混在

Ⅳ型1 A式は、筆者が観察した範囲では、模骨不使用で半周糸切り技法を用いるものと、模骨使用で巻き付け糸切り技法を用いるものがほぼ同程度存在し、模骨使用の半截丸瓦接合式はやや少ないが、ある程度存在する。Ⅳ型1 A式の半周糸切り技法を用いるものの中に、瓦当裏面に布目を残す資料が1点だけあるが、馬蹄状圧痕があるものは確認できなかった。半截丸瓦接合式は、瓦当裏面下半に横ナデを施して擬突帯を表現し、瓦当裏面中央には凹みがない。

Ⅲ型11式、「長楽未央」、「長生無極」は、いずれも模骨使用の半截丸瓦接合式である。

## ii 円筒不要部切り取り式の諸技法の年代

ここでは、丸瓦円筒製作技法、円筒不要部の切り取り技法（糸切り技法）、瓦当裏面の馬蹄状圧痕ないし布目の年代観について検討する。

丸瓦円筒の製作技法については、すでに説明したとおりであるが、おもな内容について、ここで再度確認しておく。模骨を使用せずに丸瓦円筒を作って、瓦当部粘土と接合する技法と、瓦当部粘土の裏面上で粘土紐を直接積み上げ、丸瓦円筒を作る技法は、見分けがつかない個体が多い。そこで、本稿では、これらの技法を、模骨を使用しない技法として一括して扱った。もう一つの技法は、模骨を使用して丸瓦円筒を作り、瓦当部粘土と接合する技法である。

模骨不使用  
として一括

円筒不要部を切り取る方法は、突帯上に残る痕跡からみて、半周糸切り技法と巻き付け糸切り技法、そしてヘラ切りによる切断も行われている。

瓦当裏面に施された技法としては、指ナデないし指頭による押圧が一般的で、丁寧にナデを施すものも存在するという状況であった。これらの製作技法は、円筒不要部切り取り式では新旧を問わず、幅広く行われたと考えられる。一方、瓦当裏面に馬蹄状圧痕ないし布目を残すものについては、年代をある程度限定することが可能である。

櫟陽城、太上皇陵、咸陽宮、長楽宮といった、戦国時代の秦から前漢のごく初期にかけての瓦

を含む遺跡においては、出土する軒瓦のほとんどが模骨不使用で、半周糸切り技法を用いている。このことから、模骨不使用の半周糸切り技法が古く、模骨使用の巻き付け糸切り技法が後出のものであることはほぼ明らかである。

模骨と巻き  
付け糸切り  
技法の上限

模骨使用および巻き付け糸切り技法の上限については、これらの遺跡で出土する桂宮分類のⅢ型1・2式の中で、瓦当裏面に馬蹄状圧痕ないし布目がある資料にこうした技法が認められることから、その年代観が大きな手がかりとなる。Ⅲ型1・2式は、秦始皇帝陵陵園からも多数出土しており、統一秦から前漢のごく初期にかけて数多く製作されたものと考えられる（陝西省考古研究所ほか2006・2007、袁2002）。模骨使用、巻き付け糸切り技法の上限をこの頃に求めることができるだろう。

新旧の技法  
が併存

一方、模骨不使用から模骨使用へ、半周糸切り技法から巻き付け糸切り技法へと急激に入れ替わったのか、新旧の技法が一定期間併存したのかについては、陽陵周辺や桂宮で出土するⅣ型1A式が手がかりとなる。両遺跡出土のⅣ型1A式は、模骨使用、巻き付け糸切り技法が圧倒的多数であるが、少数の模骨不使用、半周糸切り技法が混じることからみて、前漢前期（文帝・景帝期）までは確実に併存し、一部は前漢中期（武帝期）まで下る可能性もあろう。

また、瓦当裏面の馬蹄状圧痕ないし布目についても、Ⅲ型1・2式に多く認められることから、その出現も統一秦から前漢のごく初期に求められ、丸瓦円筒製作技法における模骨使用、および巻き付け糸切り技法の採用と同じ頃と考えられる。これらの技法が密接な関連をもって出現した可能性も否定できない。

なお、突帯上にヘラ切りとみられる痕跡を残し、丸瓦円筒に棒状工具を貫通させた痕跡がない資料は存在するが、丸瓦円筒と瓦当部粘土をヘラ切りによって切断したものの年代観については、筆者が確認できた資料が少ないため、かなり曖昧にならざるをえない。桂宮出土の動物文軒丸瓦は、ヘラ切りの可能性が高いものの一つであるが、これは模骨不使用で、瓦当裏面に馬蹄状圧痕や布目がない。したがって、模骨不使用による丸瓦円筒の製作が存続した期間に、一つの年代の定点を求めることができる。

そのほか、瓦当裏面中央に小さい円形を描くように施される指ナデは、桂宮では模骨使用、巻き付け糸切り技法を用いるⅣ型1A式で数多く認められた。この技法は、こうした文様と技法が組み合う年代に定点を求めることができる。

### iii 半截丸瓦接合式の諸技法の年代

ここでは、半截丸瓦接合式それ自体のほか、瓦当裏面下半の擬突帯、瓦当裏面中央部の凹みの出現時期について検討する。

**半截丸瓦接合式の出現時期** 先述のように、櫟陽城、太上皇陵、咸陽宮、長楽宮といった、戦国時代の秦から前漢のごく初期にかけての瓦を含む遺跡から出土する軒丸瓦は、ほとんどが円筒不要部切り取り式である。一方、陽陵周辺では、円筒不要部切り取り式が多いものの、半截丸瓦接合式も一定程度出土し、桂宮ではその比率が逆転する。そして、杜陵では、すべて半截丸瓦接合式となる。したがって、円筒不要部切り取り式が古い技法で、半截丸瓦接合式が後出の技法であることは間違いない。

半截丸瓦接合式の上限については、陽陵周辺や桂宮で出土するⅣ型1A式が手がかりとなる。

両遺跡出土のⅣ型1A式には、円筒不要部切り取り式と半截丸瓦接合式が混在し、とくに桂宮出土のものには、同範と考えられるⅣ型1A式に両技法が混在していた。また、陽陵周辺出土のⅣ型1A式は、円筒不要部切り取り式が多数を占めるものの、半截丸瓦接合式が一定程度存在する。このことから、陽陵周辺の整備にあたっては、初期段階に円筒不要部切り取り式が製作・供給され、一定期間経過した後に、半截丸瓦接合式が製作・供給されたと考えられよう。

桂宮では、Ⅲ型11・17式、Ⅳ型1A式が出土軒丸瓦の約3/4を占める。よって、この3型式が、武帝期に造営・整備された桂宮の主要な所用瓦と考えてよい。このうち、Ⅲ型11・17式はすべて半截丸瓦接合式だが、Ⅳ型1A式は円筒不要部切り取り式が、半截丸瓦接合式の2倍程度出土している。したがって、桂宮の造営・整備の当初段階では、円筒不要部切り取り式のⅣ型1A式が製作・供給され、しばらくして、円筒不要部切り取り式と半截丸瓦接合式のⅣ型1A式が、一定期間併存するかたちで製作・供給されたと推定する。そして、Ⅲ型11・17式の製作と供給は、半截丸瓦接合式のⅣ型1A式とほぼ同時か、若干下の段階であろう。

桂宮の造営・整備が武帝期のどの段階から始まり、いつ頃に造営・整備が一段落したかを確定することは困難だが、陽陵周辺の状況と考え合わせると、半截丸瓦接合式の上限は前漢中期（武帝期）に求めるのが妥当である。また、円筒不要部切り取り式から半截丸瓦接合式への転換は武帝期の中で行われるが、少なくとも武帝期の後半段階には両者が併存しており、その後もしばらくの間は併存した可能性があろう。ただし、前漢後期に杜陵陵園の造営と整備が開始されるころには、半截丸瓦接合式に統一されていたとみてよい。

半截丸瓦接合式の上限

**瓦当裏面の擬突帯と指頭圧痕・工具刺突痕の出現時期** 擬突帯は、型式学におけるルジメントであり、型式学的な意味では「ある」ものから「ない」ものへ、という前後関係が想定される。しかし、実際には、たんなる工人のこだわりのレベルである可能性があり、時間差をとまうか否かは厳密には不明である。ここでは、一応、時期差を考慮しておくが、ほぼ同時期における工房、工人集団、工人個人などの差を示す可能性も念頭におく必要がある。

さて、瓦当裏面下半の擬突帯や、瓦当裏面中央部の凹みの出現時期については、桂宮と杜陵出土瓦の状況が手がかりとなる。桂宮の半截丸瓦接合式のⅣ型1A式では、1点の例外を除いて、すべてに擬突帯が存在する。また、Ⅲ型11式にも擬突帯があるものが比較的多く見られる。瓦当裏面中央の凹みは、Ⅲ型11式に擬突帯が残る段階には出現している。

杜陵陵園の資料は、分析できた軒丸瓦の点数が限定されるため、詳細な検討には適していないが、一定の傾向を知ることは可能である。分析した軒丸瓦はいずれも擬突帯があり、瓦当裏面中央に凹みがあるものは1点のみである。

したがって、半截丸瓦接合式が出現した前漢中期段階では、擬突帯を表現することが一般的に行われ、Ⅲ型11式が主流になる段階では、徐々にそれが消滅していったが、前漢後期から晩期にいたっても、一部では擬突帯を表現することが行われていたと考えられる。

擬突帯の減少と残存

次に、瓦当裏面中央に指頭による押圧や工具による刺突を施す技法については、Ⅲ型11・17式など、瓦当面中央に大きな珠文を一つ置き、その周囲を小さい珠文で囲む文様の軒丸瓦の製作が開始された時期に、上限を求めることができる。すでに述べたとおり、この技法は、瓦当中央の大きな珠文を彫り込んだ部分に、粘土を十分に詰めるための工夫として考案されたものであろう。桂宮出土のⅢ型17式は、この技法がほとんどすべての軒丸瓦に採用されていた段階に製作

された可能性が高い。しかし、桂宮の造営・整備の後半段階に入って、Ⅲ型11式の瓦当裏面に擬突帯が表現されなくなる頃には、こうした技法はすたれ始め、前漢後期に杜陵陵园が造営・整備される段階には、ほとんど行われなくなったものと考えられる。

## F まとめ——桂宮出土軒丸瓦の位置づけ——

以上、桂宮出土軒丸瓦の製作技法を解説し、各技法と文様の対応関係を論じてきた。また、西安周辺の他の遺跡から出土した事例もあわせて、各技法の時期を検討した。

桂宮は武帝期に造営・整備された宮殿遺構であり、出土軒丸瓦もその時期を中心とすると考えられる。出土軒丸瓦のおよそ3/4を占める主要な3型式は、桂宮の造営・整備が最も盛んに行われ、それが一段落するまでの間に製作・供給されたと推定されることから、その文様や製作技法の時期に定点を与えることができる。前漢中期、武帝期における軒丸瓦の様相を知るうえで、きわめて重要な資料群と位置づけられよう。

製作技法の  
変遷の流れ

最後に、西安周辺における軒丸瓦製作技法の変化について簡単にまとめておく。戦国秦の段階には、模骨不使用、半周糸切り技法が用いられ、製作技法上、一定のまとまりがあったと考えられる。しかし、統一秦から前漢のごく初期の段階にいたると、いくつかの異なる技法が現れ、それらが一定期間混在する状況を示す。製作技法から見ると、多様性を増した時期と見てよいだろう。こうした技法の多様性は、武帝期前後に模骨使用、半截丸瓦接合式が出現するにいたって徐々に収束し、前漢後期から晩期には、製作技法はほぼ統一される。

こうした動向は、軒丸瓦の需要と何らかの関係があったと想定される。以下、予察として筆者の考えを述べておく。

統一秦～前  
漢の瓦需要

統一秦では、始皇帝により、自らの陵墓や阿房宮、万里の長城などの大規模な造営工事が次々に行われ、各地から労働者が徴発されたことが知られている。このため、咸陽周辺では膨大な瓦の需要が生じたことは想像にかたくない。その需要に応えるために、咸陽周辺だけでなく、それ以外の地域からも造瓦工人が集められた、あるいは瓦が運びこまれたと考えるのも一案であろう。その後、前漢の初期においても、漢長安城の造営が行われ、長樂宮、未央宮などが次々と整備されていることから、この時期にも瓦の需要はしばらく継続したと思われる。西安周辺において、統一秦から前漢初期に異なる技法が出現し、技法の多様化が進んだのは、以上の状況下で、多様な造瓦技術の伝統をもつ工人を集めたか、あるいはいくつかの地域から瓦を運びこむことにより、膨大な瓦の需要に対応した結果と考えるのがふさわしいのではないだろうか。西安周辺でこの時期に現れる技法が、より古い段階に、これ以外の地域に存在した事実が確認されることを期待したい。

武帝期の瓦  
需要の増大

また、前漢前半の文帝・景帝期にも、長安城やその周辺で造営工事は行われたと考えられるが、その次の武帝は、桂宮のほか、北宮や明光宮、建章宮などを次々と造営し、上林苑を壮大な規模に拡張した。この時期に、宮殿造作は一気に増大したと推定される。武帝期の造営工事の増大とほぼ時を同じくして、模骨を用いず、筒のままの円筒部を後から切り取るという、いわば土器作りの延長上にあった技法から、模骨を用いて成形した丸瓦円筒を半截した後に接合するという、瓦独自の技法への変換が進展する(谷1984)。後者の技法では、瓦当部粘土と半截した丸瓦

部の製作を分業で行うことが可能であり、作業効率がいっそう高まったと考えられる。こうした新技法の導入は、当時大幅に増大したであろう瓦需要に応えるための技術改良だったのではないだろうか。

このように、瓦需要の増大に対して、統一秦から前漢初期に造瓦技法が多様化していったのとは対照的に、武帝期に造瓦技法が統一の方向へ向かった背景には、統一帝国の誕生後、すでに一定期間が経過する中で、造瓦体制や組織も国家による整備が進行し、より効率的な技法が生み出されれば、一気に広まる条件が整えられていた状況があったと想定したい。

造瓦体制や  
組織の整備

以上、桂宮およびその周辺から出土した軒丸瓦の分析を通して、統一秦から前漢代の造瓦技法の変遷を検討し、その背景についても筆者の見通しを述べた。しかし、本来、こうした研究から一定の見解を得るためには、当該時期の瓦類全体を、生産地と消費地の両面から詳細に比較検討することが必要であり、その意味では本稿は十分な内容と言いがたい。また、本稿では、製作技法の変化を単純に時間差ととらえる以外になかったが、おそらく、生産地の違いや、造瓦工人がもつ技術系統の違いなどが要因となったものも混在しているであろう。今回、中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所が共同で行ったような、基礎的な作業がさらに積み重ねられることを期待したい。

基礎的作業  
の重要性

なお、本稿では、製作技法が不明瞭な部分についても、あえて復元を試み、なるべくわかりやすく図示することを心がけた。今後の資料増加や再検討などにより、さらに多様な製作技法が判明したり、あるいは本稿で提示した技法復元の誤りが指摘されたりすることも含めて、本稿が、中国の瓦研究の進展に何らかの寄与を果たすことができれば幸いである。

本稿をなすにあたっては、中国社会科学院考古研究所の劉慶柱前所長と李毓芳、劉振東、張建鋒の各氏、中国社会科学院考古研究所西安研究室の方々に、資料調査をはじめとしてさまざまな便宜を図っていただき、多大なる協力を賜った。また、咸陽博物館と陽陵博物館には、資料観察の便宜を図っていただいた。末筆ながら、深甚の謝意を表したい。

(1) これは、範端が観察できる個体はすべて、範端が外縁上面に存在すること、同範と推定される軒丸瓦はいずれも外縁の高さが均一であること、などの理由による。なお、桂宮から出土した石巻も、外縁上面までを範で形成するような形状である。

外縁のない瓦当部粘土を丸瓦円筒にはめ込み、外縁を丸瓦円筒で形成するA<sub>2</sub>技法と、外縁下半のみがついている瓦当部粘土に丸瓦を接合し、外縁上半を丸瓦部で形成するB<sub>2</sub>技法は、瓦当部と丸瓦部が接合部で剥離した個体によって確認が可能である。しかし、筆者が観察した桂宮出土軒丸瓦の中には、A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>技法を示す剥離面がある確実な資料が認められなかった。ただし、外縁の内側で割れた個体は一部にあり、A<sub>2</sub>・B<sub>2</sub>技法によるものが一定程度存在したことをうかがわせる。

(2) この復元模式図は、桂宮出土の、模骨を用いた円筒不要部切り取り式に見られる製作技法の一つを示したものにすぎず、これとは異なる手順や手法によると思われるものも多数存在している。たとえば、各工程での丸瓦円筒の向きに着目すると、瓦当部粘土を範に詰め、範からはずす手順とその際の向き（横向きか縦向きか、縦向きの場合の上下）、瓦当部粘土と丸瓦円筒を接合する際の向き、玉縁部を作る段階とその際の向き、第12図に示した糸切り工程の際の向き、そして本図ではあえて表現しなかったが、丸瓦円筒をヘラ状工具で半載する方向とその際の向き、瓦を乾燥させる際の向きなどは、筆者の観察では判然としなかった。しかし、今後、この復元案に対する訂正や改良が進められることを期待し、あえて一案として本図を提示しておく。

(3) なお、谷の復元図では糸が結ばれた側の棒の端を先に通すように表現されているが、棒を完全に貫

通させ、糸だけが丸瓦円筒に通されている状態にしてから、その後の工程を行えば、どちら側から先に通しても、結果的に同じ痕跡を生じさせることは可能である。作業としては、糸が結ばれていない側から先に通したほうがより簡便と思われるため、復元図ではこちらを採用した。

(4) ここで示した二つの糸切り技法は、突帯上に残る痕跡を生じさせることが可能な方法がいくつもある中で、最も手軽で簡便と思われる方法を選択して復元した一案である。本図では、瓦当面を下にし、丸瓦円筒を立てて表現しているが、註2に記したように、向きは不明である。ここでは、糸切り工程を見やすくするため、便宜的にこの向きにした。したがって、第35図に示した復元案と同じく、今後、訂正・改良されることを期待している。

(5) 巻き付け糸切り技法が生み出された理由は定かでないといわざるをえないが、巻き付け糸切り技法が半周糸切り技法に比べて優れている点は、糸を丸瓦円筒に巻き付けた位置に沿って、簡便かつ正確に切り離しができることである。一方、半周糸切り技法では、とくに切断位置が規定されず、糸切りがフリーハンドで行われるため、思いどおりの位置で切り離しを行うには、ある程度の技術の習熟が必要であったと考えられる。

このことから逆に、巻き付け糸切り技法が生まれた理由として、切断位置を正確にする必要、つまり、切断によって形成される突帯の高さを正確にする必要があったという可能性を指摘したい。巻き付け糸切り技法は、突帯の高さを自在に調整できる技法として開発されたものと推定する。なお、この技法による軒丸瓦は、概して突帯が低いものが多く、中には突帯の高さがほとんどないために、糸切り痕が瓦当裏面に残るものさえ見られる。突帯を低くすれば、瓦を軽くすることが可能になるので、瓦の軽量化が、巻き付け糸切り技法を開発した目的の一つであったかもしれない。

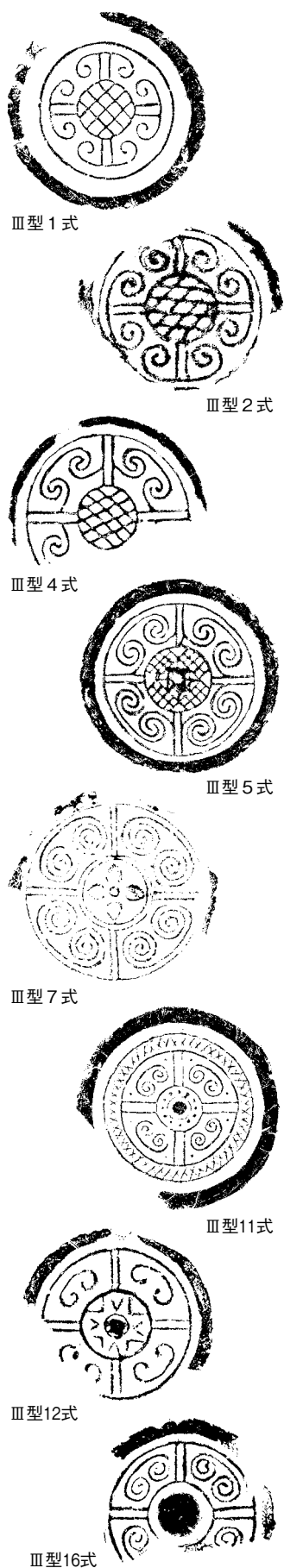
#### 参考文献 (五十音順)

- 袁仲一 2002『秦始皇陵考古発見と研究』陝西人民出版社  
岸本直文 1994「中国における秦漢代の瓦調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』奈良国立文化財研究所  
駒井和愛 1964『邯鄲』東方考古学叢刊乙種第7冊、東亜考古学会  
陝西省考古研究所・秦始皇兵馬俑博物館 2006『秦始皇帝陵園考古報告2000』文物出版社  
陝西省考古研究院・秦始皇兵馬俑博物館 2007『秦始皇帝陵園考古報告2001～2003』文物出版社  
谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号、日本考古学会  
谷豊信 1994「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法—東京国立博物館保管資料の紹介を兼ねて—」『MUSEUM』No. 519、東京国立博物館  
中国科学院考古研究所 1959『洛陽中州路(西工段)』中国田野考古報告集考古学専刊丁種第4号、科学出版社  
中国社会科学院考古研究所 1993『漢杜陵園遺址』科学出版社  
中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所 2007『漢長安城桂宮 1996-2001年考古発掘報告』文物出版社  
山崎信二 2011「西安における秦から前漢までの軒丸瓦の変遷」本書所収  
劉慶柱 1994「戦国秦漢瓦当研究」『漢唐と辺境考古研究』第1集、科学出版社  
劉慶柱 2000「漢長安城遺址及其出土瓦当研究」『古代都城与帝陵考古学研究』科学出版社  
劉振東・張建鋒 2007「西漢磚瓦初步研究」『考古学報』2007年第3期、考古雑誌社

#### 挿図出典

- 第33図：谷豊信 1984、第8図。  
第38図：岸本直文 1994、77頁挿図。  
第39図：劉振東・張建鋒 2007、図7(本書30頁第13図)。  
第41図：谷豊信 1984、第10図。

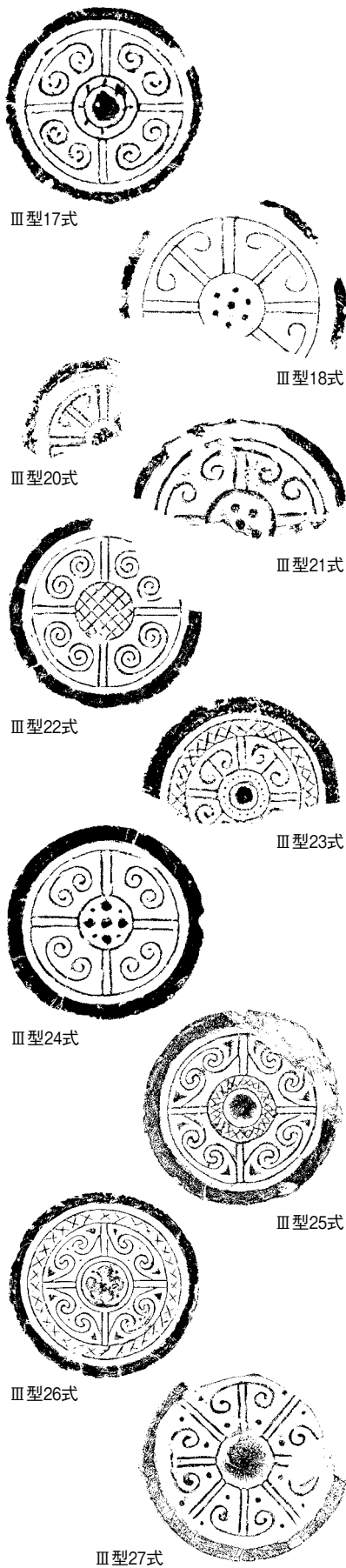
第3表 桂宮出土軒丸瓦の型式別技法一覧(1) 拓影は1:6



型式名	出土地	点数	計	製作技法				
				半周糸切り	巻き付け糸切り	不明	へら切りかなデ	瓦当裏面凹みあり
III型1式	1号	1	4					
	2号北	1		模骨使用	0	0	0	
	3号	1		模骨不使用	1	1	0	
	4号	1		不明	1	0	1	
				※判明するものはすべて円筒不要部切り取り式。				
III型2式	3号	1	2	3号出土は半周糸切り、瓦当裏面布目。4号出土はへら切りかなデ。いずれも丸瓦部不明。				
	4号	1						
III型4式	2号北	2	2	瓦当裏面に馬蹄状圧痕あり。判明するものは半周糸切り。				
III型5式	2号北	2	4		半周糸切り	巻き付け糸切り	不明	へら切りかなデ
	排水渠	1		模骨不使用	1	0	1	0
	4号	1		不明	0	1	0	1
				※判明するものはすべて、円筒不要部切り取り式。巻き付け糸切りの1点は瓦当裏面に馬蹄状圧痕。				
III型7式	4号	1	1	円筒不要部切り取り式、丸瓦部不明。半周糸切り。				
III型11式	1号	2	176		瓦当裏面凹みあり	瓦当裏面凹みなし	不明	
	2号北	23		擬突帯あり	64	7	8	
	2号南	91		擬突帯なし	14	27	0	
	3号	27		不明	26	6	24	
	排水渠	3		※判明するものはすべて、模骨使用、半截丸瓦接合式。				
III型12式	2号南	2	2		瓦当裏面凹みなし	不明		
III型12式				擬突帯あり	1	0		
				不明	0	1		
				※いずれも半截丸瓦接合式。模骨使用は不明。				
III型16式	2号南	2	2	いずれも半截丸瓦接合式、瓦当裏面凹みあり。判明する1点は模骨使用、擬突帯あり。				

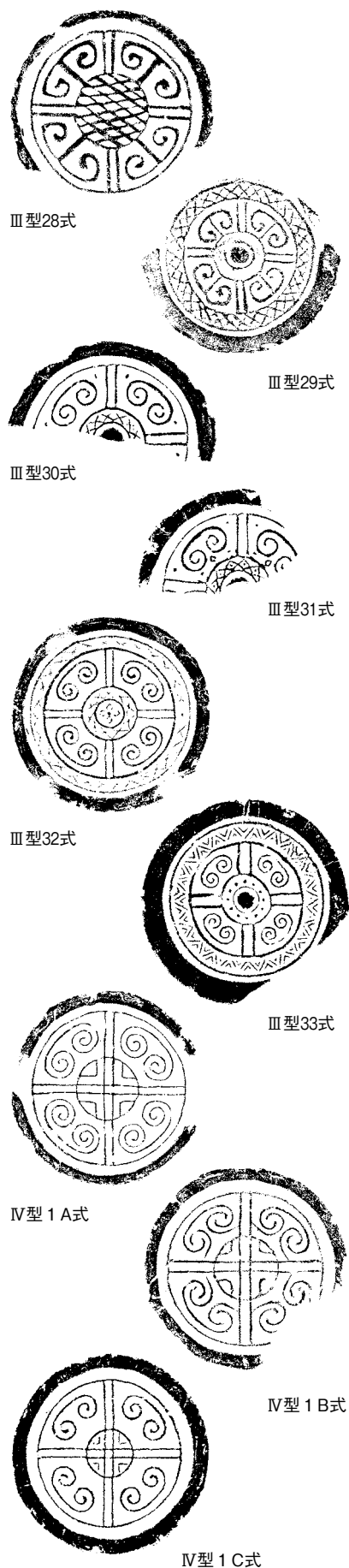


第4表 桂宮出土軒丸瓦の型式別技法一覧(2) 拓影は1:6



型式名	出土地	点数計		製作技法		
				瓦当裏面 凹みあり	瓦当裏面 凹みなし	不明
III型17式	2号北	13	57			
	2号南	23		擬突帯あり	12	8 11
	3号	7		擬突帯なし	9	3 14
	4号	12		不明		
	5号	2		※判明するものはすべて、模骨使用、半截丸瓦接合式。		
III型18式	2号南	2	2	1点は模骨不使用、切り離し技法不明。もう1点は詳細不明。		
III型20式	4号	1	1	半截丸瓦接合式。丸瓦部不明。		
III型21式	2号南	1	1	円筒不要部切り取り式、他不明。		
III型22式	2号北	2	2	いずれも円筒不要部切り取り式で巻き付け糸切り。1点は模骨不使用。		
III型23式	4号	1	1	半截丸瓦接合式、擬突帯あり、瓦当裏面凹みあり。		
III型24式	4号	1	1	半截丸瓦接合式、擬突帯あり、瓦当裏面凹みなし。		
III型25式	3号	2	3	1点は半截丸瓦接合式、擬突帯あり、瓦当裏面凹みあり。1点は詳細不明。		
	4号	1				
III型26式	3号	1	1	半截丸瓦接合式、擬突帯あり、他不明。		
III型22式	2号北	2	2	いずれも円筒不要部切り取り式で巻き付け糸切り。1点は模骨不使用。		
III型27式	3号	2	2	半截丸瓦接合式、擬突帯なし、瓦当裏面凹みなし。		

第5表 桂宮出土軒丸瓦の型式別技法一覧(3) 拓影は1:6

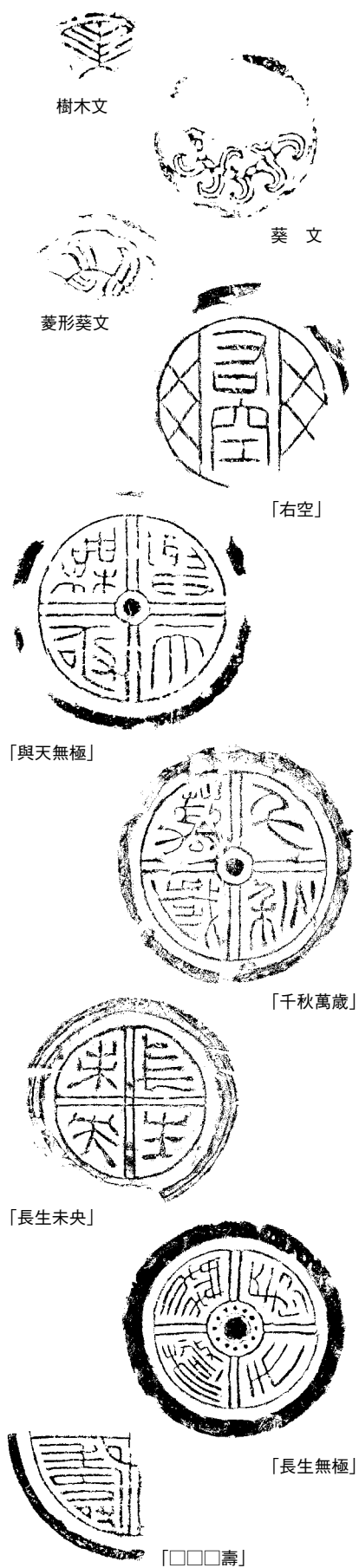


型式名	出土地	点数	計	製作技法																												
III型28式	2号北	1	1	円筒不要部切り取り式、半周糸切り、他不明。																												
III型29式	2号南	1	1	半截丸瓦接合式、擬突帯なし、他不明。																												
III型30式	2号北	1	1	半截丸瓦接合式、瓦当裏面凹みあり、他不明。																												
III型31式	2号北	1	1	半截丸瓦接合式、他不明。																												
III型32式	2号北	2	2	半截丸瓦接合式、擬突帯なし、瓦当裏面凹みなし。1点は模骨使用。																												
III型33式	2号南	6	6	いずれも半截丸瓦接合式、3点は擬突帯なし、瓦当裏面凹みなし。他の3点は不明、うち2点は模骨使用。																												
IV型1A式	1号	8	152	<p>【円筒不要部切り取り式(84点)】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>半周糸切り</th> <th>巻き付け糸切り</th> <th>不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>模骨使用</td> <td>0</td> <td>28</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>模骨不使用</td> <td>0</td> <td>3</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>不明</td> <td>1</td> <td>49</td> <td>2</td> </tr> </tbody> </table> <p>※巻き付け糸切りのうち4点は瓦当裏面に布目、うち1点は模骨使用。半周糸切り1点は瓦当裏面に馬蹄状圧痕。</p> <p>【半截丸瓦接合式(50点)】</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>瓦当裏面凹みなし</th> <th>不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>擬突帯あり</td> <td>20</td> <td>28</td> </tr> <tr> <td>擬突帯なし</td> <td>1</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>不明</td> <td>0</td> <td>1</td> </tr> </tbody> </table> <p>※判明するものはすべて、模骨使用、瓦当裏面凹みなし。線刻・ヘラナデによる擬突帯なし。</p> <p>【切り離し技法不明(18点)】</p> <p>擬突帯あり1点。模骨不使用1点。その他不明。</p>		半周糸切り	巻き付け糸切り	不明	模骨使用	0	28	1	模骨不使用	0	3	0	不明	1	49	2		瓦当裏面凹みなし	不明	擬突帯あり	20	28	擬突帯なし	1	0	不明	0	1
	半周糸切り	巻き付け糸切り	不明																													
模骨使用	0	28	1																													
模骨不使用	0	3	0																													
不明	1	49	2																													
	瓦当裏面凹みなし	不明																														
擬突帯あり	20	28																														
擬突帯なし	1	0																														
不明	0	1																														
	2号北	28																														
	2号南	37																														
	3号	24																														
	排水架	1																														
	4号	54																														
IV型1B式	1号	1	3	<p>いずれも円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り。2号北は模骨不使用。残り2点は丸瓦部不明。</p>																												
	2号北	1																														
	2号南	1																														
IV型1C式	4号	12	12	<p>いずれも半截丸瓦接合式、擬突帯あり(線刻・ヘラナデによるものなし)、瓦当裏面に縄叩きを残す。判明するものはいずれも模骨使用、瓦当裏面凹みなし。</p>																												

第6表 桂宮出土軒丸瓦の型式別技法一覧(4) 拓影は1:6

型式名	出土地	点数	計	製作技法
IV型2式				※筆者未観察。
IV型4式	2号南	1	2	2点とも模骨使用、半截丸瓦接合式、指頭ナデつけによる擬突帯、瓦当裏面凹みなし。
	4号	1		
IV型5式	1号	2	4	1号出土の1点と4号出土は円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り、円筒部不明。2号出土は模骨不使用、他不明。1号出土の残り1点は半截丸瓦接合式の可能性あり。
	2号南	1		
	4号	1		
IV型6式	1号	1	4	いずれも半截丸瓦接合式、指頭ナデつけによる擬突帯。判明するものは瓦当裏面凹みなし。
	2号北	1		
	2号南	1		
IV型9式	1号	1	3	いずれも円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り。1号出土は模骨使用。
	2号南	2		
IV型10式	2号南	1	1	半截丸瓦接合式、瓦当裏面凹みなし、他不明。
IV型11式	2号南	1	1	模骨不使用、他不明。
IV型12式	2号北	2	6	2号北・南出土は4点が円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り、うち2点模骨不使用。1点は詳細不明。出土地不明は半截丸瓦接合式の可能性あり。
	2号南	3		
	出土地不明	1		
素文	2号北	1	2	詳細不明
	3号	1		
動物文	4号	1	1	模骨不使用、円筒不要部切り取り式、ヘラ切りないし削り。

第7表 桂宮出土軒丸瓦の型式別技法一覧(5) 拓影は1:6



型式名	出土地	点数	計	製作技法																
樹木文				※筆者未観察。																
葵文	2号南 4号	1 1	2	2点とも円筒不要部切り取り式、半周糸切り。4号出土は模骨不使用。																
変形葵文	3号	1	1	模骨不使用、円筒不要部切り取り式、他不明																
渦文	2号南	1	1	円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り。																
右空	2号北	1	1	円筒不要部切り取り式、半周糸切り。																
與天無極	2号北 2号南 3号 4号	1 3 5 1	10	判明するものはいずれも模骨使用、円筒不要部切り取り式。うち1点は半周糸切り、1点はヘラ切りかナデ。 與□□□(1点)、□天□極(2点)含む。																
千秋萬歳	2号北 2号南 3号	2 6 1	9	判明するものはいずれも模骨使用、円筒不要部切り取り式、巻き付け糸切り。																
□□□壽	3号	1	1	円筒不要部切り取り式の可能性が高い。																
長生未央	2号南 3号 4号	1 2 1	4	判明するものはいずれも接合式、擬突帯あり、瓦当裏面凹みなし。 長□末□(1点)、□□末□(1点)含む。																
長生無極	1号 2号北 2号南 3号 4号	1 10 5 1 1	18	<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>瓦当裏面凹みあり</th> <th>瓦当裏面凹みなし</th> <th>不明</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>擬突帯あり</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>1</td> </tr> <tr> <td>擬突帯なし</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>0</td> </tr> <tr> <td>不明</td> <td>6</td> <td>1</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table> <p>※判明するものはいずれも模骨使用、半截丸瓦接合式。 ※長□無極(1点)、長生無□(3点)、長□無□(2点)、□生□極(1点)含む。</p>		瓦当裏面凹みあり	瓦当裏面凹みなし	不明	擬突帯あり	1	3	1	擬突帯なし	1	2	0	不明	6	1	3
	瓦当裏面凹みあり	瓦当裏面凹みなし	不明																	
擬突帯あり	1	3	1																	
擬突帯なし	1	2	0																	
不明	6	1	3																	
□□無極	1号	1	1	詳細不明																
□生□□	2号南	1	1	詳細不明																
長□□□	1号	1	1	詳細不明																
不明	2号南 3号	2 2	4	2号南の1点は模骨不使用、他不明。それ以外で判明するものはいずれも模骨使用、半截丸瓦接合式、擬突帯あり、瓦当裏面凹みあり。																
合計			521																	

第3～7表註

点数は、筆者が観察・分類したものを示しているため、本書報告編の出土点数と異なる場合がある。

表中では、本文中の用語のほか、以下のような略称を用いている。【出土地】1号:1号建築、2号北:2号建築北院、2号南:2号建築南院、3号:3号建築、4号:4号建築。【円筒不要部先端の切り取り技法】不明糸切:半周糸切り技法か巻き付け糸切り技法のいずれか、ヘラ切りかナデ:ヘラ切りない糸切り後ナデ。【瓦当裏面】瓦当裏面凹み;瓦当裏面中央に指頭圧痕ないし工具刺突痕。

表中の「渦文」は、本書報告編図版77-6。

## 5 秦漢代瓦当の製作技法

—— 櫟陽城・太上皇陵出土例を中心に ——

大 脇 潔

### A はじめに

先駆的業績 古代中国の瓦については、文字瓦当を中心に古くから研究が進められ、その成果は歴大なものがある。しかし、先駆的な業績として評価できる『洛陽中州路』（中国科学院考古研究所1959）などごく一部を除くと、これまでに刊行された図録・報告書の多くは、瓦当紋様の解説に意を尽くすことはあっても、それがどのようにして作られたのかの手がかりを残す瓦当裏面については、ほとんど紹介されることがなかった。したがって、造瓦技法の解明を志す者にとっては隔靴搔痒の感があり、瓦当紋様だけでなく、より豊富な工人単位の情報を秘める瓦当裏面を手にとって観察したいというのが積年の夢となった。製作技法の変化を時間軸に沿って大局的に把握し、その成果を加味した編年網を逐次細分しつつ作成すれば、古代中国の瓦葺きの建物を有する諸遺跡の研究に資すること少なからずと考えたからである。

秦漢代瓦当の共同調査 1994年の早春にこの希望がかない、3月3日から20日までの18日間、中国社会科学院考古研究所の洛陽工作站と西安研究室において、私を含む5名（黒崎直、毛利光俊彦、大脇潔、牛嶋茂、岸本直文）は、秦漢代を中心に、西周から北魏、隋唐、北宋代に至る瓦、総点数191点の共同調査を実現することができた。また、いくつかの見学地でも便宜をはかっていただき、予期した以上の成果を得ることができた。この間、お世話になった関係者に深甚の謝意を表したい。

こうして秦漢代の瓦を初めて手にし、その瓦当裏面を詳細に観察することができた私たちにとって、この洛陽と西安における体験は、少し大袈裟になるが、ダーウィンのガラパゴス諸島におけるそれに近いものがあつた。中国で生まれ、その後、東アジア各地に拡散した瓦の系統樹の重要なミッシング・リンクが、一瞬垣間見えたような気がしたのである。これが、本報告の中心をなす櫟陽城出土の第3群（第1～5群の分類については後述）の組み合わせ式模骨を使用した軒丸瓦との遭遇ということになる。底冷えするレンガ造りの西安研究室の一室で、第3群の馬蹄形圧痕や第4群の瓦当裏面に残る布目について論じ合った記憶が鮮明に甦る。

ただ、その時のメモ等を読み返すと、洛陽工作站訪問時にはまだ何も見えておらず、性格不明の痕跡が瓦当裏面に残るとだけ記している。第3群の位置づけが少しずつ固まりかけてきたのは、西安での調査の最終段階であつた。帰国後、図や写真の整理を進めながら、再度この第3群や第4群の製作技法の復元に没頭した。しかし、次々と浮かぶいくつかの疑問点を解き明かそうとしても、資料を再度手にすることはかなわず、観察の甘さを痛感することになった。その成果の一部を簡単に報告したが、短い文章と模式図だけで理解を求めることは困難であつた（岸本

1994)。さらに、筆者の不注意によって、この模式図に示した模骨の上端を細く描くという致命的な誤りがあり(46頁第19図)、二三の識者から、これでは模骨が抜けないというご批判をいただくことになった(井内1998)。

その後、未報告のまま、幾多の星霜が流れた。この間の怠慢を恥じるばかりである。今回、2000年の共同調査に参加した山崎信二の督励もあり、また第3群の組み合わせ式模骨を利用した造瓦技法の重要性に鑑み、再検討することにした。あわせて、その後の中国社会科学院考古研究所と奈良文化財研究所の共同調査の成果や、近年、急速に充実しつつある中国の瓦研究の進展、さらには筆者が行った明石市井内古文化研究室や高浜市かわら美術館所蔵の秦漢代瓦当など、内外の関連資料の調査成果を参照することもでき、ようやく重い責任の一端を果たすことができた。中国社会科学院考古研究所および陝西省考古研究所(現 陝西省考古研究院)の所員、ならびに国内の関係者にあらためて感謝の意を表す。

成果の再検討と報告

## B 瓦当紋様の分類

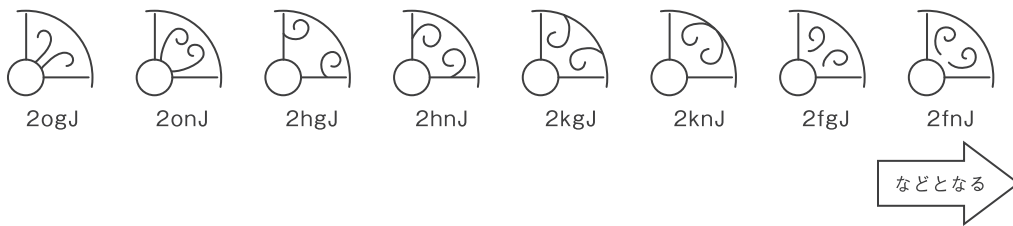
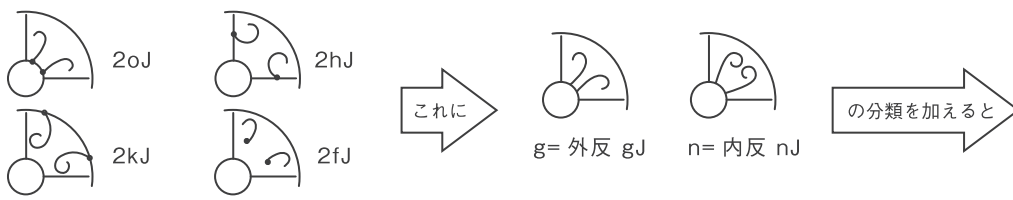
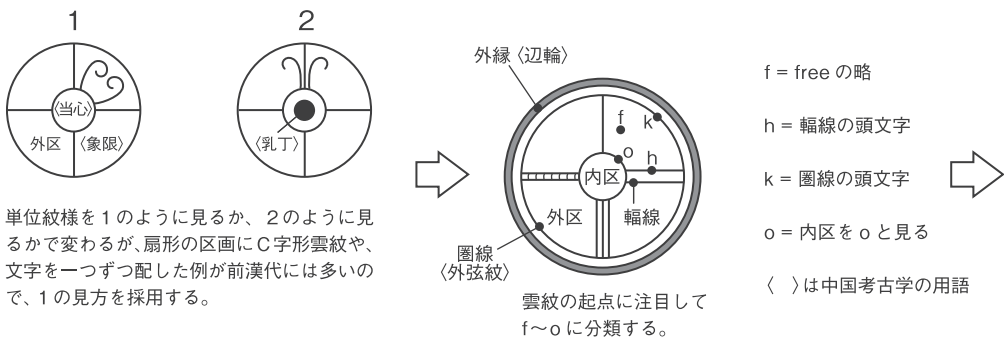
秦漢代の瓦当にはさまざまな紋様があり、その名称や用語については、すでにいくつかの案が中国の研究者によって示されている。中には、身近なものに見立てた名称も多く、柿蒂(柿のへた)紋など日本の研究者にもわかりやすい例もある。しかし、貝紋や蝶紋・蟬紋など、中国ではすでに定着した観がある用語でも、日本人にとってはなじみにくく、ただちには首肯しがたい命名もいくつかある。そして、いったんこうして命名してしまうと、それで思考が停止し、本質を追究する努力が損なわれてしまうことを筆者は恐れる。

その一方、秦漢代の瓦当紋様の多くは、中国や朝鮮半島・インドシナ半島の瓦に限られ、わが国の瓦当紋様と共通する要素はきわめて少ない、という厳然たる事実がある。したがって、無理にわが国の瓦当紋様に関する部分名称を当てはめるよりは、中国における永年の研究の中で醸成され、しかも半島や列島の研究者にとってもわかりやすい名称や用語を取捨選択していくのがもっとも妥当と考えられる。また、こうした名称や用語の選択に際して、字義を尊重することは大切であるが、原理主義をあまりにもふりかざすと自縄自縛に陥り、身動きがとれなくなる可能性もあるので、今回はできるだけわかりやすく、かつ覚えやすい、短い用語にするという観点から、柔軟に対応することにした(なお、〈羊角紋〉や丸瓦凹面に残る当て具痕である〈麻点紋〉など、中国考古学でよく用いられる用語は、〈 〉で囲み表記する)。

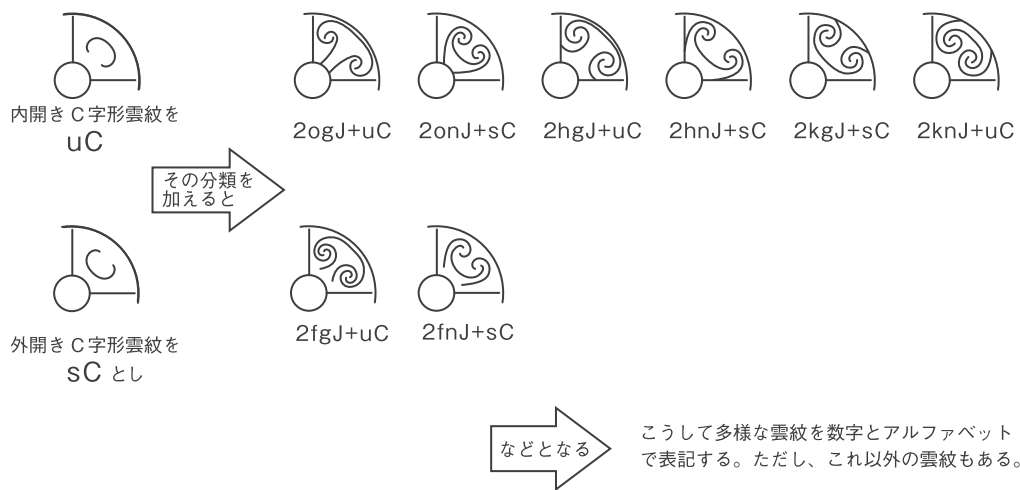
用語の選択

**雲紋の分類試案** 雲紋は、卷雲紋あるいは雲気紋と呼ばれることも多い。そのいずれが適切かは重要な課題であり、また何を象徴するのかといった問題もある(王2004)。しかし、その解決のためには深い学識が必要であり、筆者には荷が重すぎる課題である。そこで、ここでは1字でも少なく表記する方針にしたがい、とりあえず雲紋という用語を使うことにした。中国では、さらにこの雲紋を〈磨菇(キノコ)形雲紋〉、〈羊角形雲紋〉など、誰にでもわかりやすい形になぞらえた命名がすでに多く使用されている。

これをそのまま、翻訳ないしは翻案して使うのも一案である。しかし、今回は、無味乾燥になるという批判は承知のうえで、アルファベットのC字形に似たC字形雲紋、J字形に似たJ字形(蕨手状、〈羊角形〉)雲紋、J字形とC字形を組み合わせた雲紋、S字形に似たS字形雲紋という



さらに



第48図 瓦当紋様の部分名称と雲紋の分類・記号化

ように、アルファベットの組み合わせで表現する方法を暫定的に試みた(第48図)。なお、〈葵紋〉、〈饗饗紋<sup>とうてつ</sup>〉、〈山形紋〉などはそのまま用いることにした。

## C 秦漢代瓦当の製作技法

調査した秦漢代の軒丸瓦(円瓦当)を製作技法によって分けると、以下に紹介するように、大きく5群に分類できる。ただし、この時期には、その他の技法も知られており、それらを含めた製作技法の変遷については、最後にまとめることにしよう。

分類にあたって、指標としてもっとも役立つのは、瓦当裏面に残る痕跡から想定できる工程の違いである。もちろん、その他の各面に残るさまざまな痕跡の観察結果も重要である。なお、ここで使用する平瓦や丸瓦の部分名称や、その製作技法に関する用語については、佐原真の論文「平瓦桶巻作り」と拙稿「丸瓦の製作技術」に基本的に準拠することにした(佐原1972、大脇1991)。また、戦国時代から統一秦・前漢代にかけての軒丸瓦の製作技法については、陳直に始まり、劉慶柱や姚生民らによって継承発展された中国の研究者による研究成果と、わが国の谷豊信や井内潔によるこれまでの研究成果を、吟味しつつ採用することにした(陳1963、劉1992、劉・李1998、姚1998・2003、谷1984・1994、井内1976・1998)。そして、すでに定着して市民権を得ている用語はできるだけ尊重し、どうしても新たに呼ぶ必要が生じた部分名称や技法に関しては、なるべく適切な用語を取捨選択した。

以下、今回取り上げる資料に関して共通する工程についてまず簡単に説明するとともに、必要な用語を列挙しておく。

共通工程と  
用語の説明

秦漢代の軒丸瓦は、基本的には以下の工程を経て作られている。ここではまず、各工程を簡単に説明し、今回の調査でその詳細が明らかになった瓦当裏面を「半切する技法」や、第3群の組み合わせ式模骨技法については、次項でまとめて詳述することにした。なお、今回報告する軒丸瓦はすべて「円瓦当」で、「半瓦当」は含まない。

i 瓦当の成形 作業台上に紋様面を上にして「型」を置く。作業台は基本的には回転可能なものであったと推定できる。型は粘土に「瓦当紋様」を陰刻して焼き締めた陶製が圧倒的に多く(関野2005)、本来の字義からすれば「型」がふさわしい。しかし、一般的には「瓦当范」、あるいは単に「范」を使うことが通例となっているので、それにしたがう。ただし、わが国では「范」の字を使うことが多いが、本稿では中国で通常用いられる「范」を採用する。

「范」を使用

この范に適当な大きさの「粘土円板」を載せ、上から手のひらや指で押し、ときには各種の「叩き板」で叩いて、「瓦当面」に瓦当紋様を施紋する。したがって、「瓦当裏面」には「掌紋」や「指紋」、各種の叩き目が残ることになる。なお、紋様の一番外側に位置する外縁や周縁と呼ばれる部分を、別の粘土紐で作るとする技法もしばしば指摘されることがあるが、そこで剥離しやすいという欠陥があり、疑わしい例が多い。実際、今回実見した資料には、そうした例は一切認められなかった。

ii 軒丸瓦円筒の成形 范の利用に先立ち、瓦当も手作りする技法があった。無紋の半瓦当や円瓦当がそれである。この技法では、土器の底部を作るのと同じ要領で瓦当を形づくり、その外周に沿って「粘土紐」を何重にも巻き上げ、谷豊信のいう「叩き板・当板技法」で叩き締めて、

無紋の瓦当



軒丸瓦円筒 丸瓦部をまず作る(谷1994)。これを「軒丸瓦円筒」と名づけ、ふつうの丸瓦円筒と区別する。軒丸瓦円筒の製作に際しては、最下段の粘土紐を瓦当裏面に密着させることが肝要であり、そのために、上から押した際についた連続する当て具の擦痕(157…資料整理番号、以下同じ。図版6)や、指痕・爪痕が凹面側に一周する例がある。こうした痕跡を残す例は、瓦当の成形と軒丸瓦円筒の成形を一人の工人が連続して行った可能性が高いと判断でき、これを第1群と呼ぶ。

しかし、丸瓦円筒をさらに完全に密着させるために施した一周するナデなどで、その痕跡が消されてしまうと、瓦当の成形と「丸瓦円筒」の成形を別の工人が担当し、完成した丸瓦円筒を瓦当裏面に接合する技法(第1'群)との識別はきわめて困難となる。これらの痕跡は、第2群と第2'群にも共通して認められる。

「内傾接合」  
「外傾接合」

第1・1'・2・2'群ともに、「丸瓦部凹面」には粘土紐の「接合面」が顕著に残る例が多い。接合面を観察すると、わずかに見える斜面が凹面側に向かって下がる、山崎信二がいう「内傾接合」の例が多いようである(山崎本書所収論考)。ただし、あとで触れるように、「模骨」を使用して粘土紐を巻きつけ、丸瓦部を作る技法では、やはり山崎のいう「外傾接合」例が多く、識別の手がかりとなるであろう。今後の観察例の増加に期待したい。

凹面は丁寧にナデ仕上げし、粘土紐の接合痕を消したものもあるが、斜め光線を当てたり、両手で凹凸面をよくなでて観察すると、粘土紐に起因する微妙な凹凸を確認することができる場合が多い。また、成形時に凸面側を叩く際に、凹面に当てる「当て具」の刻み目の圧痕(麻点紋)や、当て具に巻きつけた縄目を残す例も多い。

凸面には、叩き板に刻まれた各種叩き目や巻きつけた縄目を残す例が多い。こうした痕跡は、中国の新石器時代から漢代頃までの土器の製作技法と共通しており、土器から派生した一器種である建築材料の土管を母胎として、瓦が生み出されたことを雄弁に物語っている。

iii 玉縁の成形 軒丸瓦円筒の瓦当の反対側には、丸瓦部より直径のやや小さな「玉縁」を、土器の口縁を作るのとほぼ同じ要領でつけ足す。この部分は、屋根に葺いた際、上に重なる丸瓦との重ね代となり、中国では〈舌・瓦舌〉という巧みな表現で呼ぶ。以上で軒丸瓦円筒が完成することになるが、玉縁の成形がどのようにして行われたかを明らかにするためには、完形例を含む多数の資料の観察が必要である。今回の資料には良好な資料が少なく、今後の課題としておく。とくに、第3群や第4群の馬蹄形圧痕や布圧痕を瓦当裏面に残す例については、模骨を抜いてから作ったかどうかの見極めが将来の重要な課題となる。

半切技法

iv 軒丸瓦円筒基底部の半切と分割の準備 次に、完成した軒丸瓦円筒の基底部に、糸をつけた「針」を貫通させて、その半分を切断する。この工程は、まだ粘土が軟らかい段階、おそらくは軒丸瓦円筒完成直後に行われたものと思われる。こうした技法を、今回、半切する技法あるいは半切技法と呼ぶことにした。これについてはあとで詳説する。また、軒丸瓦円筒を縦に二等分するため、針が貫通した「針穴」の上から丸瓦部狭端に向けて「分割截線」を入れ、分割の準備をする。

半截と半裁

この、軒丸瓦円筒を縦に2分割することを、半截あるいは半裁と表記する。「截」には「たつ」「きる」、「裁」にも「たつ」の意味があるが、『広辞苑』によれば、半裁は、半截の慣用読み「はんさい」に「裁」の字を当ててできた語とされる。また、次に述べる丸瓦側面の分割截線、分割截面も、近年では、分割截線、分割截面と表記することが多くなってきた。

諸行無常、日本語も常に変化しており、目くじらを立てることもないが、どれが本来の用字と読みであるかは知っておく必要はあろう。ここでは、佐原が提唱した分割截線、分割截面、分割破面を尊重し、またすでに市民権を得ていると判定して、そのまま使用する（佐原1972）。

佐原の用語にしたがう

分割截線を入れる作業は、鋭利な刃物を使い、凸面側から行う例が多い。分割截線の深さは、丸瓦部厚さの1/3から半分程度とし、完全には切断しないことが多い。この状態で乾燥させたほうが歪みや潰れを防げるからである。工程は、半切→分割の場合が多いようである。ただし、この先後関係については今後の詳細な検討が必要である。

v 乾燥 瓦当面を下にして立てるか、瓦当面を上にして玉縁を下にして立てるか、あるいは瓦当面を横に向け全体を横たえるかして乾燥させる。瓦当面を下にして立てれば、瓦当の周縁に圧痕が残る。横たえれば、丸瓦部凸面のどこかに圧痕が残るであろう。周縁に圧痕を残す例は前者であった可能性が高い。この工程についても今後の観察が必要である。

vi 分割 変形しないところまで乾燥した頃を見計らい、分割截線に沿って叩いて衝撃を与え、軒丸瓦円筒の「不用部分」を割り取る。こうして分割した軒丸瓦の丸瓦部側面には「分割破面」が残る。

vii 乾燥・焼成 さらに乾燥させた後、焼成する。

秦漢代の軒丸瓦の基本的な製作工程は以上のように復元できるが、いくつかの問題が残る。一つはいつ范から外すかという疑問。先行研究では、iiiのあとで范から外し、凹型台上に横たえてivの工程に移るとする。ただし、これ以外の方法も可能であり、これまた今後の詳細な検討が必要である。

## D 用語の整理と説明

ここでは、今回報告する軒丸瓦の製作技法を説明するにあたって、必要な用語を整理するとともに、簡単な説明を加える。

**丸瓦円筒と軒丸瓦円筒** 西周中期から戦国・秦・漢代にかけての軒先や棟の先端を飾った覆瓦には、無紋（素面）あるいは有紋の瓦当をつけるのが原則である。こうした軒先瓦の大半は、すでに述べたように、瓦当を形成する粘土円板の上に粘土紐を巻き上げ、叩き締めて軒丸瓦円筒を作る。

**半瓦当と円瓦当** この軒丸瓦円筒を縦に半分に切断して、半瓦当2個を得る。半瓦当は、半円瓦当（戈1997）や半円形瓦当（李1990）と呼ぶ場合もある。正確を期せば半円形瓦当となり、円形瓦当が対になる。同様に、半瓦当に対しては、円瓦当ではなく全瓦当ということになるが、通例にしたがい、以下、半瓦当で統一する。円形瓦当についても、ただ瓦当と呼んで円瓦当をあらわす場合が多い。以下、文脈上、円瓦当であることが自明の場合は瓦当と略し、必要に応じて円瓦当と呼ぶ。

半瓦当には、瓦当面を半分に切断するために入れたヘラや糸によって生じる「切断面」と、丸瓦部を半截するための分割截線・分割截面・分割破面や糸切り面が残る。

「切断面」

**半截（半裁）** 軒丸瓦円筒から円瓦当1個を得るには、大きく分けて2カ所を切断しなければならぬ。その一つは丸瓦部を縦に二等分するためのものである。少数の糸切り技法を除く多く

**分割線** の場合は、軒丸瓦円筒の外側あるいは内側から、刃物で丸瓦の厚さの半分前後に分割線を入れ、乾燥後に外側から打撃を与えて分割する。

今回観察した資料のうち、側面が残る例は丸瓦を含めて9例と少ないが、そのすべてが凸面側から浅い分割線を入れ、凹面側に分割破面を残す。分割線が浅すぎたせいか、一直線には割れずに破面の凹凸が大きくなり、これを修整するために凹面側を打ち欠く例が目立つ。分割線がなぜ浅いのか。分割前に歪むのを恐れたためか、あるいは逆にすでに乾燥が進んでいたためか、などの理由が思いつくが、正確な理由は不明である。

これ以外に、西周時代晩期の平瓦や丸瓦・半瓦当、あるいは戦国時代燕の〈山形紋〉半瓦当の一部のように、側面に糸切り痕を残す例もある。もちろん、粘土が軟らかい段階であれば糸切りも可能であるが、いったん切断してしまうと、その後の乾燥段階に歪んだり、重ねて干せなくなったりして不便なので、しだいに分割線を丸瓦断面の半ば近くまで入れ、場所をとるが円筒のまま乾燥させ、その後に分割する方法が定着したのであろう。

**半切と半切面** 今回報告する第2～4群の軒丸瓦では、軒丸瓦円筒完成直後に、糸をつけた「針」を基底部に貫通させ、その半分だけを切断する。この工程を示すときには「半切」、その痕跡を「半切痕」、それが残る面を「半切面」と呼ぶことにしたい。なお、中国ではこうした半切した瓦当を〈切當〉、その技法を〈切當法〉と呼んでいる（陳1963、劉1992）。

戦国時代末期から秦代にかけては、しだいに半瓦当に代わって円瓦当が多くなる。その作り方は基本的には同じであるが、半切の技法が少し異なる。

**半切の道具** 軒丸瓦円筒を半切して半瓦当2個、あるいは円瓦当1個を得る際には、鋭利な刃物か糸を用いる。すでによく知られているように、粘土がまだ軟らかい時に刃物で切断することは困難である。刃物で切るには、乾燥状況を注意深く見まもりながら、もっとも切断しやすい硬さになった頃を見計らう必要がある。軟らかすぎても硬すぎてもスムーズに切断できない。

軒丸瓦円筒がまだ作りたてで軟らかいときには、糸のほうが切りやすい。瓦や土器だけでなく、身近なところでは、チーズ、ゆで卵、羊羹など、包丁より糸や針金のほうが切りやすい食べ物も多く、ギザギザの刃をつけたなかなか優れたものの台所用品もある。なお、糸は撚り紐と称したほうが適切な太さではあるが、これも慣例にしたがい、糸切り痕と呼ぶ。

**ヘラ切りと糸切り** 半切の技法には、糸切りするa類と、刃物で切るb類がある。戦国時代から秦・漢代の半瓦当の切断面と円瓦当の半切面を概観すると、前者が古く、途中で後者が現れるようである。<sup>(1)</sup>その出現時期を明らかにする必要がある。なお、前者のほとんど刃こぼれのない滑らかな痕跡から推定すると、切断には、鉄や銅などの金属か、鋭く削った竹あるいは堅い木が用いられたと想定できるが、金属製の刃物と考えるのがもっとも妥当であろう。

**模骨と桶** あとで紹介する第3群や第4・5群のように、模骨を用いて軒丸瓦円筒を成形する例もある。模骨の模は型、骨は芯になるものを意味し、同形同大の丸瓦や平瓦を大量に生産するのに威力を発揮した。平瓦用のものも模骨であることに変わりはないが、日本では佐原が提唱した「桶状造瓦器具」の略称である「桶」や「桶巻作り」が定着しているので、それを尊重し、ここでは軒丸瓦円筒と丸瓦円筒の成形に用いるものを「模骨」と呼ぶ。

## E 糸切り半切技法の観察

今回報告した円瓦当は、その瓦当裏面下半に、糸切り技法で半切した痕跡をとどめる低い堤状の部分を残す例が多数を占める。表面に細かい黄土がこびり付き、糸の動きを見極めにくい例もあるが、大半は、糸の撚りによって生じた太細に起因する浅く細かい波状の凹凸、すなわち糸切り痕を鮮明に残す。この糸切り痕の観察およびごく初歩的な実験考古学の結果を、模式図と写真に示しながら、以下に説明する（第49図）。

軒丸瓦円筒の不用となる部分を切り離すためには、まず細い棒の一端に糸を結びつけるか、針孔を開けた「針」を用意し、糸を瓦当裏面すれすれか少し上の丸瓦部の基底部に貫通させる必要がある。実験では、単に結びつけるだけでは貫通時に糸が脱落するので、少なくとも棒の一端に切り込みを設ける必要があることが判明した。針孔を開ければ完璧である。

「針」と糸

たんなる棒か針か、その判別は良好な資料の蓄積を俟つかない。今回は、竹串を削った簡単な針を作って実験し、用語も針に統一する。なお先行研究の中には、棒の先端に糸を結びつけるとした例もある（谷1984、井内1998）。この方法でできないこともないが、突き刺すという工程を考えれば、裁縫と同じように工具の先端を尖らせ、末端に糸をつけたほうが作業はスムーズに進む。棒の先端に糸を結びつけた実例の有無については、針穴や瓦当裏面に残る擦過痕の詳細な観察が必要となる。なお、瓦当裏面すれすれに通過した針の擦過痕を見ると、断面を丸く加工したものと、角ばる場合がある。また、いうまでもないが、丸瓦部に残る糸を通した穴の大きさは、針の太さではなく糸の結び目の大きさを示す。

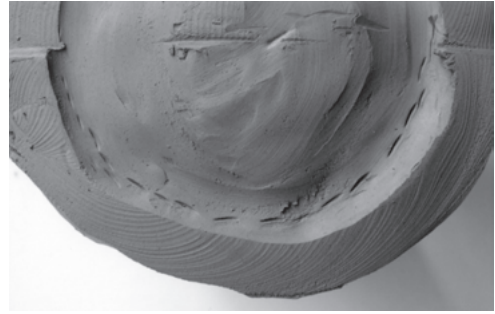
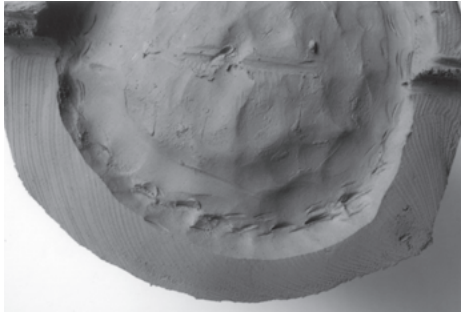
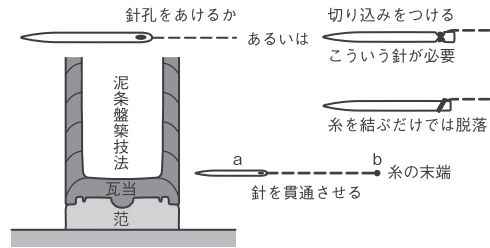
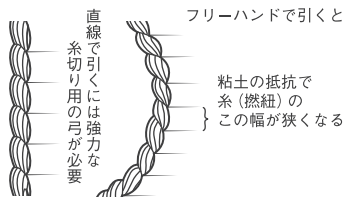
こうして貫通させた針と、糸の末端を両手で持って、糸切りすることになるが、実験の結果、以下のいく通りかの方法で針と糸を操作した場合、実際の糸切り痕に酷似する痕跡が生じることを確認した。もちろん、それらはあくまでも実験結果であり、これ以外の針や糸の操り方が存在する可能性も残る。また、両手への力の配分と糸の引き方、回転台の利用など、さらなる検討と実験も必要であるが、今回観察した資料にもとづき、最も簡単かつ実用的な方法を模式的に示しておく（第49図中・下段）。

糸切り実験

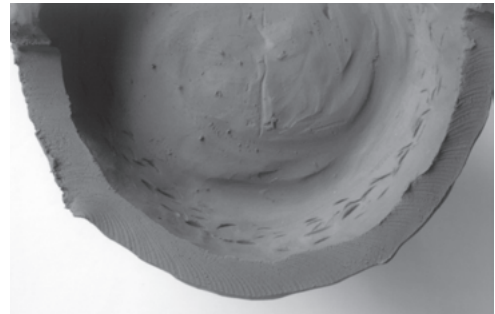
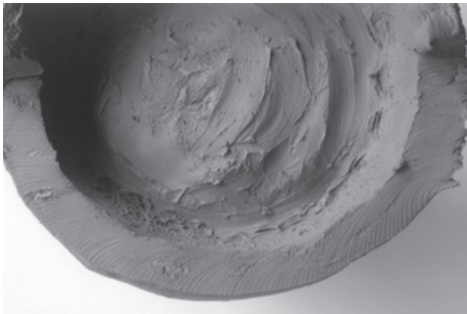
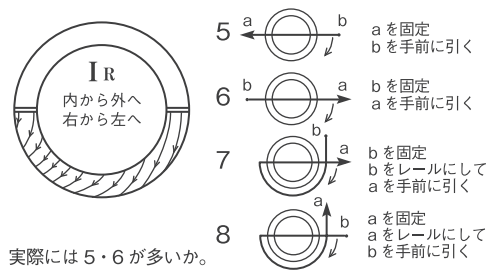
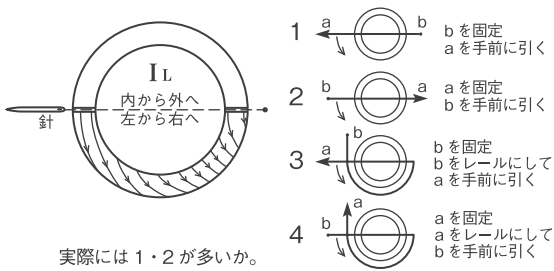
さて、造瓦における糸切り痕の観察は佐原真によって開始され（佐原1972）、私も中国雲南省の民俗例を紹介したり（大脇2003）、兵庫県志筑廃寺出土の平瓦に残る糸切り痕の分析を踏まえて、工人の異同を論じたりしたことがある（大脇2004）。

佐原が説くように、糸は均一の太さではなく、撚りをかけてあるので、上下に浅い波状の凹凸を残しながら粘土の中を走ることになる。また弓状の工具に糸を強く張れば話は別だが、今回観察した資料のようにフリーな糸を用いた場合、粘土の抵抗により、糸の動きはその中央が両端にくらべてしだいに遅れ、弧を描いて外へ抜ける。したがって、糸の動いた方向は一つひとつの撚りを示す波の幅が広いほうが糸の動き始めた位置を示し、狭いほうが糸の抜けた位置を示す（第49図上段）。切断時の針や糸の操作、つまり手の動きそのものは瓦に直接痕跡を残さないで、推定と実験結果に頼るしかない。したがって、今回は、まず確実な糸の動きの方向に依拠し、次のようにアルファベットの大文字と小文字を組み合わせて分類表記する。そして実験結果にもとづき、いくつかの針と糸の操作方法を可能なかぎり提示することにした。

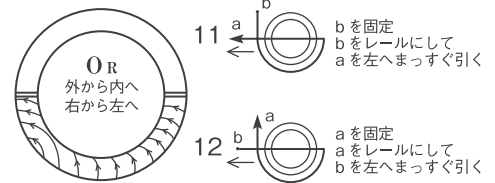
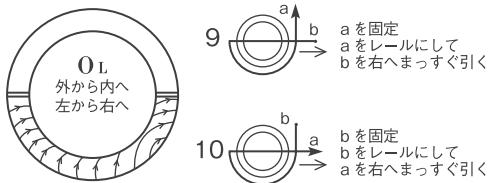
糸の動き方



I = inside



O = outside



糸切り痕が基本的にどちらの方向から走り始めるかを観察。ㄥ であらわす。

以上が基本的な糸切りの方法。ただし、糸の引き方、力の入れ方で少し変化する。

第49図 糸切り半切技法の分類

**糸切り痕の分類** 糸切り痕が、軒丸瓦円筒の内側 (Inside) から外へ走るものを I、逆に外側 (Outside) から中へ動くように見えるものを O にまず大きく分ける。

また、糸が基本的に左から右へ動くように見えるものを L (Left)、逆に右から左へ動くように見えるものを R (Right) で示す。

さらに、糸は基本的には左から右へ動くが、反対側の端を右側から引くものを L + R、逆に基本的には右から左へ動くが、反対側の端を左側から引くものを R + L であらわす。

そして、針にとりつく糸の位置、つまり糸の先端側を a、糸の末端側を b で図示する。

以上のアルファベットを組み合わせ、范を下にして立てた状態の軒丸瓦円筒に向かって作業すると仮定して説明する。なお、あとの「瓦当紋様と糸切り半切痕の関係」で紹介するように、范から外した軒丸瓦を、断面が半円形を呈する作業台上に横たえて半切・分割する方法も考えられる。この場合、上へ半切すると、范を下にして立てた状態とは左右の位置関係などが変わるが、今回は第49図の状態ですべて半切したものとして説明する。

**IL と IR の糸切り痕** 今回観察した資料で多いのは、第49図 1～4 (中段左) の IL なので、これを代表例としてまず説明しよう。

IL の諸例

1 は、范を下にして立てた状態の軒丸瓦円筒に向かって右側から通した針 a と糸の末端 b を両手で持ち、b を固定しつつ、a に力を入れて手前に引いた場合に生ずる糸切り痕である。

2 は、同じ状態の軒丸瓦円筒に向かって左側から通した針 a と糸の末端 b を両手で持ち、a を固定しつつ、b に力を入れて手前に引いた場合に生ずる糸切り痕である。

3 は、同じく軒丸瓦円筒に向かって右側から通した針 a と糸の末端 b を手前に半周させて交差させ、b を固定し、粘土円筒の手前に半周した糸の上を、いわばレール (「道糸」) にして、a に力を入れて手前に引いた場合に生ずる糸切り痕である。

4 も、軒丸瓦円筒に向かって左側から通した針 a を手前に半周させて糸の末端 b と交差させ、a を固定し、粘土円筒の手前に半周させた糸をレールにして、b に力を入れて手前に引いた場合に生ずる糸切り痕である。

この結果、1～4に残る糸切り痕はすべて同じ IL となり、これを相互に識別することは難しい。実際は一工程少ない 1 あるいは 2 が用いられた可能性が高いと思われる。今回報告した櫟陽城出土の 166・175 (図版 8) や、太上皇陵出土の 130・165 (図版 9・10) は、針穴の周囲に残る粘土のはみ出した痕跡から、針を左側から通し、左手で糸の末端を持って左から右へ糸を操作した、2 の典型例と考えられる。

3・4 の場合は、レールにした「道糸」の圧痕を将来確認できればその存在を証明できるが、「道糸」の下を糸切りすれば痕跡は残らず、「道糸」の上を糸切りするように a と b の交差を逆にした場合だけ確認できるということになる。

第49図 5～8 (中段右) は、1～4 の a・b を左右逆に引いた場合に生ずる糸切り痕 IR であり、これも 5～8 を相互に識別することは困難である。今回報告した櫟陽城出土の 142 と 151 (図版 3・4) がその実例である。なお、井内古文化研究室蔵の咸陽出土という資料 (井内 1998 の図版 2) は、針穴周囲に残るはみ出し痕からすると、針を右側から通し、右手で糸の末端を持って、糸を右から左へ操作した 6 の典型例ということになる。

IR の諸例

**OL と OR の糸切り痕** 第49図 9～12 (下段) は、実験当初、糸の操作方法が皆目わからなかつ

た例である。はじめ、貫通させた糸をさまざまな方法で外側から内側へ動かそうと試みたが、粘土の抵抗が大きく切断できないことが判明した。薄くても全体で十数cmにおよぶ幅の粘土を一挙に切断することは不可能で、無理に切ろうとすれば軒丸瓦円筒は潰れてしまう。そこで試行錯誤の結果、偶然、意外にもごく簡単に、しかもあまり力も入れずに切断できる方法があることがわかった。

#### OLとOR の再現

その方法とは、9のように、軒丸瓦円筒に向かって右側から通した針 a を、手前に半周させて糸の末端 b と交差させ、a を固定し、糸の末端 b に力を入れて右へまっすぐ引くだけである。これで、櫟陽城出土資料160 (図版7) に残る痕跡とまったく同じOLの糸切り痕が簡単に生じた。その他の方法もいろいろ試したが、これ以外の手法はまだ見出せないので、160もこの方法で切断したと判断せざるをえない。なお、このOLの糸切り痕を残す例は、今のところ少数派であるが、高浜市かわら美術館蔵の前漢中期と思われる「長生未央」円瓦当にも見られる。

一方、櫟陽城出土資料の123 (図版1) や138 (図版3)・144 (図版4)・168 (図版7)などは、右側から針を通し、糸の末端を手前に半周させて針にとりつく糸 a と交差させ、b を固定し、a をまっすぐ左へ引いた際に生じたORの糸切り痕 (第49図11) である。

10・12の場合も、針を通す方向や、a・bどちらを固定するかの違いがあるだけで、基本は同じであり、9と10のOL、11と12のORの識別困難なことは、1～8の場合と同じである。なお、井内古文化研究室蔵の雲紋円瓦当は、針を右側から通したことを示す粘土のはみ出しが針穴周辺に認められる好例である (井内1998の図版6)。また、同じく井内古文化研究室蔵の「長生」の2字をあらわす半瓦当は、丸瓦円筒の基底部に針を通し、瓦当面を正しく2分割するように糸を半周させて、糸の末端 b と交差させ、a を固定して糸の末端 b をまっすぐ引き、瓦当を切断した例である (井内1998の図版41)。こうした半瓦当の存在から推定すると、OLやORのやや特殊な糸切り技法は、半瓦当製作時に瓦当紋様をあまり損なわず、かつ正しく二等分する糸切り技法として案出・採用され、それが円瓦当の半切時にも用いられるようになったという可能性も考えられる。将来の検討課題としておく。

#### OLとOR 案出の背景

さて、以上、瓦当の糸切り半切技法について縷々説明を加えてきたが、こうした分類が果たして何の役に立つのであろうか。答えの一つは、この分類が工人集団や個々の工人を識別する際に役立つであろうという予測である。今回報告した櫟陽城出土の資料にも、128=129 (図版1)、141=147 (図版3・5)、142=148 (図版3・5)、146=159=175 (図版4・6・8) と、ごく少数ではあるが同范例があり、IRの142とILの148という一組を除くと、その糸切り痕はよく似ていることが確認できた。逆に、紋様がよく似ていても、異范であれば糸切り痕が異なる例も多い。実験を通して、針の通し方は利き腕の違いを、微妙な力の入れ方などによる糸切り痕の走り方の差は工人の癖を反映している可能性が高い、という感触を得た。また、やや複雑な糸の操作法を必要とするOLやORの糸切り痕を残す瓦は、工人集団における伝習を物語る可能性も考えられる。

#### 糸切り痕が 示す工人差

将来、同一遺跡出土の多くの同時代資料を、その他の属性と比較しつつ観察すれば、こうした研究が可能となるはずである。さらに、時間軸や空間軸を異にする多くの資料の観察を進めれば、また異なる糸切り痕に遭遇することもあろうし、針と糸の別の操作法を復元できるかもしれない。たかが糸と笑うなかれ。糸切り痕には大切な情報が秘められているのである。

**瓦当紋様と糸切り半切痕の関係** 今回観察した瓦当紋様の中で、輻線などを十文字に入れて主

紋様区を四等分する例は、半切にあたって必ず紋様の天地左右を意識し、完成した丸瓦を葺いたとき、紋様と整合するように針を入れている。一方、〈葵紋〉など、主紋様区を八等分する例は、半切する際に紋様と無関係に針を入れる。したがって、瓦当紋様が基本的に四等分された紋様をもつ第2群と第3群の製作にあたっては、紋様と針を入れる角度を間違わないようにする、なんらかの工夫があったと考えられる。なお、後述する「組み合わせ式模骨」を使う第3群では、瓦当裏面に残る馬蹄形圧痕と針を入れる角度はまったく無関係で、整合しない。

紋様と整合  
させた半切

針をいつ、どの工程で入れるかについては、いくつかの可能性が考えられる。一つは、すでに谷や井内によって提唱されているように、丸瓦部を横たえるための断面半円形の半切と半截用の作業台を利用する方法である。

半切の時期

もう一つは、范あるいは范をのせる作業台に、天地左右を示す印や記号などの合い印をつける方法である。井内古文化研究室蔵の漢代の「千秋萬歳」瓦当范の中には、范の外形がほぼ方形を呈し、その対角線に輻線を合わせた例があり（井内1998の図版50）、これなどは対角線上に針を入れればよいということになるが、文字瓦当の場合は2本ある対角線のいずれかを示す必要がある。井内資料は隅角の部分が欠損しており、こうした合い印の痕跡は認められない。その他、これまでに報告された秦・漢代の瓦当范に、天地左右を示す合い印を残す例は認められないようである（関野2005）。したがって、范を載せた作業台上に天地左右を示す何らかの工夫や合い印でもないかぎり、范にまだ軒丸瓦が載っている段階に針を入れることは難しい。

とすれば、谷や井内が想定するように、范から外した軒丸瓦を、断面が半円形を呈する作業台上に横たえて半切・分割する方法が妥当と考えられる。今回観察した資料、ならびに日本国内に所蔵されている資料の分割截線の観察結果も、こうした作業台の存在を支持する例が多い。とくに分割截線を長く残す良好な井内資料（井内1998の図版7・15・19）に残る分割截線は、いずれも定規を利用したかのような直線を呈しており、こうした作業台を利用して半切を行い、分割截線を入れた可能性が高いことを裏づけている。

## F 製作技法からみた櫟陽城と太上皇陵出土瓦当の分類

以下、今回観察した資料を、製作技法に基づいて5群に大別し、報告する（第8～11表）。

**第1群** 中国における最初の瓦作りは、型を一切利用しない手作りで始まった。つまり、土器と同じ手捏ね・手捻りの技術で瓦は作られたのである。この、瓦当范も模骨も一切使用せず、100%手作りで瓦当を作るものを第1群とした。今回報告した資料では、櫟陽城出土の無紋円瓦当157（図版6）と169（図版8）・190がこれにあたる。その製作工程は次のように復元できる。

型を利用し  
ない手作り

第1群の  
製作工程

- (1) 作業台上に適当な大きさの粘土円板を置く。
- (2) その外周に沿って粘土紐を巻き上げ、叩き板・当て具技法（「叩き板・当板技法」）で軒丸瓦円筒を作る。
- (3) 軒丸瓦円筒の上部に玉縁をつける。軒丸瓦円筒完成。
- (4) まだ粘土が軟らかい軒丸瓦円筒の基底部に、糸をつけた針を貫通させて半切する。この方法を半切技法a類と呼ぶ。今回報告する第2群以下の資料の大半がこれに属する。

一方、第1群には、鋭利な刃物（ヘラ）で基底部を半切するヘラ切り半切技法もある。こ



第8表 櫛陽城出土瓦当の製作技法による分類（1）

資料整理番号	図版番号	紋様区分割	単位紋様	幅線	圏線	内区	外区	製作技法	紋様と半切	糸切り半切技法	丸瓦部の製作技法・備考
123	1	4	4	2	1	6×6正格子	uC	第3群b類	整合	OR	凸面ナデ 凹面布筒の裾端、瓦当裏面から約2cm離れる布筒縫い合わせ目明瞭 凸面からヘラ切り、分割破面残る
124	1	4	4	2	1	3×3正格子 + 4×2斜格子	2hgJ + uC + 珠紋	第3群c類	整合	II	凸面ナデ 凹面布目 内区紋様は不整
127	1	4	4	1	1	欠損不明	2onJ + sC	第2群	整合	IR+L	外区は特殊な雲紋
128	1	4	4	1	1	1J×4	2ogJ	第2群	整合	II	瓦当裏面指ナデ 瓦当側面粗い板ナデ、瓦当面紋様に指紋目立つ 129とは丸瓦の取りつき位置180°異なる 外区は〈葵紋〉に後続する紋様、〈羊角紋〉 129と同范、范傷一致
129	1	4	4	1	1	1J×4	2ogJ	第2群	整合	II	瓦当裏面手掌押さえ、凹面沿いに〈麻点紋〉 風当て具痕 瓦当側面粗い板ナデ、瓦当面に指紋目立つ 128と同范、范傷一致 128と129は同一工人の作か
131	2	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	II	
132	2	/	8	/	1	2J×3	2J×8	第3群c類	不整合	II	
133	2	/	8	/	/	2J×3 + △×3	2J×8	第3群a類	不整合	ヘラ削り	凸面細かい縄叩き目ナデ 凹面布筒裾端明瞭
134	2	4	4	2	1	2×2正格子 + 8×8正格子 + 5×5斜格子	2hgJ + uC + 珠紋3	第3群b類	整合	II	内区紋様は不整
135	3	4	4	2	2 + △	〈乳丁〉 + 珠紋12	uC	第5群	/	/	瓦当裏面縄叩き目ナデ、中央に指頭による深い押圧 前漢中期以降
136	2	4	4	2	1	4×4斜格子	2hnJ	第3群a類	不整合	II	瓦当裏面、凹面に沿って半円形の圧痕顕著
137	3	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	II	
138	3	4	4	2	1	5×5斜格子	2hnJ	第3群c類	整合	OR	
140	6	4	4	/	1	四等分線 + 珠紋4 + 2hnJ×4	2knJ + uC + 一筆描き	第2群	整合	II	凸面、縄叩き目ナデ 瓦当面に木口とは異なる不規則なひび割れ状の范傷顕著 陶製范か 瓦当裏面中央、指押さえの凹凸著しい
141	3	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	II	147と同范
142	3	4	4	2	1	〈小乳丁〉 + 四葉紋	2hgJ + uC	第2群	整合	IR	瓦当裏面凹面沿い、指押さえによる凹凸顕著 148と同范、同范で糸切り半切技法の方向が異なる例 148とは丸瓦の取りつき角度180°異なる 幅線〈竹節紋〉梯子状
143	4	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	不明	模骨1とr、内側へ少しずらした痕跡あり
144	4	4	4	2	1	4×3斜格子	2hnJ	第4群	整合	OR	瓦当は薄手の作り、瓦当面に赤色顔料塗る 瓦当裏面中央には布痕なく、指で押さえた圧痕残る 144と166の雲紋はかなり異なるが、ほぼ同時に存在した可能性大
145	4	/	8	/	/	珠紋1 + 2J×3 一筆描き	2J×8 一筆描き	第2'群?	不整合	II	凸面横ナデ、凹面細かい格子口当て具痕 +タテナデ 粘土紐接合痕向かって左上り

第9表 櫟陽城出土瓦当の製作技法による分類(2)

資料整理番号	図版番号	紋様区分	単位紋様	輻線	圏線	内区	外区	製作技法	紋様と半切	糸切り半切技法	丸瓦部の製作技法・備考
146	4	4	4	1	1	四等分線 + 小三角紋×4	2ogJ	第2群	整合	IL	159、175と同范 丸瓦取りつき位置180°異なる
147	5	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	IL	凸面ナデ、凸面側から分割線、破面残る 凹面に布筒縫い合わせ目あり 141と同范、丸瓦取りつき位置ほぼ同じ 組み合わせ式模骨も同じか
148	5	4	4	2	1	〈乳丁〉 + 四葉紋	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	瓦当裏面丸瓦凹面沿い、指押さえによる 凹凸著しい 142と同范
151	4	4	4	1	/	四等分線 + 1J×4	2onJ	第2群	整合	IR	瓦当紋様は〈葵紋〉に後続する
152	5	/	8	/	/	八等分線	2J×8 筆描き	第2群	整合	IR?	瓦当紋様は〈葵紋〉に後続する 瓦当裏面凹凸頭著、丸瓦凹面沿い指押さえ
153	5	4	4	2	1	6×8 斜格子	2hnJ	第3群c類	整合	IL	
154	5	4	4	1	/	四等分線 + 珠紋4	2knJ + uC	第2群	整合	IL?	173と内区紋様同じ
155	6	/	8	/	/	二頭渦紋	2J×8	第3群a類	不整合	IL	瓦当面に赤色顔料塗る
156	6	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	欠損不明	凹面布筒裾端の縫い目残る
157	6	/	/	/	/	無紋	無紋	第1群	/	ヘラ切り	一見半瓦当に見えるが無紋凹瓦当 瓦当裏面に当て具の擦痕顕著に残る 瓦当面には何か細かい圧痕残る
158	6	4	4	1	1	〈乳丁〉 + 珠紋12?	2hgJ + uC	第2群?	欠損不明	欠損不明	瓦当裏面繩叩き目重複、凹面沿い指ナデ
159	6	4	4	1	1	四等分線 + 小三角紋×4	2ogJ	第2群	約25° ずれる	IL	瓦当裏面丸瓦凹面沿い指ナデ 146、175と同范
160	7	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群a類	不整合	OL	137に似るが同范ではない
161	7	/	5/5	/	/	二頭渦紋	舌状J字形 5+5	第2群	不整合	IL	瓦当裏面指押さえナデ 外区紋様〈蕉葉紋〉
162	7	/	8	/	/	2J×3	2J×8	第3群b類	不整合	不明	
163	7	(4)	4	1	1	7×(7) 正格子	2hnJ + sC	第2群	整合	欠損不明	凸面繩叩き目ナデ 凹面ていねいなナデ 瓦当裏面丸瓦沿いに強く指ナデ 瓦当面に赤色顔料塗る
166	8	4	4	2	1	四等分線 + L字形×4	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	針は向かって左から右へ抜く 瓦当裏面指ナデ、丸瓦凹面沿い指押さえ
167	8	/	4/4	/	1	五条渦紋	舌状J字形 4+4	第2群	不整合	ヘラ削り	凸面ナデ 瓦当裏面指ナデ 外区紋様〈蕉葉紋〉
168	7	4	4	/	1	四等分線 + L字形×4	2ogJ	第4群	整合	OR	瓦当は薄手の作り、瓦当裏面中央に布目 は及ばず、やや凹凸あり 少数派の雲紋、〈葵紋〉との関係が強い
169	8	/	/	/	/	無紋	無紋	第1群	/	ヘラ切り	無紋凹瓦当、瓦当面全面に細かな圧痕 瓦当側面に丸瓦部分割時の目安につけた と思われるヘラ痕あり 瓦当裏面に粘土紐接合時の当て具の一端 が当たったとみられる楕円状の擦痕残る
171	7	/	/	/	2	7×(7) 正格子	無紋	第2群	正格子と 整合	IR?	瓦当裏面丸くナデ 凸面板ナデ 凹面当て具痕〈麻点紋〉 高温で焼成、焼けひずみ顕著

第10表 櫟陽城出土瓦当の製作技法による分類（3）

資料整理番号	図版番号	紋様区分割	単位紋様	幅線	圏線	内区	外区	製作技法	紋様と半切	糸切り半切技法	丸瓦部の製作技法・備考
172	8	/	8	/	/	2J×3 珠紋3 一筆描き	2J×8 一筆描き	第3群b類	不整合	欠損不明	凸面細かい縄叩き目+ナデ 凹面布筒綴じ合わせ目 凸面側からヘラで分割線を入れる、破面わずかに残る
173	-	4	4	1	/	欠損不明	2knJ + uC	第2群	整合	欠損不明	凸面板ナデ 凹面当て具痕、粘上紐合わせ目 154と内区紋様同紋 特殊な雲紋、少数派
174	8	4	4	2	1	2J×3	2hgJ + uC	第3群	整合	欠損不明	凸面ナデ 凹面布筒裾端痕明瞭 (葵紋)と2hgJ+uCの折衷式、(葵紋)と2hgJ+uCが年代的に近いことを示す
175	8	4	4	1	1	四等分線 + 小三角紋×4	2ogJ	第2群	整合	IL	凸面斜め縄叩き目+板ナデ 凹面(麻点紋)、粘上紐接合痕明瞭 凸面側からヘラで分割線を入れる 針、向かって左から右へ抜ける 146、159と同范
176	9	4?	4?	欠損不明	1	欠損不明	欠損不明	第2群?	欠損不明	欠損不明	凹面に(麻点紋) 瓦当面に円形の穿孔2以上あり、瓦当裏面側にめくれがあり、范から外したあとで瓦当面側から穿孔したか
190	-	/	/	/	/	無紋	無紋	第1群	/	欠損不明	一見半瓦当だが針穴あるので円瓦当か 凸面細かい縄叩き目+横ナデ 凹面ナデ、当て具の痕跡不明、粘上紐接合痕明瞭 瓦当裏面指ナデ 丸瓦部側面糸切り

第8～10表補註

- (1) 紋様区分割は、それが判明する42例のうち4区分割が26例(61.9%)、8紋様単位のもの14例(33.3%)、(蕉葉文)2例(4.8%)という比率になる。4区分割が6割以上を占めるが、8紋様単位も多く、太上皇陵出土例と好対照をなしており、櫟陽城出土例のほうがやや古い様相を示すと考えられる。幅線については、幅線のないもの19例(45.2%)、1条で4区に分けるもの11例(26.2%)、2条で4区に分割するもの12例(28.6%)という比率である。幅線なしと幅線のあるものがほぼ拮抗し、前者が古い様相を示していると思われる。幅線1条と2条もほぼ同数であるが、これは、後に主流となる2条の幅線で4分割する紋様構成が、この時期にはまだ確立していないことを示すのであろう。
- (2) 外区の紋様は、(葵紋)16例(34.8%)、雲紋25例(54.3%)、無紋4例(8.7%)、不明1例(2.2%)に分類できる。(葵紋)の2J×8が14例(30.4%)と最も多く、これに雲紋の2hgJ+uCが7例(15.2%)、2ogJが6点(13.0%)、2hnJが4例(8.7%)と続く。また、(葵紋)の2J×8と雲紋の2knJ+uCと2ogJが太上皇陵では認められないのも大きな違いで、これがそのまま僅かな時代差を示す可能性もあり、今後の検討が重要となる。
- (3) 圏線1条をめぐらすもの24例(52.2%)、2条をめぐらすもの2例(4.3%)、圏線をめぐらさないもの20例(43.4%)である。圏線をもつ例が過半数を占めるが、圏線をもたないものも4割強あり、太上皇陵例にくらべて、これまた古い様相を示すものと考えられる。
- (4) 内区の紋様は多様であるが、その中でも格子類が9例、2J×3が13例とややまとまりを見せる。
- (5) 製作技法は、第1群が3例(6.5%)、第2群が21例(45.7%)、第3群aが10例(21.7%)、第3群bが4例(8.7%)、第3群cが4例(8.7%)、第4群が2例(4.3%)、第5群が1例(2.2%)、第3群の類別不明1例(2.2%)という比率となる。第2群と第3・4群がほぼ同じ比率を示しており、太上皇陵例にくらべて第3・4群の比率が高い、という特徴を指摘できる。
- (6) 瓦当紋様と半切する位置の関係は、4区分割する紋様構成の場合、葺いた際に幅線が正しく十文字になるように、丸瓦の取りつきを考慮して針を貫通させ、半切・半截する。
- (7) 糸切り半切技法は、ILが21例(45.7%)、IRが5例(10.9%)、OLが1例(2.2%)、ORが4例(8.7%)、ヘラ切りが2例(4.3%)、ヘラ削りその他が13例(28.3%)で、ILがほぼ半ば近くを占め、IRが1割、OLはきわめて少なく、ORが少しある。

以上の諸特徴が、櫟陽城築城期の瓦当紋様や製作技法の年代的・地域的特色を示していると考えられ、同様の特色をもつ瓦当の年代や系譜を考える際の参考となる。

第11表 太上皇陵出土瓦当の製作技法による分類

資料整理番号	図版番号	紋様区分割	単位紋様	幅線	圏線	内区	外区	製作技法	紋様と半切	糸切り半切技法	丸瓦部の製作技法・備考
125	9	/	8?	/	1	欠損不明	変形鋸歯状紋 + 珠紋	第2群	不整合	欠損不明 針穴明瞭	凸面縄叩き目+板ナデ 凹面縄巻き当て具痕、凹凸著しい 凸面からヘラで分割線を入れ、破面わずかに残る 瓦当紋様類例少ない
126	9	4	4	2	1	6×5正格子 + 5×5斜格子	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	凸面縄叩き目+回転利用板ナデ 凹面粘土紐接合痕明瞭 凸面側からヘラで分割線を入れる 瓦当裏面指頭による押さえ顕著
130	9	4	4	2	1	3×3斜格子	2hnJ	第2群	整合	IL	瓦当裏面中心部丁寧な指ナデ、周囲は粘土紐接合時の指ナデ顕著 針は向かって左から右へ抜く 外縁に圧痕多い、乾燥時についてたものか
139	9	4	4	2	1	3×3斜格子	2hnJ	第2群	整合	欠損不明	丸瓦部剥離、粘土紐接合前の瓦当裏面のナデ仕上げの状況がよくわかる例 瓦当裏面指押さえ
149	10	4	4	3	1	八葉紋	2hgJ	第2群	整合	IL	糸切り半折後に丸瓦部側面にヘラで分割線を入れる 八葉紋は立体的表現、葉脈をあらわす
150	10	4	4	2	1	4×4斜格子	2hgJ	第3群b類	整合	OR?	横骨1を内側に動かした際について粘土の動き顕著 瓦当薄手の作り
164	10	4	4	2	1	〈乳丁〉 + 四葉紋	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	瓦当裏面に粘土紐最下段を接合した際の指頭圧痕が顕著に残る 四葉紋は平面的表現、葉脈をあらわす
165	10	4	4	2	2	〈小乳丁〉 + 小圏線 + 幅線紋風	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	凹面に沿って細かい当て具痕 針は向かって左から右へ抜ける
170	10	4	4	2	1	珠紋 4+11+17	2hgJ + uC	第2群	整合	IL	凸面縄叩き目、粘土紐接合痕残る 凹面粘土紐接合痕、当て具痕残る 瓦当裏面に瓦当成形時の叩き目顕著に残る 瓦当側面、瓦当寄り3cmほど糸切り痕残る、その先は凸面側からヘラで分割線

## 補 註

- (1) 紋様区の分割は、欠損した例を除く8例のうち、149を除くすべてが、2条で一組となる幅線で4分割しており、扇形に分けられた外区に単位紋様4を配する。したがって、太上皇陵築造の時期には、幅線で外区を4分割する紋様構成がほぼ確立していたことがうかがえる。
- (2) 外区の紋様は、9例中、125を除くすべてが雲紋であることが特徴である。中でも2hgJ+uCが4例と多く、2hnJ(2例)と2hgJ(2例)がそれに次ぐ。これもこの時期の特徴の一つになる。
- (3) 内区の紋様はきわめてバラエティに富み、主流になる紋様がまだ確立していないのが、この時期の特徴である。斜格子や正格子に加え、四葉紋、八葉紋、小圏線・幅線紋風、蓮子風などがある。
- (4) 製作技法は、第2群が8例、第3群が1例であり、第2群が主体を占める。
- (5) 瓦当紋様と半切る位置は、葺いた際に幅線が正しく十文字になるように、丸瓦の取りつきを考慮して針を貫通させ、半切・半載する。
- (6) 糸切り半切技法は、ILが6例、OR? 1例、不明2例で、圧倒的にILが多い。

以上の諸特徴が、太上皇陵築造期の瓦当紋様や製作技法の年代的・地域的特色を示していると考えられ、同様の特色をもつ瓦当の年代や系譜を考える際の参考となる。

の工程は、粘土の特性を考慮すると、まだ軟らかい段階には困難であり、少し乾燥させたのち、刃物による切断がもっともやりやすい時間帯を選んで行わねばならない。こうしたヘラ切り半切技法で完成した円瓦当を、半切技法b類と呼ぶ。

各種の図録や報告書にごく稀に載せられている半切面や、わが国にもたらされた数少ない実物資料の観察によると、このヘラ切り半切技法を用いる例は、戦国秦の雍城（～前384年）出土の鳥獸紋円瓦当に多く、また戦国燕の下都（～前222年）出土の〈饗饗紋〉半瓦当や、戦国斉（～前221年）の樹木紋半瓦当の大半もこのb類に属するようである。したがって、櫟陽城出土の157と169・190の無紋円瓦当は、戦国秦の獻公と孝公の時代の櫟陽城（前383～350年）の遺物である可能性が高い。

(5) 次いで、軒丸瓦円筒を縦に二等分するため、丸瓦部狭端に向けて糸切りするか、分割截線を入れて半截する。櫟陽城と太上皇陵出土の円瓦当は、すべて凸面側からヘラで分割截線を入れており、これを分割技法b類と呼ぶ。また、凹面側から分割截線を入れるものもあり、これを分割技法c類とする。ただし、西周初期の半瓦当の中には、分割も糸切り技法で行う例があるので、それを分割技法a類とする分類を設けておく。

(6) 乾燥。

(7) 焼成。

**第2群** 瓦当裏面に、粘土を押しつけて施紋した際の掌紋や指紋、最下段の粘土紐接合時の指押さえや爪痕の痕跡を残し、またその下半に、軒丸瓦円筒の基底部分を半切した半円弧を描く突帯を残すものを第2群とした。瓦当紋様は〈葵紋〉と雲紋である。その製作工程は以下のように復元できる。

第2群の  
製作工程

(1) 作業台上の范に適当な大きさの粘土円板を載せ、瓦当紋様を施紋する。

(2) 瓦当裏面の外周上に粘土紐を巻き上げ、軒丸瓦円筒を作る。

(3) 軒丸瓦円筒の上部に玉縁をつける。軒丸瓦円筒完成。

(4) まだ粘土が軟らかい段階で、完成した軒丸瓦円筒の基底部分に糸をつけた針を貫通させ、半切するa類が多い。もちろん、ヘラで半切するb類も、少数ではあるが存在する。

(5) 次いで、軒丸瓦円筒を縦に二等分するため、針穴の上から玉縁に向けて分割截線を入れる。

(6) 乾燥。完成後、刻々と乾燥しつつある軒丸瓦円筒を半切し、また分割してさらに乾燥させるまでの具体的な工程については、不明な点も多い。ただし、分割破面を観察すると、粘土がまだ軟らかい段階で切断した例は皆無であり、ヘラによる沈線を丸瓦部の厚さの1/3ほど入れた浅い分割截線が多く、凹凸のある破面をそのまま残す資料が多い。よって、基底部分を半切し、分割截線を入れた状態で横たえ、乾燥させた例が多いと思われる。瓦当面や玉縁を下にした状態での乾燥も考えられないわけではないが、せっかく半切した半切面が付着してしまう恐れがあり、その可能性は低い。いずれにしても、こうした観点からの圧痕等の観察が今後の課題となる。

(7) 乾燥後、分割截線に打撃を与え、軒丸瓦円筒の不用部分を割り取る。ただし、半切技法b類の中には、(4)の半切の工程と同時に、丸瓦部もヘラで分割する例もある。

(8) 分割後、さらに乾燥させ、焼成。

なお、先行研究によれば、別の工人が別の作業台上で叩き板・当て具技法で作った丸瓦円筒

を、瓦当裏面や瓦当側面に接合する技法の存在も指摘されており(谷1994、井内1998)、それを裏づける資料もいくつか実見した。この技法を採用すれば、1個の軒丸瓦の製作時間を若干短縮できる利点がある。瓦当の製作とそれに丸瓦円筒を接合する工程に専念する工人と、いわば部品である丸瓦円筒の製作だけに従事する工人による分業の成立であり、一つの画期として評価できる。さらに、複数の工人が丸瓦円筒作りにあたれば、効率的な量産が可能となる。

分業の成立

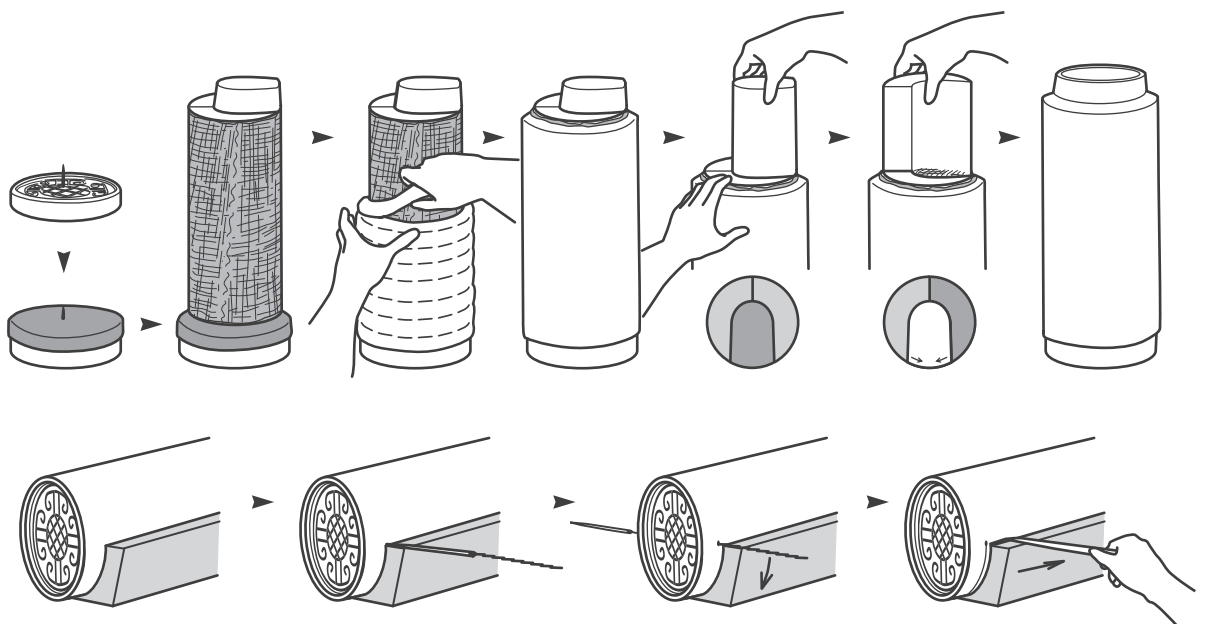
また、今回紹介する資料や未央宮5号建築出土例の中にも、そうした可能性が高い例が存在する(山崎本書所収論考)。さらに、このたび試みた製作実験でも、長さ約50cm、内径約15cm、玉縁の内径約12cmの丸瓦円筒を瓦当裏面上に立て、上から腕を入れて丸瓦円筒の基底部凹面を瓦当裏面に接合したり、接合用粘土を足したりすることが可能であることを確認した。したがって、別にもう一群を設ける必要がある。

ただし、今回紹介する第2群のすべてについて、瓦当裏面に直接粘土紐を巻き上げて軒丸瓦円筒を作る技法か、別の工人が別の作業台上で叩き板・当て具技法で作った丸瓦円筒を瓦当裏面に接合したものかを識別することが困難な場合も多い。もちろん、接合面できれいに剥離するなど、たった1点でも作り方のポイントがよくわかる例も稀に存在する。しかし、完形品と破片などを多数観察しなければ復元できない場合のほうが多いのが現実である。したがって、ここではこうした技法によるものを、とりあえず第2'群と呼ぶこととし、良好な資料の蓄積を俟つことにしたい。

**第3群** 瓦当裏面に、複数(3~6個?)の部材を組み合わせて円柱状にした模骨下端の「馬蹄形にみえる圧痕」を残すものを、第3群とする。第1・2・2'・4群と同じく、瓦当裏面の下半には、軒丸瓦円筒の基底部を糸切り技法で半切した、半円弧を描く突帯が残る。

瓦当裏面に馬蹄形圧痕

1994年の調査直後には、こうした痕跡を残すものを、「分解式模骨」として報告した(岸本1994)。しかし、その後の調査検討によって、第4群の成形に用いる模骨を「一体式模骨(木製で



第50図 第3群瓦当の製作工程

組み合わせ式模骨

あれば一木式) 」と呼称し、それに対応する「組み合わせ式模骨」と呼ぶのが適切であるとの結論に達したので、今回改称する<sup>(2)</sup>。なお、こうした組み合わせ式模骨が考案された背景には、それまでは熟練した工人の手が記憶する丸瓦の寸法(外径・内径・高さなど)を、型の使用によって統一し、また効率化する目的があったものと思われる。

第3群に属する資料のうち、丸瓦部を少しでも残す例には、その凹面に布圧痕がみられ、また布の綴じ合わせ目を明瞭に残す例(147・172)(図版5・8)もある。瓦当裏面に立てた組み合わせ式模骨に布筒をかぶせ、その外側に粘土紐を巻きつけて軒丸瓦円筒を成形し、組み合わせ式模骨を順次引き抜いて布筒を外した後、丸瓦の基底部分を半切し、丸瓦部を分割する技法が復元できる(第50図)。布端を観察すると、基本的には布端がほつれないように、裁ち目を少し折り重ねて縫っているため、圧痕では幅の狭い浅い溝状を呈する。この布端が基底部まで達する例(133・136・162・172)(図版2・7・8)と、模骨下端まで布筒が達せず少し隙間を生じ、模骨の圧痕が丸瓦部凹面に直接残る例(123・124・147・156)(図版1・5・6)がある。

素材は粘土焼成品か

組み合わせ式模骨の素材は不明であるが、木目や木特有の傷がはっきり生じた例が認められず、また欠損部にみられる微妙な凹凸から推定すると、粘土焼成品である可能性が高い。したがって、生産地での実例の発見が将来的には期待できる。

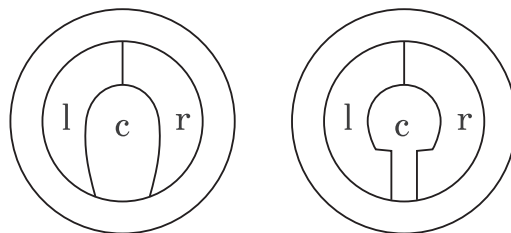
**組み合わせ式模骨の復元** 20例ある組み合わせ式模骨の形は微妙に異なり、同一個体であると確認できる例はない。中央にやや角張った小判形、あるいはキノコ形に近い模骨c(centerの略)を置き、その左右に、基本的には曲がった角状の模骨r(rightの略)とl(leftの略)を組み合わせると、馬蹄形を呈するようになる(第51図)。さらに、櫟陽城出土の131(図版2)や太上皇陵出土の150(図版10)のように、キノコ形を呈する模骨cの「石突」にあたる部分の左右にも小さな模骨を組み合わせて、完全な円形にしたと思われる例がいくつかあるが、なお痕跡不明瞭であり、さらなる精査が必要である。なお、この不明瞭さは、模骨rとlを抜くときに、内側に少し動かしてから抜いた際に生じた可能性も考えられる。太上皇陵出土の150のような良好な痕跡をとどめる資料の出現と、その詳細な観察に期待したい。

それぞれの模骨が接する部分を観察すると、基本的には中央のcが一段高く、それ以外が低い。また、模骨相互の合わせ目には、粘土のはみ出しがバリ状に残るという共通点がある。

瓦当裏面中央の孔

**瓦当を貫くピンの存在** 中央の模骨cには、櫟陽城出土の131・136・137・141・143・147・155・156・160(図版2～7)のように、瓦当裏面の正しく中央にあたる位置に径6mmほどの孔が貫通する例がある。これをa類とする。また、櫟陽城出土の123・134・162・172(図版1・2・7・8)、太上皇陵出土の150(図版10)のように、同じ位置にほぼ同じ径の低い円形突起を残すものもあり、これをb類として、櫟陽城出土の124・132・138・153(図版1～3・5)のように、こうした痕跡を何も残さないものをc類とする。

a類の孔の周囲を観察すると、瓦当面側から瓦当裏面に向かって粘土が少し動き、はみ出した例が見出せる。これは、成形時に、范と瓦当の中心を貫くピンが存在したことを示す。



第51図 組み合わせ式模骨の復元2例

b類の低い円形突起は、その位置と形から推定すると、このピンの先端が折れたか、あるいはなんらかの理由で取り外されたあと、組み合わせ式の模骨cの下面に穿たれたピン受けの孔に瓦当裏面の粘土が少し食い込んでできたものと思われる。

c類は、この模骨c下面の孔がはじめから開けられていなかったか、または粘土で完全に埋まり、痕跡すら残さなくなった段階のものである可能性が考えられる。

井内古文化研究室蔵の資料中には、伝西安出土という「千秋萬歳」瓦当范があり、その中央には円孔が貫通する（井内1998の図版50）。また、秦・漢代の西安市や洛陽市周辺出土の〈葵紋〉瓦当・雲紋瓦当・文字瓦当の中に、中心に貫通する小孔を有する例も多い。こうした例を参考にすると、中心にピンを取り付けた回転台の存在が推定できる。

第3群にみられるピンの直径は6mmほどで、回転台上に伸びるその長さは「范と瓦当の厚さ+組み合わせ式の模骨cを固定できるだけの長さ」となり、少なくとも5~6cm程度は必要となる。遠心力を利用する土器のロクロ成形を体験すればわかるように、回転台と范の中心が合わないと、作業が順調に進まない。第2群に属する可能性が高い櫟陽城出土の158（図版6）も瓦当中央に貫通する孔があり、こうした回転台に取り付けたピンの存在が必ずしも第3群だけに限定されないことを裏づけている<sup>(3)</sup>。

第2群にも  
ピンが存在

さらに、第3群のピンにはもう一つの重要な機能がある。もしこのピンがなければ、范に粘土を置いてしまうと、瓦当の中心を正確に知ることができなくなってしまうのである。したがって、このピンは、范を回転台の中央に正しく固定し、さらに瓦当となる粘土円板を間にはさみ、組み合わせ式模骨cの中心をも合わせるといふ、かなり面倒な作業を一挙に行うための装置であったと考えられる。このピンがない状態では、瓦当の中央に正しく、組み合わせ式模骨cの中心を合わせることは少々難しい作業となる。

ピンの機能

また、このピンは、その長さとしてそれを受ける模骨cの孔の深さを調節することで、瓦当中心部の厚さを一定に保つという役割も果たす。瓦当裏面の中心に位置する模骨cの痕跡だけが、必ず一段高くなるという現象も、このピンの存在があってはじめて理解できる。

こうしたピンや組み合わせ式模骨の存在から、第3群の製作技法の起源について考えると、その背後に、中国古代における鑄造技術の高度な発展と、この時期にその影響が造瓦技法に及んだ可能性が浮かび上がってくる。複雑な器形を呈する青銅製容器の鑄造には、組み合わせ式で分解可能な内型（中子）の発達が不可欠である。また、内型と外型を固定し、器壁となる空間を一定の厚さに保つための「型持」や「銅釘・筭<sup>こうかい</sup>」も必要となる。第3群のa・b類に残るピンの痕跡は、鑄造技術における「銅釘・筭」と共通する役割を果たしたものと推定できる。

ただし、b・c類の存在から考えると、回転台と范を貫き、組み合わせ式模骨cに達するピンがなくても、作業を進めることはできたようである。それが、作業の熟練によるものなのか、または回転台や范に何らかの工夫を施したものであったのかは、今後の資料の増加を俟たねばならない。なお、以上の推定が的を射ているとすれば、櫟陽城と太上皇陵出土の第2群や第3群a類に属する瓦当紋様をもつ例が相対的に古く、ついで第3群b類、第3群c類としたいに新しくなるという仮説が成り立つ（第52図）。〈葵紋〉からuCや2hnJ・2hgJ、さらに2hgJ+uCなどの雲紋への推移をあらわしたこの図は、型式の出現頻度（頻度セリエーション）を示した「紡錘形もしくは凸レンズ形」（横山1985）、あるいは「戦艦形曲線」（コリン＝レンフルーほか2007）にたとえら



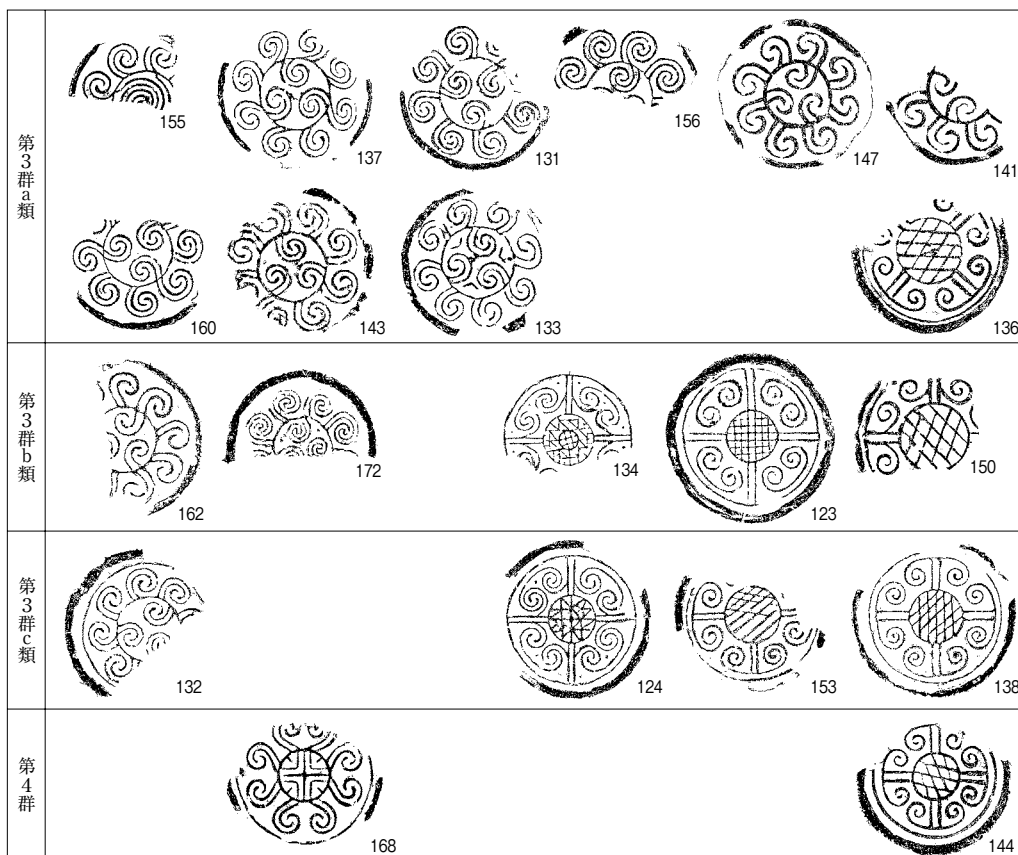
れる形の、下半と上端があらわれていると見ることもできる。なお、第3群の年代的位置については、註2を参照されたい。

瓦当裏面の  
布の圧痕と  
下半の突帯

**第4群** 瓦当裏面の中央部(直径約5cm)を除く幅3cmほどの範囲に布圧痕を残し、また瓦当裏面下半に、軒丸瓦円筒の基底部を半切した突帯を残すものを第4群とした。今回調査した資料では、櫟陽城出土の雲紋円瓦当144と168(図版4・7)がこれに属する。

この2例の瓦当裏面に残る布圧痕は、一見すると、わが国の大津市南滋賀廢寺出土例に代表される、いわゆる一本作り(一本造り)軒丸瓦のそれに似ているが、瓜二つではない。布端の始末の仕方は今後の精査を要するが、紐などで縛っているようすは見受けられない。168の布端は一部ほつれ、糸が乱れている部分もあるが、基本的には布端がほつれないように、裁ち目を少し折り重ねて縫うため、圧痕は幅の狭い浅い溝状を呈する。144も同様であるが、こちらはまだほつれていない。ただ、両者とも、布を無理に折り曲げた際に自然に生じる細長い三角形の折り重ね部分、すなわち襞<sup>ひだ</sup>が放射状にあらわれている。こうした観察によれば、南滋賀廢寺例のような、あらかじめ模骨の全面を覆うために布端を紐で綴じたものではなく、布筒の下端を下にずらし、模骨下端に折り曲げて使用したものと思われる。

なお、井内古文化研究室蔵の西安出土と伝える資料に、第3群の組み合わせ式模骨の馬蹄形圧痕とこの布圧痕を併せもつ例がある(井内1998の図版27・28)。この2例が、先述した第3群の技法で作られたことは疑いなく、組み合わせ式模骨の下端が布を介在させないと、どうしても瓦当裏面に密着し、外しにくいという欠点を解消しようとした試みがあったことを証明する資料と



第52図 第3・4群瓦当紋様の推移

して、きわめて貴重である。

その目で、あらためて櫟陽城出土の雲紋円瓦当168の瓦当裏面をみると、そのままに中央に、第3群b類のような低い円形の小さな突起(径6~7mm)が認められるのである。低い小さな突起が正しく中央に位置するので、これまた本来は第3群に属する可能性が高い。組み合わせ式模骨の合わせ目に生ずるバリ状の粘土のはみ出しこそ、明確には認められないが、それは布筒の下端がここまで及んだために、かき消されたものと考えられる。

一方、144にはこのような痕跡はない。また、布圧痕が及ばない部分に凹凸が多く、瓦当の厚さも全体にきわめて薄いので、組み合わせ式模骨ではなく、一体式模骨に布筒を巻き付け、その下端を模骨下面の半ばまで覆うようにした例である可能性が高い。したがって、今回第4群に分類した2例に井内古文化研究室蔵の2例を加えると、第3群の組み合わせ式模骨を用いるもの3例と、144のように一体式模骨を使用する1例が含まれることになる。

組み合わせ式模骨と一体式模骨

この4例だけで技法の変遷を論ずるのは難しいが、この他に瓦当裏面全体に布目が残る例として、洛陽工作站で観察した古式の雲紋半瓦当1例と、楽浪土城出土の雲紋瓦当(井内1976の図版35)をあげることができ、将来さらに増える可能性も考えられる。そこで、次節でその見通しを提示し、将来の検討に備えたい。

**第5群** 瓦当裏面下半に、第1~4群のように軒丸瓦円筒の基底部分を半切した突帯を残さないものを、第5群として分類した。櫟陽城出土の135(図版3)や、宣帝の杜陵園出土の文字瓦当などがそれに属する。その製作技法は以下のように復元できる。

瓦当裏面に突帯がない

(1) 作業台上の瓦当范に適当な大きさの粘土円板を載せ、瓦当面に瓦当紋様を施紋する。

(2) 一体式模骨で作った丸瓦円筒を2分割して丸瓦2個を得る。その丸瓦を瓦当裏面上半に接合する。

**第5群への試行錯誤** 最後に、なぜ、この第3群のように「面倒な」技法が考案されたのか、という疑問に答えよう。

まず、時代背景としては、始皇帝による全国統一から前漢中期にかけて、咸陽宮や阿房宮をはじめ、甘泉宮などの諸離宮、始皇帝陵園、櫟陽宮から長安城未央宮・桂宮など、想像を絶する規模の宮殿の造営が相次いだことがあげられる。このため、それらの屋根を飾る莫大な量の瓦生産も、その多くを手作りに頼る従来の技法から、規格の統一と量産に適した型作り技法への転換が必要となった。

そこで、それまでの第2群の范による瓦当だけを型で作る方法から、丸瓦部の製作に円柱形の型、つまり模骨を利用することが考え出されたものと思われる。そして、瓦当裏面に模骨を立てて布筒をかぶせ、それに第2群と同様に粘土紐を巻き付けて丸瓦部と玉縁を成形する方法が試行錯誤の結果、考案された。しかし、この方法では、玉縁の径が小さいので、模骨を引き抜くことはできない。そこで、鑄造技術に詳しい誰かが組み合わせ式模骨を工夫し、この問題を解決したと考えられる。失敗を踏まえた第2群から第3群への進歩である。

組み合わせ式模骨案出

ただ、ときには模骨が瓦当裏面に密着してうまく抜けられない場合もあり、その対策として、組み合わせ式模骨の基底部の半ばを覆うように布筒の下端を下げて使った第4群が生まれた。ここまで進むと、逆に組み合わせ式模骨を使う必要性は薄れ、ついに一体式模骨の基底部の半ばを布筒の下端で覆った技法が誕生する。第二の飛躍である。しかし、そのためには、やはり玉縁を作

第二の飛躍

る工程の見直しが必要であった。想像ではあるが、この一体式模骨を使い、瓦当裏面に布目を残す技法では、まず丸瓦部だけを模骨を用いて作り、模骨を引き抜いてから、土器の口縁を作る手順で玉縁を作る方法が選ばれたのであろう。なお、こうした技法と、わが国のいわゆる一本作り技法との比較検討も喫緊の課題となる。

また、相前後して、一体式模骨で別に作った丸瓦円筒を、瓦当裏面に接合してから半截するという、これまたかなり「面倒な」、現代人の目からすれば「非合理的」な技法も生まれた<sup>(5)</sup>。あらかじめ半截した丸瓦を接合すれば、丸瓦円筒を接合し、糸切り技法で半切するという二つの工程を省略できるのである。そして、こうした過渡期を経て、最終的には、一体式模骨で別に作った丸瓦円筒を半截した丸瓦を瓦当裏面に接合する第5群へ到達した。

丸瓦接合の  
第5群へ

以上、たしかに「面倒な」技法が多い。しかし、この事実が試行錯誤の時代であったことを証明している。造瓦技法がそれ以前の技法の枠組に縛られ、そこから抜け出すことがなかなか難しいのは、筆者が2001年に雲南省、2005年に浙江省で目撃したように、今なお前漢代以来の模骨と桶と布筒を使う「布目瓦」の生産が続いていることから説明できる。第2群から第5群へ一挙に飛躍することはできなかったのである。ただし、第2群から第3群へ、そして第3群から第4群へ、という技術進歩の委細をこれ以上解き明かすことは、現段階では困難である。

## G 西周～秦漢代における瓦当の製作技法

以上の観察結果を踏まえ、また第3・4群の製作技法をすでに述べたように推定復元すると、西周から秦漢代にかけての瓦当の製作技法の変遷について、次のように見通すことができる。

中国で誕生し、東アジア各地に拡散した屋瓦の製作技法を俯瞰すると、その始まりは、型を一切利用しない完全な手作りから出発した。つまり、手捏ね・手捻りの技術で作られた土器と同じ方法で、初期の瓦は作られたのである。そして、やがて范を用いるようになり、さらに模骨・桶という型を利用する、型作りの大量生産へと進んだ。

**A 類** 瓦当范も模骨も一切使用せず、すべて手作りで瓦当を作る段階。これをA類とし、さらにA類半瓦当、A類円瓦当と呼び分け、その技法をA類技法と名づける。

すべてが手  
作りの段階

西周中期に始まる無紋半瓦当や、ヘラ描きの重環紋半瓦当がその代表例である。そして、その系譜は、春秋秦中期の雍城の馬家庄遺跡の同心円弧紋半瓦当から、今回報告した戦国秦の献公と孝公の時代の櫟陽城（前383～350年）のものと思われる第1群の157・169（図版6・8）や190の無紋円瓦当に至り、さらに前漢初期まで存続した可能性が考えられる。原初的な技法だからこそ、不死鳥のようにいつでも復活しうるのである。

半切と半截は、古い段階には糸切り技法によるものが多く、のちにヘラ切り技法が用いられるようになる。西周早期の平瓦円筒は糸切りで3分割または4分割し、丸瓦円筒は2分割した例が多い。当然、粘土がまだ軟らかいうちに糸切りする必要がある。瓦当も、糸切りで半切・半截するためには、粘土がまだ軟らかいうちに糸を入れなければならない。重環紋半瓦当や同心円弧紋半瓦当の場合も、施紋直後に半切・半截しなければならない（大脇2002）。このため、乾燥するまでに歪む危険性が高く、作業効率という観点からみると非能率的である。そこで、しだいに半截は、凸面からヘラで、分割線厚さを厚さの半分または1/3程度まで入れ、半乾燥後に叩いて分割

する技法に転換するようになったのであろう。

**B 類** A類に続き、瓦当范を用いてまず瓦当紋様を施紋することで型の利用が始まるが、丸瓦部の成形には模骨を一切使用しない段階。これをB類とし、B類半瓦当・B類円瓦当、B類技法のように呼ぶ。その最古の例は、春秋晩期に遡る可能性もあるが、確実な例はやはり戦国期のものになるようである。半切と半截技法に関しては、初めはA類と同じくヘラ切り技法であったが、半切技法は戦国晩期から統一秦の時代にかけて糸切り技法に変化する。今回報告した第2群が、このB類に属する。なお、第2'群に相当するものはB'類とする。

瓦当范利用  
模骨不使用

**C-1類とC-2類** さらに、丸瓦部の成形における規格の統一と生産性の向上にも型利用が有効であることがしだいに認識されるようになり、鑄造技術における内型や型持の発達にヒントを得て、それを応用した組み合わせ式模骨と布筒を用いるようになる。今回報告した第3群がこれにあたり、C-1類として、C-1類半瓦当・C-1類円瓦当、C-1類技法のように呼ぶ。

組み合わせ式  
模骨

この組み合わせ式模骨と布筒を用いて瓦を作る型作り技法の登場は、たんに軒丸瓦の製作技法だけではなく、一体式の模骨を用いた丸瓦を生み出し、やや遅れて、桶状造瓦器具＝桶を用いた平瓦にも採用されるようになる。造瓦技術の変遷を顧みるとき、画期的な段階として位置づけることができる。

一方、この段階の末期には、瓦当裏面から模骨下端を外しやすくするための工夫として、布筒の下端を瓦当裏面の半ばまで及ぼす手法があらわれる。今回報告した第4群の168(図版7)がこれにあたり、C-2類として、C-2類半瓦当・C-2類円瓦当、C-2類技法のように呼ぶ。ただし、全面的に切り替わったわけではなく、C-1類とC-2類はB類と併存し、出土量からすると、あくまでもB類が主体的な技法であったと思われる。

**D-1類** C-1類とC-2類の段階における試行錯誤を経て、丸瓦作りに特有の一体式模骨が考案され、同じく布筒の下端を瓦当裏面の半ばまで及ぼす手法が考案される。瓦当裏面に布目が残る第4群の144(図版4)がこれにあたり、D-1類として、D-1類半瓦当・D-1類円瓦当、D-1類技法のように呼ぶ。

一体式模骨

このD-1類に属する資料に、櫟陽城出土の144(図版4)や、洛陽工作站で観察した古式の雲紋半瓦当1点(註2・4で紹介する第13表9-4)と、D-1類に属する可能性が高い井内古文化研究室蔵の1点(井内1998の図版40)、および楽浪土城出土の雲紋瓦当があることはすでに述べたとおりである。しかし、こうした技法を手にとり確認できる例はまだきわめて少なく、その実体には不明な点も多い。わが国の天津市南滋賀廢寺出土例を代表とする、いわゆる一本作り軒丸瓦との比較を含めて、とりあえずD-1類という分類名を付し、後考を俟ちたい。

また、D-1類の一体式模骨の素材の検討も将来の課題であるが、初めはC-1・2類と同じ土製で、のちに、より取り扱いやすい木製となった可能性が考えられる。

**E 類** こうして、より全面的な型利用が始まり、瓦当だけではなく、一体式模骨と布筒を利用して、丸瓦部の全体が型で作られるようになる。そして、瓦当裏面に別に作った丸瓦円筒を接合したのちに、丸瓦円筒の基底部分を半切し、丸瓦円筒を半截して円瓦当1個を得るE類が登場する。これをE類とし、E類半瓦当・E類円瓦当、E類技法のように呼ぶ。ただし、今回報告した資料中には、このE類に属する確実な例はない。

丸瓦円筒を  
接合後半截

**F 類** 前漢中期には、一体式模骨と布筒を利用した別作りの丸瓦円筒<sup>(6)</sup>を事前に分割して丸瓦

第12表 秦漢代瓦当製作技法の変遷

分類	製作技法
A類=1群	型不使用 手作り〈泥条盤築〉 半瓦当は半截 円瓦当は、半切 半截
B類=2群	范利用 手作り〈泥条盤築〉 半瓦当は半截 円瓦当は、半切 半截
C-1類=3群	范利用 組み合わせ式模骨+布筒利用〈泥条盤築〉 半切 半截
C-2類=4群	范利用 組み合わせ式模骨+布筒利用〈泥条盤築〉 布目瓦当裏面に及ぶ 半切 半截
D-1類=4群	范利用 一体式模骨+布筒利用〈泥条盤築〉 布目瓦当裏面に及ぶ 半切 半截
E類	范利用 一体式模骨+布筒利用〈泥条盤築〉 丸瓦円筒接合後 半切 半截
F類=5群	范利用 一体式模骨+布筒利用〈泥条盤築〉 半截丸瓦接合

別に作った  
丸瓦を接合

を得たのち、瓦当裏面に接合するF類の技法が確立する。今回報告した資料では、櫟陽城出土の雲紋円瓦当135(図版3)がそれにあたり、また杜陵園出土瓦当のすべてがこれに含まれる。前漢中期以降、この技法は主流を占めるようになり、中国では今日に至るまで、基本的に継続して採用されている。また、朝鮮半島や日本にも、この技法が主流として伝えられた。

瓦当と丸瓦の接合にはさまざまな工夫が加えられ、それに関する多くの研究が発表されるに至っている。瓦当裏面に丸瓦を接合する技法(いわゆる接合式、谷豊信のいうB<sub>1</sub>技法、接合する丸瓦広端部の諸加工、斜め削り・片柄式・歯車式など)、瓦当側面に丸瓦を接合する技法(谷豊信のいうB<sub>2</sub>技法、大脇のいうSR技法)(谷1986・大脇2007)などの存在が知られている。

以上の試案をまとめると、第12表のようになる。参考にいただければ幸いである。しかし、広大な東アジアというフィールドには、まだ私たちの想像の及ばない技法が存在するに違いない。「薨波無限」。この報告がその飛躍への礎の一つになることを念じ、擲筆する。

- (1) 半瓦当の切断技法について。高浜市かわら美術館蔵の戦国時代燕の半瓦当29点の観察によれば、1)瓦当面を完全にヘラで切断するもの21点、2)半ば以上をヘラで切り、分割破面を残すもの7点、3)丸瓦部と同時に糸切りするもの1点、という結果を得た。半瓦当の紋様は〈饗餐紋〉が多く、その教科書的な型式学的変化を参考にすると、1)の技法が古式の紋様をもつ例に多く、2)の技法が新しい傾向を示す紋様をもつ例に用いられるようである。3)の技法は、5点ある〈山形紋〉半瓦当の一つで認められた。丸瓦部側面は、凸面側からヘラで分割線を入れる例が多い。なお、前漢中期と思われる「上林」の2字をあらわした半瓦当にも、糸切り技法で瓦当を切断する例がある。資料の観察に際しては、天野卓哉氏をはじめ、高浜市かわら美術館の諸氏に便宜を図っていただいた。記して感謝の意を表す。なお、鳳翔県雍城出土の獣魚紋円瓦当に、糸切り半切技法が確実に存在することを確認している。この例も、丸瓦部の分割は凸面側からヘラで分割線を入れ、乾燥後に分割している。
- (2) 第3群の組み合わせ式模骨について。瓦当裏面に残る馬蹄形を呈する圧痕の存在を最初に指摘したのは谷豊信と思われる。谷は北京大学留学中に洛陽で観察した資料と、京都大学文学部および東京国立博物館の所蔵品中の「瓦当背面に特殊な突出」をもつ例を紹介し、「この技法の目的と具体的な工程はよくわからないが、これが前漢代の洛陽周辺で行われた、瓦当と丸瓦部の接合法に関連する技法であった可能性を指摘」した(谷1984)。
- 一方、この圧痕の存在についてふれた中国の研究者は少ないが、姚生民の研究が注目できる。姚は、甘泉宮遺址出土の瓦当の製作技法を大きく二つに分けて解説したあとで、「別有用使植圧緊法、当背塞入三体合成的圓柱平頂植、圧後当背光滑平整、留有“門”形植痕。植痕高低不一者、大約是三体

第13表 組み合わせ式模骨の痕跡を残す瓦当集成

番号	出土遺跡 そのほか	資料	出典	備考
1	咸陽宮	〈葵紋〉瓦当 (Ba型) 雲紋瓦当 (Cb2式)	『秦都咸陽考古報告』 図208-4・6 『同』 図415-4	推定 同上
2	始皇陵園	〈葵紋〉瓦当 (Ⅲ式)	『秦始皇陵的考古発現與研究』 図149-2	
3	阿房宮	雲紋瓦当	『陝西古代磚瓦図典』 図247	推定
4	櫟陽城		本文参照	
5	太上皇陵		本文参照	
6	未央宮	雲紋瓦当 1 (Ⅲ型 4式) 雲紋瓦当 2 (Ⅲ型 22式)	『漢長安城未央宮』 図19-4 本書論考編、54頁第24図2	
7	桂宮	雲紋瓦当 1 (Ⅲ型 4式) 雲紋瓦当 2 (Ⅲ型 5式)	『漢長安城桂宮』 図72-3 『同』 図72-5	
8	甘泉宮	「衛」瓦当	『甘泉宮卷』 図12、13、299 『甘泉宮志』 247頁 図9-②	
9	洛陽工作站	雲紋半瓦当 1 雲紋半瓦当 2 雲紋半瓦当 3 雲紋半瓦当 4	『洛陽中州路』 図版30-1	
10	谷豊信論文 所収	「閔」瓦当 「安世」瓦当 「閔」瓦当	京都大学蔵 東京国立博物館蔵 同上	河南省新安県出土? 同上 同上
11	高浜市かわ ら美術館蔵	「安世」瓦当 1 「安世」瓦当 2 「延壽王瓦」瓦当	『洛陽出土瓦当』 199に同文例あり 『同』 199に同文例あり 『同』 195、196に同文例あり	河南省新安県出土? 同上 同上
12	井内古文化 研究室蔵	雲紋瓦当 1 雲紋瓦当 2 雲紋瓦当 3 雲紋瓦当 4	『漢口古瓦図譜』 25 (秦始皇陵付近) 『同』 26 (西安) 『同』 27 (西安) 『同』 28 (西安)	

植圧力有別。植圧法在“衛”字瓦当和雲紋瓦当背見的最多。“衛”字瓦当和雲紋瓦当、有的当心一小孔通于背、或有固定瓦当之作用」と、その詳しい観察結果と使用法について述べている(姚1998・2003)。「植」は「靴または帽子の型」をあらわし、組み合わせて内型とし、製品の完成後は分解して取り出すものを指す。したがって、姚も痕跡については筆者とほぼ同じ見解を述べている。

姚の報告などを参考にしながら、今回の報告例以外に、第3群の組み合わせ式模骨の痕跡を確認できた例を集成すると、第13表ようになる。これによると、組み合わせ式模骨は、陝西省櫟陽城や西安市附近で出土した西群と、洛陽市およびその周辺から出土した東群の二つに大きく分けられそうである。西群は模骨 r と l がいわゆる馬蹄形をなし、模骨 c が楕円形に近い例が多く、瓦当紋様も〈葵紋〉や雲紋をあらわすものが多い。これに対して東群は、模骨 c が細長い長方形を呈し、模骨 r と l の内側の形状もそれに応じた角張った形になる。瓦当紋様も、雲紋に加えて「閔」「衛」「安世」「延壽王瓦」など、前漢代のものであることが明確な文字瓦当が含まれている。したがって、大局的には、西群の中に古い様相が認められ、東群には新しい要素が含まれているようである。

では、この第3群はいつ登場し、いつ頃まで作られたのであろうか。この課題を検討する際に、参考となる年代の定点をもつ資料がいくつかある。

- ① 秦王政(始皇帝)は、その即位元年の前246年に寿陵の築造に着手し、前221年の全国統一を経て、その死に至る前210年まで陵園の建設を進めた。始皇帝陵西側の1号建築遺址から出土したⅢ式〈葵紋〉瓦当は中心に径約0.5cmの円孔が貫通し、丸瓦凹面には布目が残り、瓦当裏面には「中部有一上端呈圓弧形、下端抵住辺輪的長条形突起的台面」があり、また瓦当裏面下半に糸切り技法で半切した痕跡をとどめるという(袁2002、426~427頁)。

- ② 前349年に造営が始まり、前221年の全国統一と、滅亡の年である前207年という年代の定点をもつ秦の都の咸陽1～4号宮殿出土の瓦当（陝西省考古研究所2004）には、第3群に属する可能性が高い3点（図208-4・6、図415-4）を除くと、今のところ、第3群に属する例がほとんど認められない。そして、この図208-4・6は櫟陽城出土の〈葵紋〉瓦当ときわめてよく似ている。
- ③ 前漢王朝を建てた高祖劉邦は、前202年に関中に入り、櫟陽を都としたが、前200年には新都長安に遷都した。したがって、櫟陽宮はわずか3年間の都であったが、出土した統一秦～前漢初期の様式を示す屋瓦の多くはこのときのものである可能性が高く、今回報告した櫟陽城出土資料の大半もこの時期に属すると思われる（中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊1985）。
- ④ 高祖劉邦の父は長安遷都後も櫟陽宮にとどまり、前197年に崩御した。したがって、彼を葬ったと伝えられる太上皇陵は前197年という年代の定点をもつので、出土した瓦当にはその前後の年代が与えられる（中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊1985）。
- ⑤ 前200年に丞相蕭何によって建設が始められ、前198年に完成した長安城未央宮出土の雲紋瓦当Ⅲ型4式1点と、未央宮前殿B区遺跡出土の雲紋瓦当Ⅲ型22式1点は、確実に第3群に属することが確認できる資料である（山崎本書所収論考）。
- ⑥ 前漢の武帝（前140～87年在位）が造営したと伝えられる長安城桂宮2号建築遺址出土の雲紋瓦当のうち、以下の2点は第3群に属すると思われる（中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所2007）。Ⅲ型4式第二種（図72-3、図版81-3）は、瓦当裏面に「馬蹄形凸条帯」をとどめる。また、Ⅲ型5式第二種（図72-5、図版81-5）は、瓦当の中心に径0.7cmの円孔が貫通し、瓦当裏面には「長方形凸条帯」と、下半に糸切り技法で半切した痕跡をとどめるという。
- ⑦ 「衛」字瓦当は、前漢第6代の景帝の在位期間（前157～141年）に復活した、宮門を守衛する兵士を管轄した官名「衛尉」にちなむと考えられる（姚2003）。
- ⑧ 新安県出土の「関」字瓦当は、前漢第7代の武帝の元鼎3年（前114年）に河南省新安県に移転した函谷関にちなむとされる（陳・朱1998）。

以上の資料は、瓦当裏面の観察や写真にもとづき、第3群に属することを確認できたものである。これ以外に、写真や拓本によって、瓦当紋様の中心に貫通する小孔をもつことが確認できる例がいくつか知られており、第13表にまとめた。1や3のように、瓦当裏面の馬蹄形圧痕が未確認の例もあり、すべてが第3群に属するという確証はないが、大半は瓦当紋様が統一秦～前漢初期の特色を有しており、とりあえずその可能性が高い例としてあげておく。

第8～11・13表を参考にしつつ、組み合わせ式模骨の使用の始まりを考えると、それは統一秦の末期に確実に遡る。そして、その最盛期は、第3群に属する瓦当紋様が〈葵紋〉と定型化以前の雲紋を中心とする時期にあると思われる。

一方、その終わりについては、今のところ、文字瓦当では「衛」「関」と高浜市かわら美術館蔵の「延壽王瓦」に限られ、前漢第6代の景帝（前157～141年在位）以降に盛行する、中央に平面円形、断面が低い半円形の〈泡〉状の突起（〈乳丁〉）を有し、「長樂未央」「與天無極」「與天久長」などの吉祥句や「涇置陽陵」「陽陵涇郷」などの4字を配する瓦当には、第3群に属する例がほとんどないとみられる（漢陽陵博物院編2006）。この点から推測すると、景帝の没年（前141年）から武帝の治世下（前140～87年）に行われた函谷関の新安県への移転の頃ではないかと思われる。したがって、今後さらに、函谷関の移転の時期を限定する必要があるだろう。あわせて、東群と西群の時期差を探る必要もでてくる。以上を勘案すると、第3群の瓦当は、統一秦末期の前3世紀末から前2世紀末の前漢中期までの約1世紀の年代幅をもつ可能性が高い。

- (3) 垂木先瓦の可能性のある資料について。内蒙古自治区の雲中古城や土城子古城出土の漢代雲紋瓦当3例などにも、第3群と同じように中央に孔が貫通する例がある（陳2003の図版22・拓片74、拓片34、拓片87）。ただし、これらは孔の径が1～1.2cmとやや大きく、樂浪土城出土の「大晋元康（291～299年）」文字瓦当のように、垂木先瓦として作られたものである可能性も一応考えられる。しかし、いずれも瓦当と記されており、瓦当裏面に関する記述がないので、判断を保留しておく。
- (4) 洛陽工作站で観察したC-1類半瓦当について。洛陽工作站で観察した資料の中に、3点のC-1類半瓦当と、1点のD類かと思われる瓦当裏面に布目を残す例があった。この4点は、秦漢代瓦当の製作技法を考えるうえで重要と思われるので、簡単に紹介しておく（第13表9-1～4）。

1は、『洛陽中州路』の報告書にI1式T1104:07として報告されている、S字形雲紋と独特の紋様を

組み合わせた前漢初期の雲紋半瓦当である（中国科学院考古研究所1959、図版30-1）。瓦当裏面に馬蹄形圧痕があり、中央の模骨 c は平面長方形を呈して高く残り、左右に模骨 r と l の圧痕が低く残る。模骨 r と l は観察メモに「多少高低差あり」と記しているの、基本的には西安周辺出土のC-1 類円瓦当と同じ技法で作られたものであろう。瓦当面の切断はヘラで切っている。丸瓦部側面の半截技法は、欠損のため不明。

2 以下は、『洛陽中州路』には掲載されていない未報告の資料と思われるので、詳述は避けるが、いずれも古式の雲紋半瓦当である。2 と 3 には、やはり長方形を呈するとみられる馬蹄形圧痕の一部が残り、瓦当面の切断は、模骨を抜き取ってから糸つきの針を貫通させる糸切り技法。2 の丸瓦部の半截は、凸面から分割線を入れ、乾燥後に分割しており、分割破面を残す。3 は欠損しているの不明。2・3 の丸瓦部凸面には縄叩き後にナデを加えた痕跡、凹面には布目が残る。

4 は、平坦な瓦当裏面に「粗い布痕??？」という観察メモがあり、観察当時は布痕の存在を十分理解できなかったことがわかる。瓦当面の切断と丸瓦部の半截技法は 2 と同じである。丸瓦部凸面はナデ、凹面には布目が残る。

以上の資料は、C-1 類技法が確実に洛陽地域に及んでいること、そしてたった 1 点ではあるが、前漢初期の同地域に D 技法が存在したことを証明する貴重な資料であり、今後におけるその詳細な検討結果を期待したい。

- (5) 谷豊信のいう A<sub>1</sub> 技法。井内古文化研究室蔵の雲紋円瓦当（井内1998の図版32）、「長生」半瓦当（同図版41）、「與天無極」円瓦当（同図版42）などが、この技法で作られた可能性の高い例である。図版32例の丸瓦部はほとんど剥離しているが、瓦当裏面を観察すると、やや乾燥した丸瓦円筒を瓦当裏面上に少し押しつけ、その接合線に沿って粘土紐を一周させ、指ナデして接合している。粘土紐の外周に布目（ボジ）が反転して残る。接合部の断面観察からは、いわゆる「嵌め込み技法」ではないと思われる。図版41例は、丸瓦部凹面に整然とした布目と分割突帯を残し、凹面側から分割線を半ばまで入れて分割している。瓦当は、丸瓦部底部に針を入れてから、糸切り技法で切断する。図版42例も丸瓦部凹面に布目を残し、丸瓦円筒接合後にその底部に針を入れ、糸切り半切技法Orで半切したことが明確な資料。丸瓦凹面の接合線に沿って強く指でなで、接合した深い溝が一周する。また、楽浪土城出土の雲紋円瓦当の中にも、確実にこの技法で作られたものがある。なお、井内古文化研究室蔵の資料の観察は井内潔氏のご厚意によるものであり、記して感謝の意を表す。
- (6) 粘土板模骨巻作り有段丸瓦の古い例について。一体式模骨と布筒を利用した丸瓦も、初めは粘土紐を模骨に巻きつける技法が用いられ、のち粘土板を巻きつけるように変化した。洛陽工作場で観察した瓦の中に、明らかに粘土板を模骨に巻きつけ、縄叩き目を加えて成形した有段（玉縁）丸瓦 2 点の完形品があった。中国における粘土板巻きつけ技法の起源を探るうえで貴重な資料と思われるので、この場を借りてその観察メモの一部を紹介しておく。それは、漢魏洛陽城の①靈台遺址出土例と、②太学遺址出土例である。いずれも丸瓦凹面に糸切り痕と分割突帯の痕跡を明瞭に残し、広端に補足の斜め方向の縄叩き目を加える。これは、いったん玉縁を上にして乾燥させ、変形の恐れがなくなつてからひっくり返し、広端部の歪みを直すために行ったものと思われる。このとき、②は凹面に格子叩き目を刻んだ当て板を当て、広端部を薄く叩いて仕上げる。凸面は縦方向に縄叩き目を残し、これに斜め方向の縄叩き目を加える例がある。側面は、分割のための線などは一切入れずに、一工程省略して、分割突帯で薄くなった箇所を敲打するだけで分割し、分割破面をそのまま残す。また、玉縁の最上端には布の圧痕はなく、布筒の頂部を綴じた、環状を呈する痕跡が残る。これは、『観世音寺資財帳』に記載がある「瓦衣輪鉄」にあたるものかと思われる（木村1940）。靈台遺址・太学遺址は光武帝創建とされており、そのときのものとすれば後25年か36年前後が年代の定点となる。また、北魏代の瓦としても、494年という年代の定点をもつことになる。今にわかに年代を決めることはできないが、瓦作りへの粘土板の利用開始年代を考えるうえで欠くことのできない資料となるであろう。

## 参考文献

[中国語（発表年代順）]

中国科学院考古研究所 1959『洛陽中州路（西工段）』中国田野考古報告書考古学専刊丁種第4号、科学出版社

陳直 1963「秦漢瓦當概述」『文物』1963年11期

中国社会科学院考古研究所櫟陽発掘隊 1985「秦漢櫟陽城遺址の勘探和試掘」『考古学報』1985年第3期



陕西省考古研究所秦漢研究室 1986『新編秦漢瓦當圖録』三秦出版社  
 徐錫台・樓宇棟・魏效祖 1988『周秦漢瓦當』文物出版社  
 李發林 1990『齊故城瓦當』文物出版社  
 劉慶柱 1992「漢代文字瓦當概論」『中国書法全集』第9卷、新華書店  
 中国社会科学院考古研究所 2003『漢長安未央宮 1980～1989年考古發掘報告』中国大百科全书出版社  
 戈 父 1997『中国文物序列 古代瓦當』中国書店  
 陳根遠・朱思紅 1998『屋檐上的藝術 中国古代瓦當』華夏文明探秘叢書、四川教育出版社  
 劉慶柱・李毓芳 1998「秦瓦當概論」『秦漢文化研究』同編委會編、陝西人民出版社  
 姚生民 1998『新中国出土瓦當集録・甘泉宮卷』西北大学出版社  
 傅嘉儀 1999『秦漢瓦當』陝西旅遊出版社  
 袁仲一 2002『秦始皇陵的考古發現與研究』陝西人民出版社  
 劉懷君・王力軍 2002『秦漢珍遺 眉縣秦漢瓦當圖録』三秦出版社  
 陳根遠 2002『瓦當留真』遼寧畫報出版社  
 中国社会科学院考古研究所 2003『西漢禮制建築遺址』文物出版社  
 姚生民 2003『甘泉宮志』三秦出版社  
 内蒙古自治区文物考古研究所（陳永志主編）2003『內蒙古出土瓦當』文物出版社  
 陕西省考古研究所 2004『秦都咸陽考古報告』陕西省考古研究所田野考古報告第25号、科学出版社  
 王世昌 2004『陝西古代磚瓦圖典』三秦出版社  
 王培良 2004『秦漢瓦當圖論』三秦出版社  
 漢陽陵博物院 2006『漢陽陵博物院』文物出版社  
 中国社会科学院考古研究所・日本奈良国立文化財研究所 2007『漢長安城桂宮 1996—2001年考古發掘報告』文物出版社  
 程永建 2007『洛陽出土瓦當』科学出版社

[日本語（五十音順）]

井内功 1976『朝鮮瓦磚圖譜 I 楽浪帶方』井内古文化研究室  
 井内潔 1998「秦漢軒丸瓦の造瓦技法」『井内古文化研究室蔵 漢日古瓦圖譜』井内古文化研究室  
 伊藤滋 1995『秦漢瓦當文』日本習字普及協会  
 大脇潔 1991「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅹ』奈良国立文化財研究所学報第49冊  
 大脇潔 2002「西周と春秋の瓦」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』同刊行会、真陽社  
 大脇潔 2003「雲南薨紀行2 聞き取り調査の結果と若干の考察—雲南の土と牛と「弓」と—」『帝塚山大学考古学研究所研究報告』5  
 大脇潔 2004「創建期平瓦の製作技法—糸切り痕の観察を中心に—」『志筑廃寺発掘調査報告Ⅰ』津名町埋蔵文化財調査報告書第2集、津名町教育委員会  
 大脇潔 2007「『一瓦一会』瓦当側面接合技法—SR技法—の軒丸瓦について」『三宅雄一氏・東鳥取小学校・東鳥取公民館寄贈瓦報告書』阪南市教育委員会  
 岸本直文 1994「中国における秦漢代の瓦調査」『奈良国立文化財研究所年報1994』  
 木村捷三郎 1940「観世音寺資財帳に見ゆる造瓦具」『考古学』第11卷第10号、東京考古学会（『造瓦と考古学—木村捷三郎先生頌寿記念論集—』木村捷三郎先生頌寿記念論集刊行会、1976年に収録）  
 コリン＝レンフルー・ポール＝バーン著（池田裕ほか訳）2007『考古学理論・方法・実践』東洋書林  
 佐原真 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号  
 関野雄 2005「中国歴代の瓦当範」『中国考古学論攷』同成社  
 谷豊信 1984「西晋以前の中国の造瓦技法について」『考古学雑誌』第69巻第3号  
 谷豊信 1994「戦国秦漢時代の軒丸瓦製作技法—東京国立博物館保管資料の紹介を兼ねて—」『MUSEUM』No. 519、東京国立博物館美術誌  
 横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学 1 研究の方法』岩波書店

#### 挿図出典

第50図：岸本直文 1994、77頁挿図と井内潔 1998、149頁挿図10を改変。

## 6 新王莽封禪玉牒の研究

馮 時

### A はじめに

新代王莽の封禪玉牒<sup>ほうぜんぎょくちよう</sup>は、前漢長安城桂宮から出土した（注記番号はT1③:50）。その詳細な出土状況については、本書報告編中に記している。玉牒は上下両端部が欠けており、残存長13.8cm、幅9.4cm、厚さ2.7cmである。黒色の青石製で、全体を磨いている。牒文は5行にわたって陰刻されており、字には朱が塗られている。29字が残存するが、2行目と3行目に欠けた4字の残片がはっきりと見られる（第53図）。牒文の釈文は以下のとおりである。

牒文の釈文

萬歲壹紀（之部）……

□〔德〕（職部）、作民父母（之部）、清〔深〕……

□（罷）退佞人姦軌（幽部）、誅〔滅〕……

延壽（幽部）、長壯不老（幽部）。累……

封禪（禴）泰山、新室昌□（熾）（職部）……

〔 〕内は、牒文の残存部分の形により解釈を試みた文字であり、（ ）内は文意および音韻により補填を試みた文字である。牒文は欠けた部分が多いものの、玉牒の性格や漢代の礼制を考えるための手がかりを提供する。これは、まさしく新の王莽がおこなった封禪の玉牒であり、重要な学術的価値を有している。

### B 玉牒の年代

玉牒の年代は、牒文に残存する「封禪泰山、新室昌□（熾）」の内容から明らかになる。王莽は王朝を創設し、号を新と改め、新室と称した。それゆえ、牒文の「新室」は王莽の建てた新朝を指している<sup>(1)</sup>。『漢書』王莽傳・上に、初始元年（=居攝3年、



第53図 新王莽封禪玉牒

後8) 11月戊辰のできごととして、次のように記載されている。

莽至高廟拜受金匱神璽。御王冠，謁太后，還坐未央宮前殿，下書曰「予以不德，託于皇初祖考黃帝之後，皇始皇考虞帝之苗裔，而太皇太后之末屬。皇天上帝隆顯大佑，成命統序，符契圖文，金匱策書，神明詔告，屬予以天下兆民。赤帝漢氏高皇帝之靈，承天命，傳國金策之書，予甚祇畏，敢不欽受。以戊辰直定，御王冠，昂真天子位，定有天下之號曰新。」

『漢書』元后傳には、「莽又欲改太后漢家舊號，易其璽綬，恐不見聽。而莽疏屬王諫欲諂莽，上書言『皇天廢去漢而命立新室。』」とある。『漢書』王莽傳・中には、始建国元年（後9）の記事として、「莽乃策命孺子曰『咨爾嬰，昔皇天右乃太祖，歷世十二，享國二百一十載，歷數在于予躬。』『詩』不云乎。『侯服于周，天命靡常。』封爾爲定安公，永爲新室賓。』」とある。この「新室」は新朝の別称であり、王莽の皇室を指しているわけではない。『漢書』王莽傳にある「新室既定，神祇歡喜」「五威將軍奉『符命』，齋印綬，王侯以下及吏官名更者，外及匈奴西域，徼外蠻夷，皆昂授新室印綬，因收故漢印綬」の記載は、いずれもこのことを証明している。牒文にある「新室」が王莽の建てた王朝の国号であることは明らかである。

牒文の内容には「萬歲壹紀」だけでなく、「封禪泰山」とある。これは、王莽が泰山で封禪の大典を挙げるために礼器を作ったことを示す。王莽は初始元年に皇帝となり、翌年「始建国」に改元した。15年の在位中に封禪の挙行を2度試みたが、いずれも実現しなかった。

封禪の準備  
開始と延期

王莽は、封禪の準備を始建国4年（後12）に始めていた。『漢書』王莽傳・中には、次のようにある。

莽志方盛，以爲四夷不足吞滅，專念稽古之事，復下書曰「伏念予之皇始祖考虞帝，受終文祖，在璇璣玉衡以齊七政，遂類于上帝，禋于六宗，望秩于山川，徧于羣神，巡狩五嶽，羣后四朝，敷奏以言，明試以功。予之受命昂真，到于建國五年，已五載矣。陽九之阨既度，百六之會已過。歲在壽星，填在明堂，倉龍癸酉，德在中宮。觀晉掌歲，龜策告從，其以此年二月建寅之節東巡狩，具禮儀調度。」羣公奏請募吏民人馬布帛綿，又請內郡國十二買馬，發帛四十五萬匹，輸常安，前後毋相須。至者過半，莽下書曰「文母太后體不安，其且止待後。」……五年二月，文母皇太后崩。……莽爲太后服喪三年。

王莽が1回目に封禪を挙行しようとしたときは、文母皇太后の病気が原因で延期せざるをえなかったことがわかる。

再度の実施  
計画と中止

始建国5年（後13）、文母皇太后が崩御した。翌年、天鳳元年（後14）と改元する。このとき、王莽は、まだ服喪が終了していない同年2月に封禪の実施をもくろんだが、群公の反対にあった。『漢書』王莽傳・中は、次のように伝える。

天鳳元年正月、赦天下。

莽曰「予以二月建寅之節行巡狩之禮，太宮齋糝乾肉，內者行張坐臥，所過毋得有所給。予之東巡，必躬載耒，每縣則耕，以勸東作。予之南巡，必躬載耨，每縣則耨，以勸南僞。予之西巡，必躬載鉏，每縣則耨，以勸西成。予之北巡，必躬載拂，每縣則粟，以勸蓋藏。畢北巡狩之禮，即于土中居雒陽之都焉。敢有趨讎犯法，輒以軍法從事。」羣公奏言「皇帝至孝，往年文母聖體不豫，躬親供養，衣冠稀解。因遭棄羣臣悲哀，顔色未復，飲食損少。今一歲四巡，道路萬里，春秋尊，非糝乾肉之能堪。且無巡狩，須闋大服，以安聖體。臣等盡力養牧兆民，奉稱明詔。」莽曰「羣公、羣牧、羣司、諸侯、庶尹願盡力相師養牧兆民，欲以稱予，繇此敬聽，

其助之哉。毋食言焉。更以天鳳七年，歲在大梁，倉龍庚辰，行巡狩之禮。」

この年の封禪もまた実現せず、天鳳7年（後20）まで延期されることになった。しかし、天鳳5年（後18）に赤眉の乱が起き、翌天鳳6年（後19）春になると、王莽は「見盜賊多，乃令太使推三萬六千歲歷紀，六歲一改元，布天下<sup>(2)</sup>」とし、同時に翌年には地皇と改元した。そのときには、もはや封禪をおこなう意思はなくなっていた。

このように、王莽の封禪挙行は延期が重なり、実現することはなかった。しかし、始建国4年（後12）の計画では、翌年2月に予定していた封禪の費用の大半を執行していた。帛、馬、棗盛（穀物を盛った供物）だけでなく、玉牒のような封禪の主要な儀礼用具も準備されていてしかるべきである。したがって、王莽の封禪玉牒は始建国4年に製作されたと考えられる。

封禪玉牒の製作年代

王莽がたんに「巡狩」といい、「封禪」といっていないことは、注意を要する。これは擬古的な表現である。先秦時代の典籍には「封禪」ではなく「巡狩」とある。その後、次第に「巡狩」と「封禪」が混用されるようになった。『書經』堯典には、次のような文章がある。

正月上日，受終于文祖。在璿璣玉衡，以齊七政。肆類于上帝，禋于六宗，望于山川，徧于羣神。輯五瑞。既月，乃日覲四嶽羣牧，班瑞于羣后。……

歲二月，東巡狩，至于岱宗，柴。望秩于山川，肆覲東后，協時月正日，同律度量衡。脩五禮，五玉，三帛，二生，一死贄。如五器，畢乃復。五月南巡守，至于南嶽，如岱禮。八月西巡守，至于西嶽，如初。十有一月。朔巡守，至于北嶽，如西禮。歸格于藝祖，用特。五載一巡守。羣后四朝，敷奏以言，明試以功，車服以庸。

王莽が封禪の詔書について協議した際、その語句の多くがこれに由来していることは明らかである。類似した語句は、現在まで伝わっている『偽古文尚書』舜典にもみることができる。司馬遷の『史記』封禪書もこれを引用しているが、そこに「巡狩」と「封禪」の区別はみられない。それだけでなく、漢代の封禪に関する記載は、「巡狩」あるいは「封禪」とあり、「巡狩」と「封禪」を列記している場合もある。

巡狩と封禪

『史記』封禪書には、漢の文帝が封禪について協議した記事がある。

夏四月，文帝親拜霸渭之會，以郊見渭陽五帝。……而使博士諸生刺『六經』中作『王制』，謀議巡狩封禪事。

漢の武帝の封禪については、次のようにある。

（武帝）元年，漢興已六十餘年矣。天下艾定，搢紳之屬皆望天子封禪改正度也，而上鄉儒術，招賢良，……草巡狩封禪改曆服色事未就。會竇太后治黃老言，不好儒術，……諸所興爲皆廢。……

天子從禪還，坐明堂，羣臣更上壽。……又下詔曰「古者天子五載一巡狩，用事泰山，諸侯有朝宿地。其令諸侯各治邸泰山下。」

武帝は漢王室の封禪を建議し、元封元年（前110）夏4月にはじめて泰山で封禪をおこない、以後、元封5年（前106）春3月、太初3年（前102）夏4月、天漢3年（前98）春3月、太始4年（前93）春3月、征和4年（前89）春3月と、5回の封禪をおこなっている。この5年に1度、封禪を修める「五年一脩封」は、『書經』堯典の五載一巡狩の制度と一致しており、武帝の儒教尊重がよみとれる。

後漢の光武帝は中元元年（後56）に封禪を実施しているが、やはり『書經』堯典を尊重して

「巡狩」と表記する。『後漢書』張純傳に次のような記述がある。

(建武)三十年，純奏上宜封禪，曰「自古受命而帝，治世之隆，必有封禪，以告成功焉。

『樂動聲儀』曰『以『雅』治人，『風』成於『頌』。』有周之盛，成康之間，郊配封禪，皆可見也。『書』曰『歲二月，東巡狩，至于岱宗，柴。』則封禪之義也。臣伏見陛下受中興之命，平海內之亂，脩復祖宗，撫存萬姓，天下曠然，咸蒙更生，恩德雲行，惠澤雨施，黎元安寧，夷狄慕義。『詩』云『受天之祜，四方來賀。』今攝提之歲，倉龍甲寅，德在東宮。宜及嘉時，遵唐帝之典，繼孝武之業，以二月東巡狩，封于岱宗，明中興，勒功勳，復祖統，報天神，禪梁父，祀地祇，傳祚子孫，萬世之基也。」中元元年，帝乃東巡岱宗，以純視御史大夫從，并上元封舊儀及刻石文。

『後漢書』光武帝紀・下には、次のように記されている。

中元元年春正月，……丁卯，東巡狩。二月己卯，幸魯，進幸太山。……辛卯，柴望岱宗，登封太山。甲午，禪于梁父。

『續漢書』祭祀志・上には、光武帝の封禪文が引用されている。

維建武三十有二年二月，皇帝東巡狩，至于岱宗，柴，望秩於山川，班于羣神，遂觀東后。劉昭は「欲及二月者，『虞書』『歲二月，東巡狩，至于岱宗，柴。』」と注を加えている。『晉書』禮志・下の「天子所以巡狩，至于方嶽，燔柴祭天，以告其成功」の箇所でも、「巡狩」と「封禪」を区別していない。いずれも『書經』堯典の古制にしたがっているのである。

王莽は自らを周公になぞらえ、古法を慕い、制度を改め、旧典に倣った。なかでも『書經』にしたがった例が非常に多い。黄帝、虞、舜の儀礼の継承者として自らを誇り、劉歆を国師として敬い、古文経学の提唱に力を注いだ王莽であるから、「巡狩」という語句は、『書經』堯典に依拠した表現であり、封禪を意味していた。「封禪」は必ず「巡狩」をともなったが、「巡狩」は必ずしも「封禪」を実施するとは限らない。『白虎通義』は「巡狩」と「封禪」とを二つのこととして分けているが、儒家の伝統では「巡狩」は「封禪」を含む習慣があった。『書經』堯典には「二月に東へ巡狩し、岱宗に至ると柴を燃やして、後に祖禰へ帰る」とある。封禪の次第を比較してみると、それは「巡狩」の制度とまったく同じである。『春秋』公羊傳・隱公八年の記述に「天子有事于泰山，諸侯皆從泰山之下」とある。何休は「有事者，巡守祭天告至之禮也」と注を加えている。『白虎通義』巡狩には「巡狩必祭天何。本巡狩爲天，祭天所以告至也」とある。いずれも『書經』堯典を尊重して「巡狩」とのみ称し、「封禪」とはいわない。『孔叢子』巡狩には「子思游齊，陳莊伯與其同登泰山，而觀覽風景，見古代天子巡狩之銘文。陳子曰『我生獨不及帝王封禪之世。』」とある。実際、世人の多くは「封禪」を「巡狩」に重ね合わせ、「巡狩」に「封禪」を含蓄させ、「封禪」の起源が古い礼制にあることを体現しているかのようである。

## C 玉牒文の書体

玉牒文の書体には特徴がある。それは、新の銅文、鈞權、量斗などの銘文に使用された厳格で整った小篆とも、前漢の簡帛および銅器の銘文で流行した隸書とも異なる。むしろ、方正で落ち着いた、いわゆる「繆篆」に近い字体である。この字体は、おもに前漢中・後期から後漢にかけての銅器および印章にみられる。字体の構えや筆画はよく整っており、秦篆の簡略化と篆書から

隸書への移行過程が反映されている。王莽の時代の新嘉量・新衡杆銘文の字体は小篆に属するが、丸みを帯びた筆画を方折に改め、字体を方正に転化させた。そこに秦篆と繆篆との融合が認められる。

隸書への  
移行過程

繆篆は王莽六書の一つである。許慎は『説文解字』序で次のように記した。

及亡新居攝，使大司空甄豐等校文書之部，頗改定古文。時有六書，一曰古文，孔子壁中書也。二曰奇字，昂古文而異者也。三曰篆書，昂小篆。四曰左書，昂秦隸書，秦始皇帝使下杜人程邈所作也。五曰繆篆，所以摹印也。六曰鳥虫書，所以書幡信也。

この六書は、大篆、小篆、刻符、虫書、摹印、署書、殳書、隸書といった秦八書から、二つの書体が欠けたものである。ただし、玉牒文はすべて繆篆で記されているわけではない。たとえば「壹」の字は、「漢史農碑」および「西嶽華山廟碑」に見られ、すでに隸書の範疇にある。「父」「老」の2字も小篆から隸書へ変化する過渡的な特徴が際立っており、やはり隸書の範疇に属する。牒文の書体は繆篆が主体で、隸書がこれを補うものとみることができる。王莽の時代の六書にある隸書は「左書」ともいった。『説文解字』序の段玉裁注で「左，今之佐字。……佐書，謂其法便捷，可以佐助篆所不逮」と論じられている内容は、玉牒文の書体と一致する。

## D 玉牒の性格

玉牒文は「封禪泰山」などの内容から、それが封禪儀礼のための道具であったことがわかる。古代の封禪は、天地の功に報いるためにある。そのうち、封礼は壇を築いて天を祭り、禪礼は壇を掃い清めて地を祭る。封礼は泰山でおこなわれ、禪礼は泰山の麓にある梁父、社首といった小山で実施された。封禪は祭天に重点が置かれていた。

封礼・禪礼

古代の封禪儀礼に関する次第や道具には、時代によって異同があり、実状を考察することは困難である。秦の始皇帝がおこなった封禪の詳細はわからないが、『史記』封禪書には、次のように記されている。

秦始皇帝の  
封禪儀礼

始皇、昂帝位三年，東巡郡縣，祠騶嶧山，頌秦功業。於是徵從齊魯之儒生博士七十人。至乎泰山下。諸儒生或議曰「古者封禪爲蒲車，惡傷山之土石草木。埽地而祭，席用菹稭，言其易遵也。」始皇聞此議各乖異，難施用，由此細儒生。

漢の武帝がおこなった封禪については、知られている内容も漠然としたもので、すべて太一・后土を祭る儀礼にしがっていた。『史記』封禪書には、次のような記録がある。

漢武帝の  
封禪儀礼

封禪用希曠絕，莫知其儀禮，而羣儒采封禪『書經』『周官』『王制』之望祀射牛事。……天子既聞公孫卿及方士之言，黃帝以上封禪，皆致怪物與神通，欲放黃帝以上接神僊人蓬萊土，高世比德於九皇，而頗采儒術以文之。羣儒既已不能辨明封禪事，又牽拘於『詩』『書』古文而不能騁。上爲封禪祠器示羣儒，羣儒或曰「不與古同」，徐偃又曰「太常諸生行禮不如魯善」，周霸屬圖封禪事，於是上細偃、霸，而盡罷諸儒不用。

……上念諸儒及方士言封禪人人殊，不經，難施用。

『續漢書』祭祀志・上には「封禪不常，時人莫知。元封元年，上以方士言作封禪器，以示羣儒，多言不合古，於是罷諸儒不用」とある。『漢書』兒寬傳には、武帝が封禪の儀礼を定めるにあたって、次のように発言したとある。

上議欲放古巡狩封禪之事，諸儒對者五十餘人，未能有所定。先是司馬相如病死，有遺書，頌功德言符瑞，足以封泰山。上奇其書，以問兒寬。寬對曰「……天地並應，符瑞昭明。其封泰山，禪梁父，昭姓考瑞，帝王之盛節也。然享薦之義，不著于經，……唯聖主所由，制定其當，非羣臣之所能列。……」。上然之，乃自制儀，采儒術以文焉，蓋此時事。

封禪ははるか昔のことであり、その儀礼に関する次第や道具の記載は經典になく、後人がこれのことごとく明らかにすることはできなかつたようである。そこで、武帝は封禪儀礼を自ら定め、元封元年（前110）に泰山に登って封礼を執りおこない、その儀礼は太一郊祀の例に倣った。また、泰山下の東北にある肅然山で禪礼を挙行し、その儀礼は后土祭祀を範とした。このときの儀礼の次第や道具は、古制と違いはあつたものの、後世に与えた影響は大きかつた。『史記』封禪書は「每世之隆，則封禪答焉，及衰而息。厥曠遠者千有餘載，近者數百載，故其儀闕然埋滅，其詳不可得而記聞云」と記す。『晉書』禮志・下は「封禪之說，經典無聞。……秦漢行其典，前史各陳其制矣。……此儀久廢，非倉畢所定。宜下公卿，廣撰其禮」と記す。これらの記述は、歴代の帝王が封禪を挙行する際に儀礼の内容を定めようとしたが、前代との時間の開きが大きく、困難であつたことを物語っている。

後漢光武帝  
の封禪儀礼

後漢の光武帝が建武中元元年（後56）に封禪をおこなつた際には、元封の旧事に倣つた。『續漢書』祭祀志・上は、そのときの封禪儀礼の次第や道具について詳細に述べている。

上許梁松等奏，乃求元封時封禪故事，議封禪所施用。有司奏當用方石再累置壇中，皆方五尺，厚一尺，用玉牒書藏方石。牒厚五寸，長尺三寸，廣五寸，有玉檢。又用石檢十枚，列於石旁，東西各三，南北各二，皆長三尺，廣一尺，厚七尺。檢中刻三處，深四寸，方五寸，有蓋。檢用金縷五周，以水銀和金以爲泥。玉璽一方寸二分，一枚方五寸。方石四角又有距石，皆再累。枚長一丈，厚一尺，廣二尺，皆在圓壇上。其下用距石十八枚，皆高三尺，厚一尺，廣二尺，如小碑，環壇立之，去壇三步。距石下皆有石跗，入地四尺。又用石碑，高九尺，廣三尺五寸，厚尺二寸，立壇丙地，去壇三丈以上，以刻書。

文字を刻む  
封禪儀具

これにより、漢代の封禪儀具のうち、文字を刻んだものは石碑、玉璽、玉牒だけであつたことがわかる。玉璽の形態は、今回出土した玉牒とまったく違つていた。また、石碑は泰山の山頂に立てられ、その高さは9尺、広さ3尺5寸で、光武帝の功業と名号を記している。秦の立石は、高さ3丈1尺であつた。『漢書』武帝紀に「夏四月，上還，登封泰山」とあるが、顔師古は応劭を引用して、「封者，壇廣十二丈，高二丈，階三等，封於其上，示增高也。刻石，紀績也。立石三丈一尺，其辭曰『事天以禮，立身以義。事親以孝，育民以仁。四守之内，莫不爲羣縣，四夷八蠻，咸來貢職，與天無極。人民蕃息，天祿永得。』」と注釈している。<sup>(3)</sup>しかし、始皇帝と武帝の立石の高さが3丈1尺であつたのに対し、光武帝の立石は高さ1丈2尺であつた。応劭は『漢官儀』の中で、馬第伯の『封禪儀』を引用して、「入其幕府，觀治石。……一紀號石，高丈二尺，廣三尺，厚尺二寸，名曰立石。一枚，刻文字，紀功德」と記す。以上から、石碑と出土した玉牒の形態との違いは明らかである。

『白虎通義』封禪には「因高告高，順其類也。故升封者，增高也。下禪梁甫之基，廣厚也。皆刻石紀號者，著己之功迹以自効也」とある。現在に伝わる秦の「李斯泰山刻石」、三国時代呉の「天璽禪国山碑」は、それぞれ秦の始皇帝および孫皓が封禪したときに、その年号を石に刻み込んだものである。許慎の『説文解字』序に「書者，如也。以迄五帝三王之世，改易殊體，封于泰

山者七十有二代，靡有同焉」とあるが、これはすなわち刻石の文を指している。始皇帝封禪刻石の内容は『史記』秦始皇本紀に、光武帝の封禪碑文は『續漢書』祭祀志にそれぞれ載っているが、出土した玉牒文と内容の異なる箇所が多い。以上の考察から、漢長安城桂宮から出土した新王莽封禪儀礼の玉牒文が、封禪のための玉牒であることは明らかである。

『續漢書』祭祀志によれば、光武帝の封禪は武帝の元封のときの制度を踏襲しており、玉牒の長さは1尺3寸、幅5寸、厚さ5寸であった。唐代の封禪もこの制度を遵守していた<sup>(5)</sup>。新王莽の玉牒の長さは、破損のため計測することができないが、新代の1尺はほぼ今日の23.0cmであるから、幅は4寸、厚さ1寸2分となり、元封封禪の玉牒とは少し異なる。

王莽は漢を廃し、漢礼を継承しなかった。政治では復古を主張し、制度をたびたび更新したが、祭礼についても頻繁に変更した。武帝は甘泉に泰一祠、汾陰に后土祠を立て、郊祭を執りおこなったが、これらの施設は前漢の中・後期まで長く使用された。しかし、匡衡・張譚・杜鄴は、これらを古の制度に合わないと考えた<sup>(6)</sup>。平帝の元始元年(後1)、王莽は武帝の甘泉太陰・河東少陽の地位は失われ、礼制に合わないことを改めて奏上し、甘泉と汾陰の祠を長安の南北郊外に作るように協議し<sup>(7)</sup>、武帝の制度を強引に変更した。

『漢書』元后傳・下は「及莽改號太后爲新室文母，絶之於漢，不今得體元帝」と伝える。『漢書』王莽傳には「改定安太后號曰黃皇室主，絶之於漢也」「孫公明公壽病死，旬月四喪焉。莽壞漢孝武、孝昭廟，分葬子孫其中」とあり、漢代の例をことごとく廃絶した。王莽は自らを黄帝虞舜の後裔と称し、その儀礼の挙行を力説した。王莽の定めた儀礼制度は、繁文縟礼であり、武帝のものとはおのずと異なっていた。武帝の自ら定めた封禪儀礼はすでに古制と同じではなかったため、王莽がそれにしたがうことは不可能であったのである。よって、新王莽封禪玉牒のこのような特殊な形態は、武帝の事例以外に典拠があった可能性がきわめて高い。

実際、武帝の封禪儀礼は古制と異なっており、後世に、旧典にしたがって別の玉牒の作り方を定めたのは、王莽だけではなかった。『宋會要輯稿』二十一冊・禮・二二之四には「宋眞宗大中祥符元年四月二十三日，中舍夏侯晟上漢武帝『封禪圖』，續金玉匱石礎距之狀，各有注釋。帝覽之，以所載與舊典小異，詔詳定所參校施行」とあり、武帝の制度は古制と合わずにこれを改めたことが記されている。『宋史』禮志・七は「以玉爲五牒，牒各長尺二寸，廣五寸，厚一寸」と記し、宋の眞宗が封禪の器具について発言したことに論及している。その制定したところは新王莽玉牒の形態とほぼ同じである。また、『續漢書』祭祀志・上には「二十五日甲午，禪，祭地于梁陰，以高后配，山川羣神從，如元始中北郊故事」とある。王先謙は『後漢書集解』の中で黄山を引用して「莽議北郊配後，本與封禪無涉，盜國後，屢議巡狩，亦未實行。是以高后配饗梁陰，實當時無識諸臣以意爲之耳，光武誤聽，唐高宗遵而行之<sup>(8)</sup>」と記した。

これらの文献から、王莽の方法には根拠があり、後世にもある程度影響していたように見受けられる。しかし、実際は、封禪儀礼の次第や道具の明確な記載は史書になく、帝王は挙行に際して自己流をとった。『新唐書』禮樂志・四には、「『文中子』『封禪，非古也。其秦漢之侈心乎。』蓋其曠世不常行，而于禮無所本，故自漢以來，儒生學官論議不同，而至于不能決，則出于時君變意而行之爾」と記されている。これはきわめて妥当な内容である。

このほか、新王莽玉牒の石材の選択と牒文の彫刻にみられる処理方法は、漢代の封禪玉牒と完全に合致する。『續漢書』祭祀志・上には、光武帝が、武帝の元封年間の封禪に際して作られた



封禪玉牒に倣ったことが記載されている。そして「遂使泰山郡及魯趣石工，宜取完青石，無必五色。時以印工不能刻玉牒，欲用丹漆書之，會求得能刻玉者，遂書。書秘刻方石中，命容玉牒」という記載から、漢代の封禪制度によれば、玉牒の石材は必ず純粋な青石が用いられ、牒文の文字は刻み込まれて赤く塗られていたことがわかる。王莽の玉牒は純粋な黒色の青石を使用しているが、これは天玄の色に応じたものである。また、王莽玉牒の刻文には朱を塗っており、この制度とまったく一致する。一方、唐宋の封禪では、玉牒は依然として文字を刻み込んだものの、朱の塗布から金を嵌め込むように改められた。

## E 玉牒文の釈読

歴代の封禪はいずれも封蔵されてきた。秦漢の儀礼では玉牒をもって神に告げ、唐宋の封禪では玉牒・玉册（玉策）を併用するなど、制度に違いがあった。『史記』封禪書の張守節の『正義』には「此泰山上築土爲壇以祭天，報天之功，故曰封。此泰山下小山上除地，報地之功，故曰禪。言禪者，神之也<sup>(9)</sup>」とある。『後漢書』光武帝紀・下の李賢の注には「封謂聚土爲壇，壇謂除地而祭。改『壇』爲『禪』，神之也」とある。また、『白虎通義』封禪には「或曰封者，金泥銀繩。或曰石泥金繩，封之以印璽」とある。『漢書』武帝紀の顔師古の注では、孟康を引用して「封，崇也。助天之高也。刻石紀號，有金策石函金泥玉檢之封焉」とある。これらの文献により、封礼とは、盛り土をして壇を築き、天を祭るだけでなく、石函に玉牒を封蔵して神に告げていたことがわかる。唐宋の封禪は、封礼・禪礼ともに封蔵していたが、秦漢の封禪は、封礼のときのみ封蔵していたようで、制度に大きな変化があった。

玉牒は、石函・石礎に入れて泰山に納められた。唐宋より前は秘密に伏せられ、明らかにされなかったので、牒文の内容を知るすべはなかった。『史記』封禪書は、秦の始皇帝の封禪について、「而封蔵皆祕之，世不得而記也」と記す。また、漢の武帝の封禪についても、「封泰山下東方，如郊祭祠太一之禮。封廣丈二尺，高九尺，其下則有玉牒書，書祕。禮畢，天子獨與侍中奉車子侯上泰山，亦有封，其事皆禁<sup>(10)</sup>」と記す。『漢書』武帝紀の顔師古注には、応劭を引用して「武帝封廣丈二尺，高九尺，其下則有牒書，祕」とある。『續漢書』祭祀志・上には、光武帝「封泰山，恐所施用非是，乃祕其事」とある。

これらの記載によれば、当時の封禪玉牒の内容は極秘であった。唐の玄宗は開元13年(725)に封禪をおこなったとき、このことに疑問をもって賀知章に諮問し、同時に封禪は民のために幸福を祈るものであるとして、初めて玉牒文を公表した。『旧唐書』禮儀志・三によれば、開元13年11月に泰山に至り、礼官学仕の賀知章等を召集して儀礼の次第について協議した。「玄宗因問『玉牒之文，前代帝王，何故祕之。』知章對曰『玉牒本是通於神明之意。前代帝王，所求各異，或禱年算，或思神仙，其事微密，是故莫知之。』玄宗曰『朕今之行，皆爲蒼生祈福，更無祕請。宜將玉牒出示百僚，使知朕意。』」ということから、『旧唐書』は玄宗開元13年の封禪祭天玉牒文を次のように伝えている。

有唐嗣天子臣某，敢昭告于昊天上帝。天啓李氏，運興土德。高祖，太宗，受命立極。高宗升中，六合殷盛。中宗紹復，繼體不定。上帝眷祐，錫臣忠武。底綏內難，推戴聖父。恭承大寶，十有三年。敬若天意，四海晏然。封祀岱嶽，謝成于天。子孫百祿，蒼生受福。

これ以後、玉牒・玉冊の文は公表されることとなった。宋の真宗の大中祥符元年（1008）の封禪も、唐玄宗に倣って、玉牒・玉冊を公開した。『宋史』禮志・七は、真宗の封禪告天玉牒文を掲載している。

宋真宗の告天玉牒文と告天玉冊文

有宋嗣天子臣某，敢昭告于昊天上帝。啓運大同，惟宋受命，太祖肇基，功成治定。太宗膺圖，重熙累盛。粵惟冲人，丕承列聖，寅恭奉天，憂勤聽政。一紀于茲，四隩來暨，丕貺殊尤，元符章示，儲慶發祥，清浄可致，時和年豐，羣生咸遂。仰荷顧懷，敢忘繼志，僉議大封，聿申昭事。躬陟喬嶽，對越上天，率禮祇肅，備物吉錫，以仁守位，以孝奉先。祈福逮下，侑神昭德，惠綏黎元，懋建皇極，天祿無疆，靈休允廸，萬業其昌，永保純錫。

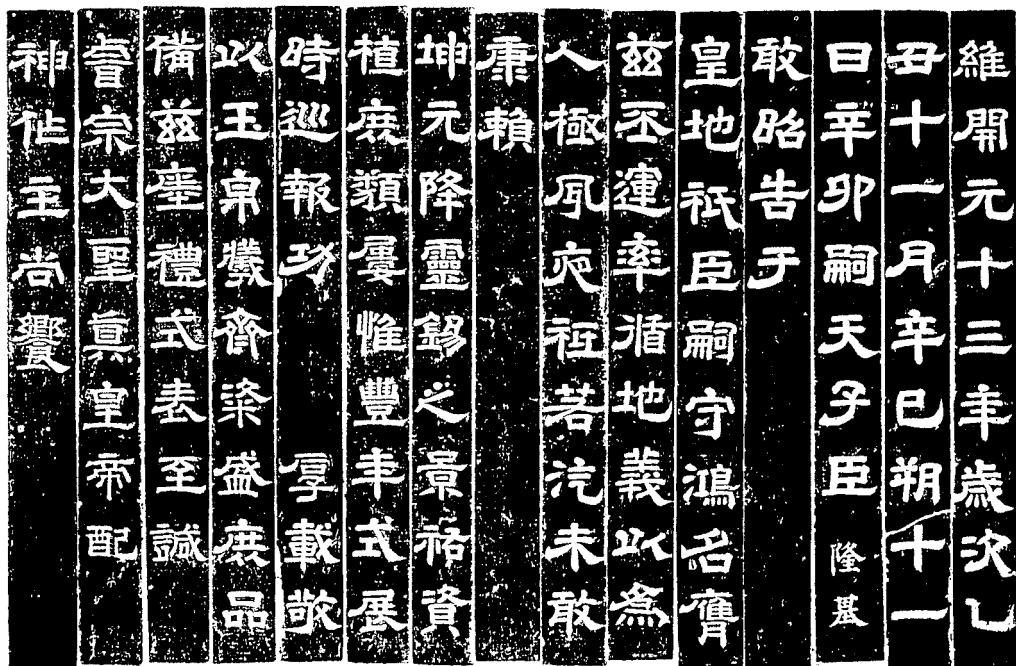
さらに、封禪告天玉冊文も掲載されている。

嗣天子臣某，敢昭告于昊天上帝。臣嗣膺景命，昭事上穹。昔太祖揖讓開基，太宗憂勤致治，廓清寰宇，混一車書，固仰升中，以延積慶。元符錫祚，衆寶効祥，異域咸懷，豐年屢應。虔脩封祀，祈福黎元。謹以玉帛、犧牲、粢盛、庶品、備茲禋燎，式荐至誠。皇伯孝太祖皇帝，皇孝太宗皇帝配神作主。尚饗。

このほか、唐の玄宗開元13年（725）の禪地祇玉冊が、宋の太宗の太平興國年間（976～984）に出土したことがある。宋の真宗は、封禪のときにこの唐冊を埋め戻して、その上に自身の禪地祇玉冊を重ねて置いた。二つの玉冊は、後の民国20年（1931）に馬鴻逵が社首山（今は蒿里山と呼ぶ）で得て、現在は台北故宮博物院に所蔵されている。<sup>(12)</sup> 唐の玄宗禪地祇玉冊文は、次の通りである（第54図）。

唐玄宗の禪地祇玉冊文

維開元十三年歲次乙丑十一月辛巳朔十一日辛卯，嗣天子臣隆基，敢昭告于皇地祇。臣嗣守鴻名，膺茲丕運，率循地義，以爲人極。夙夜祇若，汽未敢康。賴坤元降靈，錫之景佑，資植庶類，屢惟豐年。式展時巡，報功厚載。敬以玉帛、犧齊、粢盛、庶品，備茲瘞禮，式表至誠。睿宗大聖眞皇帝配神作主。尚饗。



第54図 唐玄宗禪地祇玉冊

また、宋の真宗禪地祇玉册文は『宋史』禮志・七に掲載されている。これと出土品の文を対照させるため、出土した玉牒文（後述）を以下に抜粋する（括弧内は『宋史』の異文）（第55図）。

維大中祥符元年歲次戊申十月戊子朔二十五日壬子，嗣天子臣（某），敢昭告于皇地祇。無私垂佑，有宋肇基，命惟天啓，慶賴坤儀。太祖神武，威震萬寓。太宗聖文，德綏九土。臣恭膺寶命，纂承丕緒，穹昊降鑑（祥），靈符下付，景祚延鴻，祕文昭著。八表以寧，五兵不試，九穀豐穰，百姓親比，方輿所資，涼德是愧。溥率同詞，搢紳協議，因以時巡，亦既肆類。躬陳典禮，祇事厚載，致孝祖宗，潔誠嚴配。以伸大報，聿脩明祀，本支百世，黎元受祉。謹以玉帛、犧齊（牲）、粢盛、庶品，備茲禋瘞，式表（薦）至誠。皇伯考太祖啓運立極，英武聖文，神德玄功大孝皇帝，皇孝太宗至仁應道，神功聖德，文武大明廣孝皇帝配神作主。尚饗。（「皇伯考太祖」以下「皇孝太宗皇帝配神作主。尚饗。」）

『宋史』にある真宗の大中祥符元年（1008）封禪の告天玉牒・玉册は、明代・清代に出土している。明の查志隆は、『岱史』で「明成化十八年（1482）秋，（日觀）峰側被雨水沖出玉簡，會中使有事東藩，復馳以獻，乃命仍瘞舊所」と記す。そして清の聶劍光は、『泰山道里記』に「『岱史』云，洪武初，居民于山中得玉匣，内有玉簡十六，有司獻于朝，驗其刻乃宋真宗祀泰山后土文。又成化十八年秋，日觀峰下雨水沖出玉簡，會中使有事東藩，復馳以獻，乃命仍瘞舊所。乾隆十二年（1747）十二月十四日，工人于日觀峰側鑿石，得玉匣二，各緘以玉檢金繩。啓視，其一爲祥符玉册，共十七簡，簡字一行，外用黃縵折疊裏之，見風灰飛，其一未啓。其簡尺寸悉如『宋史』禮志所載，巡撫阿里衮獻于朝」と記している。後の列強の分割と戦争の頻発により、真宗告天玉册の行方は不明である<sup>(13)</sup>。

古代の封禪に関する資料はきわめて限られていたので、秦漢の封禪玉牒の内容やそれと唐宋封禪との関係は不明であった。しかし、文献と出土資料とを駆使すれば、新王莽封禪玉牒文の理解に有効となる。実際、桂宮出土の玉牒は、形態が封禪玉牒と一致するだけでなく、牒文の内容



第55図 宋真宗禪地祇玉册

が封禪儀礼の道具に属することを証明するうえで重要な部分となっている。以下、語句ごとに考証を進めよう。

**萬歲壹紀。** 紀は世代のことである。『文選』班孟堅幽通賦に「皇十紀而鴻漸兮，有羽儀於上帝」とあり、その注では応劭を引用して、「紀，世也。……言先人至漢十世，始進仕，有羽翼于京師也」とする。宋の真宗封禪告天玉牒文の「一紀于茲」にある「一紀」とは、宋一代を意味している。玉牒文の「壹紀」は、王莽の建てた新朝一世を指しているだけでなく、「壹」に統一の意味も含ませていたことが明らかで、統一新朝の世を指している。『續漢書』祭祀志・上には、光武帝封禪刻文が「是月辛卯，柴，登封泰山。甲午，禪于梁陰。以承靈瑞，以為兆民，永茲一字，垂于後昆」と記録されている。したがって、牒文の「萬歲壹紀」と「永茲一字」とは同義であり、ともに国の統一の長久を表現している。『漢書』王莽傳・下に「予以神明聖祖黃虞遺統受命，至于地皇四年為十五年。正以三年終冬絕滅霸駁之橋，欲以興成新室統壹長存之道也」とあるが、この「新室統壹長存」の意味は、牒文の「萬歲壹紀」と合致する。つまりは王莽の願望であった。

国の統一の  
長久を表現

古代の封禪において、国運の長久と君主の長寿は祈祷のおもな内容であったので、「萬歲」と称するのは、おのずと帝王が封禪の祥瑞の兆しを得ることとなる。『史記』封禪書は、漢の武帝の封禪について「遂東幸緱氏，禮登中嶽太室。從官在山下聞若有言『萬歲』云。問上，上不言。問下，下不言。於是以前三百戶封太室奉祠，命曰崇高邑。東上泰山，泰山之草木葉未生，乃令人上石立之泰山巔<sup>(14)</sup>」と記す。胡三省は、『資治通鑑』の注で荀悦を引用し、「萬歲，神稱之也」と記す。『漢書』武帝紀は、このことについて「夏四月癸卯，上還，登封泰山，降坐明堂。詔曰『朕以眇身承至尊，兢兢焉惟德菲薄，不明于禮樂，故用事八神。遭天地況施，著見景象，屑然如有聞。震于怪物，欲止不敢，遂登封泰山，至於梁父，然後升壇肅然。……』」と記す。顔師古は、「屑然如有聞」に臣瓚を引用して「聞呼萬歲者三是也」と注を加えている。封禪はこのような瑞兆の出現を要し、後に次第に封禪大典の重要な次第となっていった。『續漢書』祭祀志・上は、光武帝の封禪について次のように伝える。

早晡時昂位于壇，北面。羣臣以次陳後，西上，畢位升壇。尚書令奉玉牒檢，皇帝以寸二分璽親封之，訖，太常命人發壇上石，尚書令藏玉牒已，復石覆訖，尚書令以五寸印封石檢。事畢，皇帝再拜，羣臣稱萬歲。

劉昭は、『封禪儀』を引用して「稱萬歲，音動山谷。有氣屬天，遙望不見山巔，山巔人在氣中，不知也」と注を加えている。『北堂書鈔』禮儀部・三には、応劭の『漢官儀』が次のように引用されている。

建武三十二年二月辛卯，登封泰山，皇帝北面。尚書令奉玉牒檢進，南面跪，太常曰，『請封。』皇帝親封，畢，退復位。太常曰，『請拜。』皇帝再拜。大行禮畢，羣臣皆呼萬歲。命人發壇上石，尚書令藏玉牒，封石檢也。<sup>(15)</sup>

『旧唐書』禮儀志・三に、唐の玄宗の封禪についての記事がある。

（開元十三年十一月）庚寅，祀昊天上帝于山上封臺之前壇，高祖神堯皇帝配享焉。……山上作圓臺四階，謂之封壇。臺上有方石再累，謂之石礎。玉牒，玉策，刻玉填金為字，各盛以玉匱，束以金繩，封以金泥，皇帝以受命寶印之。納二玉匱於礎中，金泥礎際，以「天下同文」之印封之。壇東南為燎壇，積柴其上。皇帝就望燎位，火發，羣臣稱萬歲，傳呼下山下，聲動天地。

『宋史』禮志・七には、宋の真宗の封禪についての記事がある。

十月戊子朔，禁天下屠殺一月。……有司請登封曰圓臺立黃麾仗，至山下壇設權火。將行禮，然炬相屬，有出朱字漆牌，遣執仗者傳付山下。牌至，公卿就位，皇帝就望燎位，山上傳呼萬歲，下昂舉燎。……

辛亥，設昊天上帝位于圓臺。……三獻畢，封金，玉匱。……帝登圓臺閱視訖，還御幄。宰臣率從官稱賀，山下傳呼萬歲，聲動山谷。

これらの記載により、群臣が万歳を唱えることは、天を封ずる儀礼の重要な次第となっていたことがわかる。このほか、『新唐書』禮樂志・四には、「(唐)高宗乾封元年封泰山。……是歲正月，天子祀昊天上帝于山下之封祀壇，以高祖，太宗配，如圓丘之禮。親封玉册，置石礎，聚五色土封之。……已事，升山。明日，又封玉册于登封壇。又明日，祀皇地祇于社首山之降禪壇，如方丘之禮。……乃詔立登封、降禪、朝覲之碑，名封祀壇曰舞鶴臺，登封壇曰萬歲臺，降禪壇曰景雲臺，以紀瑞焉<sup>(16)</sup>」とあり、登封臺を萬歲臺と改称することによって、封天の瑞祥を記した。『旧唐書』禮儀志・三には「則天證聖元年，將有事於嵩山。……至天册萬歲二年臘月甲申，親行登封之禮。禮畢，便大赦，改元萬歲登封」とある。『旧唐書』則天皇后本紀には「證聖元年春一月，……大赦天下，改元，大酺七日。……秋九月，親祀南郊，加尊號天册金輪聖神皇帝，大赦天下，改元爲天册萬歲。……萬歲登封元年臘月甲申，上登封于嵩嶽，大赦天下，改元，大酺九日。……夏四月，親享明堂，大赦天下，改元爲萬歲通天，大酺七日<sup>(17)</sup>」とある。武則天は、中嶽で封禪をおこなってから封禪儀礼の完了に至るまで、前後3度にわたり改元したが、いずれも「萬歲」の称号を冠している。このこともまた、封禪の主旨を強調している。

□□□ [徳]。「徳」字は、字の残存状況から釈読した。語句も4字で収まるようである。

## 二つの解釈

「徳」字の語句には、解釈の可能性が二つある。一つは、戦国後期の鄒衍が唱えた五徳終始の運とあるいは関連すると考え、もう一つは、厚德をもって封禪したと解する。

五徳終始の説は前漢の時代にひじょうに流行した。これによれば、新朝は土徳に属することになった。『漢書』王莽傳は次のように記す。「(王莽)昂眞天子位，定有天下之號曰新。其改正朔，易服色，變犧牲，殊徽幟，異器制。以十二月癸酉爲建國元年正月之朔，以鷄鳴爲時。服色配德上黃。……赤世計盡，終不可強濟。皇天明威，黃徳當興，隆顯大命，屬予以天下。……火徳銷盡，土徳當代，皇天眷然，去漢興新。……於是新皇帝立登車，之漢氏高廟受命。受命之日，丁卯也。丁，火，漢氏之徳也。卯，劉姓所以爲字也。明漢劉火徳盡，而傳于新室也」。つまり王莽は、漢を火徳、新を土徳と見なした。

『漢書』王莽傳によれば、始建国4年(後12)に王莽が巡狩封禪を協議したときに、「歳在壽星，填在明堂，倉龍癸酉，徳在中宮。觀晉掌歳，龜策告從」と封禪の前兆を明言している。顔師古注に「服虔注曰『倉龍，太歳也。』張晏曰『太歳起於甲寅爲龍，東方倉。癸徳在中宮也。』晉灼曰『壽星，角亢也。東宮倉龍，房、心也。心爲明堂，填星所在，其國昌。莽自謂土也，土行主填星。癸徳在中宮，宮又土也。』……『國語』晉文公以卯出酉入，過五鹿得土，歳在壽星，其日戊申。莽欲法之，以爲吉祥。正以二月建寅之節東巡狩者，取萬物生之始也。視晉識太歳所在，宿度所合，卜筮皆吉，故法之」とある。したがって、新王莽の玉牒文を、新朝の土徳の運をもって隆盛するというように解釈すれば、文献の記載と合致するだけでなく、先に紹介した唐の玄宗封禪告天玉牒にある「天啓李氏，運興土徳」の内容の証左となりうる。

古代の封禪をおこなう者は、有徳の君主でなければならなかった。『史記』封禪書には、「自古受命帝王，曷嘗不封禪。蓋有無其應而用事者矣，未有賭符瑞見而不臻乎泰山者也。雖受命而功不至，至梁父矣而徳不洽，洽矣而日有不暇給，是以崑事用希」とある。要するに、封禪は功徳に重きを置いている。そのため、古の封禪をおこなった帝王は、いずれも功徳があったと自らを誇った。『續漢書』祭祀志・上の劉昭注で引用された『東觀書』には、「登封告成，爲民報徳，百王所同」とある。『旧唐書』禮儀志・三には、「貞觀六年，平突厥，年穀屢登，羣臣上言請封泰山。太宗曰『議者以封禪爲大典。如朕本心，但使天下太平，家給人足，雖闕封禪之禮，亦可比徳堯舜。若百姓不足，夷狄内侵，縱脩封禪之儀，亦何異於桀紂。昔秦始皇自謂徳洽天心，自稱皇帝，登封岱宗，奢侈自矜。漢文帝竟不登封，而躬行儉約，刑措不用。今皆稱始皇爲暴虐之主，漢文爲有徳之君。以此而言，無假封禪。』」とある。いずれも徳と封禪の関係を説明している。『史記』封禪書には、「爰周徳之洽維成王，成王之封禪則近之矣」とある。『續漢書』祭祀志・上の劉昭・注は、袁宏を引用して、「然則封禪者，王者開務之大禮也。徳不周洽，不得輒議斯事。功不弘濟，不得彷彿斯禮」と記載している。

有徳の君主

秦の始皇帝の封禪は、「祇誦功徳」を主旨とし、ゆえに「立石頌徳」したのである<sup>(18)</sup>。漢武帝の封禪の任務は、まず徳を修めて礼を明らかにすることであつた<sup>(19)</sup>。後漢の建武30年(後54)、群臣は奏上して封禪を請願し、光武帝を「聖徳洋溢」と称賛した<sup>(20)</sup>。このとき、劉秀は自らを徳がないとし、封禪をおこなわなかつた<sup>(21)</sup>。いずれの場合でも、厚徳こそが封禪を推し進める条件であつた。『晉書』禮志・下には、魏の明帝が太和年間<sup>(22)</sup>に、護軍の蔣済が奏上して封禪を請願した記載がある。「元功懿徳，不刊梁山之石，無以顯帝王之功，示兆庶不朽之觀也」。しかし、魏の明帝は「吾何徳之脩」と、これを却下した。西晋太康元年(280)、尚書令の衛瓘らは奏上して封禪を請うた。「陛下之徳，合同四海，迹古考今，宜脩此禮」。これに対して、晋の武帝は、封禪とは「盛徳之事」であるとして、承認しなかつた<sup>(23)</sup>。隋の開皇14年(594)、群臣は封禪を請うた。文帝は「朕何徳以堪之」と言つてこれを受け入れず、ついに果たさなかつた<sup>(24)</sup>。唐の玄宗は、封禪とは厚き徳の報いであり、功業の成就を告げるものと捉えた<sup>(25)</sup>。歴代の封禪は、君主に功業を積み上げて徳を修めることを課したのである。

封禪の条件

漢王朝の運勢は途中でいったん衰え、元后は長寿であつた。王莽は、その勢力を借りて政治を補佐し、幼弱な皇帝を盛り立てて、大権を手中に収めた。成王を補佐した周公になぞらえて偽り、安漢公によって権力を司り、やがては天子に代わつて政務を執るに至り、皇帝の地位に登りつめた。その権勢をほしいままにしたため、その功徳を褒め称える者は甚だ多く、はじめ8,000人余りもいた。これに次いで王侯貴族で九錫を加えるように協議した者は920人、また上書した官吏および庶民はおよそ487,500人余りにも及び、威風に大勢がなびき従つた。『漢書』王莽傳・上には「元壽元年，日食，賢良周護，宋崇等對策深頌莽功徳」とある。元始年間、張敞の孫である張竦は、陳崇のために奏上書を起草して、王莽の功徳を称えた。「公卿咸嘆公徳，同盛公勛，皆以周公爲比。……揆公徳行，爲天下紀。觀公勛，爲萬世基」。その美辞麗句に溢れた論調は、ほかにも数多くある。これらは、王莽が十分に徳の厚い君主であると自負していたことを明確に示すものである。

作民父母。後漢の建武30年(後54)2月、群臣は光武帝に奏上して、封禪をおこなうように請願した。『續漢書』祭祀志・上の劉昭注に引用された『東觀書』には、太尉の趙憙が次のように上奏

したと記載されている。「自古帝王，每世之隆，未嘗不封禪。陛下聖德洋溢，順天行誅，撥亂中興，作民父母，脩復宗廟，救萬性命，黎庶賴福，海內清平。功成治定，羣司禮官咸以爲宜登封告成，爲民報德。百王所同，當仁不讓。宜登封岱宗，正三雍之禮，以明靈契，望秩羣神，以承天心也」。つまり、ここでは、劉秀は民衆の父母であり、封禪をおこなうのは民衆の幸福を祈るためであった。『續漢書』祭祀志・上には、光武帝が建武元年（後25）に即位して、天に祝文を告げたときの記録がある。「皇天上帝，后土神祇，睠顧降命，屬秀黎元，爲民父母，秀不敢當。羣下百僚，不謀同辭。咸曰王莽篡弑竊位，秀發憤興義兵，破王邑百萬衆於昆陽，誅王郎、銅馬、赤眉、青犢賊，平定天下，海內蒙恩，上當天心，下爲元元所歸<sup>(26)</sup>」。これにより、「作民父母」は、天を祭るときか封禪に用いられた、前漢と後漢の交替期の慣用語であったことが十分に見て取れる。唐の玄宗封天玉牒文は「底綏内難，推載聖父」といい、宋の真宗封天玉牒文は「祈福逮下，侑神昭德，惠綏黎元」とあり、封天玉牒文は「祈福黎元」と記す。いずれも、万民の父母であることは明らかである。『漢書』王莽傳・上には、王莽が天子の位に就いて、次のように詔したことが記載されている。「予以不德，襲于聖祖，爲萬國主，思安黎元」。これは、万民の父母であると自称していることにほかならない。

万民の父母

清〔深〕□□。「深」字は、残存した形から解釈した。4字からなる語句のようである。

先に引用した『東觀書』によれば、趙憙が奏上して光武帝に封禪を請願し、功は成就し政治は定まったといい、「海内清平」と記載している。宋の真宗封天玉牒文には、宋王朝が太平で、「清淨可致」という文言がある。いずれも、太平で安泰であるという意味の言葉を述べている。したがって、新の王莽玉牒の「清〔深〕□□」の意味もこれに近いはずである。

□〔罷〕退佞人姦軌，誅〔滅〕□□□□。「滅」の字は、残存した形から解釈した。「罷」字は、残存した形および文意から補填した。両語句は並列され、いずれも6字からなる語句であった。

王莽は、漢の成帝永始元年（前16）より新都侯に封ぜられて、騎都尉、光祿大夫、伺中を歴任し、益尊の爵位を与えられた。同時に、敵対分子の殲滅に尽力して、徒党を組織した。王莽は、まず外戚の定陵侯淳于長の罪過を摘発した後に、これを罰し、忠直の名を得た。『漢書』佞幸傳は記す。

初，許皇〔后〕坐執左道廢處長定宮，而后姊女靡爲龍額思侯夫人，寡居。（淳于）長與女靡私通，因取爲小妻。許后因女靡賂遺長，欲求復爲婕妤。長受許后金錢乘輿服御物前後千餘萬，詐許爲白上，立以爲左皇后。女靡每入長定宮，輒與女靡書，戲侮許后，媮易無不言。……（王）根兄子新都侯王莽心害長寵，私聞長取許女靡，受長定宮賂遺。……莽白上，上乃免長官，遣就國。……長具服戲侮長定宮，謀立左皇后，罪至大逆，死獄中。

『漢書』王莽傳・上は、次のように記述する。

是時，太后姊子淳于長以材能爲九卿，先進在莽右。莽陰求其罪過，因大司馬曲陽侯根白之，長伏誅，莽以獲忠直。

哀帝が即位すると、佞幸の董賢と外戚の丁・傅両家が勢力を得た。王莽は官を辞して家に戻り、門を閉ざして自らを守り、ついにこれを退けた。『漢書』佞幸傳は、次のように記す。

哀帝崩。太皇太后召大司馬（董）賢，引見東廂，問以喪事調度。賢内憂，不能對，免冠謝。太后曰「新都侯莽前以大司馬奉送先帝大行，曉習故事，吾令莽佐君。」賢頓首幸甚。太后遣使者召莽。既至，以太后指使尚書劾賢帝病不親醫藥，禁止賢不得入出宮殿司馬中。賢不知所

爲、詣闕免冠徒跣謝。莽使謁者以太后詔昂闕下冊賢曰「問者以來、陰陽不調、菑害並臻、元元蒙辜。夫三公、鼎足之輔也、高安侯賢未更事理、爲大司馬不合衆心、非所以折衝綏遠也。其收大司馬印綬、罷歸第。」昂日賢與妻皆自殺、家惶恐夜葬。莽疑其詐死、有司奏請發賢棺、至獄診視。莽復風大司徒光奏「賢質性巧佞、翼姦以獲封侯、父子專朝、兄弟並寵、多受嘗賜、治第宅、造冢壙、放効無極、不異王制、費以萬萬計、國家爲空虛。父子驕蹇、至不爲使者禮、受賜不拜、罪惡暴著。賢自殺伏辜、死後父恭等不悔過、乃復以沙畫棺四時之色、左蒼龍、右白虎、上著金銀日月、玉衣珠璧以棺、至尊無以加。恭等幸得免於誅、不宜在中土。臣請收沒入財物縣官。諸以賢爲官者皆免。」……賢既見發、羸診其尸、因埋獄中。賢所厚吏沛朱詡自劾去大司馬府、買棺衣收賢尸葬之。……王莽聞之而大怒、以它罪擊殺詡。

『漢書』王莽傳・上は、次のように記す。

莽還京師歲餘、哀帝崩、無子、而傅太后、丁太后皆先薨、太皇太后昂日駕之未央宮收取璽綬、遣使者馳召莽。詔尚書、諸發兵符節、百官奏事、中黃門、期門兵皆屬莽。莽白「大司馬高安侯董賢年少、不合衆心、收印綬。」賢昂日自殺。

哀帝が即位した当初、成帝の母は太皇太后と称し、成帝の趙皇后は皇太后と称した。しかし、哀帝の祖母の傅太后は母の丁后とともに宮城にあり、定陶共王と自称した。高昌侯の董宏は、定陶共王后を皇太后に立てるべきであると上奏した。『漢書』師丹傳には、次のように記す。

時丹以左將軍與大司馬王莽共劾奏宏「……誑誤聖朝、非所宜言、大不道。」上新立、謙讓、納用莽、丹言、免宏爲庶人。

王莽は「附順者拔擢、忤恨者<sup>(27)</sup>誅滅」と記されているように、朝廷の政治を独占し、敵対分子を排除した。およそ淳于長、董賢、董宏、衛氏、呂寬、張充らは、親子数人にまで及んで罷免させられたか殺され、おのずと玉牒文のいわゆる佞人姦軌の列に加えられた。『漢書』王莽傳・上には、陳崇が起草した上奏文によって、張竦が王莽の功德を褒め称え、次のような奏文を書いたと記述されている。「及爲侍中、故定陵侯淳于長有大逆罪、公不敢私、建白誅討。……定陶太后欲立僭號、憚彼面刺幄坐之議、佞惑之雄、朱博之疇、懲此長、宏手劾之事、上下壹心、讒賊交亂、詭辟制度、遂成篡號、斥逐仁賢、誅殘戚屬、而公被胥、原之訴、遠去就國、朝政崩壞、綱紀廢弛、危亡之禍、不隨如髮。……賴公立入、昂時退賢、及其黨親」。また、平帝の元始五年(後5)、王莽に九錫を加える策命についても記述がある。「前公宿衛孝成皇帝十有六年、納策盡忠、白誅故定陵侯淳于長、以彌亂發姦、登大司馬、職在內輔。孝哀皇帝昂位、驕妾窺欲、姦臣萌亂、公手劾高昌侯董宏、改正故定陶共王母之僭坐。……是夜倉卒、國無儲主、姦臣充朝、危殆甚矣。朕惟定國之計莫宜于公、引納于朝、昂日罷退高安侯董賢、轉漏之間、忠策輒建、綱紀咸張」。

敵対分子の排除

牒文の「□(罷)退佞人姦軌、誅〔滅〕□□□□」は、明らかに上記の事実を指している。「□退」は欠けているものの、その意味が「罷退」に近いことは証明できる。「退」の上にある字の残された下部から分析して、「罷」の字に似ている。「誅滅」の後の4字は失われてしまったが、これもまた佞人姦軌に類する語句ではないだろうか。

以上の諸語句は、いずれも王莽が自分の功德を自賛したものである。唐の玄宗封天玉牒文は「上帝眷祐、錫臣忠武。底綏內難、推戴聖父。恭承大寶、十有三年。敬若天意、四海晏然」と記す。宋の真宗封天玉牒文は「粵惟冲人、丕承列聖、寅恭奉天、憂勤聽政。……時和年豐、羣生咸遂」と記す。これらも、自分の功德を賛美する語句である。『東觀書』には、趙憙が奏上して光武

王莽の自賛



帝劉秀に請求した封禪文が記載されている。「陛下聖德洋溢，順天行誅，撥亂中興，作民父母，脩復宗廟，救萬性命，黎庶賴福，海內清平」。文の流れや言葉遣いは新王莽玉牒文と近似する。

『續漢書』祭祀志・上は、光武帝が封禪をおこなうに先立って、『河圖會昌符』にある「赤劉之九，會命岱宗。不慎克用，何益于承。誠善用之，姦偽不萌」を読み、感じるものがあったことを記す。劉昭注には、群臣が光武帝の封禪を協議した記事が、次のように『東觀書』から引用されている。「陛下無十室之資，奮振於匹夫，除殘去賊，興復祖宗，集就天下，海內治平，夷狄慕義，功德盛於高宗、武王。宜封禪爲百姓祈福」。また、項威注より「封泰山，告太平，升中和之氣于天」と引用している。つまり「姦偽不萌」、「除殘去賊」とは、太平で治安が定まるということである。これは、玉牒文で述べられている「王莽が佞人姦軌を退けて誅滅し、海内を太平に至らしめ、治を怠らない」という意味とまったく同じである。

□□延壽，長壯不老。　これは、封禪で長寿を祈願する言葉である。

長寿を祈念

歴代の封禪では、漢の武帝の封禪が、長寿を祈念する色彩が最も濃い。秦始皇帝の封禪の具体的な内容は秘され、知るすべがないけれども、秦の功德を賞賛することが、そのおもな目的であった<sup>(28)</sup>。唐宋の封禪では、玉牒文や玉冊文に、長寿延命の内容はすでに言及されなくなった。漢武帝はことに鬼神の祭祀を最も尊び、専ら長生を求めて神仙を思慕した。『續漢書』祭祀志・上は、「初，孝武帝欲求神仙，以扶方者言黃帝由封禪而後僊，於是欲封禪」と記す。また、『史記』封禪書は次のように記す。

少君言上曰「祠竈則致物，致物而丹沙可化爲黃金，黃金成以爲飲食器則益壽，益壽而海中蓬萊僊者乃可見，見之以封禪則不死，黃帝是也。……」於是天子始親祠竈，遣方士入海求蓬萊安期生之屬，而事化丹沙諸藥齊爲黃金矣。……申公曰「漢主亦當上封，上封則能僊登天矣。」……自得寶鼎，上與公卿諸生議封禪。封禪用希曠絕，莫知其儀禮，而羣儒采封禪『尚書』、『周官』、『王制』之望祀射牛事。齊人丁公年九十餘，曰「封禪者，合不死之名也。」……天子既聞公孫卿及方士之言，黃帝以上封禪，皆致怪物與神通，欲放黃帝以上接神僊人蓬萊士，高世比德於九皇，而頗采儒術以文之。……天子既已封泰山，無風雨災，而方士更言蓬萊諸神若將可得，於是上欣然庶幾遇之，乃復東至海上望，冀遇蓬萊焉。

これにより、武帝は、封禪をおこなうことで神仙の長生不死を思慕していたことがわかる。

『風俗通義』正失に「俗説岱宗上有金篋玉策，能知人年壽脩短。武帝探策得十八，因倒讀曰八十，其後果用耆長」とある。武帝の封禪は、長生の説を思慕して深い影響を受けていたことが窺い知れる。これだけでなく、仙人との面会を求めて不死身となるために、甘泉に益延寿觀も建設した<sup>(29)</sup>。その高さは30丈であった<sup>(30)</sup>。武帝が封禪を通して長生を求める方法は、王莽の手本となっていたはずである。封禪を通して不死身を得ようとしたのは武帝だけでなく、王莽も同様であったことを、牒文ははっきりと示している。

累□□□。　4字からなる語句と思われるが、文字の残存状況が悪く、意味は不明である。

宋の真宗封天玉牒文に「太宗膺圖，重熙累盛」とある。これは、太宗が吉兆のしるしを受けて、機運に乗じ、盛んになったことを指している。『文選』潘安仁爲賈謐作贈陸机詩には「子嬰面觀，漢祖膺圖」、『文選』張平子東京賦には「高祖膺籙受圖，順天行誅」とある。『韓昌黎集』卷三・永貞行には「膺圖受禪登明堂」とある。また、『文選』班孟堅兩都賦には「重熙而累洽」、何晏『景福殿賦』には「重熙而累盛」とある。これらに準ずれば、この語句は新朝が機運に乗じて隆盛し、

祥瑞が頻繁に現れること、すなわち封禪の吉兆を表現しているようである。『漢書』王莽傳・中に「歳在壽星，填在明堂，倉龍癸酉，德在中宮。觀晉掌歲，龜策告從，其以此年二月建寅之節東巡狩」という記載がある。顔師古注は、晉灼を引用して、「『國語』晉文公以卯出酉入，過五鹿得土，歳在壽星，其日戊申。莽欲法之，以爲吉祥。……視晉識太歳所在，宿度所合，卜筮皆吉，故法之」と述べている。牒文にある語句は、これらの記載と関係するようである。

**封亶泰山。** 「亶」は壇と読む。上古の音は「亶」「壇」ともに定紐の声であり、韻も元部に属することから、声母も韻母も等しく同音であり、交換可能であった。『易經』屯卦に「屯如遭如，乘馬班如」とあるが、馬王堆帛書本は「遭」を「壇」、宋本は「亶」に作り、『漢書』叙傳・上の顔師古注では「亶」で引用されている。これは、「亶」と「壇」とが相通じていた証拠である。

古代の封禪で封礼をもって天を祭るときには、土を盛って壇を築かなければならなかった。禪礼で地を祭るときは、土を掃き清めて壇となした。『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、項威注を引用して、「祭土爲封，謂負土於泰山爲壇而祭也」と記している。また、光武帝紀・下の李賢注は「封謂聚土爲壇，壇謂除地而祭」と述べる。『史記』秦始皇本紀の裴駟・集解は、瓚を引用して、「積土爲封。謂負土於泰山上，爲壇而祭之」と記す。張守節の正義に引用された『晉太康地記』には、「爲壇於太山以祭天，示增高也。爲壇於梁父以祭地，示增廣也」と記されている。『大戴禮記』保傅には「是以封泰山而禪梁父」とある。盧弁注は「封謂負土石於泰山之陰，爲壇而祭天也。禪謂除地於梁甫之陰，爲壇以祭地也。變壇爲禪，神之也」と記述する。泰山で封祭をおこなうときには、壇を築いて祀ったことが知られる。

封礼の壇  
禪礼の壇

古人が壇を築く場合、必ずその場を整除して壇を作った。『説文字解』土部に「壇，野土也」とある。段玉裁は「野者，郊外也。野土者，于野治地除艸」と注釈を加えている。また、『説文字解』土部に「壇，祭壇場也」と見える。段玉裁は「壇，壇場也，爲壇而後壇之，壇之前又必除地爲場，以爲祭神道」と注釈を加えている。朱駿声の『説文通訓定聲』には、「除地曰場，曰壇，于壇築土曰壇。壇無不壇，而壇有不壇」と記載されている。『書經』金縢は「爲三壇同壇」、『禮記』祭法は「是故王立七廟，一壇一壇」と記す。

これらの記述から、古代の壇が高く盛られ、壇は下がるものであること、壇には壇を盛らないものもあるが、壇を作らない壇はなかったことが明らかである。したがって、壇を築く際には、壇が必ずあった。それゆえに、壇と壇は区別されず、典籍でもお互いに通用することが多い。

『詩經』鄭風・東門之壇の陸徳明『經典釋文』は「壇」を「壇」に作り、「依字當作壇」と述べる。また、孔穎達『五經正義』には「徧檢諸本皆作壇，今定本作壇」とある。『周禮』夏官・大司馬には「暴内陵外，則壇之」という記述があり、鄭玄は「壇讀如『同壇』之壇。鄭司農云『書亦或爲壇。』」と注釈を加えている。『禮記』曾子問には「望墓而爲壇」とあり、陸徳明『經典釋文』は「壇或作壇」と記す。『春秋』左氏傳・襄公二十八年には「舍不爲壇」とあり、孔穎達『五經正義』は「壇，服虔注本作壇，王肅本作壇，讀爲壇」と記す。『春秋』左氏傳・宣公十八年には「公孫歸父……壇帷復命于介」とある。『春秋』公羊傳・成公十五年では「壇」を「壇」と作る。『史記』孝文本紀には「其增廣諸祀壇場珪幣」とある。『漢書』文帝紀は「壇場」を「壇場」に作る。顔師古注には「築土爲壇，除地爲場」とある。これらは、いずれも「壇」と「壇」とが相通じていることを証明している。

段玉裁は、『説文解字』に「築土曰封，徐地曰禪。凡言封禪，亦是壇壇而已」と注釈する。論じ

ている内容はきわめて妥当である。封の儀礼に際して築かれた壇は、天神を祭るための場所である。よって、「壇」字はまた「禴」とも作りうる。「示」符を加えることで、これに神霊の意味をもたせている。なお、封禴の「禴」はもともと「壇」と作ったが、「示」偏に変えることで神霊の意味を加えた。ゆえに、「壇」と「禴」は通用して区別しない。朱駿声の『説文通訓定聲』には「(壇) 實昂禴之本字, 猶壇亦作禴也」とあるが、妥当な指摘である。『漢書』禮樂志には「帝臨中壇, 四方承宇」とあり、これに顔師古は「言天神尊者來降中壇, 四方之神各承四字也。壇字或作禴, 讀亦曰壇。字加示者, 神靈之耳。下言紫壇、嘉壇, 其義並同」と注釈を加えているのが、その証拠である。

壇は天を祭る所である以上、「禴」字も、もとより天を祭る意味があった。『漢書』武帝紀の記載「望見泰一, 脩天文禴」に、顔師古が文穎を引用して「禴, 祭也」と注釈を施している。「壇」と「禴」、「壇」と「禴」がもともと一つの字であり、文献で「壇」と「壇」も区別なく通用したからには、「示」偏の「禴」と「禴」も互いに混用していたのである。『説文解字』示部に「禴, 祭天也」とあり、『廣雅』釋天に「禴, 祭也」とある。壇が天を祭る所であることから、壇を禴とも作り、禴と禴に共通していた意味が転化していったことは明白である。場を整除するという壇の本義と、その後に強まっていった壇=祭地としての意味とでは、一致しない。朱駿声は『説文通訓定聲』で、「是禴爲祭地, 壇爲祭天。禴從壇省, 禴從壇省, 皆秦以後字。許書收禴不收禴, 故云祭天耳。其實爲壇無不先壇者, 祭天之義, 禴自得兼」と述べている。『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、「天高不可及, 於泰山上立封, 禴而祭之, 冀近神靈也」と、張晏注を引用して述べる。これらにより、禴は本来、禴と作ったに違いなく、また天を祭る名前であったことがわかる。

壇は壇を築く場であり、古の壇は必ず先に壇を設けた。ゆえに壇は壇と通じることができた。しかし、壇は壇そのものではない。壇の本義は野土であり、次第に地を祭る場所となった。古代封禴の除地とは、壇を設けて土地の神に禴の祭りをおこなうことであり、「壇」字に神聖な意味をもたせるには「禴」と作る。したがって、封禴の意味は壇壇と違いはなかった。壇は高く、壇は下がり、祭りの内容もそれぞれ異なっている。

ところで、『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、項威注を引用して、「除地爲壇, 後改『壇』曰『禴』, 神之矣」と述べる。これと天を祭る意味での禴およびその仮借字の禴とは、同音異義であった。昔の人はこの意味の違いがわからず、ついには禴を禴の古字であると考えた。とくに昔は、壇・壇に禴・禴をあてたことが知られていなかったのも、許慎・張揖は禴を祭天の名であると考えた。また、禴と禴とが通用したことから、祭天の意味も「禴」のそれと誤解された。それによって、禴はもともと壇と作り、除地成場であるとの本義は曖昧になった。実際、禴はもともと壇と作ったに違いなく、これに神聖な意味を含ませて禴禴と作った。その祭天の意味は、古人が壇をもって天を祭った所に由来する。

『禮記』祭法には、「燔柴於泰壇, 祭天也」とある。しかし、『説文解字』は禴を祭天と訓ずる。これは、古に壇と壇とが相互に通じたことにより、禴を禴の仮借字とした道理をわかっていなかったことを物語る。したがって、古訓の祭天は禴となっているが、本来は禴であるべきである。壇の本義は除地して場を設けることであり、後に壇は祭地をおこなう場所であることから、神聖の意味を加えて禴と作った。しかし、祭天を意味する禴およびその仮借字としての禴を、除地を意味する禴と同義であるとするのは、大きな誤りである。

『史記』封禪書には、武帝が封禪をおこなったときの記事がある。「遂登封泰山，至於梁父，而後禪肅然」。封禪書のこの記載を受けて、班固は、「禪肅然」と字の如く『漢書』郊祀志・上に記し、『漢書』武帝紀には「遂登封泰山，至於梁父，然後升壇肅然」と記した。張晏は、「壇」が祭りを意味するものであると考えた。これはきわめて妥当である。服虔注が「壇」を壇としたのは誤りである。班固および後世の儒者は「壇」と「禪」の違いがわからずに、ことごとく壇を禪とした。『漢書』異姓諸侯王表の「舜禹受壇」に、顔師古は「壇，古禪字」と注釈を施している。『漢書』蓋寛饒傳の「以爲寛饒指意欲求壇」にも、顔師古が「壇，古禪字」と注釈を施した。『漢書』眭弘傳の「壇以帝位」にも、顔師古が「壇，古禪字」と注釈を加えている。また、『後漢書』梁統列傳には、李賢が「壇，古禪字也」と注釈を加えている。これらはいずれも誤りである。『韻會』に「禪，『漢書』每作壇，後世遂多通用」とある。この悪い先例は班氏父子によって始められたことになる。『漢書』はもともと、古字古訓を十分に読めていないことが多く、これはその一例である。

壇は祭天の場所であり、盛り土をして築いた。ゆえに、そこから派生して祭りの意味をもつようになった。『莊子』山木に「爲壇乎郭門之外」という記述がある。陸徳明の『經典釋文』は、李熙注を引用して「祭也。禱之，故爲壇也」と述べている。ところで、古人の祭天は、先祖を合祀した。だからこそ、壇は先祖の祭りでもありえた。『廣雅』釋天には「壇，祭先祖也」とある。この字義によれば、壇はまた壇とも作りえた。したがって、新王莽玉牒の「封壇泰山」は、実際「封壇泰山」であった。その意味は「封祭泰山」あるいは「封祀泰山」であり、泰山で封壇して祭天を執りおこなったのである。これと、唐玄宗封天玉牒文にある「封祀岱嶽」という語句、宋眞宗封天玉牒・玉册文の「僉議大封」「虔脩封祀」という語句とは、まったく同じ意味である。

古代の封禪は、封礼と禪礼とがそれぞれ違う場所で挙行されたのみならず、対象となる神も異なっていた。封礼は泰山でおこない、昊天上帝を対象とした。禪礼は肅然か社首でおこなわれ、皇地祇を対象とした。そのため、告神玉牒は、その具体的な祭祀の内容を反映しているにすぎず、それぞれの対象の神に対して祭祀をおこなったのであり、封礼や禪礼の祭祀中に「封禪」と総称することはありえなかった。

封礼と禪礼

文献史料は古の封禪の次第について論及しており、封礼と禪礼とを区別している。『史記』封禪書の張守節・正義は、『五經通義』を引用して「易姓而王，致太平，必封泰山，禪梁父」と記す。封禪書は、秦始皇帝の封禪についても「自泰山陽至巔，立石頌秦始皇帝徳，明其得封也。從陰道下，禪於梁父」と言及している。『漢書』武帝紀は「遂登封泰山，至於梁父，然後升壇肅然」と記す。『續漢書』祭祀志・上は、光武帝禪刻石文を引用して「是月辛卯，柴，登封泰山。甲午，禪于梁陰」と記す。いずれも封と禪とを分けて言っている。唐宋の封天玉牒・玉册はすべて「封」のみを言い、「禪」まで言及していない。これを見れば、新王莽封禪玉牒にある「封壇泰山」の「壇」が「禪」と異なっていることは疑いない。

新室昌□。新室とは、王莽の立てた新王朝のことである。「昌」の下にある1字は、盛に近い意味で、かつ調和の取れた声調のものを求めると、「熾」字であったかもしれない。

劉向の『説苑』建本には「夫穀者，國家所以昌熾，士女所以姣好，禮儀所以行，而人心所以安也」とある。『漢書』王莽傳・下には「皇孫功崇公宗坐自畫容貌，被服天子衣冠，刻印三。一曰『維祉冠存己夏處南山臧薄水』，二曰『肅聖寶繼』，三曰『徳封昌圖。』」とあり、顔師古は、蘇林

を引用して、「宗自言以德見封，當遂昌熾，受天下圖籍」と注釈を施す。これは、「新室昌熾」の意味が新室昌盛であり、それこそ封禪で祈り請うゆえんである。

歴代の封禪刻石および告神玉牒・玉册文は同じ韻文が多いようであり、新王莽封禪玉牒も、残文から見て、韻を踏んだ文であった。古代の音によれば、「紀」「母」は之部に属する字で、「徳」「熾」は職部の字であり、すなわち之部の入声であった。顧炎武、段玉裁、孔広森、王念孫、江有誥、朱駿声、章炳麟の古音学は、どれも職部を之部に併せて入れてしまい、独立して分けていない。<sup>(31)</sup>「軌」「壽」「老」はいずれも幽部の字である。すべて、先頭のいくつかの言葉は之職で韻を統一させ、中間のいくつかの文は幽韻を用い、末尾のいくつかの文は先頭と同じく之韻を用いている。その用韻形式は抱韻に属している。

以上で述べたように、新の王莽封禪玉牒は、まさに泰山で封の祭祀をおこない、昊天上帝に祈りを告げるための礼器であった。それは、本来、封礼がおこなわれるとき、泰山上に築かれた登封壇の石礎に秘蔵されるべきものであった。しかし、王莽の封禪が実現しなかったことにより、封祀玉牒は長安に留め置かれることになったのである。

## F 封禪儀礼の変化

巡狩して泰山で柴祀をおこなったことを述べた『書経』を除き、古代の封禪史料の中で「封禪」について言及したものとしては、『管子』が最も古い。『管子』は、長い時間をかけて複数の人の手によって編纂されたものだが、各篇が書物の体裁をなした時期に大きな差はなく、多くが戦国から前漢初年に編纂された。そのうち『封禪』の一篇は、かつて太史公の撰によって『史記』封禪書に収録された。唐代に散逸してしまったが、後にまた『史記』の内容に基づいて『管子』に移され、補填された。<sup>(32)</sup>

『管子』封禪篇は、古代の封禪の歴史を古くまで遡らせている。

桓公既覇，會諸侯於葵丘，而欲封禪。管仲曰「古者封泰山，禪梁父者七十二家，而夷吾所記者十有二焉。昔無懷氏封泰山，禪云云。慮義封泰山，禪云云。神農封泰山，禪云云。炎帝封泰山，禪云云。黃帝封泰山，禪亭亭。顓頊封泰山，禪云云。帝嚳封泰山，禪云云。堯封泰山，禪云云。舜封泰山，禪云云。禹封泰山，禪會稽。湯封泰山，禪云云。周成王封泰山，禪社首。皆受命然後得封禪。」

これと類似した内容は、戦国時代以前に儒家と道家によっても言及されていた。『白虎通義』封禪は、「升泰山，觀易姓之王，可得而數者七十餘君」と、孔子の言葉を引用している。また、『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、「易姓而王，封於泰山，禪於梁父者，七十有二代」と、『莊子』を引用している。封禪儀礼の由来は遠い昔に遡るようである。

封禪の本質は、天神および地神に対する祭礼である。これは、中国における自然崇拜、伝統祭祀に由来する。古人は、天を祭るのに盛り土をして壇を築き、地を祭るには土地を整えて壇を作った。したがって、封禪の儀礼と壇壇の風俗は、密接に関わる不可分なものであった。

これまでに発見された紀元前3千年紀以降の中国東部新石器時代の壇壇祭祀遺構を、後世の封禪制度の起源であると見なしても、それは行き過ぎた考えではない。なぜなら、壇壇遺構が反映する祭祀形式は封禪制度と共通しているだけでなく、この種の祭祀形式が流行した地域も、封

禪が齊魯で発祥したとする伝統的な理解と符合するからである。この点は、すでに他の研究者も注意を向けている。<sup>(34)</sup>新石器時代の壇埤遺構の発見により、先民の封禪儀礼の起源が非常に古くまで遡るとする理解に、有力な傍証が得られたことは疑いない。

秦代以降、封禪の大典を挙行した帝王は7人を数える。すなわち、秦の始皇帝、漢の武帝・光武帝、唐の高宗・武則天・玄宗、宋の真宗である。そのうち、武則天は嵩山で封禪をおこなったが、他の6人の帝王は、いずれも泰山で封禪をおこなった。封禪を計画しながらも実現しなかった者はさらに多い。

7人が挙行

漢の武帝は、封禪を繰り返しておこなったのみならず、秦の始皇帝の封禪が具体的な次第を秘されて伝わらなかったため、武帝の封禪の次第書が後世に最も大きな影響を与えた。『隋書』禮儀志・二に「秦始皇既黜儒生，而封太山，禪梁甫，其封事皆祕之，不可得而傳也。漢武帝頗采方士之言，造爲玉牒，而編以金繩，封廣九尺，高一丈二尺。光武中興，聿遵其故」とある。これに限らず、唐宋の封禪儀礼に関する次第も、武帝の例を範とするものが多かった。

漢武帝の封禪

武帝の封禪の次第は、太史公の記載があるものの、甚だ簡単で、深く立ち入ることは難しい。『史記』封禪書は次のように記す。

四月，……天子至梁父，禮祠地主。乙卯，令侍中儒者皮弁薦紳，射牛行事。封泰山下東方，如郊祠太一之禮。封廣丈二尺，高九尺，其下則有玉牒書，書祕。禮畢，天子獨與侍中奉車子侯上泰山，亦有封。其事皆禁。明日，下陰道。丙辰，禪泰山下隄東北肅然山，如祭后土禮。天子皆親拜見，衣上黃而盡用樂焉。江淮間一茅三脊爲神籍。五色土益雜封。縱遠方奇獸蜚禽及雉諸物，頗以加禮。兕牛犀象之屬不用。皆至泰山然後去。<sup>(35)</sup>

玉牒の制度についての言及はない。武帝の封禪に用いられた玉牒ではっきりしているのは、わずか1枚だけである。その玉牒は、泰山山頂の下の東方にあった封壇に封蔵され、玉牒文の内容は秘密にされた。禪祭で封蔵されたとは言及されていない。武帝が玉牒を封蔵した後に、また子侯と山に登って封をしたが、何を封蔵したのかはわからない。封祭を済ませた後で、祖先を祭る玉牒は祖廟に戻したに違いないが、史料に明確な記載はない。

後漢の光武帝の封禪は、はじめ武帝の旧壇で玉牒を封蔵しようとしたが、梁松が激しく反論した結果、廃案となった。<sup>(36)</sup>このとき、馬第伯が光武帝の随行官員として封禪を直接経験し、同時に『封禪儀』を著した。これは応劭の『漢官儀』に採録されており、武帝がかつて封禪をおこなった場所についても言及がある。『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、次のように『封禪儀』を引用している。

後漢光武帝の封禪

早食上，晡後到天門。<sup>(37)</sup>郭使者得銅物。銅物形状如鍾，又方柄有孔，莫能識也，疑封禪具也。得之者汝南召陵人，姓陽名通。東上一里餘，得木甲。木甲者，武帝時神也。東北百餘步，得封所，始皇立石及闕在南方，漢武在其北。二十餘步得北垂圓臺，高九尺，方圓三丈所，有兩陛。人不得從，上從東陛上。臺上有壇，方一丈二尺所，上有方石，四維有距石，四面有闕。鄉壇再拜謁，人多置錢物壇上，亦不掃除。國家上見之，則詔書所謂酢梨酸棗狼藉，散錢處數百，幣帛具，道是武帝封禪至泰山下，未及上，百官爲先上跪拜，置梨棗錢于道以求福，帛此也。東山名曰日觀，日觀者，鷄一鳴時，見日始欲出，長三丈所，秦觀者望見長安，吳觀者望見會稽，周觀者望見嵩山。北有石室。壇以南有玉盤，中有玉龜。

また『漢官儀』は次のように記す。

自下至古封禪處，凡四十里。山頂西岩爲千人石闕，東岩爲介邱，東南岩名曰觀（『初學記』地部・上の引用）。

封禪太山，昂武帝封處，累其石，登壇，置玉牒書，封石此中，復封石檢（『藝文類聚』禮部・中の引用）。

『史記』封禪書の張守節・正義は、伍緝の『從征記』を引用して、「漢武帝封壇，廣丈三尺，高丈尺，下有玉牒書，以金銀爲鏤，封以璽」（會注考證本）と記す。『漢書』武帝紀の顔師古注は、応劭を引用して「武帝封廣丈二尺，高九尺，其下則有滕書，<sup>(38)</sup>祕」と記す。『後漢書』張純傳の李賢注には「武帝元封元年『封禪儀』『令侍中皮辯，搢紳射牛行事。封廣丈二，高九尺，有玉牒書，書祕，其事皆禁。』」とある。記述内容はおおむね同じである。

秦始皇帝と漢武帝の封禪の意義は、仙人と出会い、不死となることであった。ゆえに、典礼中の最も重要な部分は秘密裏に進行され、後人の知るところは甚だ少ない。後漢の光武帝は、はじめ徳が薄いとして封禪をおこなわなかった。その後、「赤劉之九，會命岱宗」という讖文を読み、ついに封禪をおこなって、天の敬意を賜り、図書の瑞兆を授かったが、神仙世界への昇天を求めたわけではなかった。そのため、全過程とも、群臣が列する状況下で公開して進められた。それでもなお、光武帝の封禪儀礼は武帝元封の故事に倣ったものであり、『續漢書』祭祀志・上に記された儀礼用具の詳細を見れば、制度を継承していることは明らかである。

『旧唐書』禮儀志・一には「又漢建武中封禪，用元封時故事，封泰山于圓臺上，四面皆立石闕，并高五丈。有方石再累，藏玉牒書。石檢十枚，于四邊檢之，東西各三，南北各二。外設石封，高九尺，上加石蓋。周設石距十八，如碑之状，去壇二步，其下石跗入地數尺」と記す。この記載により、光武帝の封禪を通じて、漢武帝の封禪儀礼の映像がかすかに見えてくる。『續漢書』祭祀志によれば、光武帝は、封禪に際して泰山に壇を築き、壇の中に四角い石を使って石礎をしつらえた。また、神に祈りを告げるための玉牒は、長さ1尺3寸、厚さ・幅ともに5寸で、金鏤・石檢・金泥・玉璽で玉牒を封し、石礎に置かれた。詳細な長さや形態は、いずれも前漢代におこなわれた儀礼に倣っている。

2枚の玉牒 後漢光武帝の封禪では、2枚の玉牒が用いられたと考えられる。一つは祭天用で、もう一つは先祖祭祀用であった。これは、『書經』堯典に見える、泰山で柴祭をおこなった後で祖廟に帰り至る古い制度と一致する。『續漢書』祭祀志・上は次のように記す。

二十二日辛卯晨，燎祭天於泰山下南方，羣神皆從，用樂如南郊。諸王、王者後二公、孔子後褒成君，皆助祭位事也。事畢，將升封。或曰「泰山雖已從食於柴祭，今親升告功，宜有禮祭。」於是使謁者以一犧牲於常祠泰山處，告祠泰山，如親耕、糶劉、先祠、先農、先虞故事。至食時，御輦升山，日中後到山上更衣，早晡時昂位于壇，北面。羣臣以次陳後，西上，畢位升壇。尚書令奉玉牒檢，皇帝以寸二分璽親封之，訖，太常命人發壇上石，尚書令藏玉牒已，復石覆訖，尚書令以五寸印封石檢。事畢，皇帝再拜，羣臣稱萬歲。命人立所刻石碑，乃復道下。

二十五日甲午，禪，祭地于梁陰，以高后配，山川羣臣從，如元始中北郊故事。

四月己卯，大赦天下，以建武三十二年爲建武中元元年，復博，奉高，羸勿出元年租、芻藁。以吉日刻玉牒書函藏金匱，璽印封之。乙酉，使太尉行事，以特告至高廟。太尉奉匱以告高廟，藏于廟室西壁石室高主室之下。

この記載から、光武帝の封禪は、告天神玉牒を泰山上の封壇の石礎に封蔵し、告祖玉牒は金匱に納めて祖廟に蔵したことがわかる。注意が必要なのは、封禪に用いた告神玉牒と告祖玉牒とは、製作が同時でなかったことである。告神玉牒は、封禪大典の前にできあがっている必要があったのに対し、告祖玉牒は封禪の後でつくられた。

唐の貞観初頭に、房玄齡、魏征らが隋の儀礼を修正して、『貞観禮』を著した。しかし、封禪の次第書は簡略だったので、ついに中書令の楊師道と多くの議案を広く採集して奏上し、これを礼に加えた。『新唐書』禮樂志・四は記す。

唐初の封禪

爲壇於泰山下，祀昊天上帝。壇之廣十二丈，高丈二尺。玉牒長一尺三寸，廣、厚五寸。玉檢如之，厚減三寸。其印齒如璽，纏以金繩五周。玉策四，皆長一尺三寸，廣寸五分，厚五分，每策皆五簡，聯以金。昊天上帝配以太祖，皇地祇配以高祖。已祀而歸格于廟，盛以金匱。匱高六寸，廣足容之，制如表函，纏以金繩，封以金泥，印以受命之玉璽。而玉牒藏于山上，以方石三枚爲再累，纏以金繩，封以石泥，印以受命之璽。其山上之圓壇，土以五色，高九尺，廣五丈，四面爲一階。天子升自南階，而封玉牒。已封，而加以土，築爲壇，高一丈二尺，廣二丈。其禪社首亦如之。

次に見る『旧唐書』禮儀志・三の記事はやや詳細である。

其議昊天上帝壇曰「將封先祭，義在告神，且備謁敬之儀，方展慶成之禮。固當于壇下趾，預申齊潔。贊饗已畢，然後登封。既表重慎之深，兼示行事有漸。今請祭於泰山下，設壇以祀上帝，以景皇帝配享。壇長一十二丈，高一丈二尺。」

又議制玉牒曰「……今請玉牒長一尺三寸，廣厚各五寸。玉檢厚二寸，長短闊狹一如玉牒。其印齒請隨璽大小，仍纏以金繩五周。」

又議玉策曰「封禪之祭，嚴配作主，皆奠玉策，肅奉虔誠。今玉策四枚，各長一尺三寸，廣一寸五分，厚五分。每策五簡，俱以金編。其一奠上帝，一奠太祖坐，一奠皇地祇，一奠高祖坐。」

又議金匱曰「登配之策，盛以金匱，歸格藝祖之廟室。今請長短令容玉策，高廣各六寸。形制如今之表函。纏以金繩，封以金泥，印以受命璽。」

又議方石再累曰「舊藏玉牒，止用石函，亦猶盛書篋笥，所以或呼石篋。今請方石三枚，以爲再累。其十枚石檢，刻方石四邊而立之。纏以金繩，封以石泥，印以受命璽。」

又議泰山上圓壇曰「四出開道，壇場通議，南面入升，於事爲允。今請介丘上圓壇廣五丈，高九尺，用五色土加之。四面各段一階。御位在壇南，升自南階，而就上封玉牒。」

又議圓壇上土封曰「凡言封者，皆是積土之名。利建分封，亦以班社立號。謂之封禪，厥義可知。今請于圓壇之上，安置方石，璽緘既畢，加土築以爲封。高一丈二尺，而廣二丈，以五色土益封，玉牒藏于其內。祀禪之土，其封制亦同此。」

この記述を見ると、唐初の封禪制度は、漢武帝の旧制からなお脱していなかったようである。登封の前に封祀の壇を設けて昊天上帝を祭る制度も、武帝の明堂を建てる祭祀に起源をもつ。『漢書』武帝紀には「夏四月癸卯，上還，登封泰山，降坐明堂」という記述がみられるが、顔師古は、臣瓚を引用して「『郊祀志』『初，天子封泰山，泰山東北述古時有明堂處。』則此所坐者也。明年秋，乃作明堂耳」と注釈を加えている。また、『史記』封禪書は次のように記す。

初，天子封泰山，泰山東北趾古時有明堂處，處險不敞。上欲治明堂奉高旁，未曉其制度。



濟南人公玉帶上黃帝時明堂圖。明堂圖中有一殿，四面無壁，以茅蓋，通水圍宮垣，爲復道，上有樓，從西南入，命曰昆侖，天子從之入，以拜祠上帝焉。於是上令奉高作明堂汶上，如帶圖。及五年脩封，則祠太一，五帝於明堂上坐，令高皇帝祠坐對之。祠后土於下房，以二十太牢。天子從昆侖道入，始拜明堂如郊禮。禮畢，燎堂下。而上又上泰山，自有祕祠其巔。

これは、武帝が元封5年（前106）に封禪をおこなった際、登封に先立ち、明堂において天神太一および五帝を祭ったことを述べている。

隋の明堂 隋の文帝は、開皇15年（595）、東方へ巡狩に赴き、封禪には及ばなかったものの、漢代の制度を継承して、南郊のように明堂を封壇に変えた。<sup>(39)</sup>唐に至っても、隋礼によって封祀壇を築いたが、実は、これは漢代の制度と連なっている。王先謙は、『漢書補注』で「呉仁傑曰『明堂者，壇也。』『司儀職』曰『將會諸侯則命爲壇，三成。』鄭康成曰『成猶重也。三重者，自下差之爲上等，中等，下等。』」と記す。『爾雅』釋丘には、「丘，一成爲敦丘，再成爲陶丘，再成銳上爲融丘，三成爲昆侖丘」と見える。古の明堂は昆侖というだけでなく、その中でも復道は昆侖道といった。『爾雅』の記載内容から、明堂は本来3段からなる壇であり、その壇がすなわち昆侖であったと考えられる。<sup>(40)</sup>『旧唐書』禮儀志・三は、唐の高宗が乾封元年（666）におこなった封禪の次第について、「有司於太嶽南四里爲圓壇，三成，十二階，如圓丘之制」と詳述している。つまり、登封前に泰山の下で昊天上帝を祭る封祀壇は、3段からなる円壇だったのであり、これは武帝が建てた古の明堂の制度と一致する。

明堂の機能<sup>(41)</sup> 古代の明堂の機能は複雑だが、最も重要なものは天神を祭る祭場としての機能であった。古においては、円丘で天を祭った。明堂の3段からなる円壇の制度は圓丘と等しく、形態・構造ともに古の制と一致する。明堂は太室とも呼ばれた。『孝經援神契』は「明堂之制，東西九筵，長九尺也。明堂東西八十一尺，南北六十三尺，故謂之太室」と記す。『隋書』牛弘傳は、蔡邕が明堂を論じているくだりを引用して、「明堂者，所以宗祀其祖以配上帝也。……東曰青陽，南曰明堂，西曰總章，北曰玄堂，内曰太室」と述べている。「太室」はもともと「大室」と作った。西周の金文は「天室」と作る。天室とは、天を祭る部屋のことである。これは名称と一致する。明堂は、また郊外にあった。『大戴禮記』明堂に「明堂者，古有之也。在近郊，近郊三十里」とある。また西周の何尊の銘文には「唯王初遷宅于成周，復稟武王禮福自天」、徳方鼎の銘文には「唯三月王在成周，延武王福自蒿（郊）」と記されている。両文を照らし合わせながらと読むと、郊祭とはすなわち圓丘祭天のことであり、祭場は都城南郊外にあった。この地望はまさしく符合する。

明堂と圓丘 古は明堂で天神太一を祭り、圓丘で天神の郊祭を執りおこなった。『孝經』聖治には「昔者周公郊祀后稷以配天，宗祀文王於明堂以配上帝」とある。圓丘は郊外にあり、上帝とはすなわち天の至上神であって、郊祀と明堂は、古において本来同源であったことが知られる。漢武帝が明堂に参拝することを郊礼というように、二つの祭祀は同じものであった。祭祀と儀礼との一体である。これに准ずれば、唐宋の封禪儀礼は過去の明堂の制度を継承して、登封に先立ち、天神上帝を祭ったことになる。

唐宋の封禪制度には、次に述べるような変化があったものの、玉牒の形態は漢代の旧制となお差異がなかった。違いといえば、封蔵儀礼の道具に元来の登封玉牒だけでなく、告神玉册が加わったことである。『貞觀禮』によれば、そのときには天神と地神の先祖も1名ずつ合祀されたので、告神玉册は合計4枚あった。各册とも5簡あり、金繩で綴られていた。封禪に際して、玉牒

は泰山山上にある圓壇の五色土の下に封蔵されたが、4枚の玉册は、泰山の下にある封祀壇で昊天上帝を祭り、社首山の降禪壇で皇地祇を祭る際に、正坐と配坐に献納した。そのうち、正坐に献納した告祭昊天上帝および皇地祇の玉册2枚は、祭りの後に、封祀壇と降禪壇に封蔵された。配坐に献納した告祭祖先用の残り2枚の玉册は、封禪の後で金匱に納め、祖廟に改めて献じた。これらの儀礼道具は、封禪の大典が挙行される前に完成していなければならなかった。

唐の高宗は、顯慶年間(656~661)、長孫無忌に命じて、『貞觀禮』を編纂して『顯慶禮』を作らしめた。これにより、封禪制度にまた変化が起こった。麟徳2年(665)2月、高宗は再び、礼官・博士に対して、封禪の次第書を選定するように詔を発した。<sup>(42)</sup>『新唐書』禮樂志・四は、唐高宗の封禪について、次のように記載する。

唐 高 宗  
の 封 禪

高宗乾封元年封泰山，爲圓壇山南四里如圓丘，三壇，壇上飾以青，四方如其色，號封祀壇。玉策三，以玉爲簡，長一尺二寸，廣一寸二分，厚三分，刻而金文。玉匱一，長一尺三寸，以藏上帝之册。金匱二，以藏配帝之册。纏以金繩五周，金泥，玉璽，璽方一寸二分，文如受命璽。石礎以方石再累，皆方五尺，厚一尺，刻方其中以容玉匱。礎旁施檢，刻深三寸三分，闊一尺，當繩刻深三分，闊一寸五分。石檢十枚，以檢石礎，皆長三尺，闊一尺，厚七分。印齒三道，皆深四寸，當璽方五寸，當繩闊一寸五分。檢立於礎旁，南方北方皆三，東方西方皆二，去礎隅皆一尺。礎纏以金繩五周，封以石泥。距石十二，分距礎隅，皆再累，皆闊二尺，長一丈，斜刻其首，令與礎隅相應。又爲壇于山上，廣五丈，高九尺，四出陛，一壇，號登封壇。玉牒、玉檢、石礎、石距、玉匱、石檢皆如之。爲降禪壇于社首山上，八隅、一成，八陛如方丘，三壇。上飾以黃，四方如其色，其餘皆如登封。……

是歲正月，天子祀昊天上帝于山下之封祀壇，以高祖，太宗配，如圓丘之禮。親封玉册，置石礎，聚五色土封之，徑一丈二尺，高九尺。已事，升山。明日，又封玉册于登封壇。又明日，祀皇地祇于社首山之降禪壇，如方丘之禮，以太穆皇后，文德皇后配。<sup>(43)</sup>

この儀礼によれば、玉牒はやはり泰山山上の登封壇に封蔵された。2枚の告神玉册は玉匱に納め、封祀壇および降禪壇に分けて封蔵された。他の4枚の告祖玉册は金匱に納めて持ち帰り、祖廟に献じた。数こそ違うものの、儀礼用具の内容はすべて封禪典礼の制度と等しい。

唐の玄宗は、開元年間(713~741)、徐堅、李銳、肅嵩らに対して、『顯慶禮』を再び編纂して『開元禮』を作るように命じた。封禪制度は変更され、後に張説、徐堅、韋縉、康子元、侯行果らと礼官に対して、集賢書院で次第書を選定・刊行するように詔を出した。『旧唐書』禮儀志・三に、玄宗の開元年間の封禪について、次のような記述がある。

唐 玄 宗  
の 封 禪

十三年十一月丙戌，至泰山，去山趾五里，西去社首山三里。丁亥，玄宗服袞冕于行宮，致齋於供帳前殿。己丑，日南至，大備法駕，至山下。玄宗御馬而登，侍臣從。先是玄宗以靈山請潔，不欲多人上，欲初獻于山上壇行事，亞獻，終獻於山下壇行事。因召禮官學士賀知章等入講儀注，原問之，知章等奏曰「昊天上帝，君位。五方時帝，臣位。帝號雖同，而君臣異位。陛下享君位於山上，羣臣祀臣位于山下，誠足以垂範來葉，爲變禮之大者也。禮成於三，初獻，亞，終，合於一處。」玄宗曰「朕正欲如是，故問卿耳。」於是敕三獻於山上行事，其五方帝及諸神坐于山下壇行事。……

庚寅，祀昊天上帝于山上封臺之前壇，高祖神堯皇帝配享焉。……山上作圓臺，四階，謂之封壇。<sup>(44)</sup>臺上有方石再累，謂之石礎。玉牒、玉策，刻玉填金爲字，各盛以玉匱，束以金繩，封

以金泥，皇帝以受命寶印之。納二玉匱於礧中，金泥礧際，以「天下同文」之印封之。壇東南爲燎壇，積柴其上。皇帝就望燎位，火發，羣臣稱萬歲，傳呼下山下，聲動天地。……

辛卯，享皇地祇于社首之泰折壇，睿宗大聖貞皇帝配祀。五色雲見，日重輪。藏玉策于石礧，如封壇之儀。

これと、次に記した『新唐書』禮儀志・四の内容は、互いに補完しあう。

玄宗開元十二年，四方治定，歲屢豐稔，羣臣多言封禪，中書令張說又固請，乃下制以十三年有事泰山。於是說與右散騎常侍徐堅、太常少卿韋縉、祕書少監康子元、國子博士侯行果刊定儀注。立圓臺於山上，廣五丈，高九尺，土色各依其方。又於圓臺上起方壇，廣一丈二尺，高九尺，其壇臺四面爲一階。又積柴爲燎壇於圓臺之東南，量地之宜，柴高一丈二尺，方一丈，開上，南出戶六尺。又爲圓壇於山下，三成、十二階，如圓丘之制。又積柴於壇南爲燎壇，如山上。又爲玉册、玉匱、石礧，皆如高宗之制。玄宗初以謂升中於嵩山，精享也，不可諠譁。欲使亞獻已下皆行禮山下壇，召禮官講義。學士賀知章等言「昊天上帝，君也。五方精帝，臣也。陛下享君於上，羣臣祀臣於下，可謂變禮之中。然禮成於三。亞、終之獻，不可異也」。於是三獻皆升山，而五方帝及諸神皆祭山下壇。……

其登山也，爲大次於中道，止休三刻而後升。其已祭燔燎，侍中前跪稱「具官臣某言，請封玉册。」皇帝升自南陛，北向立。太尉進昊天上帝神坐前，跪取玉册，置於案以進。皇帝受玉册，跪內之玉匱，纏以金繩，封以金泥。侍中取受命寶跪以進。皇帝取寶以印玉匱，侍中受寶，以授符寶郎。太尉進，皇帝跪捧玉匱授太尉，太尉退，復位。太常卿前奏「請再拜。」皇帝再拜，退入于次。太尉奉玉匱之案於石礧南，北向立。執事者發石蓋，太尉奉玉匱，跪藏於石礧內。執事者覆石蓋，檢以石檢，纏以金繩，封以石泥，以玉寶徧印，引降復位。帥執事者以石距封固，又以五色土圓封。其配坐玉牒封於金匱，皆如封玉匱。太尉奉金匱從降，俱復位。以金匱內太廟，藏於高祖神堯皇帝之石室。其禪于社首，皆如方丘之禮。

兩文を照らし合わせながら読むと、歐陽脩のいわゆる金匱に封蔵した玉牒が、実は祖坐に帰る玉牒を指していることがわかる。玄宗が封禪の次第を簡略化したにもかかわらず、祭天玉牒を玉匱に納めて泰山山上の登封殿の石礧に封蔵するだけでなく、封蔵するものには正坐の昊天上帝位に献上する玉册と、配坐の唐高祖に献上する玉册があったのである。後者の玉册は金匱に納めて、祖廟まで持ち帰った。宋真宗の大中祥符元年（1008）の封禪になると、唐玄宗の制度を継承し、次第書にもあまり大きく手を加えていない。<sup>(45)</sup>しかし、封禪の祭祀、正坐ないし配坐に献じる祭祀においても、玉牒玉册は同様に事前に完成していた

#### 封禪儀礼 の 変 化

古今の封禪礼制には、文華と質朴の違いがある。前期は質朴を尊び、後期は華やかな傾向があった。『旧唐書』禮儀志・三は「古今典制，文質不同，至於制度，隨世代沿革，唯祀天地，獨不改張，斯乃自處於厚，奉天以薄。又今封禪，昂用玉牒金繩，器物之間，復有瓦罍粘席，一字行禮，文質頓乖，駁而不倫，深爲未愜。其封祀、降禪所設上帝、后土位，先設稟秸、瓦甗、瓢杯等物，並宜改用裋褐罍爵，每事從文」と記す。封禪の本質は、壇墀で天地を祭ることであった。先人の用いた資材は質朴であり、天地の性を合わせるその概念は後世の祖となった。それゆえに壇墀は簡素であった。

古代における郊祭も明堂の祭天も、3段から成る圓丘を築いたが、これもまた広義の封禪文化に属する。だからこそ、漢武帝の明堂は四面に壁がなく、上屋には茅を葺くなど、簡素な構造で

あった。『呂氏春秋』召類には「故明堂茅茨蒿柱，土階三等，以見節約」とある。『淮南子』本經訓は、「是故古者明堂之制，下之湿润弗能及，上之霧露弗能入，四方之風弗能襲。土事不文，木工不斲，金器不鏤，衣無隅差之削，冠無觚贏之理，堂大足以周旋理文，静潔足以享上帝，禮鬼神，以示民知儉節」と記す。『禮記』郊特性は「郊之祭也，……掃地而祭，於其質也。器用陶匏，以象天地之性也」と記す。また、『續漢書』祭祀志・上で劉昭は、袁宏が封禪を論じたのを引用して、「天地易簡，其禮尚質，故藉用白茅，貴其誠素，器用陶匏，取其易從。然封禪之禮，簡易可也」と注釈している。祭天において質朴を尊ぶのは古の伝統であり、それゆえに早期の封禪の次第や道具は質朴であることを好んだ。

封禪儀礼の道具には、質朴から文華への転換が見られるのみならず、同時に簡素から繁縟への変化もあった。秦漢の時代の封禪は、玉牒を用いて天神や祖先に報告をおこなった。しかし、告天玉牒と告祖玉牒の制度は異なっており、製作にも前後があった。唐宋の時代は、封禪告天玉牒は昔のものが受け継がれたものの、祭天儀礼の道具は玉牒から発展して玉册が派生し、禪地玉册も封天玉册と同時に出現した。玉牒と玉册はともに捧げられ、製作も同時であった。王先謙の『後漢書集解』第七は、「前世封禪，有得封不得封之別，故金匱告廟，既得封而後刻玉紀之，不敢誣其先，猶昭鄭重也。自唐以下，易稟積以文錦，去匏瓦而尊彝，踵事增華，帝封後禪，金匱玉策，皆預爲之矣」と黄山を引用して述べているが、妥当な論である。したがって、古制によると、王莽が封禪を実施していないならば、祖廟に報告するための玉牒が未完成なのは自然であり、この新王莽封禪玉牒は、封祭告天のために作られた儀礼用具であった可能性以外は考えられないことになる。

## G おわりに

新王莽封禪玉牒は桂宮から出土した。その原因について推測してみたい。

『漢書』王莽傳によれば、王莽は、始建国5年（後13）、天鳳元年（後14）および7年（後20）と再三、封禪について協議している。しかし、そのたびに延期され、ついに実現には至らなかった。このことから、始建国5年の前に封禪玉牒は完成していたことが窺える。王莽の封禪に対する意欲は失われず、また牒文は秘密で公開しない古制により、玉牒は王莽によって秘蔵されていたに違いない。

封禪玉牒は  
王莽が秘蔵

『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、『封禪儀』を引用しながら、光武帝の封禪について次のように述べている。「馬第伯自云，某等七十人先之山虞，……入其幕府，觀治石。石二枚，狀博平，圓九尺，此壇上石也。其一石，武帝時石也。時用五車不能上也，因置山下爲屋，號五車石。四維距石長丈二〔尺〕，廣二尺，厚尺半所，四枚。檢石長三尺，廣六寸，狀如封篋。長檢十枚。一紀號石，高丈二尺，廣三尺，厚尺二寸，名曰立石。一枚刻文字，紀功德」。その中で玉牒を封蔵した記述だけが見られない。これは、光武帝自らが玉牒を蔵したことの傍証にもなりうる。『續漢書』祭祀志・上に見られる「書祕刻方石中，命容玉牒」の記載からも、玉牒書が秘かに刻まれ、皇帝が自ら管理するものであったことがわかる。

王莽が封禪を実現していない状況では、玉牒が長安で保管されて当然である。『漢書』王莽傳には、「平帝疾，莽作策，請命於泰畤，戴璧秉珪，願以身代。藏策金縢，置于前殿，敕諸公勿敢言。

……又聞漢兵言，莽鳩殺孝平帝。莽乃會公卿以下於王路堂，開所爲平帝請命金縢之策，泣以視羣臣」とある。つまり、王莽は、『書經』周書・金縢の故事に倣って、武王の延命を祈願した周公を装い、藏策金縢を未央宮前殿に置いた。したがって、この宮殿に再び封禪玉牒を置くことは不可能である。

ところで、王莽は未央宮を寿成室と改めたが、『三輔黃圖』によれば、未央宮にはもともと萬歳殿もあった。これらの宮名や殿名は、みな封禪儀礼用具と相容れるようである。なおかつ『三輔黃圖』によれば、桂宮には紫房復道があり、未央宮に通じていた。<sup>(46)</sup>封禪玉牒は、兵乱の際に、儀礼用具を移している最中、桂宮に遺棄されたのかもしれない。しかし、王莽の末年、後漢軍は長安城東北の宣平門より入り、王莽はついに前殿から椒除を南下して、白虎門から西へ出た。未央宮西南の漸台を避けているので、もしも儀礼用具が王莽に従って移動していたのであれば、北へ向かったことはありえず、桂宮で落とした可能性は低くなる。よって、この封禪玉牒は桂宮で保管されていたものと推測されるのである。

桂宮は未央宮の北にあり、漢長安城宮殿区の西北に位置した。后天八卦の方位によれば、西北は乾の方位に当たり、乾は天位と合う。つまりは、封禪で天を祭る方位と符合する。封禪祭天の器物をこの方位に置いたとすれば、伝統的な天數觀念と符合するだけでなく、同時に、もっぱら古制に倣い、易教を尊ぶ王莽の習慣・心理とも合うことは明らかである。

以上のように、新王莽封禪玉牒は、本来、桂宮北部のいずれかの殿室で保管されていたと考えられる。その後、地皇4年（後23）10月に長安城は陥落し、王莽は未央宮漸台において後漢軍に殺された。そして、桂宮所蔵の封禪用器物も、同時に戦火に遭って壊されたのである。

---

(1) 王莽は国号を新と称したが、名称を変えることは甚だ多かった。たとえば新室、新家、黄室、新成、薪世、あるいはたんに薪と称した。陳直『漢書新證』天津人民出版社、1979年を参照。

(2) 『漢書』王莽傳・下を参照。

(3) 『續漢書』祭祀志・上の劉昭注で引用された『風俗通義』に、作二丈一尺とある。

(4) 『風俗通義』正失にも文が見られる。「封者，立石高一丈二赤，剋之曰『事天以禮，立身以義，事文以孝，成民以仁。四守之内，莫不爲郡縣，四夷八蠻，咸來貢職，與天無極。人民蕃息，天祿永得』」。しかし、どの代のものなのかは記されていない。『後漢書』劉昭注は漢武帝の刻石文、『通典』卷十四に引用された『晉太康郡國志』は秦の始皇帝刻石文であるとそれぞれ考えた。一方、顧炎武は、武帝の封禪のときは泰山に石を立てただけで、文字はなかったとしている（『日知録』卷三一・泰山立石を参照）。また、始皇帝刻石は三句一韻で、十二韻をなし、属する辞の形態がこれとは異なっている。『史記』秦始皇本紀について、張守節・正義は、『晉太康地紀』を引用して「壇高三尺，階三等，而樹石太山之上，高三尺一尺，廣三尺，秦之刻石也」と記す。大きさから考えるに、これは秦の刻石であることがわかる。二世胡亥が即位して、即刻、始皇帝の石碑が立てられ、新旧の文が併存している。これは、『史記』秦始皇本紀、『漢書』郊祀志および顔師古注、『金薤琳琅』跋秦峰山刻石の記載によって明らかである。ゆえに、王利器は、これが秦二世によって刻まれたものであると考えた。この説は『風俗通義校注』中華書局、1981年に見られる。

(5) 『旧唐書』禮儀志・三を参照。

(6) 『漢書』郊祀志・下に「成帝初昂位，丞相衡，御史大夫譚奏言『帝王之事莫大乎承天之序，承天之序莫重於郊祀，故聖王盡心極慮以建其制。祭天於南郊，就陽之義也。瘞地於北郊，昂陰之象也。天之於天子也，因其新都而各饗焉。往者，孝武皇帝居甘泉宮，昂於雲陽立泰畤，祭於宮南。今行常幸長安，郊見皇天反北之泰陰，祠后土反東之少陽，事與古制殊。……宜於長安定南北郊，爲萬世基』」とある。また、「後成都侯王商爲大司馬衛將軍輔政，杜鄴說商曰『……今甘泉，河東天地郊祀，咸失方位，違陰陽之宜。……宜如異時公卿之議，復還長安南北郊。』」とも見える。

- (7) 『漢書』郊祀志・下に次の記載がある。「平帝元始五年，大司馬王莽奏言『……孝武帝祠雍』，曰『今上帝朕親郊，而后土無祠，則禮不答也。』於是元鼎四年十一月甲子始立后土祠於汾陰。或曰，五帝，泰一之佐，宜立泰一。五年十一月癸未始立泰一祠於甘泉，二歲一郊，與雍更祠，亦以高祖配，不歲事天，皆未應古制。……臣謹與太師孔光，長樂少府平晏，大司農左咸，中壘校尉劉歆，太中大夫朱陽，博士薛順，議朗國由等六十七人議，皆曰宜如建始時丞相衡等議，復長安南北郊如故。』また『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は次のように記す。『黃圖』「載元始儀最悉，曰『元始四年，宰衡莽奏曰『帝王之義，莫大承天，承天之序，莫重於郊祀。……甘泉太陰，河東少陽，咸失闕位，不合禮制。……』於是定郊祀，祀長安南北郊，罷甘泉、河東祀』」。
- (8) 『北堂書鈔』設官部は、『漢官儀』を引用して「建武三十二年，車駕東巡狩。二月二十二日，祭上，日中到山，禮畢，羣臣稱萬歲。有頃，詔百官以次下。明，問起居。二十四日，發，至梁父九十里，夕，牲。二十五日，禪祭於梁陰。陽者祭天，陰者祭地。始元舊禮，以高帝配天，高后配地」と記す。
- (9) 『史記』秦始皇本紀の裴駟・集解は、『漢書』郊祀志を引用して「禪，闡廣土地也」と記述する。また、丘瓚を引用して、「古者聖王封泰山，禪亭亭或梁父，皆泰山下小山。除地爲壇，祭於梁父。後改『壇』曰『禪』」と記す。
- (10) 併せて『史記』孝武本紀、『漢書』郊祀志・上も参照。
- (11) 『宋史』禮志・七を参照。
- (12) 那志良「唐玄宗、宋真宗の禪地祇玉冊」『故宮文物月刊』第9卷第10期、1992年。
- (13) 隋文帝の仁壽元年(601)冬至に、南郊で祭祀をおこなって、昊天上帝及び五方天帝位を安置し、また壇上において、封禪儀礼のように執りおこなった。その告神玉版の内容は、封禪玉牒、玉牒とも共通点が多い。『隋書』禮儀志一を参照。
- (14) 併せて『漢書』郊祀志・上を参照。
- (15) 『北堂書鈔』設官部は、『漢官儀』を引用して「建武三十二年，車駕東巡狩。二月二十二日，祭上，日中到山。禮畢，羣臣稱萬歲」と記す。
- (16) 『旧唐書』禮儀志・三に「又詔名封祀壇爲舞鶴臺，介丘壇爲萬歲臺，降禪壇爲景雲臺，以紀當時所見之瑞焉」とある。
- (17) 『新唐書』則天皇后本紀に「天册萬歲元年正月辛巳，……改元證聖。大赦，賜酺三日。……九月甲寅，祀南郊。加號天册金輪大聖皇帝。大赦，改元，賜酺九日。……萬歲通天元年臘月甲戌，如神嶽。甲申，封于神岳。改元曰萬歲登封。……三月……丁巳，復作明堂，改曰通天宮。大赦，改元，賜酺七日」とある。
- (18) 『史記』秦始皇本紀・封禪書、『漢書』郊祀志・上を参照。
- (19) 『漢書』武帝紀に「詔曰『朕以眇身承至尊，兢兢焉惟德非薄，不明于禮樂，故用事八神。……遂登封泰山，至於梁父，然後升禪肅然。』」とある。顔師古注は、孟康を引用して「王者功成治定，告成功於天」、また服虔注を引用して「增天之高，歸功於天」と記す。
- (20) 『續漢書』祭祀志・上の劉昭注は、『東觀書』を引用して太尉趙熹が上奏したことを記載する。
- (21) 『續漢書』祭祀志・上に「建武三十年二月，羣臣上言，崑位三十年，宜封禪泰山。詔書曰『崑位三十年，百姓怨怒滿腹，吾誰欺，欺天乎。曾謂泰山不如林放，何事乎七十二代之編録。恒公欲封，管仲非之。若郡縣遠遣吏上壽，盛稱虛美，必弊，兼令屯田。』從此羣臣不敢復言」とある。劉昭注は、『東觀書』を引用して、「羣臣奏言『……陛下輒拒絕不許，臣下不敢頌功述德業。……』上曰『至泰山乃復議，國家德薄，宰異仍至，圖讖蓋如此。今予末小子，巡祭封禪，德薄而任重。』」と記す。
- (22) もともと「黃初」とある。盧弼『三國志』集解は、『高堂隆傳』を根拠に、「黃初」は「太和」に改めるべきであるとする。
- (23) 『晉書』禮志・下に次の記載がある。「及武帝平吳，混一區宇，太康元年九月庚寅，尚書令衛瓘、尚書左僕射山濤、右僕射魏舒、尚書劉寔、司空張華等奏曰『……立德濟世，揮揚仁風，以登封泰山者七十有四家，……宜宣大典，禮中嶽，封泰山，禪梁父，發德號，明至尊，享天休，篤黎庶……』詔曰『……此盛德之事，所未議也。』……瓘等又奏曰『……濟兆庶之功者，必有盛德之容，告成之典。……陛下之德，合同四海，迹考古今，宜脩此禮。……今陛下動高百王，德無與二，茂績宏規，巍巍之業，固非臣等所能究論……』王公有司又奏『……文王爲西伯以服事殷，周公以魯藩列于諸侯，或享于岐山，或有事泰山，徒以聖德，猶得爲其事』」。
- (24) 『隋書』禮儀志・二を参照。
- (25) 『旧唐書』禮儀志・三に「自古受命而王者，曷嘗不封泰山，禪梁父，答厚德，告成功」とある。

- (26) 併せて『後漢書』光武帝紀・上を参照。文に小異がある。
- (27) 『漢書』王莽傳・上を参照。
- (28) 『史記』秦始皇本紀・封禪書を参照。
- (29) 『史記』封禪書を参照。『漢書』郊祀志・下は「益寿、延壽館」と作る。梁玉繩『史記志疑』卷六は『史記』の例が妥当ではないと考えた。これについては多少議論がなされた。陳直『漢書新證』天津人民出版社、1979年を参照。
- (30) 『史記』封禪書の司馬貞・索隱に引用された『漢武故事』を参照。
- (31) 顧炎武『音學五書』中華書局、1982年。段玉裁『六書音均表』經韻樓刻本。孔広森『詩聲類』中華書局、1983年。王引之『經義述聞』卷三一、江蘇古籍出版社、1985年。江有誥『二十一部韻譜』。朱駿声『古今韻備』臨嘯閣刻本。章炳麟『二十三部音備』張氏叢書本を参照。
- (32) 『史記』封禪書の司馬貞・索隱を参照。『管子』封禪・尹知章注に「元篇亡，今以司馬遷『封禪書』所載管子言以補之」とある。
- (33) 『韓詩外傳』に「孔子升泰山，觀易姓之王，事得而數者七十餘氏，不可得而數者萬數」とある。『太平御覽』は、『漢完儀』を引用して「孔子稱封泰山，禪梁父，可得而數者七十有二」とある。
- (34) 凌純聲「北平的封禪文化」『中央研究院民族學研究所集刊』第16期、1963年。鄧淑蘋「唐宋玉册及其相關問題」『故宮文物月刊』第9卷第10期、1992年を参照。
- (35) 本来は「皆至泰山祭后土」と記してあった。褚少孫は、『封禪書』によって『史記』孝武本紀を補足し「皆至泰山然後去」と記した。『漢書』郊祀志・上も同じである。以上のことから、「祭后土」は誤りであるとわかる。梁玉繩『史記志疑』を参照。
- (36) 『續漢書』祭祀志・上に「上以用石功難，又欲及二月封，故詔松欲因故封石空檢，更加封而已。松上疏爭之，以爲『登封之禮，告功皇天，垂後無窮，以爲萬民也。承天之敬，尤宜章明。奉圖書之瑞，尤宜顯著。今因舊封，竄寄玉牒故石下，恐非重命之義。受命中興，宜當特異，以明天意。』」とある。
- (37) 『泰山道里記』に「十八盤盡處爲南天門，舊稱三天門，邵所謂天門也」とある。
- (38) 『續漢書』祭祀志・上の劉昭注に引用された応劭『風俗通義』には、「封廣丈二尺，高九尺，下有玉牒書也」とある。
- (39) 『隋書』禮儀志・二に「十五年春，行幸兗州，遂次岱嶽，爲壇，如南郊，又壇外爲柴壇，飾神廟，展宮懸於庭。爲埋坎二，於南門外。又陳樂設位於青帝壇，如南郊。帝服袞冕，乘金輅，備法駕而行。禮畢，遂詣青帝壇而祭焉」とある。『旧唐書』禮儀志・三に「隋開皇十四年，晉王廣率百官抗表，固請封禪。文帝令牛弘、辛彥之、許善心等創定儀注。至十五年，行幸兗州，遂於太山之下，爲壇設祭，如南郊之禮，竟不升山而還」とある。『新唐書』禮儀志・四にも見られる。
- (40) 凌純聲「中國的封禪與兩河流域的崑崙文化」『中央研究院民族學研究所集刊』第19期、1965年。「崑崙丘與西王母」『中央研究院民族學研究所集刊』第22期、1966年を参照。
- (41) 王夢鷗『鄒衍遺說考』商務印書館、台北、1966年を参照。
- (42) 『旧唐書』禮儀志・三を参照。
- (43) 併せて『旧唐書』禮儀志・三を参照。
- (44) 『册府元龜』卷三六引は「封祀壇」と記し、下文の「如封壇之儀」もまた同じであるが、これは誤りである。封禪制によれば、登封壇とするべきである。
- (45) 『宋史』禮志・七を参照。
- (46) 『後漢書』班固傳に引用された『兩都賦』に、「輦道經營，脩塗飛閣。自未央而連桂宮，北彌明光而緬長樂，陵燈道而超西墉，混建章而外屬，設壁門之風闕，上觚稜而棲金雀」とある。さらに、李賢注には「『前書音義』曰『輦道，閣道也。』未央宮在西，長樂宮在東，桂宮、明光宮在北，言飛閣相連也」とある。

#### 挿図出典

第54・55図：鄧淑蘋「唐宋玉册及其相關問題」『故宮文物月刊』第9卷第10期、國立故宮博物院、1992年、14・15頁。

# 7 窖窯の系譜

深澤芳樹

## A はじめに

土製焼物を生みだす閉じた焼成空間、すなわち窯の歴史は、地域によって異なっている。日本列島で窯を用いるようになったのは、古墳時代になってからのことである。それは、斜面を這い上がっていく細長い<sup>あながま</sup>窖窯という型式の窯で、大陸から伝わった。本稿では、土器を焼成するための窯、すなわち<sup>とうよう</sup>陶窯が、中国において出現期から三国・晋代までどのように変遷したのか、2006年末現在、公表された報告によってその過程をたどる。この作業をとおして、日本列島に現われた窖窯の文化的位置を遠望することにしたい。

窖 窯

さて、土器は、充分に加熱すれば粘土鉱物が水に溶けなくなり、さらに温度を上げれば硅質成分が溶解する性質を利用して作られている。粘土鉱物に変化を生む加熱処理には、天井のない野天焼成による場合と、天井をそなえた窯焼成による場合とがある。

窯は、燃料を燃やす燃焼部と、この熱を使って土器を焼成する焼成部とからなる。そして、燃焼部で発生させた火熱をどのように焼成部に伝えるかで窯に構造上の差異が生じ、形態にさまざまな変異が生まれた。

## B 陶窯の型式分類

**陶窯の部分呼称** 陶窯には、<sup>ひ</sup>篋（<sup>ひごうし</sup>火格子）と呼称する部位のあるものがある。篋とは、焼成部の床面を構成し、この下方に導いた火熱を小孔から焼成部に吹き込む部位である。この篋に開けた小孔を、<sup>かがん</sup>火眼と呼ぶ。篋をそなえた陶窯は、篋をはさんで下部と上部に分かれる二層構造になっている。燃焼部から篋の下部に空洞が通じていて、火眼に熱した空気を導く。篋の下部で火熱が通過する空洞部分の面積が篋全体の面積の50%未満の場合、空洞部分は溝状を呈する。これを<sup>か</sup>火道と呼ぶ。そして、燃焼部から焼成部奥壁に達する火道を主火道、主火道から分岐した火道を小火道と呼称する。空洞部分の面積が篋全体の面積の50%を越える場合は、空洞でない部分<sup>ようちゅう</sup>を窯柱と呼ぶ。

火眼と火道

また、陶窯内の空気は、焼成部天井に開けた孔から直接排出する場合と、焼成部の奥壁下端部に設けた小孔を迂回して外部に排出する場合とがある。外部への出口<sup>しゅつえんこう</sup>を出煙孔と呼び、焼成部の奥壁下部に設けた小孔<sup>つうえんこう</sup>を通煙孔と呼称する。通煙孔と出煙孔の間が<sup>えんどう</sup>煙道である。

出 煙 孔  
通 煙 孔

**陶窯の分類** これら篋の有無、火道の形状とその数、窯柱の形状・位置とその数、さらに通煙孔の有無とその数を指標にして、陶窯を分類する（第56図）。

まず、篋の有無に着目し、篋のある有篋式と篋のない無篋式に大別する。



有箆式の陶窯は、基本的に、箆をはさんで上下の二層構造をとる。この型式は、火道の有無とその形状で分類する。

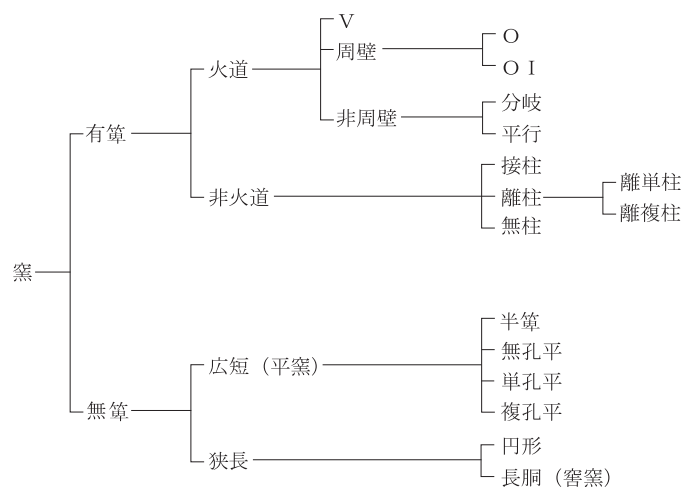
**火道式** 火道式には、主火道が二叉になった<sup>フイ</sup>V式、主火道が焼成部窯壁に沿ってまわる周壁式、火道が窯壁に沿ってまわらない非周壁式とがある。V式は1種類しかない(第57図1)。周壁式には、火道が窯壁に沿って一周するだけの<sup>オ-</sup>O式(第57図2)、これに燃烧部側から奥壁に向かう直線状の火道が加わった<sup>オ-フイ</sup>O I式(第57図3・4)、の2種類がある。非周壁式には、奥壁方向に伸びる主火道からさらに側壁方向などに小火道が分岐する分岐式(第57図5・6、第58図2)、分岐部がなく、燃烧部から奥壁方向に主火道だけが幾条か平行する平行式(第58図1)とがある。

**非火道式** また、火道のない非火道式は、窯柱の有無で分類する。窯柱のあるものを有柱式、窯柱のないものを無柱式(第58図6、第59図1)とする。有柱式は、その位置で二分する。窯柱の一面が奥壁に接する接柱式(第58図3・4)、窯柱のどの面も奥壁に接しない離柱式(第58図5)とである。さらに、窯柱が単数か複数かにより、前者を離単柱式、後者を離複柱式とする。

**広短式** 無箆式の陶窯は、基本的に一層構造である。燃烧部から焼成部にかけての形状を全長と幅の比率でみると、等倍に近い広短式と、2~16倍以上ある狭長式とがある。このうち広短式は、焼成部位の一部を掘り下げて燃烧部とする。本稿では、この無箆広短式窯を<sup>ひらがま</sup>平窯とも呼ぶ。また、狭長式には、焼成部の平面形が円形に近い円形式(第60図1~7)、焼成部の長さが幅の5倍以上ある細長い長胴式(第60図8、第61図1~4、第62図1~3)とがある。本稿では、この無箆長胴式窯を、**窖窯**とも呼ぶ。

広短式(平窯)には、燃烧部の上部にだけ箆をそなえるものがある。本稿では、これをとくに半箆広短式(第59図3)と呼ぶ。その他の広短式(平窯)は、通煙孔のない無孔平式(第59図2)、通煙孔が一つの単孔平式(第59図4・5)、通煙孔が複数の複孔平式(第59図6)に分ける。また、半箆広短式(平窯)と長胴式(窖窯)には、通煙孔があるものとなないものがある。通煙孔は、これら広短式(平窯)と長胴式(窖窯)の一部の型式とだけ組み合う。

以上の指標によって、中国の出現期から三国・晋代までの陶窯を分類し、一覧表にした(第13~27表)。ただし、入手できた資料のうち、図、写真、解説で型式をある程度絞れたものに限って



第56図 陶窯の分類

いる。そして、これらの陶窰を、まず型式順に、次に各型式を省ごとに、さらに時期順に配列した。大きさは、mを単位に、原則として内法長を掲載した。全長は、燃焼部焚口から焼成部奥壁までの長さを示した。主火道と通煙孔の項目ではその数を、箆の項目で( )内は火眼数を示した。項目内容の存否や詳細が不明な場合は、その有無の判定を放棄して?印であらわし、有無が明確な資料に限って、あれば○印あるいはその数、なければ×印で示した。

## C 各型式の所属時期

では、本稿で分類した各型式の陶窰がどの時期に属するか、確かめよう。

箆を用いた有箆式の実例は、仰韶文化からある。

**有箆火道式** まず、火道式をみる。

V式(第57図1)は、仰韶文化から西周～戦国時代、あるいはその併行期におよんでいる。このうち、陝西省半坡遺跡において、仰韶文化に属するV式が、やはり仰韶文化に属するO I式や非火道の離複柱式(第57図2)は、ほぼ仰韶文化あるいはその併行期に属している。

O I式(第57図3・4)は、ほとんどすべてが仰韶文化か、それに後続する時期に属している。

非周壁式のうち、分岐式(第57図5・6、第58図2)は、仰韶文化から竜山文化、あるいはその併行期にかけてあり、廟底溝二期文化と竜山文化にきわめて強い出現率のピークがある。なお、確かに仰韶文化に属するとされるのは、39例中2例である。

平行式(第58図1)は、仰韶文化から竜山文化、あるいはその併行期にあつて、竜山文化に出現率のとくに強いピークがある。ただし、仰韶文化に併行する例が青海省胡李家遺跡にあつて、仰韶文化のなかでも後期に併行するとされる。

**有箆非火道式** 次に、非火道式をみよう。

接柱式(第58図3・4)は、夏～西周代に集中し、1例だけが春秋晩期～戦国中期に属する。

離柱式(第58図5)は、仰韶文化から戦国時代にある。このうち、窰柱が複数ある離複柱式は、どれも仰韶文化に属し、他の離単柱式はすべて竜山文化以降の例である。

無柱式(第58図6、第59図1)は、仰韶文化から東周代におよんでいる。1例が仰韶文化に属するほかは、すべて二里頭期以降に属する。

次に、無箆式をみる。この型式は、裴李崗文化からある。

**無箆広短式** 広短式(平窰)は、燃焼部上の箆の有無、それに通煙孔の数で分ける。

半箆広短式(平窰)(第59図3)は、表に掲げた窰はすべて東周代に属するが、湖北省芦荻窰址(老河口市博物館1999)に同型式の窰があつて、六朝時代とされている。

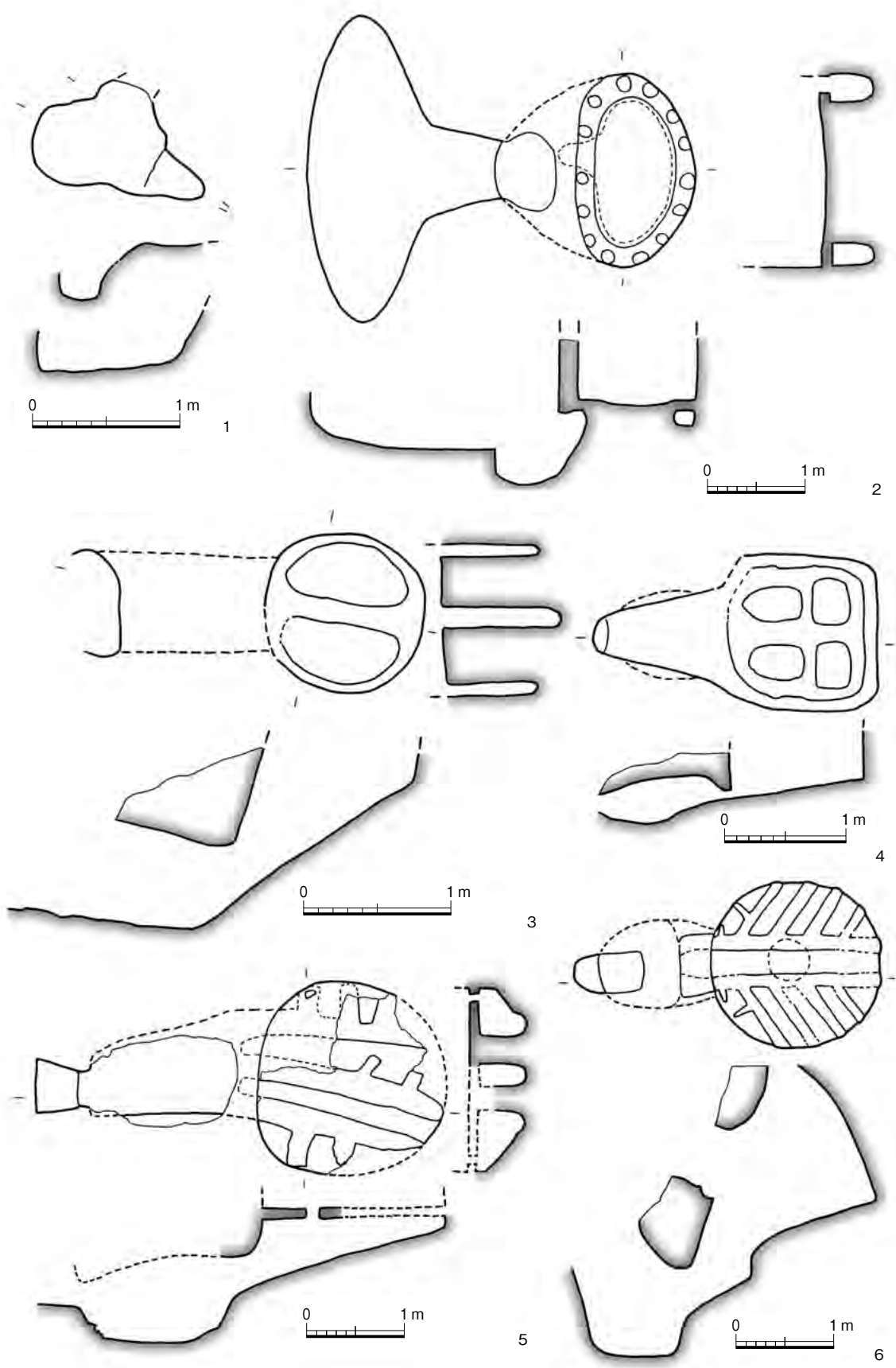
無孔広短式(平窰)(第59図2)は、西周代から東周代にかけてある。

単孔広短式(平窰)(第59図4・5)は、西周代以降続く。ただし、確実に後漢代に属するのは、45例中1例だけである。

複孔広短式(平窰)(第59図6)は、秦漢代にあつて、以降連綿と続く。後漢代の確実な例は、46例中10例ある。

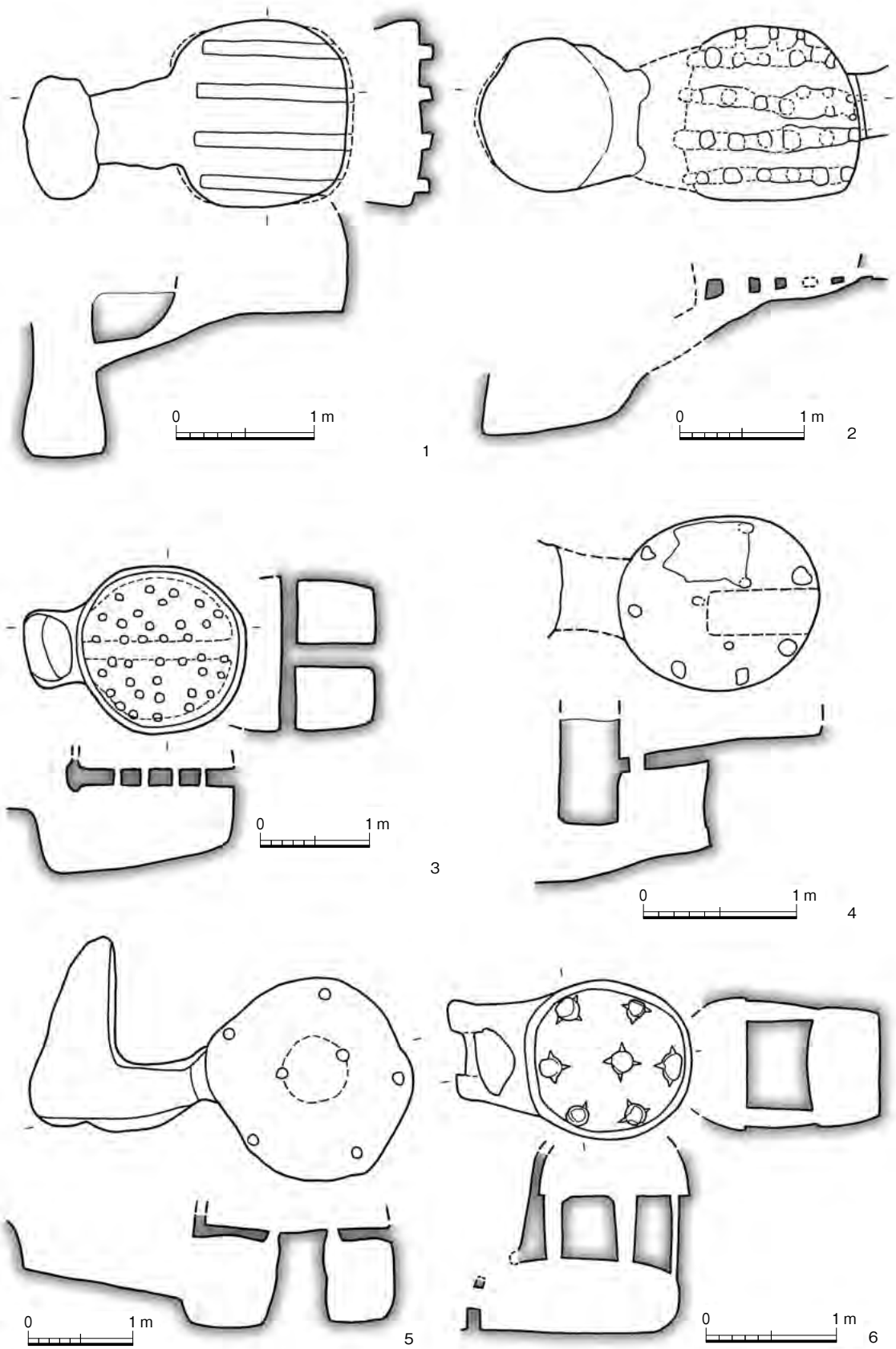
**無箆狭長式** 円形式(第60図1～7)は、裴李崗文化、仰韶文化、南部青銅器時代早期にある。

長胴式(窰窰)(第60図8、第61・62図)は、二里頭文化からあつて、後漢代、さらに晋代以降に

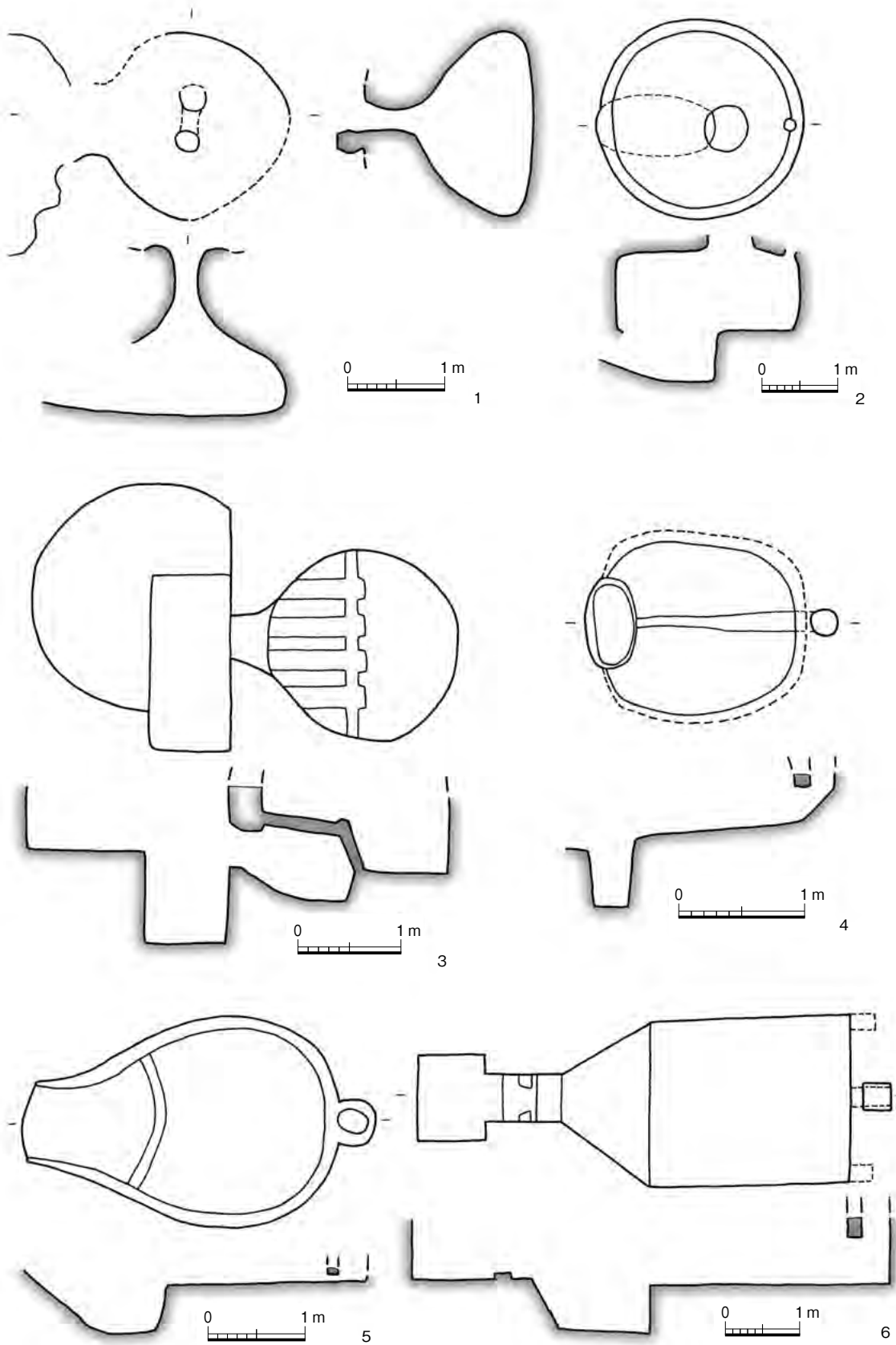


V式：1 半坡 O式：2 槐林 OI式：3 姜寨、4 四稜山 分岐式：5 大汶口、6 寧家坡

第57図 各型式の実例（1）

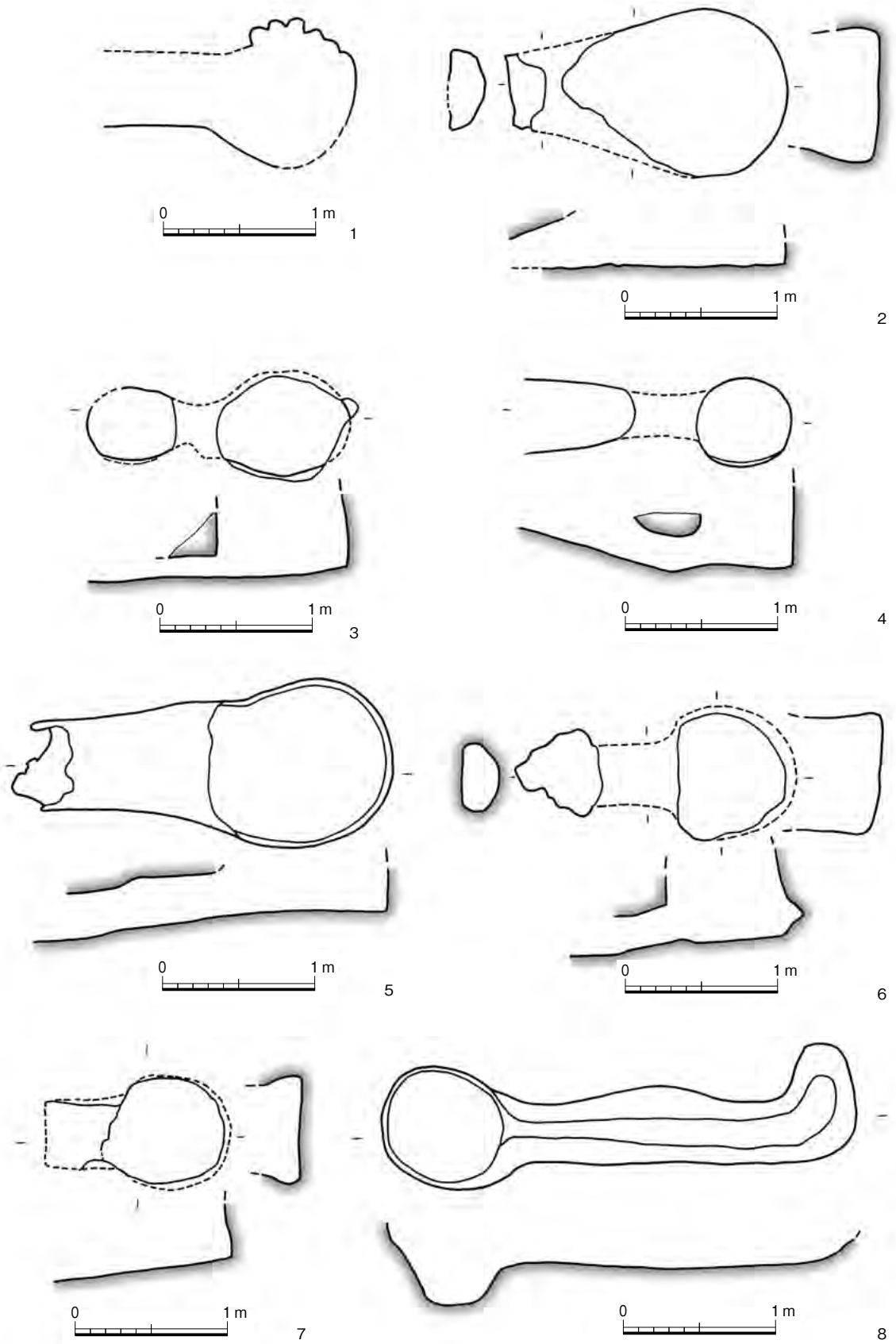


平行式：1 三里橋 分岐式：2 案板 接柱式：3 垣曲古城、4 下七垣 離単柱式：5 普渡村 無柱式：6 北羊台  
 第58図 各型式の実例（2）



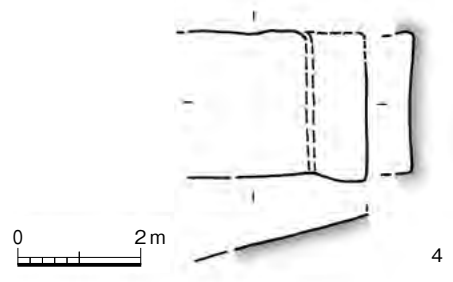
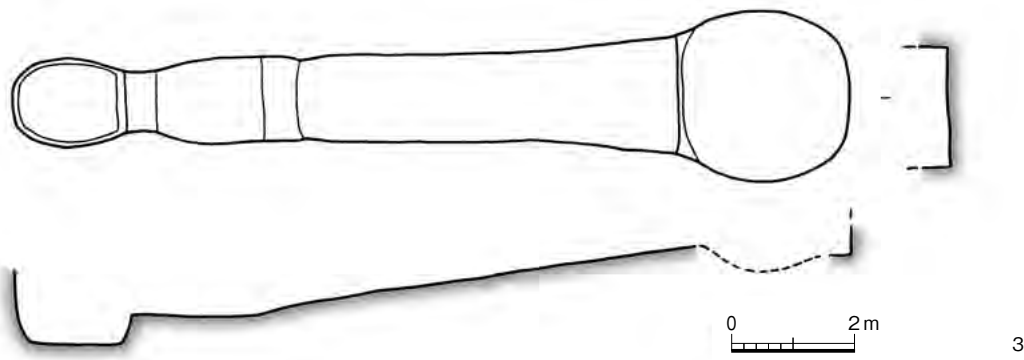
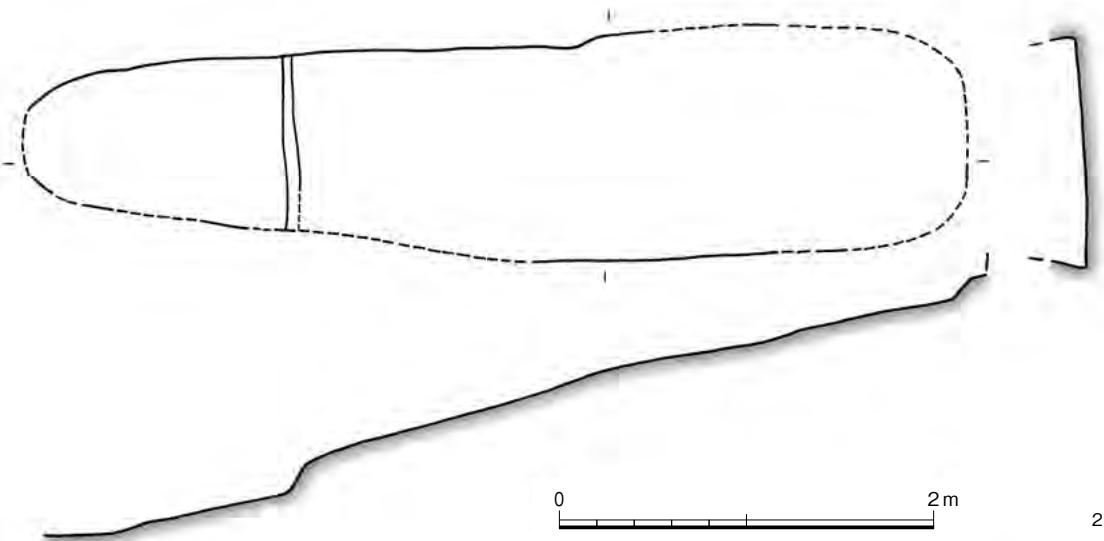
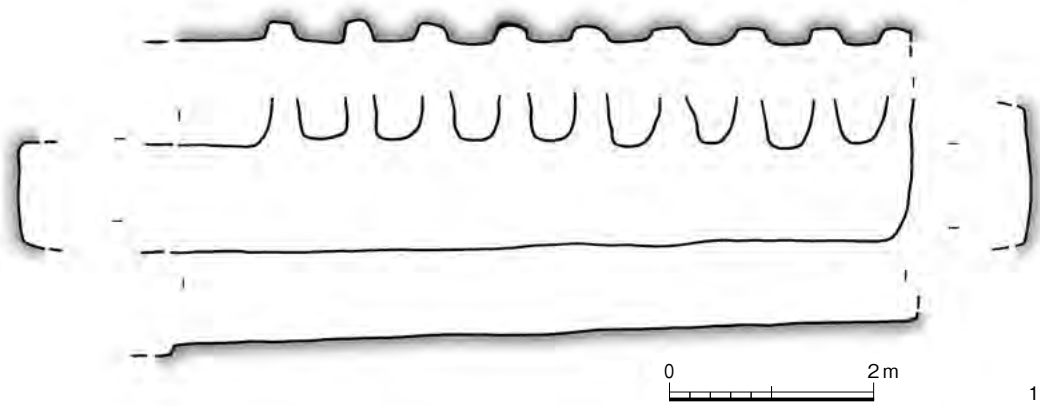
無柱式：1 半坡　無孔平式（平窯）：2 趙家台　半單式（平窯）：3 洛陽　単孔平式（平窯）：4 譚西庄、5 阜城村  
 複孔平式（平窯）：6 漢長安城

第59図 各型式の実例（3）



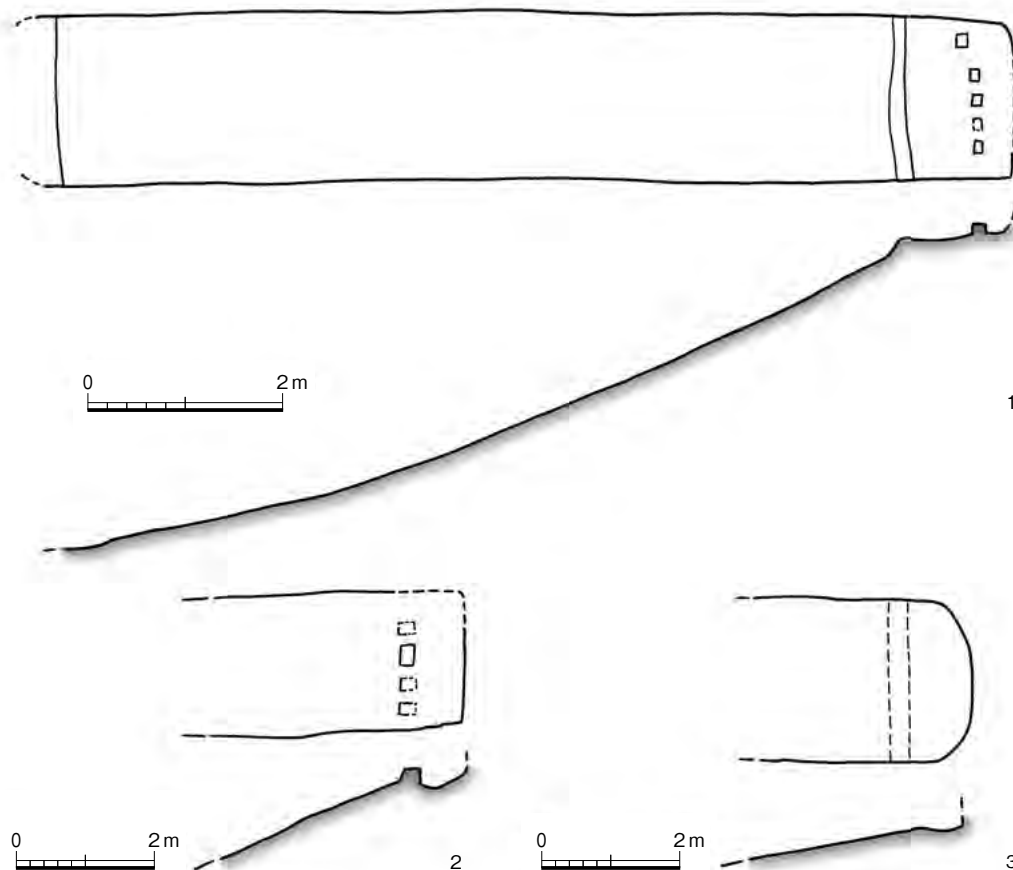
円形式：1 裴李崗、2 東庄村、3・4 下王村、5 三里橋、6・7 曇石山 長胴式（窖窯）：8 札州

第60図 各型式の実例（4）



長洞式（窟窯）：1 呉城、2 百官鎮、3 梅花墩、4 長竹園

第61図 各型式の実例（5）



長胴式（窖窯）：1 鞍山、2・3 帳子山

第62図 各型式の実例（6）

およぶ。ただし、江西省呉城6号竜窯（第61図1）には、側壁に多数開口部があって、漢代までの陶窯ではほかに例がない。本例は、陶窯ではなく、炭焼き窯の可能性が高い。

**小 結** ここで、各型式の所属時期を整理しておこう。

中国では、陶窯は裴李崗文化から確認できる。有箆式のうち、火道周壁式は仰韶文化期に集中し、火道非周壁式は廟底溝二期から竜山文化にかけて集中する。有柱式は、仰韶文化と商・西周代の2時期に偏る。無柱式も、仰韶文化と商・西周代を中心とした2時期に集中する。

他方、無箆式のうち、広短式（平窯）は西周代に出現し、戦国時代以降、発見頻度の高い型式となる。円形式は、裴李崗文化から仰韶文化にかけてある。長胴式の窖窯は、とくに二里头文化以降になるとその存在が確認されるようになり、さらに漢代以降におよぶ。

## D 通煙孔と出煙孔

次に、通煙孔と出煙孔についてみる。

**通煙孔がない場合** 通煙孔がない場合、出煙孔はどこにあるか。遺存状態がきわめて良好な有箆火道V式にあたる山西省垣曲古城ⅢY4や有箆火道分歧式にあたる山西省寧家坡窯址Y501（第57図6）・Y502でみると、これらには焼成部天井のほぼ中央に直径30cmほどの円孔があって、こ



天井中央部に  
出煙孔

れを出煙孔とする。この場合、出煙孔は、燃焼部で発生した火熱を天井上部から外部に放出して空気の流れを生みだし、火熱を焼成部に供給する働きをするのであろう。さらに、焚口と出煙孔を開閉することによって、窯内を酸化炎状態や還元炎状態にすることもできる。河南省北窯遺跡2号窯のような無算式の広短式（平窯）を含めて、天井の一部や焼成部壁面が残存する事例から、長胴式（窖窯）を除く通煙孔のない型式の窯には、これら垣曲古城例や寧家坡窯址例などと同様に、天井のほぼ中央部に通煙孔があったと推定できる。

**通煙孔がある場合** では、通煙孔がある場合はどうか。有算式には、確実な例はない。半算式の最古例は、山西省垣曲古城IY1と河南省東周城址H415にあって、東周代に属する。

無算式では、広短式（平窯）にあたる陝西省許西庄遺跡Y6・Y7（第59図4）は、どちらも西周代に属する。すべての型式を通じて、通煙孔としては最古例である。すなわち、焼成部奥壁中央下端に20～30cmの小孔を開けて、ここを通煙孔とし、奥壁外側に通煙孔と直径が同大の孔をやや傾けて開け、排気する。焼成部の天井は完存しないが、後代の事例を参考にすると、天井に出煙孔はなかったはずである。燃焼部で発生した火熱は、いったん焼成部天井に達したのち、下降して通煙孔を迂回し、奥壁外側に開けた出煙孔から排出される。なお、陝西省張家坡遺跡H110や河南省李家窯遺跡Y1・Y2も同型式で、西周代に属する可能性がある。

奥壁外側に  
出煙孔

これ以降、通煙孔は継続して用いられた。通煙孔がある場合も、単数か複数かの違いがあり、後者では三つの例が圧倒的に多い。そして、無孔平式と単孔平式では奥壁の平面形が曲線状になるのに対して、通煙孔が三つの場合、奥壁は直線状を呈するものが多くなる。

燃焼部形状の  
型式差

また、燃焼部の形状にも型式差を認めることができる。すなわち、燃焼部と焼成部の境界部分が強い曲線状を呈するものが無孔平式では圧倒的に多く、一方、複孔平式は直線状に区切られている。単孔平式には両者がともにみられるが、その中間のゆるやかな曲線を呈するものが多い。そして、通煙孔を複数有する平窯が、秦漢代以降、ごく一般的な型式となる。

長胴式（窖窯）では、戦国時代に属する浙江省長竹園遺跡Y1（第61図4）について、報告者は最上部に位置する奥壁の下方約1mにある窯内の窯壁を隔壁と認定し、遺存こそしないものの、ここに通煙孔の存在を指摘する（紹興県文物管理委員会1979）。奥壁の手前に設ける隔壁に通煙孔を開けた確実な例は、後漢代に属する浙江省張子山一号竜窯（第62図2）、さらに三国時代の浙江省鞍山三国竜窯（第62図1）以降、連綿と続く。したがって、これらと同位置に隔壁の痕跡をとどめた長竹園遺跡Y1の隔壁部に、通煙孔を推定して誤りないであろう。

通煙孔の  
出現時期

通煙孔は、中国に陶窯が出現してからも長期にわたって存在せず、西周代の陶窯に初めて現われた。それは、まず無算式に属する広短式（平窯）においてであった。そして、戦国時代には無算長胴式（窖窯）にすでに取り入れられていた。つまり、通煙孔は無算式に限定されており、このうちの平窯と窖窯という異なった型式をつうじて用いられていたのである。また、出煙孔の果たした役割は、通煙孔の有無によって本質的に異なっていた。

## E 各型式の分布状況

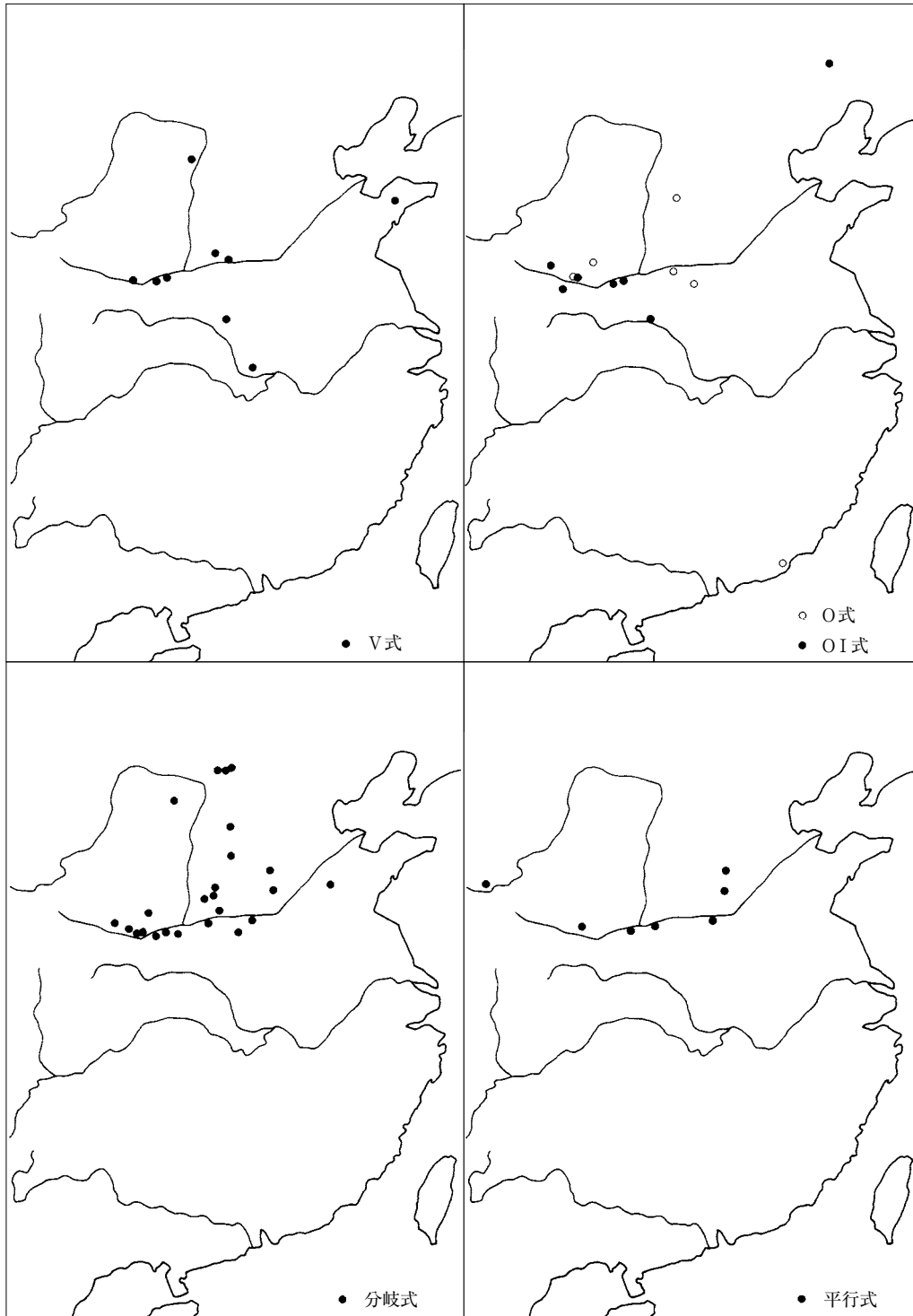
では、各型式の分布状況をみよう。

V式（第63図左上）は、中国西北部にとくに密集し、そのほか黄河下流域・揚子江中流域に点在

する。O式の分布(同右上○)は、南部海岸域の1例を除き、V式の分布域に含まれる。また、OI式(同右上●)は、内蒙古自治区の1例を除けば、V式の分布域に重複する。

分岐式(同左下)と平行式(同右下)は、中国北部に偏在し、基本的に、分岐式の分布域が平行式の分布を含む関係にある。

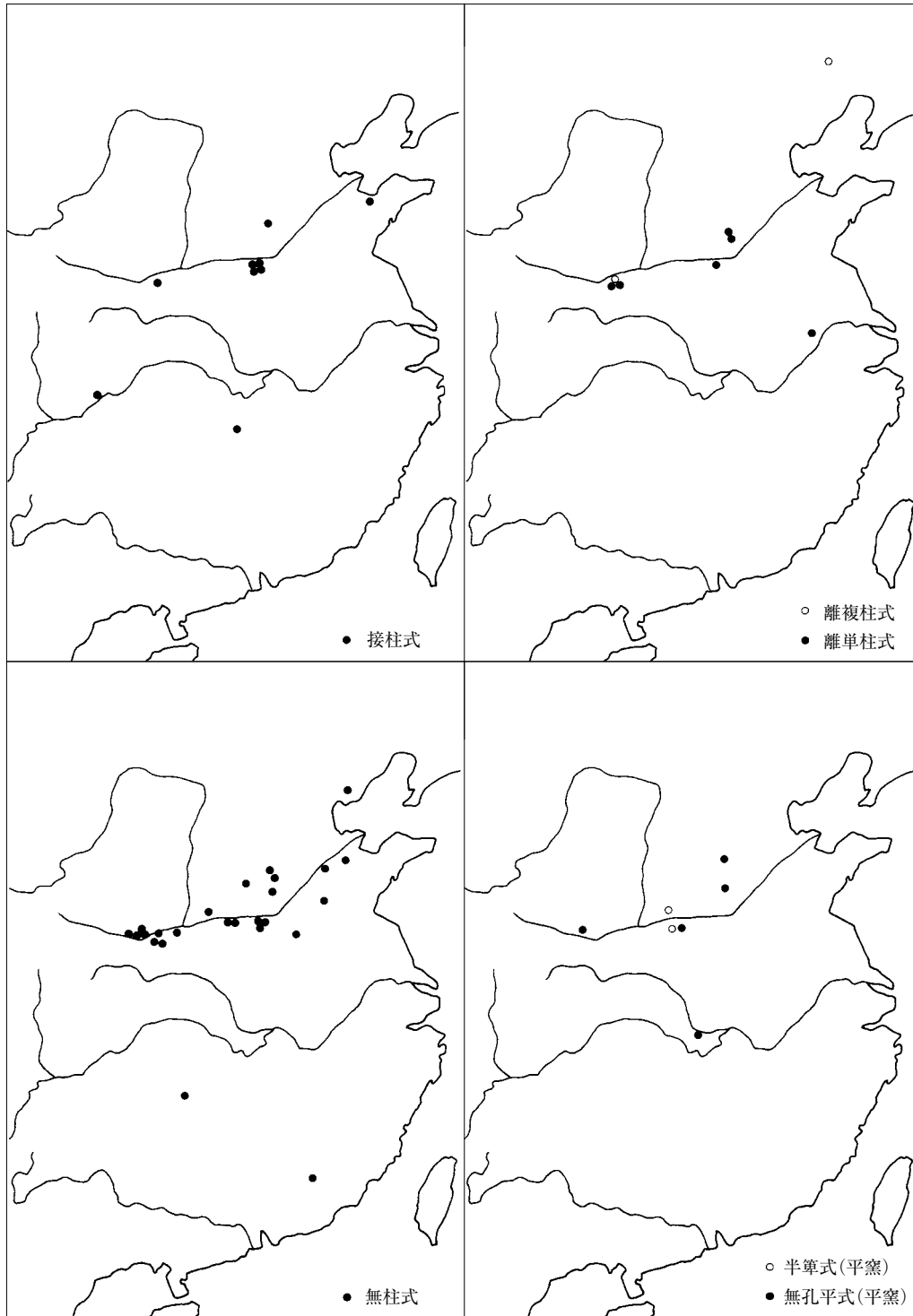
接柱式(第64図左上)と離柱式(同右上)、無柱式(同左下)の分布域には共通点が多い。すなわ



第63図 各型式の分布(1)

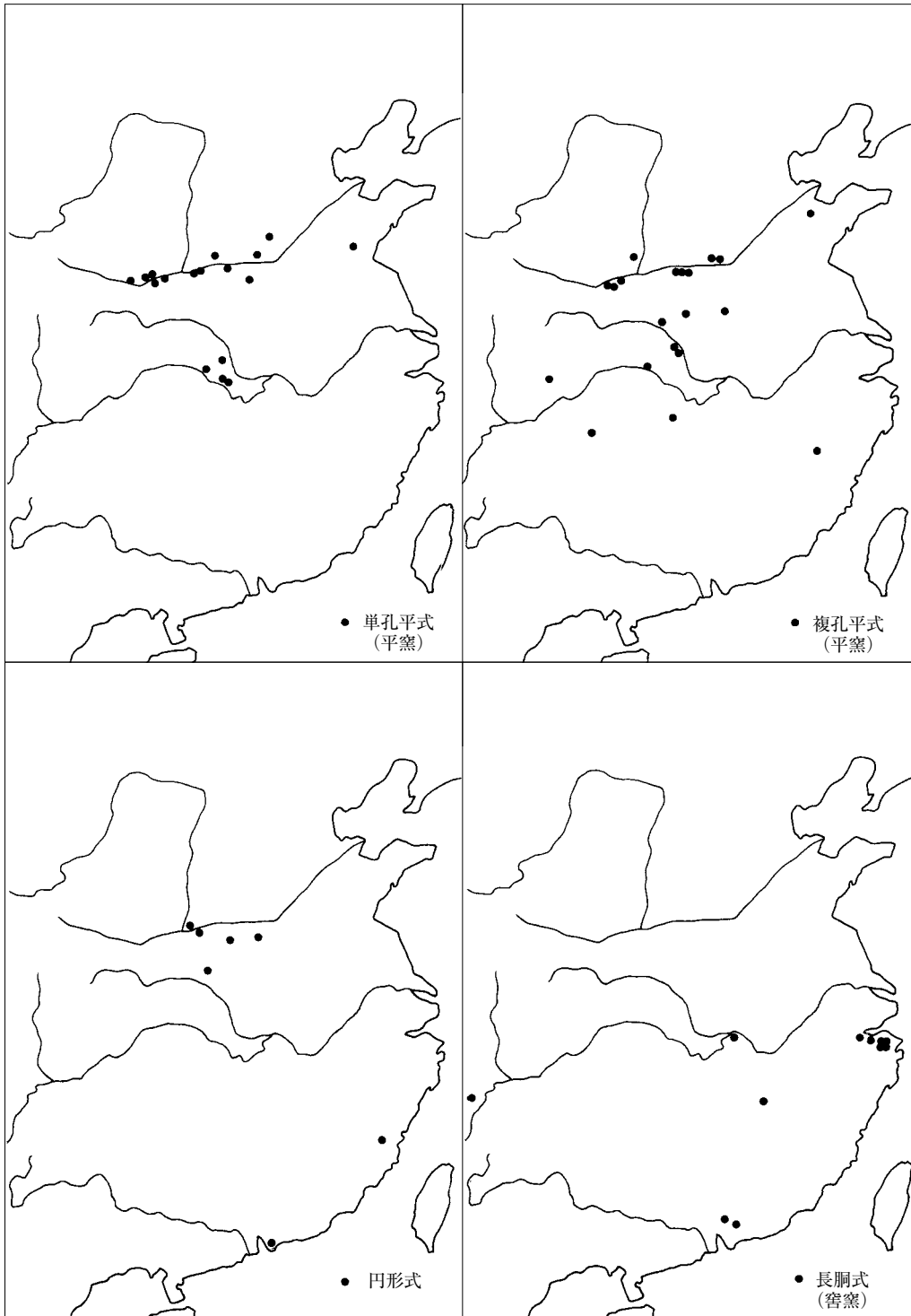
ち、黄河流域の中国北部に密集するほか、揚子江以南の地域にも分布する。

これに対して、無算広短式（平窯）の分布域も、中国北部に多く、一部が南部地域におよぶ点で、有算式のうち非周壁式・無火道式の分布域と共通点が多い。手元の資料によるかぎり、半算式（同右下○）は河南省に限定される。広短式における無孔式（同右下●）、単孔式（第65図左上）、複孔式（同右上）に、分布上、大きな差異はない。



第64図 各型式の分布（2）

円形式（同左下）は、中国西北部に密集域があるほか、中国南部のとくに海岸部に点在する。長胴式（窰窯）（同右下）は、中国北部には分布せず、中国南部の広域に点在する点で、ほかの型式とは大きく相違する。しかしながら、長胴式（窰窯）の分布域が、他の無算式の分布域と南部地域で確実に重複している点に注目しておきたい。



第65図 各型式の分布（3）

## F 型式変遷とその方向性

陶窯各型式の所属時期と分布域については、以上のようにまとめることができる。次に、中国における陶窯の変遷過程を推定することにしよう。

**有算式の変遷** まず、有算式について検討する。

所属時期からみると、周壁式が非周壁式に基本的に先行する。そして、半坡遺跡では、層位において、火道をもつV式が周壁式のO I式や非火道の離柱式、無柱式に先行することが確認されている。したがって、有算式においては、V式が最も先行し、かつ火道式が非火道式に先行すると認めることができる。

ところで、V式とO式は主火道が2本である点で共通し、V式とO式を含む周壁式は主火道の形状で分離できる。O I式は、O式と火道が窯壁をめぐる点で共通するものの、主火道の数がV式・O式とは異なる。さらに、算の下部での支えの有無は、V式・O式・O I式・有柱式と無柱式の間で異なる。また、算下部の空隙部の比率は、O式、O I式、離柱式、無柱式の順に大きくなる。

これらの属性の共通点と相違点から、相互の近縁性を、V式とO式、O式とO I式、O I式と離柱式、離柱式と無柱式に、それぞれ認めることができる。そして、半坡遺跡における発掘成果から、V式を最古に位置づけ、各型式の出現の順序を、V式→O式→O I式→離複柱式→無柱式、と推定する。ただし、新型式が出現した後も、旧型式が存続した可能性を認めておく。

こうした変遷は、おのおのの陶窯の所属時期から、すべて仰韶文化のうちに生起していたと推定する。離柱式、それに無柱式でこの時期に該当するのは、離柱式では窯柱を複数もった離複柱式であり、無柱式では半坡遺跡の1例であった。

これらの仰韶文化における有算式陶窯の変遷過程は、つまるところ、算下部の空隙部分の拡大にあった。変遷の方向は、燃焼部で発生した熱の有効利用であったのである。すなわち、燃焼部で発生した熱を効率よく焼成部に送るために、焼成部に達する火道の数を増やし、最終的に焼成部の下部を燃焼部として、さらに窯柱を排除する方向に変化した、とみなすことができる。こうした変化は、各型式の分布状況から、陝西省など仰韶文化の中心地域である中国西北部で進行したと推定して誤りないであろう。

ところが、非周壁式の分岐式や平行式は、周壁式とした仰韶文化期におけるO式以降の変遷過程から導きだすことはできない。分岐式と平行式における窯壁付近への火熱の供給法が、周壁式系列の各型式と異なっていたのである。すなわち、分岐式は、小火道を窯壁側に分岐させ、平行式は窯壁側壁近くに主火道を配することで解決した。この場合、分岐式と平行式の祖型となるのは、火道をもち、その形状に共通した要素をそなえ、かつ先行する時期にある、という条件を満たすものでなければならない。とすると、それにあたるのは火道をもつV式しかなく、V式を非周壁式の分岐式と平行式の祖型と認める。

ここで分布のあり方に着目すると、中国北部では周壁式が、内蒙古自治区の1遺跡を除き、西部に偏在するのに対して、非周壁式は、これを含むさらに広い地域に分布する点が注意される。このうち、山東省大汶口遺跡<sup>だいぶんこう</sup>では、西部の仰韶文化に併行し、かつ竜山文化の源流となる大汶口

出現順序  
の推定

変遷の方向

非周壁式  
の祖型

分布の違い

文化に属する陶窯が発見されている。この陶窯は、典型的な火道分岐式に該当する。よって、非周壁式がV式から成立した地域は、非周壁式の分布域のうちで、周壁式が分布しない中国東北部であったと結論してよいであろう。

これを認めれば、中国西北部で起きた仰韶文化から竜山文化への移行は、陶窯の系譜関係によるかぎり、周壁式から非周壁式への移行と言いかえることができる。かつ、その過渡期に位置づけられている廟底溝二期文化の陶窯は、すべて非周壁式であった。したがって、この文化的移行は、決して一系列的な内的変化などではなく、山東省など東方地域からの強い影響によって生じた文化変容であったと結論しなければならない。

また、分岐式と平行式は、さらに型式変化を遂げたと推定する。それぞれの所属時期からみて、火道間の掘り残し部分が窯柱になり、窯柱は占有面積を縮小していった。発生の順番を、V式→分岐式・平行式→接柱式→離柱式→無柱式、と推定できるのである。そして、接柱式以降、分布域は南方に拡大した。

有  
筭  
式  
の  
発  
生  
順  
序

こうした変遷は、仰韶文化併行期から西周代にわたってなされ、変遷の方向は、燃焼部位置を焼成部の下部に移動することおよび窯柱の占有面積比の縮小化、すなわち燃焼部で発生した熱の効率的な利用にあった。これらは、仰韶文化期における周壁式のたどった方向に一致する。したがって、ここでも、筭下部の空洞部分の拡大が、筭が支持できる重量の低下をまねく、という重大な問題をかかえることとなった。

**無筭式の変遷** 次に無筭式について検討する。

所属時期から、無筭式のうちでは、円形式が最古の型式であるのは疑いない。

広短式（平窯）の出現期の陶窯で、所属時期が最古なのは、西周代に属する陝西省趙家台遺跡Y1、河南省北窯遺跡2号窯、陝西省澗西庄遺跡Y6・Y7の窯である。このうち、前二者に通煙孔はなく、後者の陶窯には通煙孔がそなわっていた。通煙孔は、それまでの陶窯にはなかったものである。広短式（平窯）も、当初から通煙孔をもっていたわけでないであろう。というのは、燃焼部の型式学的検討からは、無孔平式が単孔平式に先行する要素をそなえているからである。この点を重視すれば、無筭式の広短式（平窯）は、当初は通煙孔をもたず、後に通煙孔を獲得したと理解すべきである。

平  
窯  
の  
出  
現

通煙孔については、出煙孔が天井に開いて通煙孔のない広短式が、河南省北窯遺跡の西周代の金属加工工房内でみつかっている。そして、この型式に通煙孔を追加したものが、漢代には河南省鉄生溝遺跡（趙ほか1985）などで、脱炭炉として金属加工の工程で使用されている事実に注目したい。こうした状況から、広短式（平窯）における通煙孔の導入には、高温加工を必要とする金属加工の技術がかかわっていたと推定する。

また、円形式と広短式（平窯）における形状と構造の類似、および所属時期の先後関係から、円形式の焼成部に燃焼部が進出し、広短式（平窯）が成立した可能性を認めておきたい。すなわち、発生の順番を、円形式→無孔平式→単孔平式→複孔平式、と推定する。ただし、今回資料化した両者が直接の系譜関係にあるかどうかは、相互の時間的な空隙があまりに大きいため、確定しない。

無  
筭  
式  
の  
発  
生  
順  
序

なお、平窯の燃焼部上面に筭をそなえた半筭式は、燃焼部の形状をみるかぎり、その境界が直線状となって、無孔平式より単孔平式に近い特徴を示し、より後出的である。したがって、半筭

式は、有算式から無算式への過渡的型式と位置づけるよりも、広短式（平窯）に有算式の伝統が加わった重複型式、あるいは広短式（平窯）の燃焼部上部を焼成部とするための改良が加わって成立した改良型式とみなすべきであろう。

#### 通煙孔採用 の意義

ところで、通煙孔の採用は、焼成部内部の温度を均質化して、燃焼部から焼成部へ空気の流れを生みだし、燃焼部で発生した熱をより効率的に利用することを可能にした（劉1982）。しかも、焼成部の床面は地面であり、十分な強度をもつ。また、焼成部の大型化も容易であった。有算式は、熱効率を向上させるために耐重量の低下をまねいたが、広短式（平窯）においては、通煙孔を採用することで、これらの課題は解決されたのである。さらに、この型式であれば、構築するうえでの地形的な制約は少ない。

長胴式（窖窯）については、円形式が長胴式より時期的に先行して存在すること、そして円形式の焼成部を伸長すれば長胴式（窖窯）が成立することから、両者の間に時間的空隙はあるものの、円形式から長胴式に変遷したと推定する。円形式が、中国の西北部ばかりでなく、南部にも広く分布している事実が、こうした見方を支持する。円形式の場合、出煙孔は焼成部の中央上部に開いていたはずであるが、火熱の引き方からみて、傾斜地では斜面の多くを焼成部とする方向に変化し、出煙孔は奥壁の近くに寄ったであろう。この長胴式（窖窯）においても、戦国時代には通煙孔を導入し、焼成部の温度管理に変革をもたらすとともに、焼成部床面を伸長して、焼成量の増加を実現したのである。

#### 北部の平窯 南部の窖窯

このように、無算式が通煙孔を獲得することで、有算式に対する優位が決定的となり、中国では無算式が、とくに戦国時代以降、主流となった。そして、中国北部では広短式（平窯）が、南部の揚子江下流域では長胴式（窖窯）がそれぞれ卓越し、また南部の多くで両型式が混在する。長胴式（窖窯）は、広短式（平窯）に対して、「室内温度や雰囲気（酸化・還元の状態）が不均一であること、また保温性に欠け、急冷却しすぎる」（関口1997、136頁）などの差異はあるものの、両者の熱効率や耐重量に関する対応の仕方には共通点が多い。実際、この両型式は、全く孤立して変遷したのではなく、通煙孔を共有するなど、相互に技術交流があったことを示す明らかな証拠がある。

#### 無算長胴式 窖窯が伝来

**日本列島に到達した窖窯の系譜** 日本列島に初めて定着した窯は、中国において大きく2系統で展開した陶窯のうち、無算式に属し、かつ揚子江下流域に顕著に分布する無算長胴式の窖窯であった。そして、植野浩三によると、それは通煙孔を欠いていた（植野1999）。

本稿の検討とその年代観から、通煙孔を欠く理由は、揚子江下流域かその周辺地域に広まっていた窖窯が北上し、日本列島に至る道程で文化細目（この場合は通煙孔）の欠落を起こしたか、それとも中国で窖窯が通煙孔をすでに獲得した後も、まだ通煙孔のない型式が揚子江下流域あたりに存続していて、それが日本列島に伝来したか、のどちらかということになる。

本稿をまとめるにあたって、徐萃芳、劉慶柱、白雲翔、王巍、具一會、崔完奎、金武重、東仁美、伊庭功、今井淳雄、小野山節、川竹恵梨花、神野恵、橋本美佳、樋口隆康、菱田哲郎、望月精司、森下しのぶの諸氏に、ご教示とご援助をいただいた。あらためて深く感謝する。

第14表 陶窯一覽(1) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	形状	幅×長 (m)	竈	煙	成	部	細	部	通	煙	孔	文	献
V	半坡	陝西省 西安市	第5号 陶窯	仰韶文化半坡類型	?	?	?	?	?	?	2	×	×	×	×	×	中国科学院长古研究所ほか 1963		
V	半坡	陝西省 西安市	第6号 陶窯	仰韶文化半坡類型	1×1.2	?	?	?	?	?	2	×	×	×	×	×	中国科学院长古研究所ほか 1963		
V	姜寨	陝西省 蒲潼県	Y3	仰韶文化半坡類型	1.04×2.3	立垣	?	1.0×1.20	○ (3以上)	?	2	×	×	×	?	西安半坡博物館ほか 1988			
V	趙家交	陝西省 武功県	Y5	客省庄二期文化(竜口文化)	1.05×1.41	立垣	楕円形	1.05×0.4	?	?	2	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所 1988			
V	新豊	陝西省 神木県	Y3	竜山文化晩期至夏代	?×1.18 (以上)	?	?	0.38×0.71	?	?	2	×	×	×	?	陝西省考古研究所 2002			
V	埧曲古城	山西省 埧曲県	IIIY1	廟底溝二期文化早茅	0.8×1.3	?	?	0.8×?	?	?	2	×	×	×	?	中国歴史博物館考古部ほか 2001			
V	埧曲古城	山西省 埧曲県	IIIY2	廟底溝二期文化早茅	0.55×0.84	立垣	円形	0.54~0.55	○ (2以上)	?	2	×	×	×	×	中国歴史博物館考古部ほか 2001			
V	埧曲古城	山西省 埧曲県	IIIY4	廟底溝二期文化早茅	0.5×0.62	立垣	円形	0.5~0.54	○ (6)	?	2	×	×	×	×	中国歴史博物館考古部ほか 2001			
V	長泉村	河南省 济源市	Y1	仰韶文化	0.89×1.25	?	?	0.89×0.3 (以上)	?	?	2	×	×	×	?	河南省文物管理局ほか 1999			
V	八里崗	河南省 鄧州市	Y1	裴家嶺文化中晩期	1.28 (以上) ×1.56 (以上)	?	?	1.28 (以上) ×0.8 (以上)	?	?	2	×	×	×	?	北京大学考古文博系ほか 2000			
V	下馬王	山東省 萊西市	Y1	西周晩期至戦国晩期	0.36×0.42	?	?	0.36×0.33	?	?	2	×	×	×	×	山東省文物考古研究所ほか 1997			
V	肖家屋脊	湖北省 天門市	Y1	石家河文化早期	0.86×0.9以上	平垣?	台形	0.86×0.96	○ (2?)	?	2	×	×	×	×	湖北省荆州博物館ほか 1999			
O	北首嶺	陝西省 宝鸡市	Y3	北首嶺中期 (仰韶文化半坡類型)	1.4×2.6	立垣	円形	1.0	?	?	2	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所 1983			
O	下孟村	陝西省 彬県	第2陶窯	仰韶文化半坡類型	1.34×1.34 (以上)	立垣	円形	1.34	○ (10)	?	2	×	×	×	×	陝西省社会科学院考古研究所 1962			
O	杏花村	山西省 汾陽県	Y201	杏花村第一段 (仰韶文化廟底溝類型)	0.7 (以上) ×2.6 (以上)	?	円形	0.7~1.0	○	?	2	×	×	×	×	晋中考古隊 1989			
O	槐林	河南省 新安县	Y1	仰韶文化中期	1.75×1.87	立垣	楕円形	1.08~1.75	○ (14)	?	2	×	×	×	×	河南省文物管理局ほか 1999			
O	北劉庄	河南省 臨汝県	Y1	北劉庄第二期文化 (仰韶文化から崑山文化へ への過渡期 玉湾二期)	0.9~2.16	?	円形	0.9	?	?	2	×	×	×	×	河南省文物研究所 1990e			
O	虎頭埧古窯	広東省 普寧県	Y13	新石器時代充期(印紋陶)	1.58×3.65	?	円形	1.58	?	?	2	×	×	×	×	広東省博物館ほか 1984			
O I	四陵口	内蒙古 自治区 敖漢旗	Y1	紅山文化(仰韶文化后崑 山類型~廟底溝類型)	1.38×2.50	立垣	方形	1.38×1.48	?	?	3	×	×	×	×	遼寧省博物館ほか 1977			



第15表 陶窯一覽(2) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	形状	幅×長 (m)	窯	主火道	分岐	細部	通煙孔	文献
〇I	四稜山	内モンゴ 自治区 敖漢旗	Y2	紅山文化(仰韶文化后崗 類型~廟底溝類型)	2.8×2.35 (以上)	立垣	長方形	1.1×2.8	?	7	×	×	×	遼寧省博物館ほか 1977
〇I	四稜山	内モンゴ 自治区 敖漢旗	Y4	紅山文化(仰韶文化后崗 類型~廟底溝類型)	1.3×2.68	立垣	方形	1.3×1.35	?	3	×	×	×	遼寧省博物館ほか 1977
〇I	四稜山	内モンゴ 自治区 敖漢旗	Y5	紅山文化(仰韶文化后崗 類型~廟底溝類型)	1.2×1.69 (以上)	立垣	方形	1.2×1.38	?	3	×	×	×	遼寧省博物館ほか 1977
〇I	四稜山	内モンゴ 自治区 敖漢旗	Y6	紅山文化(仰韶文化后崗 類型~廟底溝類型)	2.6×2.53	立垣	長方形	2.6×1.0	?	7	×	×	×	遼寧省博物館ほか 1977
〇I	大地湾	甘肃省 秦安県	Y800	仰韶文化晚期	1.16×2.4	立垣	円形	1.16	○	3	×	×	?	甘肃省博物館文物工作队 1983
〇I	郭家湾	陕西省 鳳県	T2丙	新石器~仰韶文化ごろ	?	立垣	円形	?	?	3	×	×	?	陕西省文物管理委员会 1956
〇I	半坡	陕西省 西安市	第3陶窯	仰韶文化半坡類型	1.1×2.1	立垣	円形	0.8	○	2	×	×	×	中国科学院考古研究所ほか 1963
〇I	半坡	陕西省 西安市	第4陶窯	仰韶文化半坡類型	1.1×2	?	?	?	?	○	?	?	?	中国科学院考古研究所ほか 1963
〇I	姜寨	陕西省 臨潼県	Y1	仰韶文化半坡類型	0.72~1.08×2.4	立垣	円形	0.84~0.86	○	3	×	×	×	西安半坡博物館ほか 1988
〇I	北首嶺	陕西省 宝鶏市	78Y1	北首嶺早(仰韶文化)	1.03×1.28	立垣	円形	0.97×1.03	○	3	×	×	×	中国社会科学院考古研究所 1983
〇I	青竜泉	湖北省 鄖県	Y1	屈家嶺文化晚期	1.2×0.70 (以上)	立垣	円形	1.2	?	3	×	×	×	中国社会科学院考古研究所 1991
〇I	青竜泉	湖北省 鄖県	Y2	屈家嶺文化晚期	1.11 (以上) ×2.11	立垣	円形	1.11 (以上) ×0.51 (以上)	?	3	×	×	×	中国社会科学院考古研究所 1991
分岐	圓子溝	内モンゴ 自治区 三蘇木郷	Y3004	圓子溝第三段(圓子溝後 期が龍山文化早期晩段)	2.00×3.20	立垣	楕円形	1.70~2.00	○	1	○	×	×	内蒙古文物考古研究所 2001
分岐	老虎山	内モンゴ 自治区 涼城県	Y1	老虎山文化先期(龍山早 期晩段)	1.65×1.91 (以上)	立垣	円形	1.65	○	1	○	×	×	内蒙古文物考古研究所 2000 (12以上)
分岐	面坡	内モンゴ 自治区 涼城県	Y2	龍山文化早期晩段	1.7×2.73	立垣	円形	1.7	○	1	○	×	×	内蒙古文物考古研究所 2000 (20)
分岐	老虎山	内モンゴ 自治区 涼城県	Y2	老虎山文化先期(龍山早 期晩段)	2.20×2.22	立垣	楕円形	1.90×2.20	○	2	○	×	×	内蒙古文物考古研究所 2000 (12以上)



第17表 陶窯一覽(4) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	焼成形状	部幅×長 (m)	算	焼成主火道	部	細	部	文	献
分岐	寧家坡	山西省垣曲県	Y501	廟底溝二期文化の比較的早い段階～廟底溝第二期文化内	1.7×3.05	立垣	円形	1.7	○	2	○	×	×	山西省考古研究所	1998
分岐	寧家坡	山西省垣曲県	Y502	廟底溝二期文化の比較的早い段階～廟底溝第二期文化内	1.9×3.5	立垣	円形	1.9	○	2	○	×	×	山西省考古研究所	1998
分岐	白燕	山西省太谷県	Y503	竜山文化早期	1.4×2.2	立垣	馬蹄形	1.4×1.8	?	2	○	×	×	晋中考古隊	1989
分岐	陶寺	山西省襄汾県	Y315	陶寺類型竜山文化早期	1.22×1.96 (以上)	立垣	円形	1.2	○	2	○	×	×	中国社会科学院考古研究所山西工作队	1986
分岐	陶寺	山西省襄汾県	Y1	竜山文化早期	1.6×2.6	立垣	近円形	1.6×1.65	○	3	6	×	×	山西省考古研究所	1999
分岐	陶寺	山西省襄汾県	Y2	竜山文化早期～仰韶	1.75×2.3 (以上)	立垣	近円形	1.75×1.5以上	○	3	7	×	×	山西省考古研究所	1999
分岐	陶寺	山西省襄汾県	Y3	陶寺文化早期	1.06×1.70	立垣	円形	1.06×0.96	○	2	10	×	×	中国社会科学院考古研究所山西隊ほか	2006
分岐	丁村	山西省襄汾県	Y2	陶寺類型竜山文化晚期	1.50×2.36	立垣	円形	1.50	?	2	○	×	×	山西省考古研究所	1991
分岐	游邀	山西省襄汾県	Y105	竜山文化晚期	1.23 (以上) × 2.19	立垣	楕円形	0.9×1.23 (以上)	?	2	○	×	×	忻州考古隊	1989
分岐	鮑家堂	河南省安陽市	Y1	仰韶文化	1.3×?	?	円形	1.3	○	2	○	×	×	中国社会科学院考古研究所安陽工作队	1988
分岐	林山砦	河南省鄭州市	陶窯	仰韶文化晚期?	1.1×1.9	?	楕円形	0.70×1.10	○	2	○	×	?	河南省文化局文物工作队第一隊	1968
分岐	廟底溝	河南省陝県	1号窯	廟底溝二期文化	0.93×1.09	立垣	円形	0.78~0.93	○	3	○	×	×	中国科学院考古研究所	1959
分岐	煤山	河南省臨汝鎮	Y1	煤山類型一期文化(河南竜山文化文化晚期)	0.84×1.48	立垣	楕円形	0.84×0.96	?	2	○	×	?	中国社会科学院考古研究所河南二隊	1982
分岐	煤山	河南省臨汝鎮	Y2	煤山類型一期文化(河南竜山文化文化晚期)	1.34×1.7 (以上)	立垣	円形	1.34	○	2	○	×	?	中国社会科学院考古研究所河南二隊	1982
分岐	煤山	河南省臨汝鎮	Y3	煤山類型一期文化(河南竜山文化文化晚期)	0.32 (以上) × 1.0 (以上)	立垣	?	?	○	2	○	×	?	中国社会科学院考古研究所河南二隊	1982
分岐	下王岡	河南省浙川県	Y4	竜山文化	1.06 (以上) × 2.08	?	?	1.06×?	○	2	○	×	?	河南省文物研究所長江流域規劃辦公室考古隊河南分隊	1989
分岐	灤溝	河北省邯鄲県	第七号窯	竜山文化	?	?	?	?	?	2	○	×	×	河北省文化局文物工作队	1961
分岐	大汶口	山東省泰安市、寧陽県	陶窯	大汶口文化	2.02×3.81	平垣	円形	1.93~2.02	○	3	○	×	?	山東省文物管理処	1974
平行	胡李家	青海省民和县	Y2	青海廟底溝時期	0.9×1.1 (以上)	平垣	方形	0.9×1.0 (以上)	?	3	×	×	×	中国社会科学院考古研究所甘青工作队ほか	2001

第18表 陶窯一覽(5) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	形状	部 幅×長 (m)	窯 罫	成 部 主火道	部 分岐	細 部 窯柱	通煙孔	文 献
平行	柳子鎮	陝西省華縣	崆山窯址	崆山文化	?	平坦	円形	?	?	3	×	×	?	黄河水庫考古隊華縣隊 1959
平行	双庵	陝西省岐山縣	Y1	崆山文化	?	平坦	隅丸方形	0.80×1.03	?	3	×	×	?	西安半坡博物館 1983
平行	屈茹王	河南省鄭州市	姚廟窯	崆山文化	?	平坦	隅丸方形	?	?	2	×	×	?	河南省文化局文物工作隊 1958
平行	三里橋	河南省陝縣	Y4	崆山文化	1.3×2.28	平坦	隅丸方形	1.3×1.2	?	4	×	×	×	中国科学院考古研究所 1959
平行	八里庄	河南省安陽縣	陶窯	后崗崆山文化	1.3×1.62	平坦	馬蹄形	1.3×?	?	5	×	×	?	安陽地区文管會 1980
平行	瀾溝	河北省邯鄲縣	第一号窯	崆山文化	0.7×?	平坦	長円形	0.7×0.9	?	2	×	×	×	河北省文化局文物工作隊 1961
接柱	上泉北村 村東	陝西省長安縣	Y3	西周代	0.8	平坦	円形	0.8	○ (4)	×	×	1	×	鄭洪泰ほか 1986
接柱	埧曲故城	山西省埧曲縣	Y3	二里崗下層文化	1.60×1.88	平坦	円形	1.6	○ (37)	×	×	1	×	中国歴史博物館考古部ほか 1997a
接柱	埧曲商城	山西省埧曲縣	Y6	二里崗上層文化	1.30×1.60 (以上)	平坦	楕円形	0.9×1.30	○ (20以上)	×	×	1	×	中国歴史博物館考古部ほか 1997b
接柱	洛達廟	河南省鄭州市	Y1	洛達廟二期(夏晚期)	1.16×1.62	平坦	方形	1.16×1.12	○ (2以上)	×	×	1	×	河南省文物研究所 1989
接柱	洛達廟	河南省鄭州市	Y13	洛達廟二期(夏晚期)	1.2×1.54	平坦	円形	1.14~1.2	○ 多	×	×	1	×	河南省文物研究所 1989
接柱	銘功路	河南省鄭州市	陶窯	二里崗期	?	?	方形	?	?	×	×	1	×	河南省文化局文物工作隊第一隊 1957
接柱	銘功路	河南省鄭州市	Y110	二里崗期中層	1.12×1.03	平坦	円形	1.12	○ (5以上)	×	×	1	?	河南省文物研究所 1991
接柱	銘功路	河南省鄭州市	Y111	二里崗期上層	1.01×1.20	平坦	円形	1.02	?	×	×	1	×	河南省文物研究所 1991
接柱	洛達廟	河南省鄭州市	窯址	商代早期	1.2×1.4 (以上)	平坦	方形	1.2×1.4	○	×	×	1	×	馬全ほか 1957
接柱	鄭州市 人民公園	河南省鄭州市	一号窯	商代	1.2×1.2 (以上)	?	円形	1.2	?	×	×	1	×	河南文物工作隊第一隊 1955
接柱	下七垣	河南省磁縣	Y4	下七垣第一層(商代晚期)	1.16×1.4	平坦	楕円形	1.16~1.39	○ (11以上)	×	×	1	×	河北省文物管理處 1979
接柱	姚關上	山東省濰坊市	窯址	周代	1.05×2.2 (以上)	平坦	円形	1.05	?	×	×	1	×	山東省文物考古研究所ほか 1981
接柱	李家壩	四川省重慶市	Y2	春秋晚期~戰国中期	1.35×2.4	?	楕円形	0.7×0.75 (以上)	?	×	×	2	×	四川大学歷史文化學院ほか 2004
接柱	高砂青	湖南省望城縣	AY1	高砂青遺跡第二期(西周中期)	1.1×1.2 (以上)	傾斜	不整形	1.1×1.2 (以上)	?	×	×	1	×	湖南省文物考古研究所ほか 2001

第19表 陶窯一覽(6) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	焼成形状	部幅×長 (m)	口径	主火道	成部	細部	文獻
離複柱	西陵山	内モンゴ 自治区 敖漢旗	Y3	紅山文化 (仰韶文化后崑崙 類型~廟底溝類型)	1.1×1.97	平基	方形	1.1×1.25	?	×	×	×	遼寧省博物館ほか、1977
離複柱	半坡	陝西省 西安市	第1号 陶窯	仰韶文化半坡類型	1×1.5	平坦?	扁方形	1×?	?	×	×	?	中国科学院考古研究所ほか、1963
離単柱	普渡村	陝西省 長安県	Y1	西周晩期	1.87×1.93	平基	円形	1.86~1.93	○ (7)	×	×	×	中国科学院考古研究所西漢編 隊、1986
離単柱	上泉北村 村東	陝西省 長安県	Y4	西周代	1.74	平基	円形	1.74	○ (14)	×	×	×	鄭洪春ほか、1986
離単柱	上泉北村 村東	陝西省 長安県	Y5	西周代	1.43	平基	円形	1.43	○ (8)	×	×	×	鄭洪春ほか、1986
離単柱	望馬屯	河南省	Y1	望馬屯第三期文化 (滎山 文化晩期)	0.6×1.7	?	方形	0.6×0.9	?	×	×	×	河南省文物研究所ほか、1987
離単柱	高樓庄	鄭州市	陶窯	殷代	2.0×2.58	?	方形	?	○	×	×	×	周到ほか、1963
離単柱	阜城村	河南省 安陽市	Y1	戰国時代	1.77×2.5	?	不整円形	1.77×2.5	?	×	×	×	安陽市文物工作队、1997
離単柱	阜城村	河南省 安陽市	Y2 (前期)	戰国時代	?	平基	馬蹄形	?	×	×	×	×	安陽市文物工作队、1997
離単柱	大坡墩	安徽省 含山県	Y1	大城墩第四期 (鄆州二里 崗上層殷墟一期文化)	1.2×1.35	平基	長方形	1.0×1.2	○	×	×	×	安徽省文物考古研究所ほか、1989
無柱	半坡	陝西省 西安市	第2号 陶窯	仰韶文化半坡類型	2.06×2.24	?	円形	?	○ (1)	×	×	×	中国科学院考古研究所ほか、1963
無柱	鄭家坂	陝西省 武功県	Y1	鄭家坡遺址早期 (二里頭 文化晩期至二里頭下層)	1.62×2.66	平基	円形	1.62	○ (6)	×	×	×	中国科学院考古研究所ほか、1963
無柱	青沙村	陝西省 鞏義	Y1	南沙村上層 (二里頭三層)	1.17×1.6	平基	円形	1.17	○ (10)	×	×	×	宝鶏市考古工作队、1984
無柱	岸底村	陝西省 武功県	Y4	岸底村早期 (殷墟文化一 期)	1.91×1.97	平基	椅円形	1.74×2.16	○ (8)	×	×	×	北京大学考古教研室集果報告編号組 1980
無柱	岸底村	陝西省 武功県	Y5	岸底村早期 (殷墟文化一 期)	1.34×1.96	平基	円形	1.34	○ (5)	×	×	×	陝西省考古研究所、1993
無柱	岸底村	陝西省 武功県	Y3	岸底村晩期 (殷墟文化一 期)	1.82×2.00	平基	椅円形	1.82×2.00	○ (3以上)	×	×	×	陝西省考古研究所、1993
無柱	北馬	陝西省 武功県	-号陶窯	西周代	2.19×2.5	平基	円形	1.35	○ (5)	×	×	×	扶風県博物館、1981
無柱	洛水村 (西把)	陝西省 長安県	Y5	西周晩期代	1.07×1.67	平基	円形	1.07	○ (4以上)	×	×	×	中国科学院考古研究所意誠考古隊 1963
無柱	清四庄	陝西省 武功県	Y2	西周代	1.76×1.6	平基	円形	1.17	○ (6)	×	×	×	中国科学院考古研究所、1988
無柱	上泉北村 村東	陝西省 長安県	Y1	西周代	1.44	平基	円形	1.44	○ (4以上)	×	×	×	鄭洪春ほか、1986

第20表 陶窯一覽(7) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長(m)	燒		傾斜	形状	幅×長(m)	燒 算	成 部 主火道	部 分岐	細 部 窯柱	文 獻
						傾斜	形状								
無柱	上泉北村	陝西省 長安縣	Y2	西周代	10.7	10.7	立垣	円形	10.7	○ (4以上)	×	×	×	×	鄭洪春ほか、1986
無柱	村東	山西省	Y501	東下馮第三期(二里頭期)	1.62×1.95	1.70×1.80	立垣	楕円形	1.70×1.80	○ (11)	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所ほか、1988
無柱	東下馮	山西省 夏縣	Y502	東下馮第三期(二里頭期)	1.9×1.87	1.90	立垣	円形	1.90	○ (38以上)	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所ほか、1988
無柱	東下馮	山西省 夏縣	Y503	東下馮第三期(二里頭期)	1.2×1.62	1.20×1.05(以上)	立垣	楕円形	1.20×1.05(以上)	○ (9以上)	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所ほか、1988
無柱	東下馮	山西省 夏縣	Y504	東下馮第三期(二里頭期)	1.7×1.6	1.50×1.70	立垣	楕円形	1.50×1.70	○ (22)	×	×	×	×	中国社会科学院考古研究所ほか、1988
無柱	小神	山西省	Y3	二里頭文化	1.10×1.45	1.10	立垣	円形	1.10	円 (9)	×	×	×	×	山西省考古研究所晋東南工作站、1996
無柱	小屯南地	長治縣	Y1	商早期	1.07×2.11	1.07(以上) ×1.00(以上)	?	?	?	○ (5以上)	×	×	×	?	中国科学院考古研究所安陽工作隊、1975
無柱	陳庄	河南省 安陽市	窯一	商代晚期	1.3×?	1.3	?	円形	1.3	○ (4以上)	×	×	×	?	鄭州市博物館、1986
無柱	碧沙崗	河南省 鄭州市	C20E8	商代末期?	?	?	平垣	円形	?	○ (5)	×	×	×	×	馬全ほか、1957
無柱	鄭州商城	河南省 鄭州市	Y2	商代	1.0×1.3	1.0	平垣	円形	1.0	○ (21)	×	×	×	?	河南文物考古研究所、2000
無柱	孟庄	河南省 柘城縣	窯址 (H29)	商代	1.08×1.35(以上)	1.14	平垣	円形	1.14	○ (4以上)	×	×	×	?	中国社会科学院考古研究所河南一隊 ほか、1982
無柱	漣水東岸	河南省 洛陽市	Y1	西周代	1.18×1.28	1.18~1.28	平垣	円形	1.18~1.28	○ (7)	×	×	×	×	洛陽市第一文物工作隊、1988
無柱	東周王城	河南省 洛陽市	Y5	東周代	0.94×?	0.94×?	曲	楕円形	0.94×?	○ (4?)	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊、1983a
無柱	北羊台	河北省 邯鄲市	Y1	漢河聖先商文化系統	1.08×1.49	1.08~1.13	平垣	円形	1.08~1.13	○ (7)	×	×	×	×	河北省文物研究所ほか、2001
無柱	下七垣	河北省 磁縣	Y1	下七垣第三層(商早期)	?	1.70	平垣	?	1.70	○ (8)	?	?	?	?	河北省文物管理處、1979
無柱	下七垣	河北省 磁縣	Y2	下七垣第三層(商早期)	0.8×0.8	0.8	平垣	円形	0.8	○ (6)	×	×	×	×	河北省文物管理處、1979
無柱	古冶	河北省 唐山市	Y1	商代	1.5×1.5	1.50	平垣	円形	1.50	○ (7)	×	×	×	×	河北省文物研究所、1981
無柱	古冶	河北省 唐山市	Y2	商代	1.12×0.8(以上)	1.20	平垣	方形?	1.20	○ (4以上)	×	×	×	×	河北省文物研究所、1984
無柱	王府	山東省 濟南縣	Y1	西周中期	1.4×1.5	1.50	立垣	円形	1.50	○ (6)	×	×	×	×	山東省文物考古研究所、2000
無柱	王府	山東省 濟南縣	Y2	西周中期	1.16×1.48	1.48	立垣	円形	1.48	○ (12)	×	×	×	×	山東省文物考古研究所、2000
無柱	西吳寺	山東省 堯門縣	Y1	周代	1.55×1.59	1.55~1.59	立垣	円形	1.55~1.59	○ (8以上)	×	×	×	×	匡家文物局考古領隊培訓班、1990

第21表 陶窯一覽(8) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	形状	幅×長 (m)	窯	主火道	分岐	細部	窯柱	通煙孔	文獻
無柱	趙鋪	山東省青州市	Y2	商代	2.8×2.8	?	?	?	○(1)	×	×	×	×	×	青州市博物館 夏名采 1989
無柱	下湾	湖南省辰溪縣	陶窯	商周代	?	平坦	円形	1.28	○(1?)	×	×	×	×	×	曾志鴻 1987
無柱	水口	広東省平遠縣	一号窯	西周晚期	1.46×1.7 (以上)	平坦	橢円形	1.30×1.86	○(3)	×	×	×	×	×	広東省博物館 1983
無柱	水口	広東省平遠縣	三号窯	西周晚期	1.64×2.1	平坦	円形	1.64	○(8以上)	×	×	×	×	×	広東省博物館 1983
無柱	水口	広東省平遠縣	四号窯	西周晚期	1.80×1.92 (以上)	平坦	橢円形	1.50×1.80	○(10以上)	×	×	×	×	×	広東省博物館 1983
半竈	垣曲故城東関	山西省垣曲縣	Y1	東周代	0.9×1.5	平坦	橢円形	0.9×1.5	○(14以上)	×	×	×	×	1	中国歴史博物館考古部 2001
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y5	戰国早期或稍早前段	2.4×2.1	平斜	橢円形	2.4×2.1	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y7	戰国早期或稍早前段	2.4×2.2	平斜	橢円形	2.3×2.2	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y13	戰国早期或稍早前段	2.5×2.2	平斜	橢円形	2.3×2.2	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y16	戰国早期或稍早前段	2.3×2.2	平斜	隅丸方形	2.3×2.2	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y17	戰国早期或稍早前段	2.4×1.9	平斜	三角形	2.4×1.9	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y6	戰国早期或稍早中后段	2.1	平斜	円形	2.1	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y14	戰国早期或稍早中后段	2.8	平斜	円形	2.8	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y15	戰国早期或稍早中后段	1.8×2.1	平斜	隅丸方形	1.8×2.1	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y3	戰国中期	2.5	平斜	半円形	2.5×0.8	○	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	H463	戰国晚期	2.6×2.65	段	三日月形	2.6×1.8	○	×	×	×	×	?	中国社会科学院考古研究所 1989
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	H415	戰国晚期	2.12×3.38	平坦	三日月形	2.12×2.00	×	×	×	×	×	1	中国社会科学院考古研究所 1989
半竈	洛陽東周王城	河南省洛陽市	Y4	東周代	1.80×2.10	段	円形	1.80	○	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 1983a
無孔平	趙家台	陝西省岐山縣	Y1	西周早期	2.4×2.4	平坦	円形	2.4	×	×	×	×	×	×	陝西省考古研究所宝鶏工作站ほか 1994
無孔平	北窯	河南省洛陽市	2号窯	西周前期	1.62×1.47	平坦	長方形	1.62×1.26	×	×	×	×	×	×	洛陽市文物工作隊 1983b
無孔平	阜塚村	河南省安陽縣	Y2 (後期)	戰国時代	1.55×2.97	平坦	馬蹄形	1.55×1.95	×	×	×	×	×	×	安陽市文物工作隊 1997

第22表 陶窯一覽(9) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長(m)	傾斜	形状	部 幅×長(m)	燒 毎	成 部 主火道	部 分岐	細 部 窯柱	通 煙孔	文 献
無孔平	阜城村	河南省 安陽県	Y2 (中期)	戦国時代	?	平坦	?	?	×	×	×	×	×	安陽市文物工作队 1997
無孔平	東先賢	河北省 邢台県	Y2	西周早期	1.8×4.15	平坦	円形	1.8~2.27	×	×	×	×	×	湖北省文物研究所 2002
無孔平	龍湾	湖北省 潜江市	窯址	東周代	2.8×3.78	平坦	馬蹄形	2.8×2.7	×	×	×	×	×	羅正松 1997
単孔平	潘西庄	陕西省 武功県	Y6	西周代	1.56×2.05	斜	隅丸方形	1.56×1.48	×	1	×	×	1	中国社会科学院考古研究所 1988
単孔平	潘西庄	陕西省 武功県	Y7	西周代	1.53×1.65	平坦	隅丸方形	1.53×1.65	×	1	×	×	1	中国社会科学院考古研究所 1988
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T1E1	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	2.9×3.7	?	馬蹄形	2.9×2.7	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T1E2	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	2.8×3.6	?	馬蹄形	2.8×2.7	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T2E3	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	2.5×3.4	?	近馬蹄形	2.5×2.7	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T2E6	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	3.0×4.0	平坦	馬蹄形	3.0×3.2	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T2E8	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	2.9×3.6	?	近馬蹄形	2.9×2.8	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	油王村	陕西省 臨潼県	T3E7	秦昭襄王至秦統一 (前306~221年)	3.0×3.5	平坦	馬蹄形	3.0×2.8	×	×	×	×	1	陕西省考古研究所秦陵工作队ほか 1995
単孔平	咸陽故城	陕西省 咸陽市	4号窯	秦代	1.85×3.13	平坦	長方形	1.85×2.25	×	×	×	×	1	陕西省博物館ほか 1974
単孔平	咸陽故城	陕西省 咸陽市	Y11	秦~漢代	3.39×3.30	平坦	馬蹄形	3.39×2.56	×	×	×	×	1	秦都咸陽考古工作站 1986
単孔平	漢長安城	陕西省 咸陽市	Y47	前漢代	1.66?×1.47	平坦	長方形	1.66?×2.00	×	×	×	×	1	劉振東 2002
単孔平	漢長安 (磚瓦窯址)	陕西省 咸陽市	Y33	前漢初~前漢中期	2.9×3.6	平坦	馬蹄形	2.9×2.6	×	×	×	×	1	中国社会科学院考古研究所漢城工作队 1996
単孔平	漢長安 (磚瓦窯址)	陕西省 咸陽市	Y38	前漢初~前漢中期	2.62×3.28	平坦	馬蹄形	2.62×3.08	×	×	×	×	1	中国社会科学院考古研究所漢城工作队 1996
単孔平	漢長安 (磚瓦窯址)	陕西省 咸陽市	Y40	前漢初~前漢中期	2.68×3.64	平坦	馬蹄形	2.68×2.68	×	×	×	×	1	中国社会科学院考古研究所漢城工作队 1996
単孔平	埧曲故城 東関	山西省 垣曲県	Y2	東周代	2.05×2.15	平坦	長方形	2.05×1.82	×	多	×	×	1	中国歴史博物館考古部ほか 2001
単孔平	三門峡	河南省 三門峡市	陶窯	春秋早期	2.1×2.0	平坦	長方形	2.1×1.82	×	×	×	×	1	景通 懸宇 1989
単孔平	洛陽東関 王城	河南省 洛陽市	Y2	戦国中期	2.5	平坦	半円形	2.4×0.9	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作队 2003
単孔平	洛陽東関 王城	河南省 洛陽市	Y11	戦国中期	2.4	平坦	半円形	2.4×0.9	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作队 2003



第23表 陶窯一覽(10) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長(m)	傾斜	焼成形状	部幅×長(m)	窯	成主火道	部	窯柱	通煙孔	文獻
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y12	戰国中期	2.6	平埀	?	2.5×?	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y14 (磚窯)	戰国中・晚期	2.18×3.15	平埀	馬蹄形	2.18×2.08	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 1983a
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	H137	戰国晚期	2.8×3.3 (以上)	平埀	二H形	2.8×1.9	×	×	×	×	1	中国社会科学院考古研究所 1989
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y1	戰国晚期	1.8×2.7	平埀	半円形	1.7×1.2	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y4	戰国晚期	2.1×2.4	平埀	半円形	2.1×1.5	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y8	戰国晚期	1.6×2.3	平埀	半円形	1.7×1.4	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y8	戰国晚期	2.39×2.93	平埀	円形	2.39×1.79	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2004
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y10	戰国晚期	2.5×3.2	平埀	半円形	2.5×2.0	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y18	戰国晚期	2.5×3.0	平埀	半円形	2.5×1.7	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 2003
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y3	戰国時代	1.9×2.9	平埀	馬蹄形	1.9×1.7	×	×	×	×	1	安陽市文物工作隊 1997
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y1	東周代	1.5×2.06	平埀	馬蹄形	1.5×1.4	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 1995
単孔平土窯	李家窯	河南省洛陽市	Y1	周代	1.2×1.79	平埀	近長方形	1.2×0.90	×	×	×	×	1	三門峽市文物工作隊 1993
単孔平土窯	李家窯	河南省洛陽市	Y1	周代	1.6×1.54	平埀	三H形	1.6×1.31	×	×	×	×	1	三門峽市文物工作隊 1993
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	東2号窯	秦漢代之際	2.35×3.4	平埀	馬蹄形	2.35×2.30	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 1983a
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y12 (瓦窯)	前漢前期	2.42×4.03	平埀	馬蹄形	2.42×2.48	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 1983a
単孔平土窯	洛陽東周土窯	河南省洛陽市	Y11	前漢前期	2.10×2.67	平埀	長方形	2.10×2.65	×	×	×	×	1	洛陽市文物工作隊 1983a
単孔平土窯	前郭柳村	河南省新鄉市	2号窯	後漢代	1.78×2.12	?	台形	1.40~1.78×1.40	×	×	×	×	1	新鄉市文管会 1989
単孔平土窯	五里店村	河南省密县	Y2	漢代	2.65×4.32	平埀	方形	2.65×2.63	×	×	×	×	1	鄭州文物工作隊 1992
単孔平土窯	后里	山東省蒙陰县	Y1	漢代	1.95×2.95	平埀	馬蹄形	1.95×1.3	×	×	×	×	1	山東省文物考古研究所ほか, 2000
単孔平土窯	紀南城	湖北省江陵县	河Ⅱ1号窯	春秋中期以降	1.8×2.66	平埀	馬蹄形	1.8×1.61	×	×	×	×	1	湖北省博物館 1982
単孔平土窯	紀南城	湖北省江陵县	松柏范家坑	春秋中期以降	2.0×4.0	平埀	長方形	2.0×3.2	×	×	×	×	1	湖北省博物館 1982

第24表 陶窯一覽 (11) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	形状	部 幅×長 (m)	燒 算	成 部 主火道	細 部 窯柱	文 献
单孔平	紀南城新橋	湖北省 江陵县	Y4	戰國中期晚段至戰國中晚 期之際	2.34×3.79	平坦	馬蹄形	2.34×2.90	×	×	×	湖北省文物考古研究所 1995
单孔平	紀南城新橋	湖北省 江陵县	Y1	戰國中期晚段至戰國中晚 期之際	2.06×3.24	平坦	馬蹄形	2.06×2.17	×	×	×	湖北省文物考古研究所 1995
单孔平	新橋村	湖北省 荆門市	陶窯	戰國代	2.07×3.70	平坦	馬蹄形	2.07×2.39	×	×	×	荆沙鐵路考古隊 1992
单孔平	紀南城	湖北省 江陵县	Y2	東周代	3.64×5.13	平坦	馬蹄形	3.64×3.81	×	×	×	湖北省文物考古研究所 1991
单孔平	毛家山	湖北省 江陵县	陶窯	東周代	1.22×1.5	平坦	馬蹄形 (?)	1.22×0.96	×	×	×	紀南城文物考古發掘隊 1977
单孔平	三家沱	湖北省 宜昌县	93YSY1	前漢代	?	平坦	馬蹄形	?	×	×	×	三峡考古隊 1994
復孔平	早湖瑞	甘肅省 安西県	Y1	曹魏早期	2.8×3.96	平坦	方形	2.48~2.8×2.96	×	×	×	甘肅省文物考古研究所 2004
復孔平	秦始皇陵園 周厠	陝西省 臨潼県	82FY1	秦代	2.5×3.72	平坦	長方形	2.5×2.25	×	×	×	秦備考古隊 1985
復孔平	秦始皇陵園 周厠	陝西省 臨潼県	73趙Y14	秦代	3.92×2.94	平坦	台形	1.6~3.92×1.96	×	×	×	秦備考古隊 1985
復孔平	坡頭村	陝西省 澄城県	2号陶窯	漢武帝到昭帝時期	2.70×3.9	平坦	長方形	2.70×2.60	×	×	×	陝西省文管會ほか 1982
復孔平	坡頭村	陝西省 澄城県	3号陶窯	漢武帝到昭帝時期	2.72×4.47	平坦	長方形	2.72×2.85	×	×	×	陝西省文管會ほか 1982
復孔平	坡頭村	陝西省 澄城県	4号陶窯	漢武帝到昭帝時期	3.08×4.90	平坦	長方形	2.9~3.08×3.27	×	×	×	陝西省文管會ほか 1982
復孔平	漢長安 (磚瓦窯址)	陝西省 西安市	Y36	前漢初~前漢中期	2.9×3.6	平坦	馬蹄形	2.9×2.6	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城工作 隊 1996
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y8	景帝末年或武帝初年 ~前漢末年	1.84×3.24	平坦	長方形	1.66~1.84×2.16	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y11	景帝末年或武帝初年 ~前漢末年	1.96×3.65	平坦	長方形	1.88~1.96×2.2	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y21	景帝末年或武帝初年 ~前漢末年	1.71×3.68	平坦	長方形	1.66~1.71×2.12	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y22	景帝末年或武帝初年 ~前漢末年	1.8×3.78	平坦	長方形	1.7~1.8×2.15	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y4	前漢晚期偏早	1.7×4.47	平坦	長方形	1.7×2.2	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y8	前漢晚期偏早	1.84×3.27	平坦	長方形	1.66~1.84×2.3	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城隊 1994
復孔平	關家寺村	陝西省 西安市	2号窯	前漢較晚期	2.38×2.84	平坦	長方形	2.38×2.10	×	×	×	唐金裕 1994
復孔平	漢長安城	陝西省 西安市	Y23	前漢代	2.38×4.06	平坦	長方形	2.38×?	×	×	×	中国社会科学院考古研究所漢城工作 隊 1994

第25表 陶窯一覽(12) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長(m)	傾斜	形状	幅×長(m)	毎	焼	主火道	分岐	窯柱	通煙孔	文献
複孔平	漢長安城	陕西省 西安市	Y27	前漢代	2.44×4.06	平坦	長方形	2.34~2.44×2.87	×	×	×	×	×	3	中国社会科学院考古研究所漢城工作队 1994
複孔平	漢長安城	陕西省 西安市	Y45	前漢代	2.8×4.52	平坦	長方形	2.8×3.3	×	×	×	×	×	3	劉振東 2002
複孔平	東干道	河南省 新鄉市	陶窯	前漢中期	2.22×6.68	平坦	長方形	2.22×2.88	×	×	×	×	×	6	賀惠陸 1994
複孔平	函谷關	河南省 洛陽市	99XIAY1	前漢中晚期(永始二年銘 磚)	2.36×2.65	平坦	長方形	2.56×?	×	×	×	×	×	3	洛陽市第二文物工作隊 1983
複孔平	瓦房庄	河南省 南陽市	Y29	前漢代	1.1×1.77	平坦	長方形	1.1×1.25	×	×	×	×	×	3	河南省文物研究所 1994
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y7	前漢早・中期	1.66×2.66	平坦	方形	1.66×1.53	×	×	×	×	×	2	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y3	前漢晚期~後漢	?	平坦	長方形	2.1×2.9(以上)	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y5	前漢晚期~後漢	2.39×3.79	平坦	馬蹄形	2.39×2.53	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y6	前漢晚期~後漢	2.13×3.06(以上)	平坦	長方形	2.13×2.33	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y1	後漢晚期	2.26×3.86	平坦	長方形	2.26×2.39	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	洛陽東周 王城	河南省 洛陽市	Y4	後漢晚期	1.6×2.93	平坦	長方形	1.6×1.86	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 2004
複孔平	漢魏 洛陽城	河南省 洛陽市	T2Y1	後漢早期	2.7×3.38	平坦	長方形	2.7×2.44	×	×	×	×	×	3	中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏 城隊 1997
複孔平	洛陽市東郊 (磚瓦窯)	河南省 洛陽市	Y1	後漢末年	2.9×4.54	平坦	方形	2.9×2.8	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 1985
複孔平	洛陽市東郊 (磚瓦窯)	河南省 洛陽市	Y2	後漢末年	2.9×5.11	平坦	方形	2.9×3.00	×	×	×	×	×	3	洛陽市文物工作隊 1985
複孔平	瓦房庄	河南省 南陽市	Y14	後漢代	2.4×4.05	平坦	長方形	2.4×2.6	×	×	×	×	×	3	河南省文物研究所 1994
複孔平	瓦房庄	河南省 南陽市	Y23	後漢代	1.81×2.96	平坦	長方形	1.87×2.15	×	×	×	×	×	3	河南省文物研究所 1994
複孔平	前郭柳村	河南省 南陽市	1号窯	後漢代	2.54×3.78	平坦	長方形	2.44~2.54×2.7	×	×	×	×	×	4	新鄉市文管會 1989
複孔平	前郭柳村	河南省 新鄉市	3号窯	後漢代	2.00×3.24	平坦	正方形	2.0×2.0	×	×	×	×	×	3	新鄉市文管會 1989
複孔平	蔡匡古城	河南省 上蔡縣	Y2	漢代以降?	2.3×3.87	平坦	長方形	2.3×2.68	×	×	×	×	×	3	河南省文物研究所 1990a
複孔平	謝家埠	山東省 昌樂縣	Y1	前漢代	1.89×3.38	平坦	方形	1.89×1.88	×	×	×	×	×	5	濰坊市文物管理委員會辦公室ほか 2005
複孔平	匡家廟	四川省 武勝縣	二号窯 (磚)	前漢晚期或後漢初期	2.00×4.22	平坦	長方形	1.92~2.00×1.90	×	×	×	×	×	3	重慶市博物館ほか 1980

第26表 陶窯一覽 (13) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長 (m)	傾斜	焼成形状	部幅×長 (m)	焼成部	主火道	分岐	窯柱	細部	通煙孔	文献
複孔平	鄧城韓崗	湖北省襄陽縣	Y1	秦漢之際～前漢前期	1.8×3.79	平坦	長方形	1.8×2.15	×	×	×	×	×	3	湖北省文物考古研究所 2002a
複孔平	柴店崗	湖北省老河口市	Y1	前漢中期～晚期	1.71×2.89	平坦	長方形	1.76×2.18	×	×	×	×	×	3	老河口市博物館 2004
複孔平	何家坪	湖北省秭歸縣	Y1第2層	漢代	1.70×?	平坦	長方形?	1.7×0.99 (以上)	×	×	×	×	×	3	湖北省文物考古研究所 2002b
複孔平	何家坪	湖北省秭歸縣	Y1第1層	漢代	1.80×?	平坦	長方形?	1.8×0.97 (以上)	×	×	×	×	×	3	湖北省文物考古研究所 2002b
複孔平	竹条	湖北省襄陽縣	Y1	漢代	2.32×3.13	平坦	長方形	2.32×1.63	×	×	×	×	×	3	湖北省文物考古研究所 2000
複孔平	武隆路西	河南省常德市	Y1 (轉)	漢代	2.6×4.57	平坦	長方形	2.6×2.74	×	×	×	×	×	3	常德市博物館 1998
複孔平	城村	福建省武夷山市	Y1	前漢代 (前202年～110年)	1.85×0.68 (以上)	平坦	方形	1.85×0.68 (以上)	×	×	×	×	×	2	福建博物院ほか 2003
複孔平	城村	福建省武夷山市	Y2	前漢代 (前202年～110年)	2×0.7 (以上)	平坦	方形	2×0.7 (以上)	×	×	×	×	×	2	福建博物院ほか 2003
複孔平	城村	福建省武夷山市	Y4	前漢代 (前202年～110年)	2.2×5.2	平坦	方形	2～2.2×2.3	×	×	×	×	×	1以上	福建博物院ほか 2003
複孔平	洪渡	貴州省貴陽市	2号窯	後漢代	2.16×3.2	平坦	正方形	2.16×2.18	×	×	×	×	×	3	貴州省博物館考古隊 1993
凹形	東庄村	河南省芮城縣	Y202	仰韶文化	1.06×1.8 (以上)	平坦	橢圓形	1.05～1.2	×	×	×	×	×	×	中国科学院考古所山西工作队 1973
凹形	裴李崗	河南省新鄭縣	T31陶窯	裴李崗文化	0.96×1.76	?	凹形	0.96	×	×	×	×	×	×	李家治ほか 1996
凹形	下王岡	河南省浙川縣	Y1	仰韶文化二期 (仰韶文化下層に近い)	0.67×1.72	平坦	凹形	0.69	×	×	×	×	×	×	河南省文物研究所江流域規劃辦公室考古隊河南分隊 1989
凹形	下王岡	河南省浙川縣	Y3	仰韶文化二期 (仰韶文化中期半坡遺址 (仰韶文化下層に近い))	0.56×1.72 (以上)	平坦	凹形	0.56	×	×	×	×	×	×	河南省文物研究所江流域規劃辦公室考古隊河南分隊 1989
凹形	孫村	河南省伊川縣	Y1	仰韶文化	?	?	凹形	?	×	×	×	×	?	?	河南省文物考古研究所 1998
凹形	三里橋	河南省陝縣	301号窯	仰韶文化	2.1×1.17 (以上)	斜	橢圓形	2.1～2.24	×	×	×	×	×	×	中国科学院考古研究所 1959
凹形	臺石山	福建省閩侯縣	Y3	仰韶文化に近い	0.75×1.45	斜	凹形	0.75	×	×	×	×	×	×	福建省博物館 1983
凹形	臺石山	福建省閩侯縣	Y5	仰韶文化に近い	0.8×1.83 (以上)	15°	凹形	0.7～0.8	×	×	×	×	×	×	福建省博物館 1983
凹形	陳家園沙丘	香港元朗慶鄉	Y1	青銅器文化早期	1.08×4.9	平坦	橢圓形	1.08×1.84	×	×	×	×	×	×	区家亮ほか 2002
窖窯	礼州	四川省西昌縣	BY1	商代? (戰国以前)	0.5×3.3	?	長方形	0.42×1.86 (以上)	×	×	×	×	×	×	礼州遺址聯合考古發掘隊 1980

第27表 陶窯一覽(14) (計測値は内法長)

型式	遺跡名	所在地	遺構名	時期	幅×全長(m)	傾斜	形状	幅×長(m)	礎	主火道	分岐	細部	通煙孔	文献
窖窯	盤龍城	湖北省 武漢市	Y1	盤龍城二期(二里頭文化三期)	2.4~4(10)×54	2° 55'	長円形	2.4~4×38.5	×	×	×	×	×	湖北省文物考古研究所 2001
窖窯	盤龍城	湖北省 武漢市	Y3	盤龍城三期(二里頭文化四期後期二里頭下層前半)	3~5.6(9)×30	4° 23'	長円形	1.7~5×17	×	×	×	×	×	湖北省文物考古研究所 2001
窖窯	吳城	江西省 清江県	吳城6号 電窯	商晚期	0.92~1.07 ×7.54(以上)	1° 54'	長方形	0.8~6.6	×	×	×	×	×	江西省吳城考古工作站 1989
窖窯	百官鎮	浙江省 上虞市	Y2	商代	1.22×3.8(以上)	16°	長方形	1.22×3.6(以上)	×	×	×	×	?	浙江省文物考古研究所 1987
窖窯	長竹園	浙江省 紹興県	Y1	戦国時代	2.42×5.1(以上)	16°	長方形	2.4×2(以上)	×	×	×	×	?	紹興県文物管理委员会 1979
窖窯	帳子山	浙江省 上虞市	1号電窯	後漢代	1.97~2.08 ×3.9(以上)	28°	長方形	1.97~2.08 ×2.7(以上)	×	×	×	×	4以上	浙江省文物考古所 朱佐謙 1984
窖窯	帳子山	浙江省 上虞市	2号電窯	後漢代	?	?	?	?	?	?	?	?	?	浙江省文物考古所 朱佐謙 1984
窖窯	小仙壩古窯	浙江省 上虞市	東漢電窯	後漢晚期	?	?	?	?	?	?	?	?	?	喻芝琴 1995
窖窯	鞍山	浙江省 上虞市	三国電窯	三国時代	0.8×13.32	13~23°	長方形	0.8×10	×	×	×	×	6	浙江省文物考古所 朱佐謙 1984
窖窯	帳子山	浙江省 上虞市	晋代電窯	晋代	2.4×3.27(以上)	10°	長方形	2.4×2.1(以上)	×	×	×	×	?	浙江省文物考古所 朱佐謙 1984
窖窯	前山	浙江省 上虞市	Y2	春秋中期	2.3~2.4×13.0	15°	長方形	2.3~2.4×11.0	×	×	×	×	?	浙江省文物考古研究所ほか 2005
窖窯	梅花嶺窯址	浙江省 杭州府	窯址	春秋晚期~戦国早期	1.05~2.9×15	12°	長方形	1.05×13.7	×	×	×	×	×	広東省文物考古研究所ほか 1988
窖窯	西瓜嶺	広東省 増城県	1号窯	戦国早期・中期	2×7.6(以上)	?	長方形	?	?	?	?	?	?	広東省文物管理委员会ほか 1961
窖窯	西瓜嶺	広東省 増城県	2号窯	戦国早期・中期	1.52×1.72(以上)	?	?	?	?	?	?	?	?	広東省文物管理委员会ほか 1961
有火道	園子溝	内モンゴ 自治区 三蘇木郷	Y3001	園子溝第三段(園子溝後期が竜山早期晩期段)	?	平坦	楕円形	1.10×1.30	○	5?	?	?	?	内モンゴ文物考古研究所 2000
有火道	園子溝	内モンゴ 自治区 三蘇木郷	Y3002	園子溝第三段(園子溝後期が竜山早期晩期段)	?	平坦	楕円形	1.50×2.10	○	5?	?	?	?	内モンゴ文物考古研究所 2001
有竈	陽瓜	甘粛省 寧県	陶窯	仰韶文化半坡類型晩期	0.92×0.57	平坦	円形	0.92	○	○	?	×	?	慶陽地区博物館 1983
有火道	大地湾	甘粛省 秦安県	F403	仰韶文化文化晩期	0.90×1.13	平坦	楕円形	0.90×0.64	○	3	?	×	×	李最雄 1988
不明	張家坡	陝西省 西安市	H110	西周代	1.45?×1.6?	?	?	?	?	?	?	?	?	中国科学院考古研究所 1963



---

引用・参考文献（五十音順）

- 安徽省文物考古研究所・含山縣文物管理所 1989「安徽含山大城墩遺址第4次發掘報告」『考古』1989年第2期
- 安陽市文物工作隊 1997「安陽縣阜城村戰國窯址發掘簡報」『華夏考古』1997年第2期
- 安陽地區文管會 1980「安陽八里庄龍山遺址發掘簡報」『河南文博通訊』1980年第2期
- 濰坊市文物管理委員會辦公室・昌樂縣文物管理所 2005「山東昌樂縣謝家埠遺址的發掘」『考古』2005年第5期
- 植野浩三 1999「初期須惠器窯の構造の特徴」『瓦衣千年』
- 王永彪・潘能艷 1997「湖南常德市東漢磚窯遺址」『考古』1997年第7期
- 賀惠陸 1994「河南新鄉市東幹道發現西漢陶窯」『考古與文物』1994年第4期
- 河南省文化局文物工作隊 1958「1957年鄭州西郊發掘記要」『考古通訊』1958年第9期
- 河南省文化局文物工作隊 1962「河南偃師湯泉溝新石器時代遺址的試掘」『考古』1962年第11期
- 河南省文物工作隊第一隊 1955「鄭州發現的商代製陶遺址」『文物參考資料』1955年第9期
- 河南省文化局文物工作第一隊 1958「鄭州西郊仰韶文化遺址發掘簡報」『考古通訊』1958年第2期
- 河南省文化局文物工作第一隊 1957「鄭州商代遺址的發掘」『考古學報』1957年第1期
- 河南省文物管理局・河南省文物考古研究所 1999『黃河小浪底水庫考古報告（1）』
- 河南省文物研究所 1989「鄭州市南倉西街兩座漢墓的發掘」『華夏考古』1989年第4期
- 河南省文物研究所 1990a「河南臨汝北劉庄遺址發掘報告」『華夏考古』1990年第2期
- 河南省文物研究所 1990b「1988年蔡國故城發掘紀略」『華夏考古』1990年第2期
- 河南省文物研究所 1991「鄭州市商代制陶遺址發掘簡報」『華夏考古』1991年第4期
- 河南省文物研究所 1994「南陽市瓦房庄漢代制陶、鑄銅遺址的發掘」『華夏考古』1994年第1期
- 河南省文物考古研究所 1998「河南省登封砬區鐵路登封伊川段古遺址調查發掘報告」『華夏考古』1998年第2期
- 河南省文物考古研究所 1999『舞陽賈湖』
- 河南省文物考古研究所 2000「河南鄭州商城宮殿區夯土壇1998年的發掘」『考古』2000年第2期
- 河南省文物研究所・長江流域規畫辦公室考古隊河南分隊 1989『浙川下王岡』
- 河南省文物研究所・文化部文物局鄭州培訓中心 1987「鄭州市站馬屯遺跡發現報告」『華夏考古』1987年第2期
- 河北省文化局文物工作隊 1961「河北邯鄲澗溝村古遺址發掘簡報」『考古』1961年第4期
- 河北省文物管理委員會 1959「河北武安縣午汲古城中的窯址」『考古』1959年第7期
- 河北省文物管理處 1979「磁縣下七垣遺址發掘報告」『考古學報』1979年第2期
- 河北省文物研究所 1984「唐山市古冶商代遺址」『考古』1984年第9期
- 河北省文物研究所 1996「西沈村村北19號居住址的勘察與發掘」『燕下都』
- 河北省文物研究所 2002「河北邢台縣東先賢遺址發掘簡報」『考古』2002年第3期
- 河北省文物研究所・邯鄲市文物管理處・峰峰砬區文物管理所 2001「河北邯鄲市峰峰砬區北羊台遺址發掘簡報」『考古』2001年第2期
- 甘肅省博物館文物工作隊 1983「甘肅秦安大地灣第九區發掘簡報」『文物』1983年第11期
- 甘肅省文物考古研究所 2004「甘肅安西旱湖瑤墓地、窯址發掘簡報」『考古與文物』2004年第4期
- 廣東省博物館 1983「廣東平遠縣西周陶窯清理簡報」『考古』1983年第7期
- 廣東省博物館・汕頭地區文管站・普寧縣博物館 1984「廣東普寧虎頭埔古窯發掘簡報」『文物』1984年第12期
- 廣東省文物管理委員會・中央美術學院美術史美術理論系 1964「廣東增城、始興的戰國遺址」『考古』1964年第3期
- 廣東省文物考古研究所・博羅縣博物館 1998「廣東博羅縣園洲梅花墩窯跡的發掘」『考古』1998年第7期
- 貴州省博物館考古隊 1993「貴州沿河洪渡漢代窯址試掘」『考古』1993年第9期
- 紀南城文物考古發掘隊 1977「江陵毛家山發掘記」『考古』第3期
- 忻州考古隊 1989「山西忻州市游邀遺址發掘簡報」『考古』1989年第4期
- 區家發・莫雅 2002「香港元朗廈村鄉陳家偃沙丘遺址的發掘」『考古學報』2002年第3期
- 荊沙鐵路考古隊 1992「荊門簡家灣墓葬和窯址發掘簡報」『江漢考古』1992年第1期

- 景通・懸宇 1989「三門峽發現春秋時期陶窯遺址」『考古』1989年第3期
- 慶陽地区博物館 1983「甘肅寧縣陽城遺址試掘簡報」『考古』1983年第10期
- 黃河水庫考古隊華縣隊 1959「陝西華縣柳子鎮考古發掘簡報」『考古』1959年第2期
- 黃河水庫考古工作隊河南分隊 1960「山西平陸新石器時代遺址復查試掘簡報」『考古』1960年第8期
- 国家文物局考古領隊培訓班 1990『兗州西吳寺』
- 湖南省博物館・岳陽地区文物工作隊・岳陽市文管所 1985「湖南岳陽費家河商代遺址和窯址的探掘」『考古』1985年第1期
- 湖南省文物考古研究所・常德市文物處・安鄉縣文物管理所 2005「湖南安鄉劃城崗遺址第二次發掘報告」『考古學報』2005年第1期
- 湖南省文物考古研究所・長沙博物館・長沙市考古研究所・望城縣文物管理所 2001「湖南望城縣高砂脊商周遺址的發掘」『考古』2001年第4期
- 湖北省荊州博物館・湖北省文物考古研究所石家河考古隊・北京大學考古學系 1999『肖家屋脊』（天門石家河考古發掘報告之一）
- 湖北省博物館 1982「楚都紀南城的勘查与發掘（下）」『考古學報』1982年第4期
- 湖北省文物考古研究所 1991「1988年楚都紀南城松柏區的勘查与發掘」『江漢考古』1991年第4期
- 湖北省文物考古研究所 1995「紀南城新橋遺址」『考古學報』1995年第4期
- 湖北省文物考古研究所 2000「襄陽竹条漢代墓葬窯址發掘」『江漢考古』2000年第1期
- 湖北省文物考古研究所 2001『盤龍城』（1963~1994年考古發掘報告）
- 湖北省文物考古研究所 2002a「湖北襄陽鄧城韓崗遺址發掘報告」『江漢考古』2002年第2期
- 湖北省文物考古研究所 2002b「湖北秭歸何家坪遺址發掘簡報」『江漢考古』2002年第3期
- 三峽考古隊 1994「宜昌三家沱遺址發掘報告」『江漢考古』1994年第1期
- 山西省考古研究所 1991「山西省襄汾縣丁村新石器時代遺址發掘簡報」『考古』1991年第10期
- 山西省考古研究所 1998「垣曲寧家坡陶窯址發掘簡報」『文物』1998年第10期
- 山西省考古研究所 1999「陶寺遺址陶窯發掘簡報」『文物季刊』1999年第2期
- 山西省考古研究所・山西大學歷史系考古專業 1991「山西侯馬東呈王新石器時代遺址」『考古』1991年第2期
- 山西省考古研究所晉東南工作站 1996「長治小常鄉小神遺址」『考古學報』1996年第1期
- 山東省文物管理處・濟南市博物館 1974『大汶口』（新石器時代墓葬發掘報告）
- 山東省文物考古研究所 2000『山東濟南王府遺址發掘報告』
- 山東省文物考古研究所・萊西市文物管理所 1997「山東萊西市下馬庄、仙格庄遺址發掘簡報」『山東省高速公路考古報告集』
- 山東省文物考古研究所・山東省博物館・中國社會科學院考古研究所山東隊・山東省昌濰地区文物管理小組 1981「山東姚官庄遺址發掘報告」『文物資料叢刊』1981年第5期
- 山東省文物考古研究所・蒙陰縣文物管理所 2000「山東蒙陰后里遺址發掘簡報」『山東省高速公路考古報告集（1997）』
- 三門峽市文物工作隊 1993「三門峽市李家窯遺址發掘簡報」『華夏考古』1993年第4期
- 四川省文物考古研究院・雅安市文物管理所・漢源縣文物管理所 2006「四川漢源大地頭新石器時代遺址」『文物』2006年第2期
- 四川大學歷史文化學院ほか 2004「重慶雲陽李家壩遺址1997年度發掘簡報」『考古』2004年第6期
- 重慶市博物館 1980「四川武勝匡家壩漢代磚窯試掘記」『考古与文物』1980年第2期
- 周到・劉東垂 1963「1957年秋安陽高樓庄殷代遺址發掘」『考古』1963年第4期
- 紹興縣文物管理委員會 1979「浙江紹興富盛戰國窯址」『考古』1979年第3期
- 常德市博物館 1998「湖南常德市區發現漢代磚窯」『江漢考古』1998年第2期
- 新鄉市文管會 1989「新鄉北站區前郭柳村漢代窯址發掘」『考古』1989年第5期
- 晉中考古隊 1989a「山西太谷白燕遺址第二、三、四地點發掘簡報」『文物』1989年第3期
- 晉中考古隊 1989b「山西汾陽孝義兩縣考古調查和杏花村遺址的發掘」『文物』1989年第4期
- 秦都咸陽考古工作站 1986「秦都咸陽古窯址調查与試掘簡報」『考古与文物』1986年第3期
- 秦俑考古隊 1985「秦代陶窯遺址調查清理簡報」『考古与文物』1985年第5期
- 西安半坡博物館 1983「陝西岐山雙庵新石器時代遺址」『考古學集刊』1983年第3集
- 西安半坡博物館 1985「陝西臨潼康家遺址第一、二次試掘簡報」『史前研究』1985-1



- 西安半坡博物館・陝西省考古研究所・臨潼縣博物館 1988『姜寨』（新石器時代遺跡發掘報告）
- 青州市博物館・夏名采 1989「青州市趙鋪遺址的清理」『海岱考古』第1輯
- 西北大學文化遺產與考古學研究中心・陝西省考古研究所・旬邑縣博物館 2006「陝西旬邑下魏洛遺址發掘簡報」『文物』2006年第9期
- 西北大學歷史系考古專業實習隊 1988「陝西扶風縣案板遺址第三、四次發掘」『考古與文物』1988年5・6期
- 関口広次 1997「龍窯について」『中国の陶磁』第4卷青磁
- 浙江省文物考古研究所 1987「浙江上虞縣商代印紋陶窯跡發掘簡報」『考古』1987年第11期
- 浙江省文物考古所・朱伯謙 1984「試論我國古代的龍窯」『文物』1984年第3期
- 浙江省文物考古研究所・蕭山博物館 2005「浙江蕭山前山窯址發掘簡報」『文物』2005年第5期
- 陝西省考古研究所 1993「陝西武功岸底先周遺址發掘簡報」1993年第3期
- 陝西省考古研究所 2002「陝西神木新華遺址1999年發掘簡報」『考古與文物』2002年第1期
- 陝西省考古研究所秦陵工作隊・臨潼縣文物工作隊 1995「秦芷陽制作坊遺址清理簡報」『考古與文物』1995年第5期
- 陝西省考古研究所・西安市臨潼區文化局 2006「陝西臨潼零口北牛遺址發掘簡報」『考古與文物』2006年第3期
- 陝西省考古研究所寶鷄工作站・寶鷄市考古工作隊 1994「陝西岐山趙家台遺址試掘簡報」『考古與文物』1994年第2期
- 陝西省考古研究所・寶鷄市考古工作隊 2006「陝西寶鷄市閔桃園遺址發掘簡報」『考古與文物』2006年第3期
- 陝西省社會科學院考古研究所涇水隊 1962「陝西郿縣下孟村仰韶文化遺址統掘簡報」『考古』1962年第6期
- 陝西省博物館・文管會勘查小組 1974「秦都咸陽故城遺址發現的窯址和銅器」『考古』1974年第1期
- 陝西省文物管理委員會 1956「鳳縣古文化遺址清理簡報」『文物參考資料』1956年第2期
- 陝西省文管會・澄城縣文化館聯合發掘隊 1982「陝西坡頭村西漢鑄錢遺址發掘簡報」『考古』1982年第1期
- 曾志鴻 1987「辰鷄縣下灣發現商周陶窯」『湖南考古輯刊』1987年第4集
- 中國科學院考古研究所 1959『廟底溝與三里橋』
- 中國科學院考古研究所 1963『澧西發掘報告』
- 中國科學院考古研究所・陝西省西安半坡博物館 1963『西安半坡』
- 中國科學院考古研究所安陽工作隊 1975「1973年小屯南地發掘簡報」『考古』1975年第1期
- 中國科學院考古研究所山西工作隊 1973「山西芮城東庄村和西王村遺址的發掘」『考古學報』1973年第1期
- 中國科學院考古研究所豐鎬考古隊 1963「1961年-62年陝西長安豐東試掘簡報」『考古』1963年第8期
- 中國社會科學院考古研究所 1983『寶鷄北首嶺』
- 中國社會科學院考古研究所 1988『武功發掘報告』（澠西庄與趙家來遺址）
- 中國社會科學院考古研究所 1989『洛陽發掘報告』
- 中國社會科學院考古研究所 1991『青龍泉與大寺』
- 中國社會科學院考古研究所安陽工作隊 1988「安陽鮑家堂仰韶文化遺址」『考古學報』1988年第2期
- 中國社會科學院考古研究所漢城工作隊 1992「漢長安城2-8號窯址發掘簡報」『考古』1992年第2期
- 中國社會科學院考古研究所漢城工作隊 1994「漢長安城23-27號窯址發掘簡報」『考古』1994年第11期
- 中國社會科學院考古研究所漢城工作隊 1996「漢長安城北宮的勘探及其南面磚瓦窯的發掘」『考古』1996年第10期
- 中國社會科學院考古研究所漢城隊 1994「漢長安城窯址發掘報告」『考古學報』1994年第1期
- 中國社會科學院考古研究所甘青工作隊・青海省文物考古研究所 2001「青海民和縣胡李家遺址的發掘」『考古』2001年第1期
- 中國社會科學院考古研究所河南一隊 1991「河南汝州中山寨遺址」『考古學報』1991年第1期
- 中國社會科學院考古研究所河南二隊 1982「河南臨汝煤山遺址發掘報告」『考古學報』1982年第4期
- 中國社會科學院考古研究所山西工作隊・山西省臨汾地區文化局 1986「陶寺遺址1983~1984年Ⅲ區居住址發掘的主要收穫」『考古』1986年第9期
- 中國社會科學院考古研究所山西隊・山西省考古研究所・臨汾市文物局 2005「山西襄汾陶寺城址2002年發掘報告」『考古學報』2005年第3期
- 中國社會科學院考古研究所・中國歷史博物館・山西省考古研究所 1988『夏縣東下馮』

- 中国社会科学院考古研究所澧西發掘隊 1986「1979-1981年長安澧西、澧東發掘簡報」『考古』1986年第3期
- 中国社会科学院考古研究所洛陽漢魏城隊 1997「漢魏洛陽城發掘的東漢燒煤瓦窯址」『考古』1997年第2期
- 中国社会科学院考古研究所河南一隊·商丘地区文物管理委員會 1982「河南柘城孟庄商代遺址」『考古學報』1982年第1期
- 中国歴史博物館考古部·山西省考古研究所 1997a「1988~1989年山西垣曲古城南閩商代城址發掘簡報」『文物』1997年第10期
- 中国歴史博物館考古部·山西省考古研究所 1997b「1991~1992年山西垣曲商城發掘簡報」『文物』1997年第12期
- 中国歴史博物館考古部·山西省考古研究所·垣曲縣博物館 2001「垣曲古城東閩」
- 趙青雲·李京華·韓汝玢·丘亮輝·柯俊 1985「鞏縣鉄生溝漢代冶鑄遺址再探討」『考古學報』1985年第2期
- 張季 1959「西双版纳傣族的制陶技術」『考古』1959年第9期
- 鄭洪春·蔣祖棣 1986「長安市澧東西周遺存的考古調查」『考古与文物』1986年第2期
- 鄭州市博物館 1986「鄭州市陳庄遺址發掘簡報」『中原文物』1986年第2期
- 鄭州市文物工作隊 1992「河南密縣新商場漢墓和陶窯的發掘」『華夏考古』1992年第2期
- 鄭州市文物工作隊·鞏義市文物管理所 1999「河南鞏義市瓦窯嘴新石器時代遺址的發掘」『考古』1999年第11期
- 唐金裕 1994「西安市北郊漢代磚瓦窯址」『考古』1994年第1期
- 東北博物館 1957「遼陽三道壕西漢村落遺址」『考古學報』1957年第1期
- 內蒙古自治區文物考古研究所·額爾多斯博物館 2000「朱開溝」(青銅時代早期遺址發掘報告)
- 內蒙古文物考古研究所 2000「岱海考古1」(老虎山文化遺跡發掘報告集)
- 內蒙古文物考古研究所·日本京都中国考古研究会 2001「岱海考古2」(中日岱海地区考察研究報告集)
- 裴明相 1991「鄭州商代二里崗期陶器制作中的幾個問題」『華夏考古』1991年第4期
- 扶風縣博物館 1984「扶風北呂周人墓地發掘簡報」『文物』1984年第7期
- 福建省博物館 1983「福建省閩侯曇石山遺址發掘新收穫」『考古』1983年第12期
- 福建博物院·福建閩越王城博物館 2003「福建武夷山市城村西漢窯址發掘簡報」『考古』2003年第12期
- 北京大學考古教研室華鼎報告編寫組 1980「華鼎、渭南古代遺址調查与試掘」『考古學報』1980年第3期
- 北京大學考古文博系南陽地区文物研究所 2000「河南鄧州八里崗遺址1998年度發掘簡報」『文物』2000年第11期
- 寶鷄市考古工作隊 1984「陝西武功鄭家坡先周遺址發掘簡報」『文物』1984年第7期
- 馬全·毛宝亮 1957「鄭州發現的幾個時期的古代窯址」『文物參考資料』1957年第10期
- 喻芝琴 1995「浙江上虞小仙壇古窯址」『南方文物』1995年第3期
- 洛陽市第一文物工作隊 1988「洛陽澗水東岸西周窯址清理簡報」『中原文物』1988年第2期
- 洛陽市第二文物工作隊 2000「黄河小浪底塩東村漢函谷關倉庫建築遺址發掘簡報」『文物』2000年第10期
- 洛陽市文物工作隊 1983a「洛陽東周王城内的古窯址」『考古与文物』1983年第3期
- 洛陽市文物工作隊 1983b「1975-1979年洛陽北窯西周鑄銅遺址的發掘」『考古』1983年第5期
- 洛陽市文物工作隊 1985「洛陽市東郊東漢“對開式”磚瓦窯清理簡報」『中原文物』1985年第4期
- 洛陽市文物工作隊 1995「洛陽東周王城遺址發現燒造坩堝古窯址」『文物』1995年第8期
- 洛陽市文物工作隊 2003「洛陽東周王城戰國陶窯遺址發掘報告」『考古學報』2003年第4期
- 洛陽市文物工作隊 2004「東周王城戰國至漢代陶窯遺址發掘簡報」『文物』2004年第7期
- 羅正松 1997「湖北潛江龍灣發現一處東周窯址」『考古』1997年第5期
- 李家治·張志剛·鄭澤群 1996「新石器時代早期陶器的研究—兼論中国陶器起源」『考古』1996年第5期
- 李恭篤·高美璿 1987「內蒙古敖漢旗四稜山紅山文化窯址」『史前研究』1987年第4期
- 李最雄 1988「世界上最古老的混凝土」『考古』1988年第8期
- 林士民 1986「浙江寧波漢代窯址的勘察」『考古』1986年第9期
- 龍雲波 1987「江西發見商代窰」『文物報』第45期1987年4月17日
- 劉振群 1982「窯炉的改進和我国古陶瓷發展的關係」『中国古陶瓷論文集』
- 劉振東 2002「漢長安城新發現六座窯址」『考古』2002年第11期
- 遼寧省博物館·昭烏達盟文物工作站·敖漢旗文化館 1977「遼寧敖漢旗小河沿三神原始文化的發現」『文

物』1977年第12期  
遼寧省文物考古研究所 1997『牛河梁紅山文化遺址与玉器精粹』  
礼州遺跡聯合考古發掘隊 1980「四川西昌礼州新石器時代遺跡」『考古學報』1980年第4期  
老河口市博物館 1999「老河口市芦營六朝窯址清理簡報」『江漢考古』1999年第3期  
老河口市博物館 2004「老河口市柴店崗磚廠漢代窯址清理簡報」『江漢考古』2004年第4期

**插图出典**（原図を一部改変）

- 第57図1 中国科学院考古研究所ほか1963、図115。  
2 河南省文物管理局ほか1999、図135。  
3 西安半坡博物館ほか1988、図46。  
4 遼寧省博物館ほか1977、図6。  
5 山東省文物管理所ほか1959、図91。  
6 山西省考古研究所1998、図2。  
第58図1 中国科学院考古研究所1959、図57。  
2 西北大学文博学院考古專業2000、図116。  
3 中国歴史博物館考古部ほか1997、図14。  
4 河北省文物管理所1979、図23。  
5 中国社会科学院考古研究所禮西發掘隊1986、図15。  
6 河北省文物研究所ほか2001、図15。  
第59図1 中国科学院考古研究所ほか1963、図117。  
2 陝西省考古研究所宝鷄工作站1994、図7。  
3 洛陽市文物工作隊1983、図4。  
4 中国社会科学院考古研究所1988、図59  
5 安陽市文物工作隊1997、図4。  
6 中国社会科学院考古研究所漢城工作隊1994、図5。  
第60図1 李家治ほか1996、図3。  
2 中国科学院考古研究所山西工作隊1973、図9。  
3 河南省文物研究所ほか1989、図55。  
4 河南省文物研究所ほか1989、図56。  
5 中国科学院考古研究所1959、図56。  
6 福建省博物館1983、図5-1。  
7 福建省博物館1983、図5-2。  
8 礼州遺址連合考古發掘隊1980、図4。  
第61図1 江西省呉城考古工作站1989、図2。  
2 浙江省文物考古研究所1987、図3。  
3 広東省文物考古研究所1998、図3。  
4 紹興県文物管理委員会1979、図2。  
第62図1 浙江省文物考古所朱伯謙1984、図2。  
2 浙江省文物考古所朱伯謙1984、図1。  
3 浙江省文物考古所朱伯謙1984、図3。

**The Guigong Palace in the Han Capital City  
Chang'an  
Volume for Research Essays**

**TABLE of CONTENTS**

<b>1. Study of Decorative Roof Tiles from the Guigong Palace</b> .....	1
Li Yufang and Shen Yunyan	
A. Introduction .....	1
B. Classification of decorative roof tiles .....	1
C. Contents of unearthed decorative roof tiles and comparison with other examples .....	12
D. Manufacture method of round eave tiles .....	15
E. Conclusion .....	15
<b>2. A Study of Roof Tiles and Bricks in the Western Han Dynasty</b> .....	17
Liu Zhendong and Zhang Jianfeng	
A. Introduction .....	17
B. Classification of bricks .....	17
C. Classification of flat roof tiles .....	26
D. Classification of round roof tiles .....	29
E. Chronology of roof tiles and bricks in the Western Han Dynasty .....	33
<b>3. Transformation of Round Eave Tiles in Xi'an:</b>	
<b>From the Qin Dynasty to the Western Han Dynasty</b> .....	39
Shinji Yamasaki	
A. Introduction .....	39
B. Round eave tiles from the Liyangcheng citadel .....	41
C. Round eave tiles from the architecture complex No. 5 in the Weiyanggong palace .....	52
D. Round eave tiles from the architecture complex No. 3 in the Weiyanggong palace .....	58
E. Round eave tiles from the Guigong palace .....	60
F. Round eave tiles from the Duling Lingyuan mausoleum .....	63
G. Conclusion .....	64

<b>4. Manufacture Methods of Round Eave Tiles from the Guigong Palace</b>	67
Takayuki Seino	
A. Introduction	67
B. Manufacture method of round roof tile cylinder part and jointing method with eave tile endpiece	67
C. Observation of manufacture traces on the back side of eave tile endpiece and on its clay band	71
D. Comparison between manufacture methods and decorative motifs	80
E. Manufacture methods of round eave tiles in chronological perspective	85
F. Conclusion	90
<b>5. Manufacture Methods of Eave Tiles in the Qin and Han Dynasties:     Analysis on the Materials from the Liyangcheng Citadel and the     Taishang Imperial Mausoleum</b>	98
Kiyoshi Ōwaki	
A. Introduction	98
B. Classification of decorative motifs of eave tiles	99
C. Manufacture methods of eave tiles in the Qin and Han Dynasties	101
D. Terminology and its explanation	103
E. Observing trace of cylinder half-cutting technique	105
F. Classification of eave tiles from the Liyangcheng citadel and the Taishang imperial mausoleum in perspective of manufacture methods	109
G. Manufacture methods of eave tiles from the Western Zhou Dynasty and the Qin and Han Dynasties	120
<b>6. A Research on <i>Yudie</i> Tablets for the Fenshan Sacrificial Ceremony     in the Xin Mang Period</b>	127
Feng Shi	
A. Introduction	127
B. Chronology of <i>yudie</i> tablets	127
C. Styles of inscriptions on <i>yudie</i> tablets	130
D. Characteristics of <i>yudie</i> tablets	131
E. Deciphering inscriptions of <i>yudie</i> tablets	134
F. Transformation of the Fenshan sacrificial ceremony	146
G. Conclusion	153

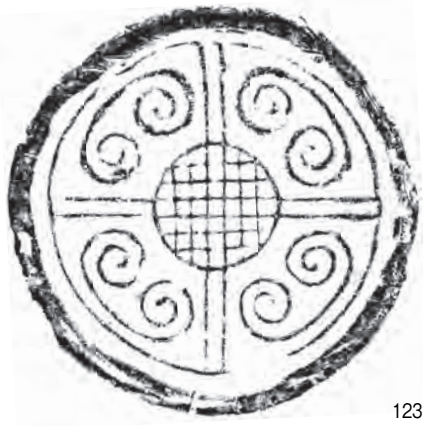
<b>7. Genealogy of Tunnel Kilns</b> .....	157
Yoshiki Fukasawa	
A. Introduction .....	157
B. Classification of kilns .....	157
C. Chronology of kilns .....	159
D. Intake duct and exhaust outlet .....	165
E. Distribution of kilns .....	166
F. Transformation of kilns .....	170
 Table of Contents (in English) .....	 193
Plates	



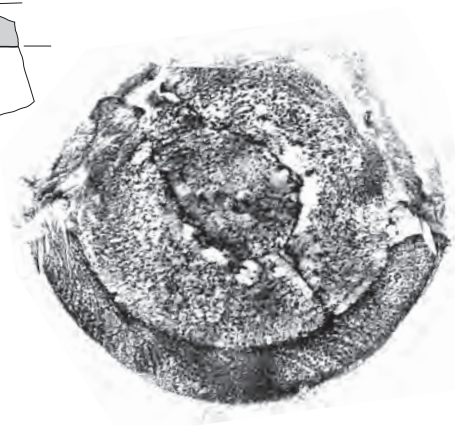
# 図 版

- 図版1 櫟陽城出土軒丸瓦（1）
- 図版2 櫟陽城出土軒丸瓦（2）
- 図版3 櫟陽城出土軒丸瓦（3）
- 図版4 櫟陽城出土軒丸瓦（4）
- 図版5 櫟陽城出土軒丸瓦（5）
- 図版6 櫟陽城出土軒丸瓦（6）
- 図版7 櫟陽城出土軒丸瓦（7）
- 図版8 櫟陽城出土軒丸瓦（8）
- 図版9 櫟陽城出土軒丸瓦（9）・  
    太上皇陵出土軒丸瓦（1）
- 図版10 太上皇陵出土軒丸瓦（2）
- 図版11 櫟陽城・太上皇陵出土丸瓦
- 図版12 櫟陽城出土平瓦
- 図版13 杜陵便殿出土軒丸瓦（1）
- 図版14 杜陵便殿出土軒丸瓦（2）
- 図版15 杜陵東門出土軒丸瓦（1）
- 図版16 杜陵東門出土軒丸瓦（2）
- 図版17 皇后陵東門・杜陵便殿出土丸瓦・平瓦

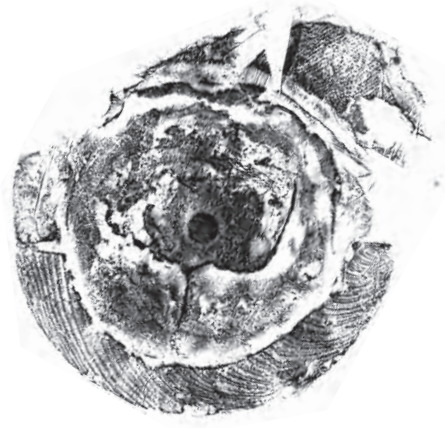
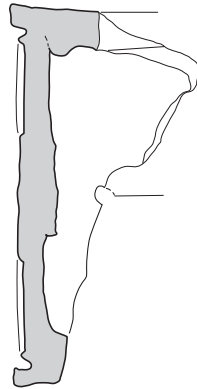




123



124



127



128



129



123



124



127



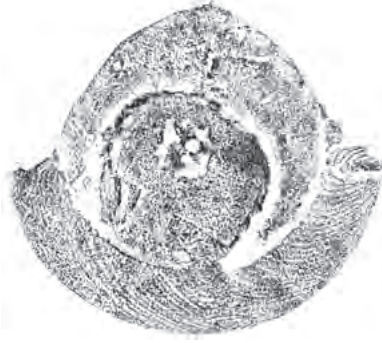
128



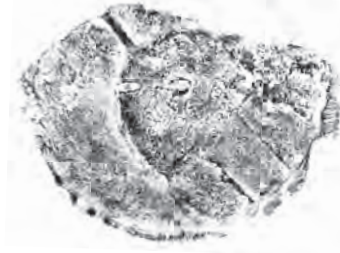
129



131



134



132



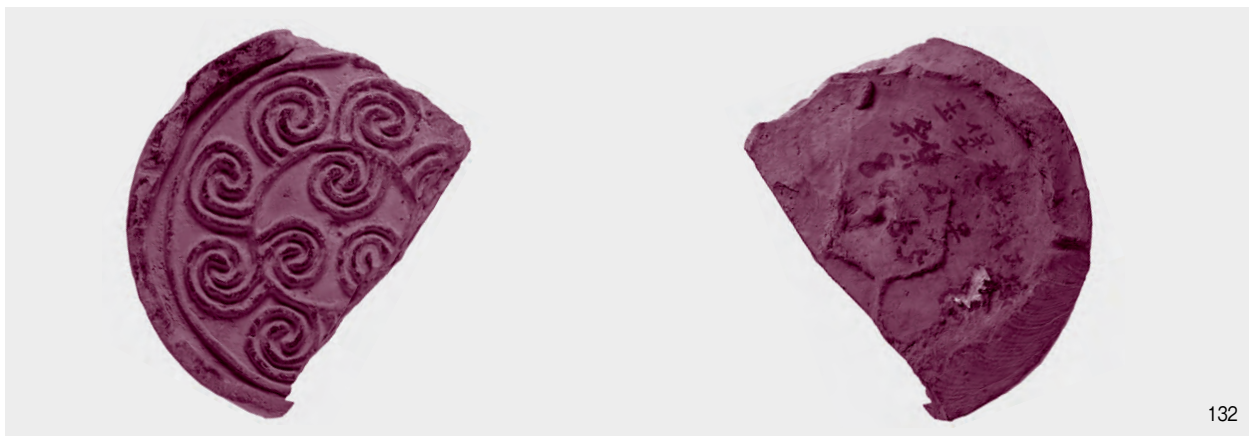
133



136



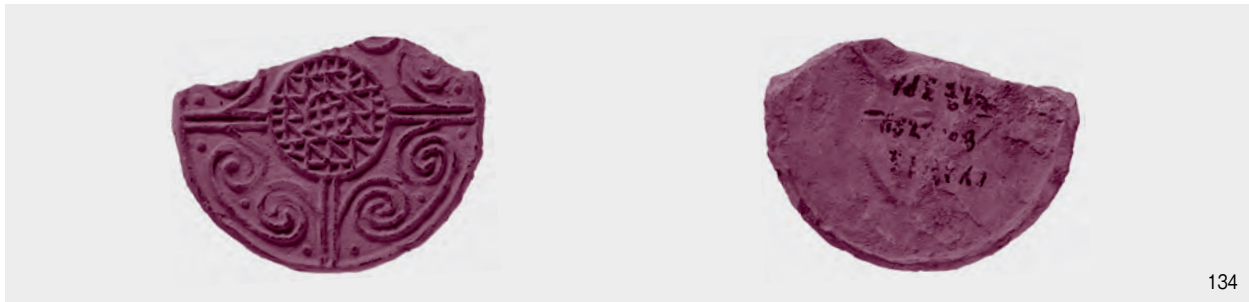
131



132



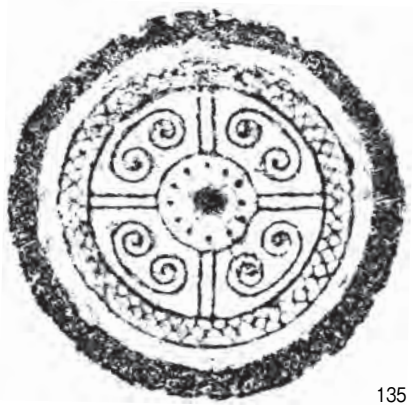
133



134



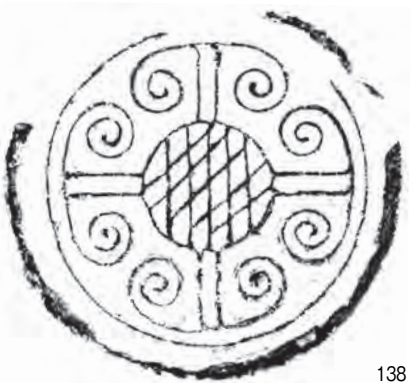
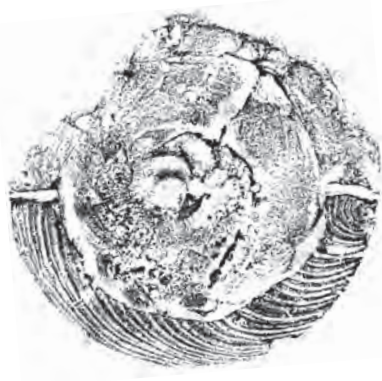
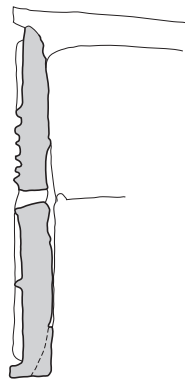
136



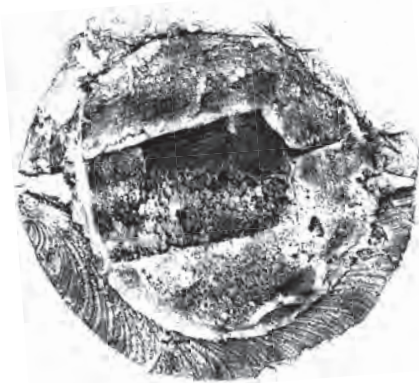
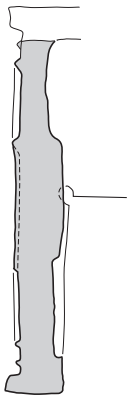
135



137



138



141



142



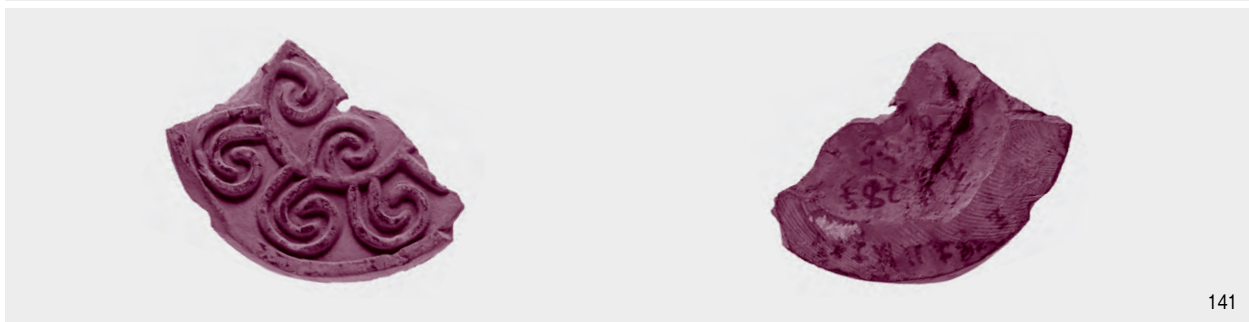
135



137



138



141



142



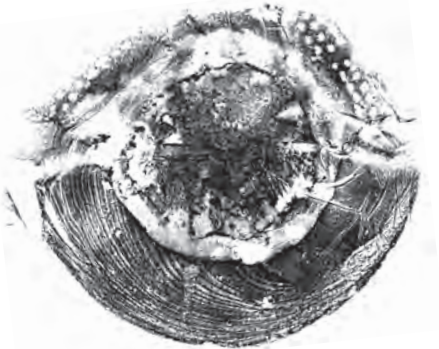
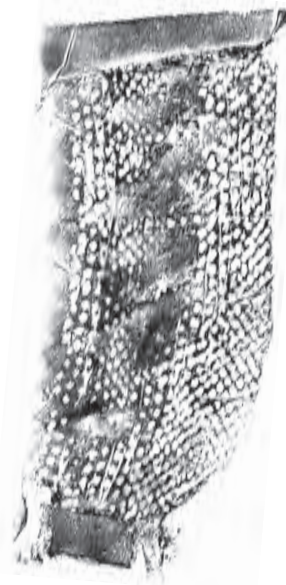
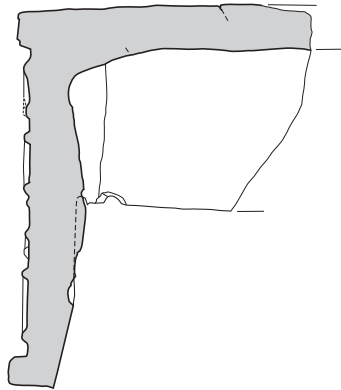
143



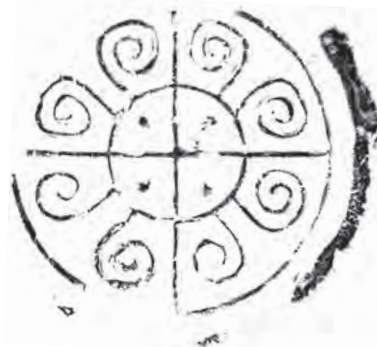
144



145



151



146



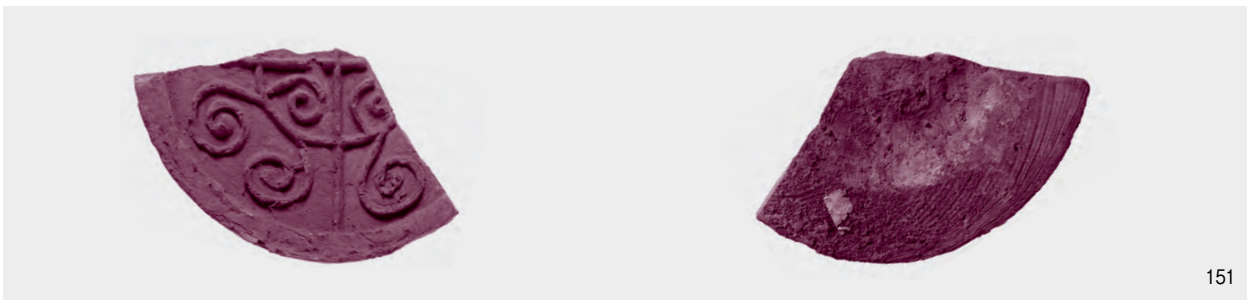
143



144



145

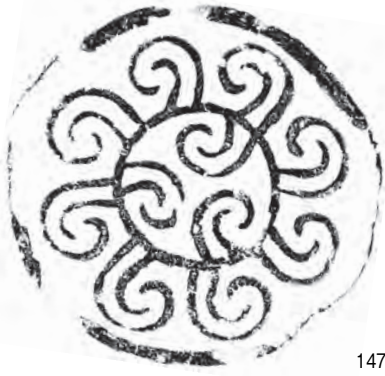


151

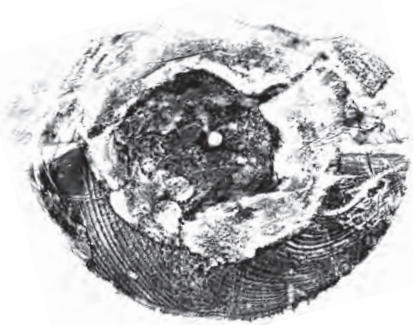
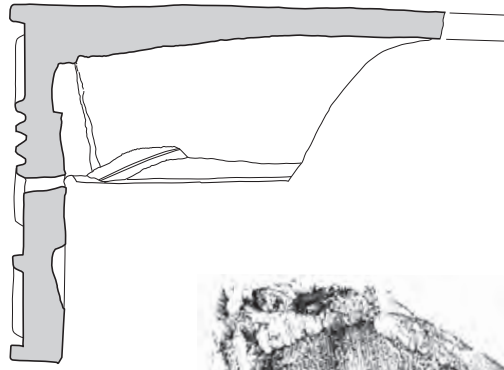


146





147



148



152



153



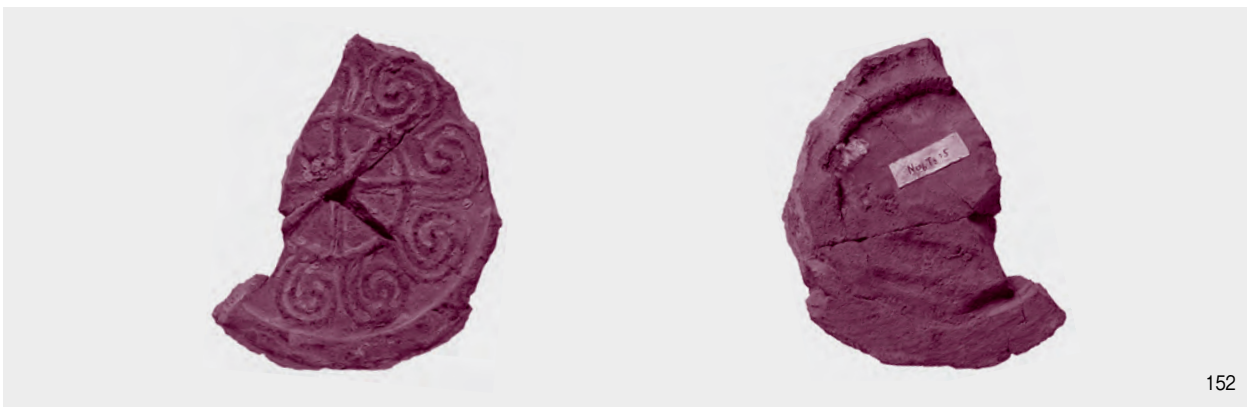
154



147



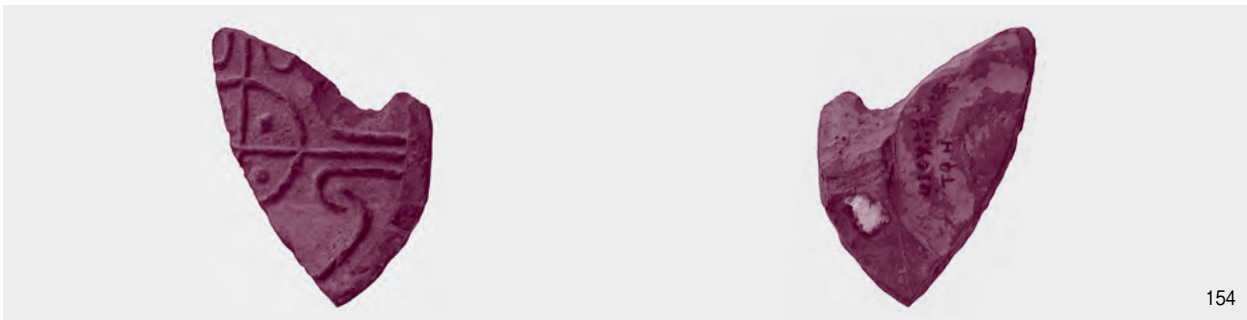
148



152



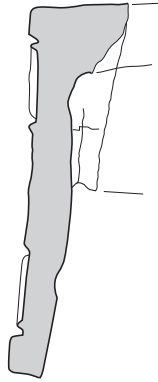
153



154



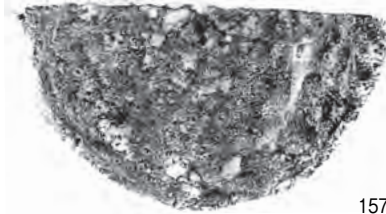
140



155



156



157



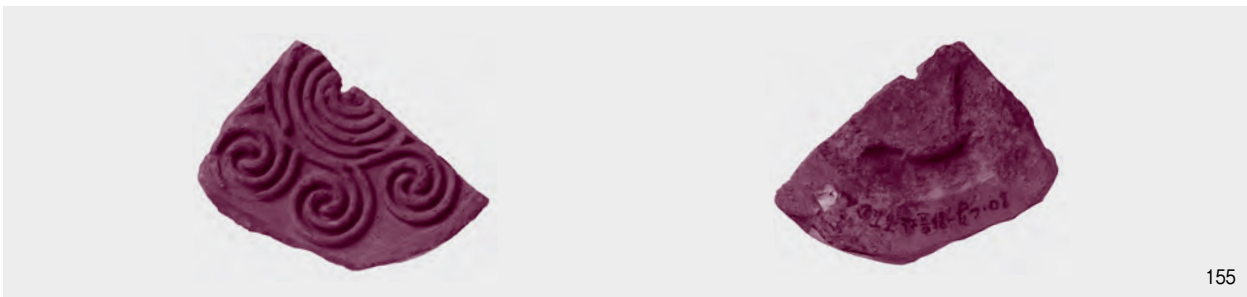
158



159



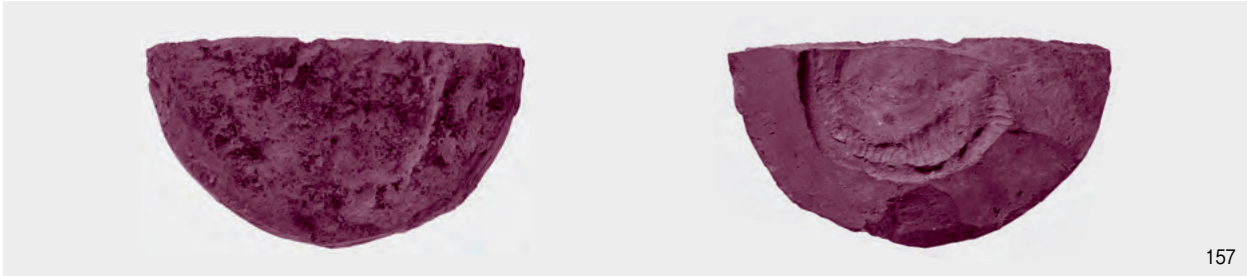
140



155



156



157



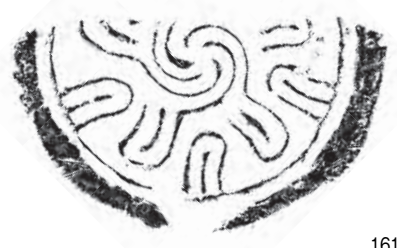
158



159



160



161



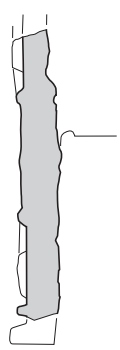
162



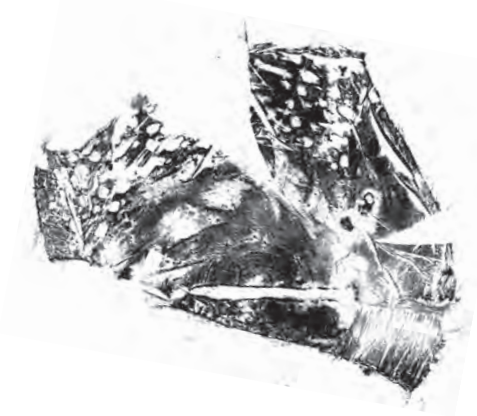
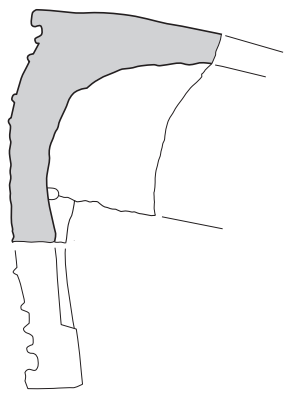
163



168



171





160



161



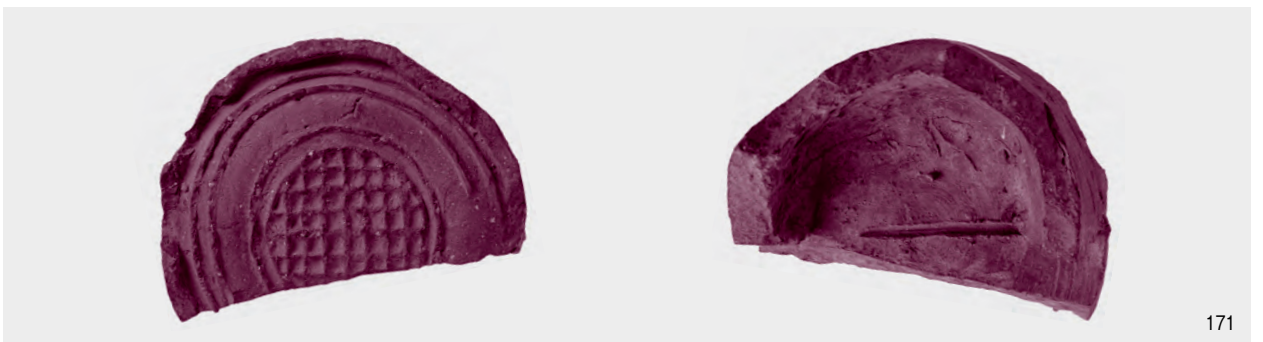
162



163



168



171



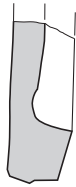
166



167



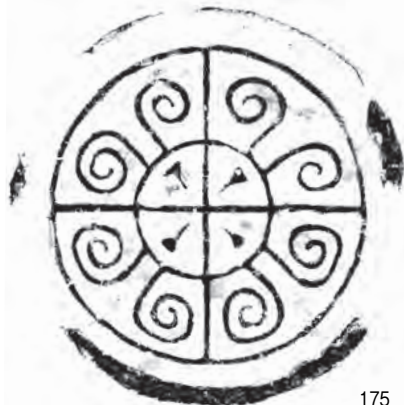
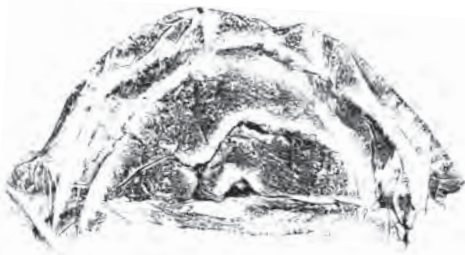
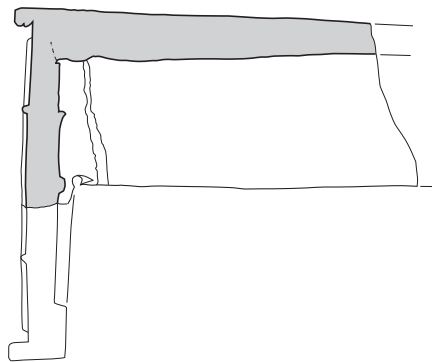
169



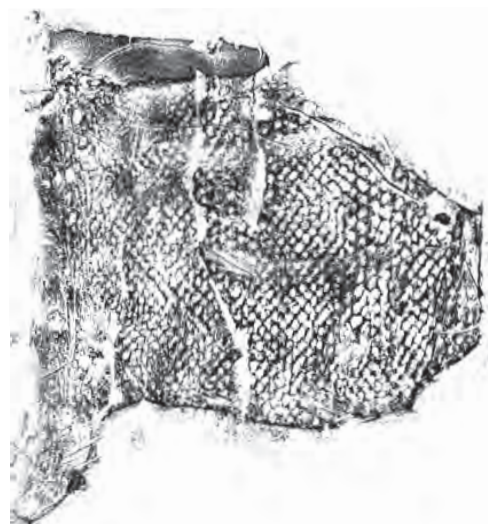
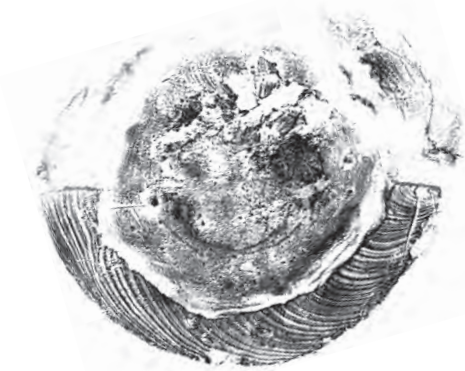
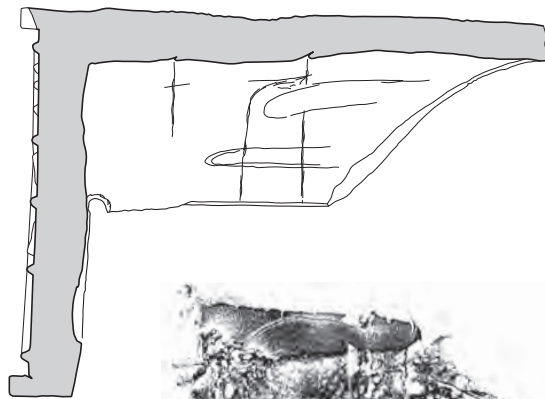
174

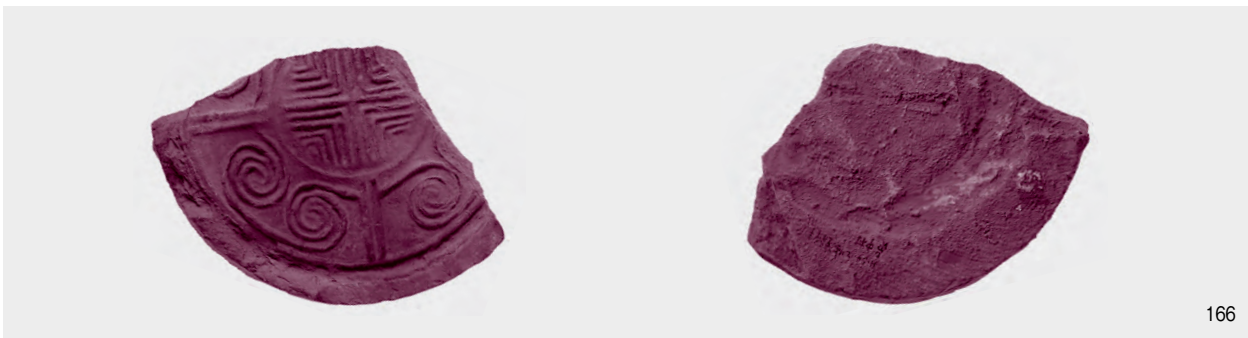


172



175

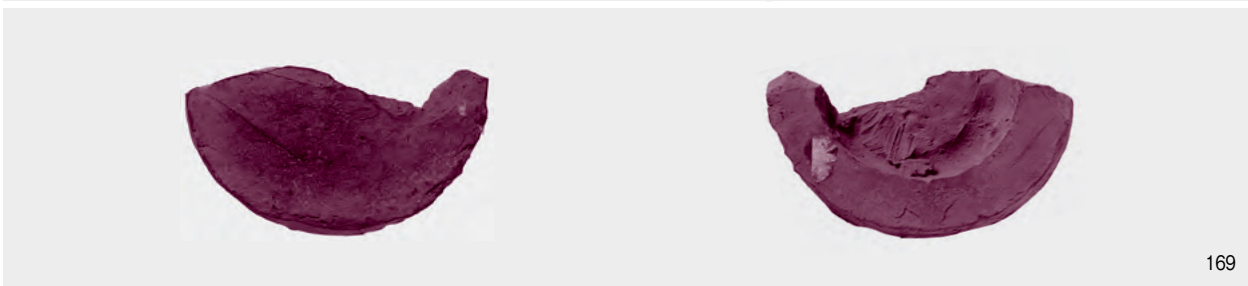




166



167



169



172



174



175





176



125



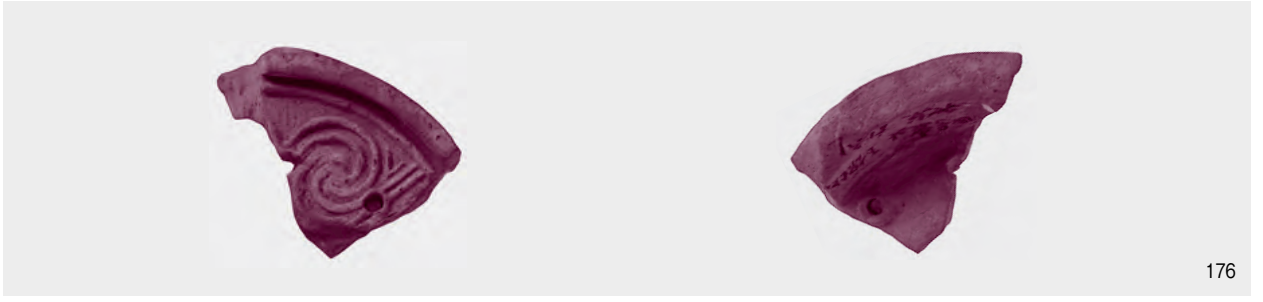
126



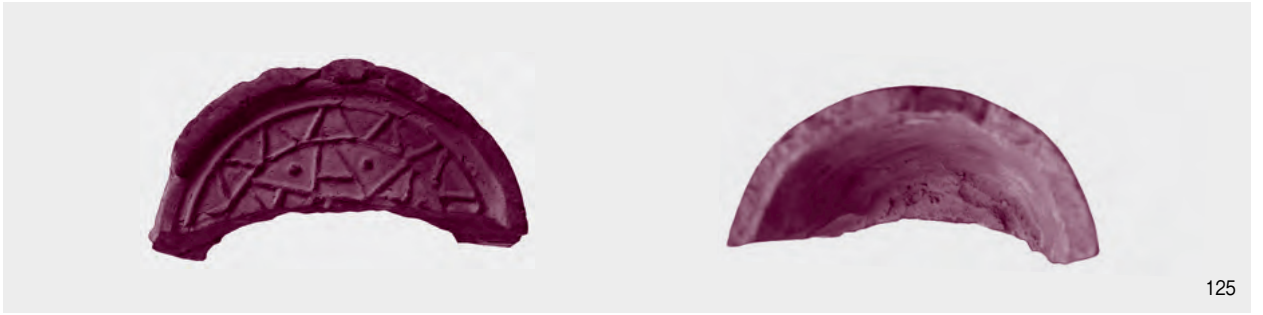
130



139



176



125



126



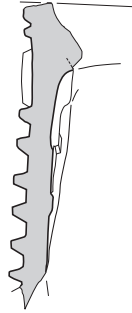
130



139



150



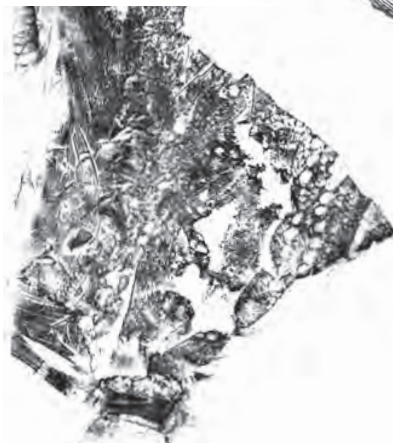
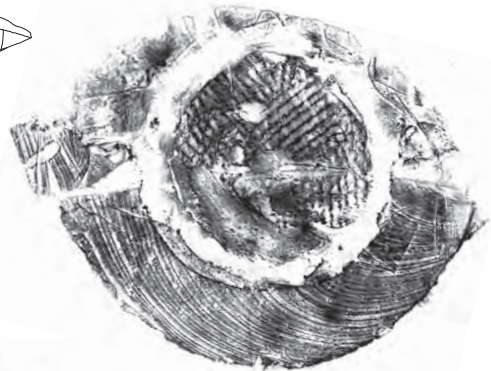
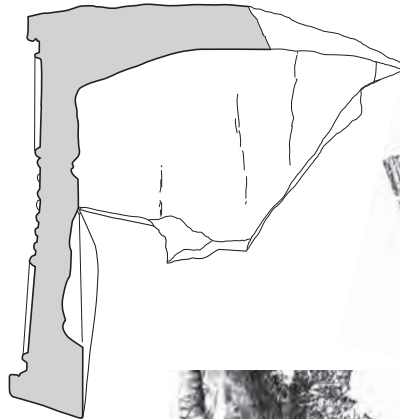
165



164



170



149



149



150



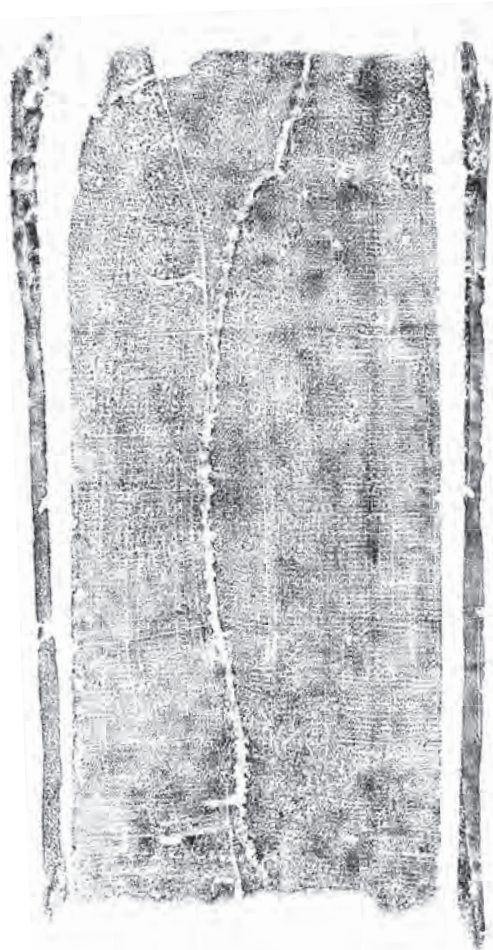
164



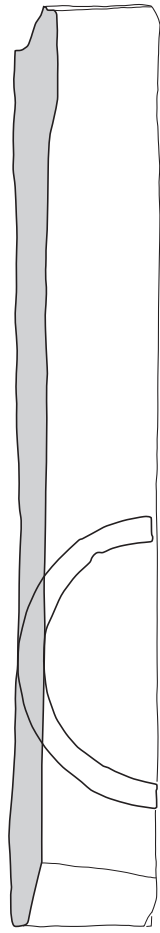
165



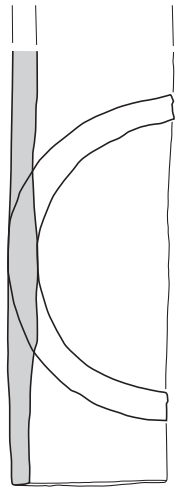
170



178



179



180

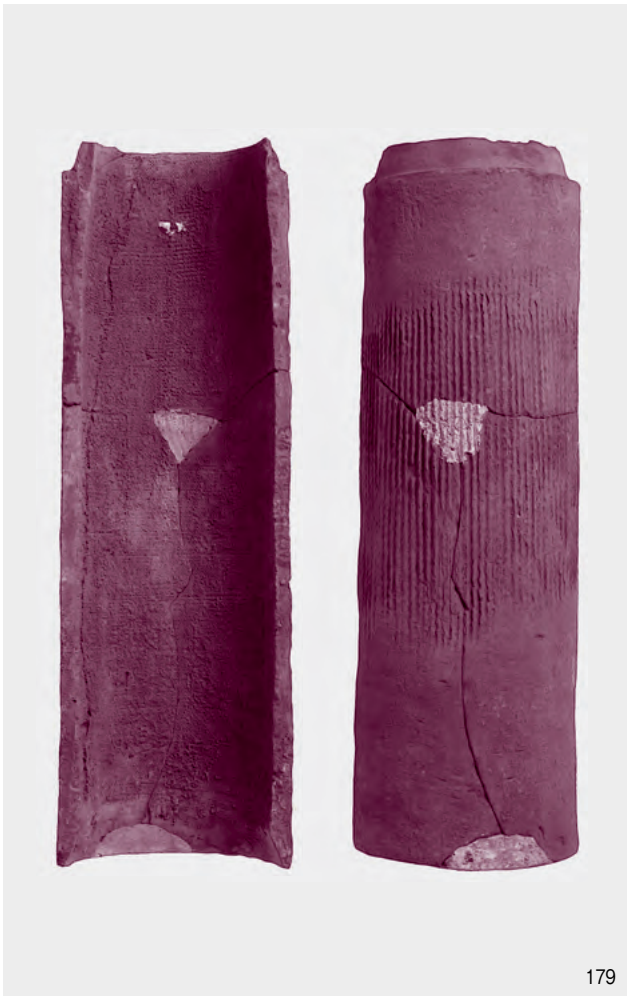




177



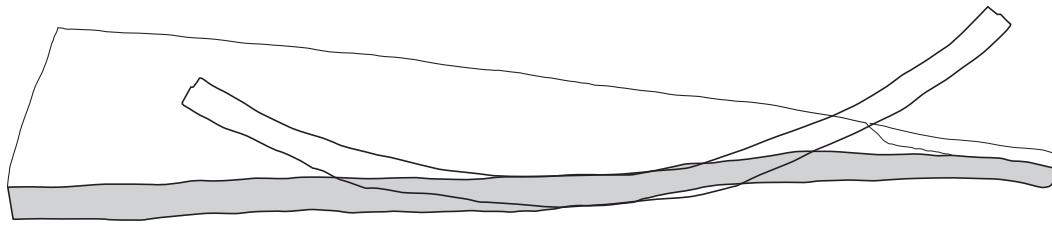
178



179



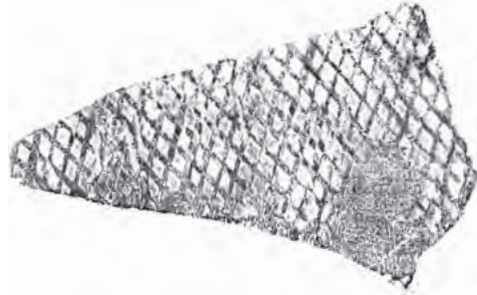
180



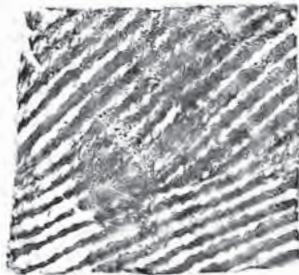
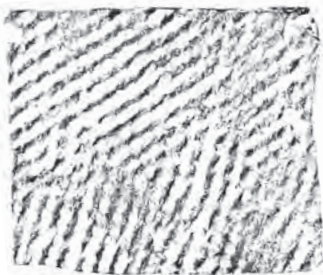
181



187



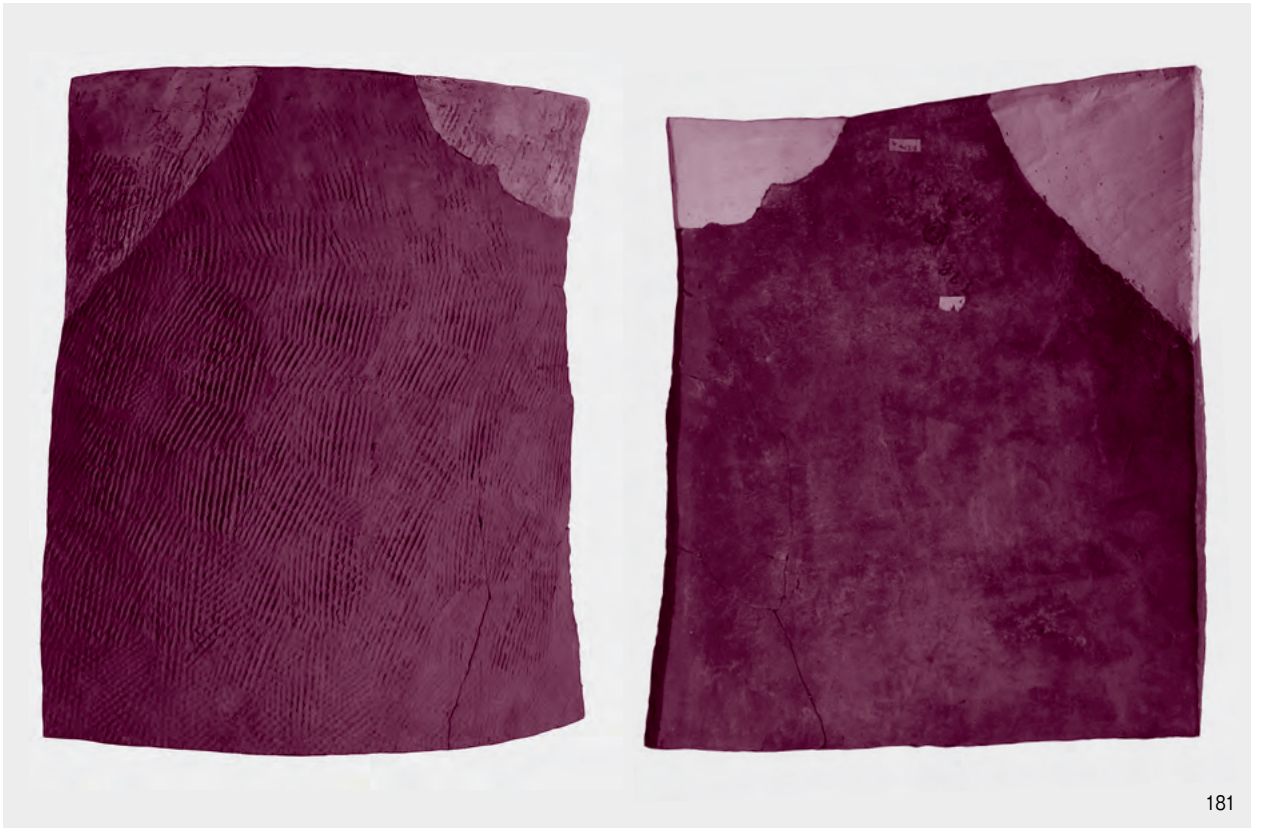
189



184



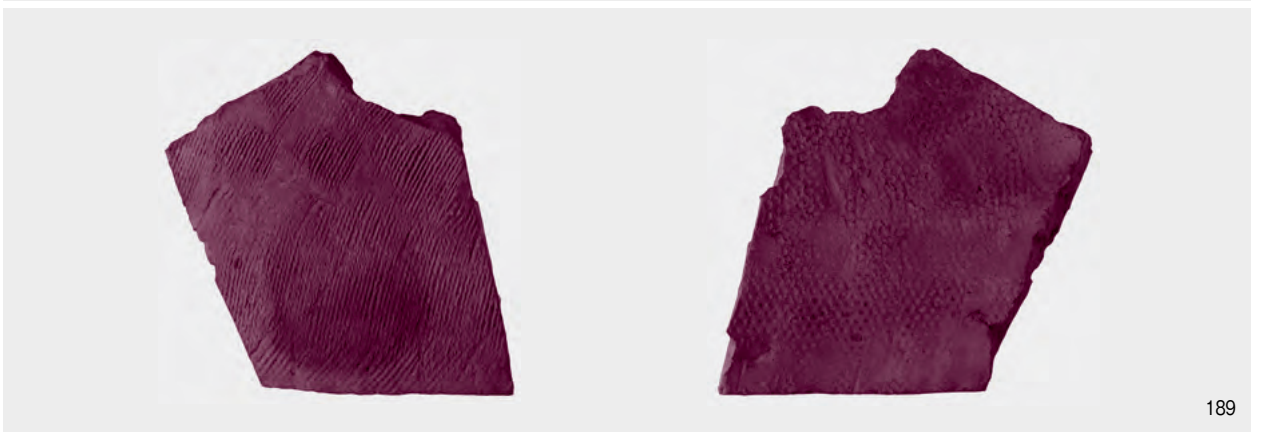
183



181



187



189



184

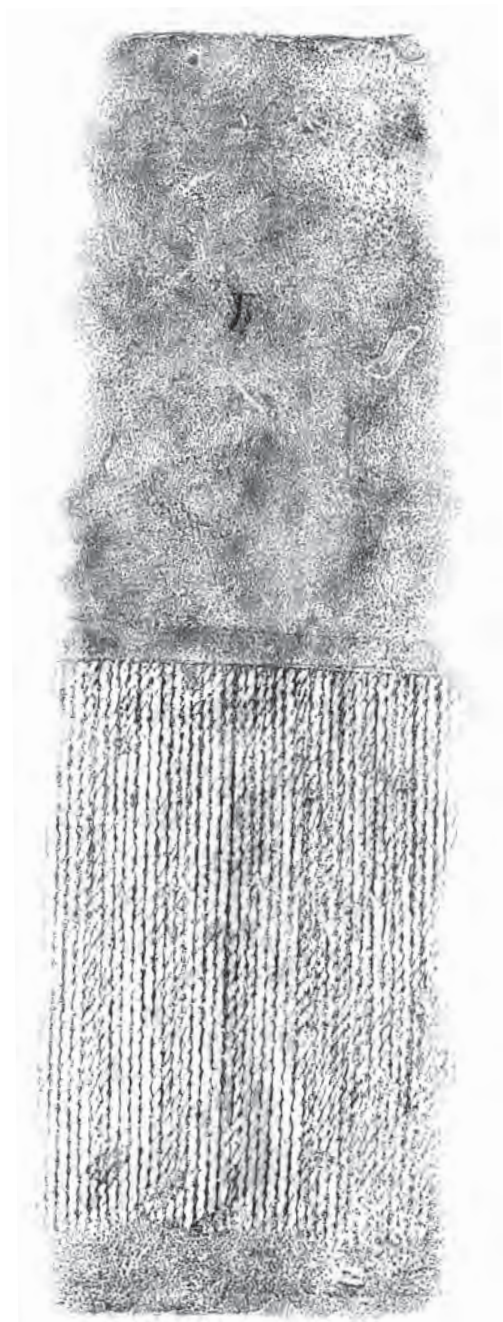
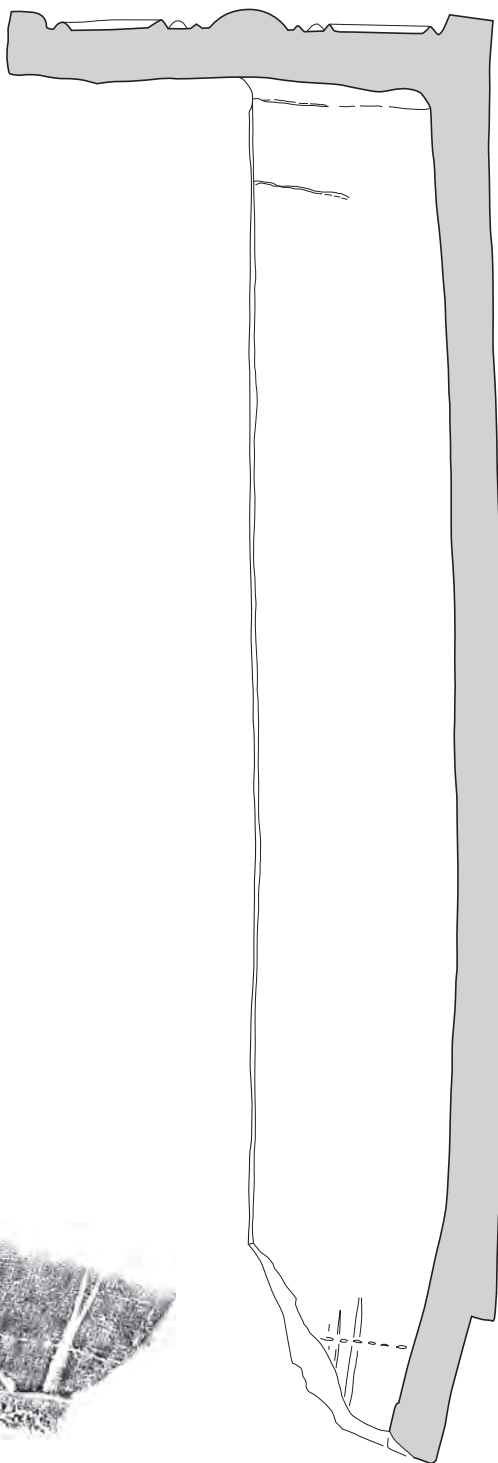


183

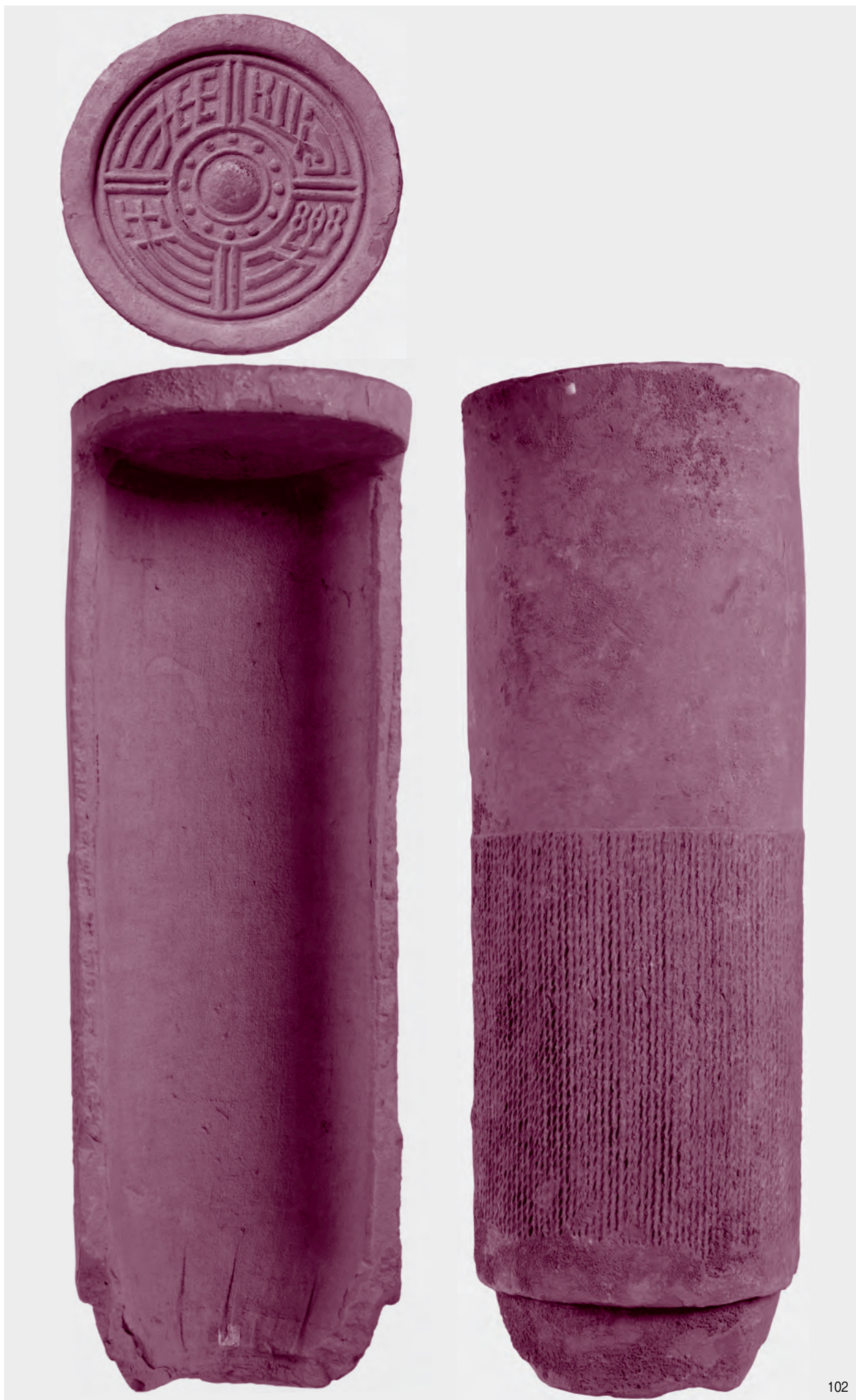




102



1:3

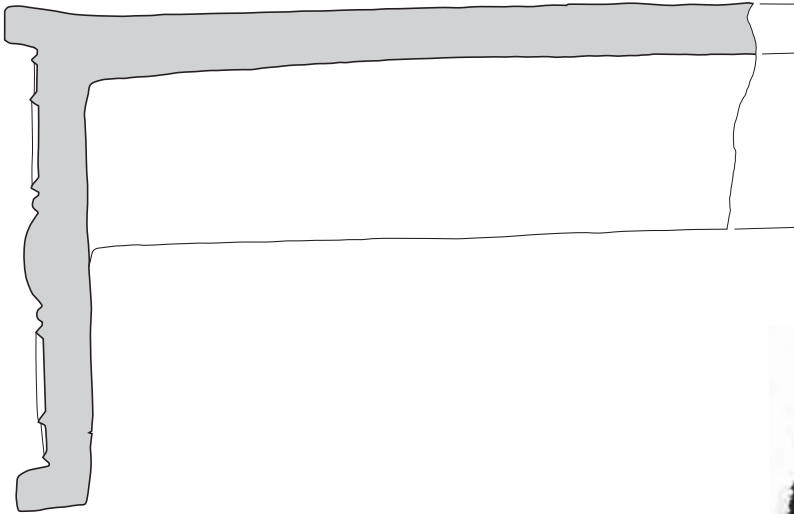




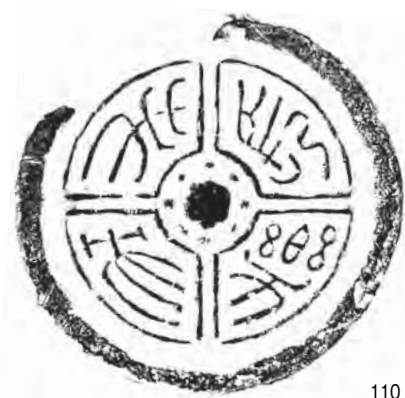
109



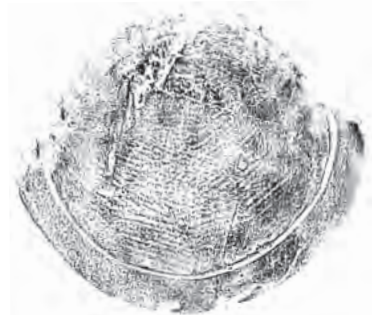
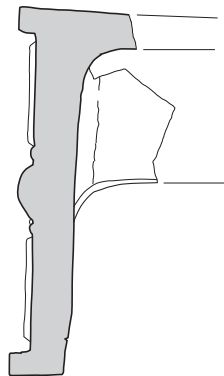
108



111



110





109



108



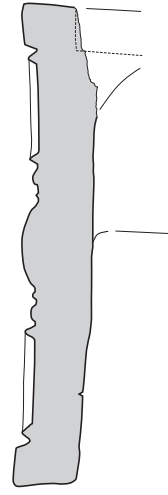
110



111



112



113



114



116



112



113



114



116



117



118



119



121



117



118



119

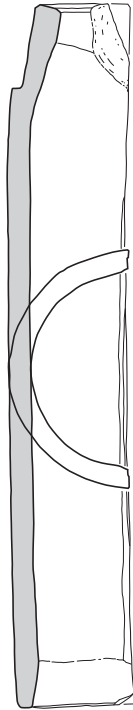


121

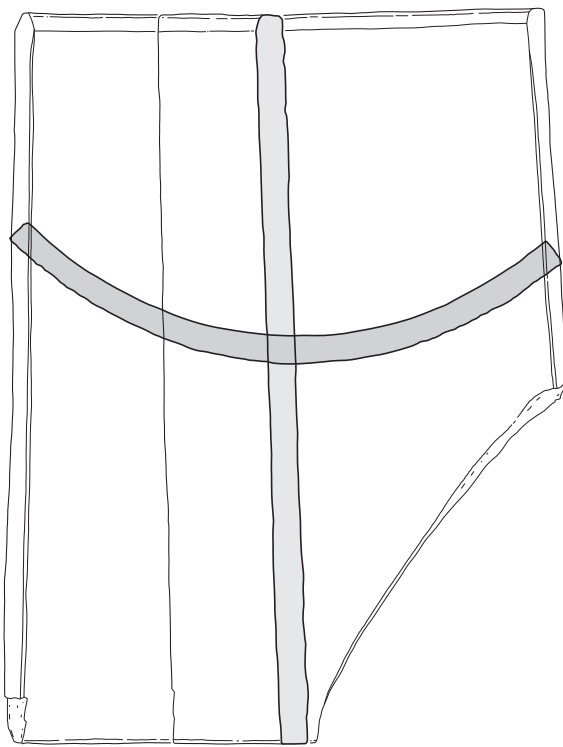




101

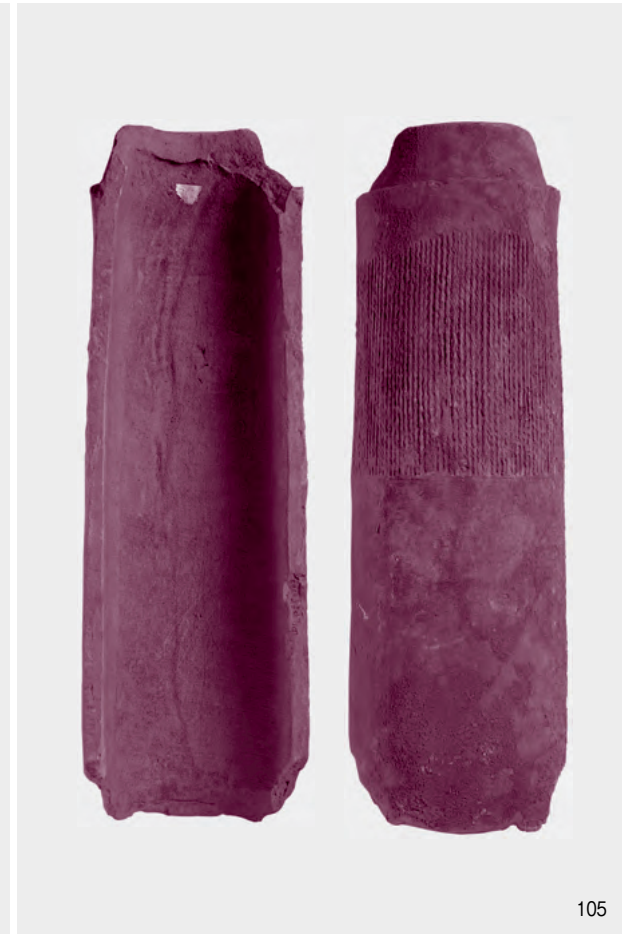


106

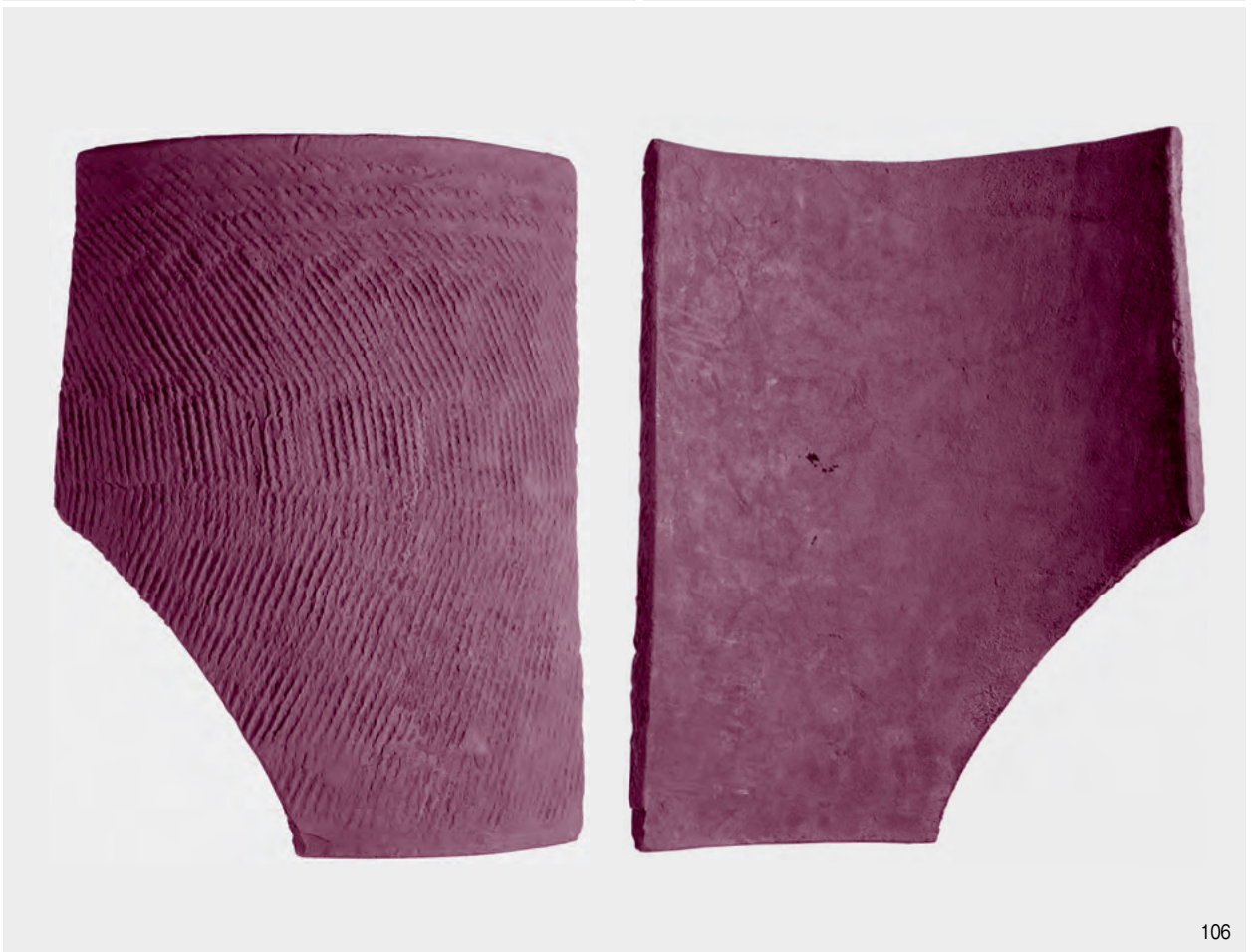




101



105



106



---

---

2011年3月30日発行

# 漢長安城桂宮

——論考編——

奈良文化財研究所学報第85冊

発行 独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所

〒630-8577 奈良市二条町2丁目9番1号

TEL 0742-30-6852 (代)

印刷 株式会社 天理時報社

〒632-0083 奈良県天理市稲葉町80番地

TEL 0743-64-1411 (代)

ISBN 978-4-902010-89-3

---

---